

百間川当麻遺跡2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 IV

1982

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会
文化課

百間川当麻遺跡 2

序

百間川は、岡山市竹田で旭川から分かれ、操山山塊の北を東進し、岡山市米田で南に向きを変え、瀬戸内海に注ぎます。ここに取りあげる百間川当麻遺跡は米田に位置し、奈良時代の『大安寺流記資材帳』に「石間江」と記載される地域に含まれていることから、当時の海岸に近かったことも考えられます。

百間川当麻遺跡では、縄文時代晩期から近世に至る数多くの遺構、遺物が発見されました。中でも奈良時代の建物群十四棟からは、青銅製の帯金具、硯、「上三宅」と墨書された須恵器が出土し、官衙遺跡である可能性もあります。

本報告書では、百間川当麻遺跡の低水路部分及び右岸用水路部分について調査結果を報告します。この報告書が、文化財の保護、保存、更には今後の研究の一助となれば幸いと存じます。

現地調査の実施、報告書の作成にあたっては、建設省中国地方建設局、岡山河川工事事務所、並びに百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員をはじめとする関係各位から多大の御協力と御指導をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

昭和57年11月

岡山県教育委員会

教 育 長 佐 藤 章 一

例 言

1 この報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の依頼を受け、岡山県教育委員会が昭和53・54・56年度に発掘調査を行った百間川当麻遺跡低水路及び右岸用水路の発掘調査の概要である。

2 調査期間は、昭和53年10月1日～昭和54年9月30日、56年4月1日～5月31日である。

3 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）埋蔵文化財保護対策委員会の助言を受けた。また、石材の同定には、岡山理科大学三宅寛教授の手を煩した。

4 この報告書の作成は、昭和56年4月以降同57年3月まで、文化課分室にて整理事業を実施し文化課職員の担当者が執筆し、文責は、文末に記した。

5 遺物の整理、実測及び実測図の浄写・遺構図の浄写は、おもに各担当者が行った。遺構・土器・石器の実測図の一部については平井典子の助力を得た。

6 この報告書の断面図高度値は海拔高である。また、方位は磁北である。

7 この報告書に掲載の図の縮尺率は、それぞれに示した。出土遺物の実測図で数値で縮尺率の示していないものは、 $\frac{1}{4}$ の縮尺である。

8 この報告書で用いる時代区分は、一般的な政治的区分に準拠し、それを補うために文化史区分と世紀を適宜併用した。

9 この報告書では図面に溝→溝、住居址→住、土壙→土、柱穴状遺構→Pの略号を使用した。遺物については土器・陶磁器・埴輪について通し番号をつけ、石器にはS、鉄器にはI、木器・木製品にはW、銭貨等銅製品にはB、土製品にはC、ガラス製品にはGを各々付し、土器番号と区別した。

10 この報告書に掲載した地形図で、1/5万の地形図は、建設省国土地理院発行のもの、1/1万の地形図は岡山市発行のものを複製したものである。その他の地形図は、建設省岡山河川工事事務所作成のものをトレースしたものである。

11 この報告書に関係する遺物、実測図、写真等は、文化課分室で保管している。

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	9
第2章 調査の経緯	13
第1節 調査経過	13
第2節 日誌抄	15
第3節 調査の構成	18
第3章 低水路調査区	21
第1節 調査区の概要	21
第2節 弥生・古墳時代の遺構・遺物	23
第3節 奈良時代の遺構・遺物	51
第4節 中世の遺構・遺物	60
第5節 近世・近代の遺構・遺物	67
第6節 小結	88
第4章 右岸用水路調査区	91
第1節 調査区の概要	91
第2節 弥生・古墳時代の遺構・遺物	92
第3節 奈良時代の遺構・遺物	107
第4節 中世の遺構・遺物	120
第5節 近世・近代の遺構・遺物	138
第6節 包含層出土遺物	142
第7節 小結	149
第5章 まとめ	153

図 目 次

第1図 百間川周辺遺跡分布図 (1/50000)	10	第4図 ボーリング土層断面図(1/50)	23
第2図 区割り及びボーリング位置図 (1/1000)	21	第5図 弥生・古墳時代遺構配置図 (1/400)	24
第3図 百間川当麻遺跡周辺地形図及び調査 区設定図(1/6000)	22	第6図 溝一2平・断面図(部分)(1/50)	25
		第7図 溝一2平・断面図(部分)(1/50)	25
		第8図 溝一2出土遺物	26

第9図	溝—2出土遺物……………27	第37図	1号住居址平・断面図(新) (1/80)……………45
第10図	溝—10土層断面図(1/80)……………27	第38図	3号住居址平・断面図 (1/80)……………46
第11図	溝—10土層断面図(1/80)……………27	第39図	住居址出土遺物……………46
第12図	土墳—3平・断面図(1/50)……………28	第40図	住居址・溝・土墳・包含層出 土遺物……………47
第13図	土墳—4平・断面図(1/40)……………28	第41図	井戸—1平・断面図(1/40)……………48
第14図	土墳—1平・断面図(1/50)……………28	第42図	井戸—1出土遺物……………48
第15図	土墳—43平・断面図(1/40)……………29	第43図	井戸—2平・断面図(1/40)……………49
第16図	土墳—2平・断面図(1/40)……………29	第44図	井戸—3平・断面図(1/40)……………49
第17図	土墳—5平・断面図(1/50)……………29	第45図	井戸—4平・断面図(1/40)……………49
第18図	土墳—8平・断面図(1/50)……………29	第46図	井戸—2・3出土遺物……………50
第19図	土墳・基盤層直上層・第4・ 5遺構面出土遺物……………30	第47図	G—3区土器溜り—1平面図 (1/30)……………51
第20図	土墳出土遺物……………31	第48図	G—3区土器溜り—1出土遺物…52
第21図	壺棺墓平・断面図(1/40)……………32	第49図	G—3区土器溜り—1出土遺物…53
第22図	出土遺物……………32	第50図	灰穴・井戸・井戸状ピット・ 土墳・柱穴・包含層出土遺物…54
第23図	土墳(灰穴—1)(1/40)……………33	第51図	地形図及び奈良時代建物配置図 (S:1/1000)……………55
第24図	土墳(灰穴—1)出土遺物……………33	第52図	建物—1平・断面図(1/80)……………56
第25図	2号住居址平・断面図(1/80)……34	第53図	建物—2平・断面図(1/80)……………57
第26図	溝—7土器溜り平・断面図 (1/100)……………35	第54図	建物—3平・断面図(1/80)……………57
第27図	溝—7出土遺物……………36	第55図	建物—4平・断面図(1/80)……………58
第28図	溝—7出土遺物……………37	第56図	建物—5平・断面図(1/80)……………58
第29図	溝—7出土遺物……………38	第57図	建物—6平・断面図(1/80)……………59
第30図	溝—7出土遺物……………39	第58図	建物—8平・断面図(1/80)……………60
第31図	溝—7出土遺物……………40	第59図	建物—10平・断面図(1/80)……………60
第32図	溝—7出土遺物……………41	第60図	建物—12平・断面図(1/80)……………61
第33図	溝—7出土遺物……………42	第61図	建物柱穴出土遺物(1/4)……………61
第34図	溝出土遺物……………43	第62図	「官」印須恵器(1/3)……………62
第35図	溝・土墳・水田層・集石遺構 出土遺物……………44		
第36図	1号住居址平・断面図(旧) (1/80)……………45		

第63図	中世遺構配置図(1/500)……………63		
第64図	井戸—5平・断面図(1/40)……………64		・20(右下)・21(右上)平・ 断面図(1/60)……………74
第65図	井戸—6平・断面図(1/40)……………64	第91図	土塋—22—1(下)・22—2(上)平・ 断面図(1/50)……………74
第66図	建物—14平・断面図(1/100)……………65	第92図	土塋—23平・断面図 (1/50)……………74
第67図	建物—15平・断面図(1/100)……………65	第93図	土塋—24平・断面図(1/50)……………74
第68図	建物—16平・断面図(1/100)……………65	第94図	土塋—38平・断面図(1/40)……………75
第69図	建物—17平・断面図(1/100)……………66	第95図	土塋—39平・断面図(1/50)……………75
第70図	建物—18平・断面図(1/100)……………66	第96図	土塋—42平・断面図(1/50)……………75
第71図	建物—19平・断面図(1/100)……………66	第97図	ボーリング—3内・土塋・柱 穴・ピット・包含層出土遺物……………76
第72図	建物—20平・断面図(1/100)……………67	第98図	土塋出土遺物……………77
第73図	井戸・土塋出土遺物……………68	第99図	土塋出土遺物……………78
第74図	石組み遺構—1平・断面図(1/50)……………69	第100図	土塋・包含層出土遺物……………79
第75図	土塋墓—1(中世)平・断面図 (1/20)……………70	第101図	包含層・第3遺構面・堤防盛 土出土遺物……………80
第76図	土塋墓—1(中世)出土遺物……………70	第102図	包含層・近世造成土出土遺物……………81
第77図	土塋—40平・断面図(1/50)……………70	第103図	包含層・近世造成土出土遺物……………82
第78図	土塋—41平・断面図(1/50)……………70	第104図	包含層・側溝・第2遺構面下 出土遺物……………83
第79図	シスト状遺構(1/50)……………70	第105図	包含層・堤防盛土出土遺物……………84
第80図	近世・近代遺構配置図 (1/500)……………71	第106図	包含層・近世造成土出土遺物……………85
第81図	溝—13平・断面図北端 (部分)(1/50)……………72	第107図	包含層・近世造成土出土遺物……………86
第82図	溝—13閉塞石平・断面図(1/50)……………72	第108図	包含層・表土層出土遺物……………87
第83図	土塋—10平・断面図(1/50)……………72	第109図	調査区南壁土層柱状図(1/60)……………91
第84図	土塋—11平・断面図(1/50)……………72	第110図	土塋—25(1/30)……………92
第85図	土塋—12平・断面図(1/50)……………72	第111図	土塋—27, 溝—16(1/50)……………92
第86図	土塋—13(左), 14(右)平 ・断面図(1/50)……………73	第112図	近世・近代遺構全体図 (1/300)……………93~94(折込)
第87図	土塋—15平・断面図(1/50)……………73	第113図	中世遺構全体図(1/300)……………93~94 (折込)
第88図	土塋—16平・断面図(1/100)……………73		
第89図	土塋—17平・断面図(1/50)……………74		
第90図	土塋—18(左上)・19(左下)		

第114図	奈良時代遺構全体図 (1/300) … 93～94(折込)	第142図	溝—29出土遺物(3) … 119
第115図	弥生・古墳時代遺構全体図 (1/300) … 93～94(折込)	第143図	溝—29出土遺物(4)(1/2) … 119
第116図	土墳—25出土遺物 … 95	第144図	井戸—7 (1/40)・出土遺物 … 120
第117図	土墳—27断面図 (1/40) … 95	第145図	井戸—7 棧 (1/6) … 121
第118図	土墳—27出土遺物(1) … 96	第146図	井戸—8 (1/50)・出土遺物 … 122
第119図	土墳—27出土遺物(2) … 97	第147図	土墳—29出土遺物 … 123
第120図	土墳—27出土遺物(3) … 98	第148図	土墳—30出土遺物 … 124
第121図	溝—17・18・19 (1/100・1/50) … 98	第149図	土墳—31・32, 溝—44 (1/100) … 125
第122図	溝—20・21 (1/150) … 99	第150図	土墳墓—2 (1/20)・出土遺物 (1/3・1/4) … 126
第123図	溝—20出土遺物(1) … 100	第151図	中世柱穴出土遺物(1) … 128
第124図	溝—20出土遺物(2) … 101	第152図	中世柱穴出土遺物(2) … 129
第125図	溝—20出土遺物(3) … 102	第153図	中世柱穴出土遺物(3) (鉄器1/2) … 130
第126図	溝—20出土遺物(4) … 103	第154図	2・3区南壁土層断面図(1/80) 132
第127図	溝—20出土遺物(5) … 104	第155図	2・3区遺構関係模式図 (1/120) … 132
第128図	溝—22 (1/80) … 105	第156図	溝—30出土遺物(1) … 133
第129図	溝—23 (1/80) … 106	第157図	溝—30出土遺物(2)(1/6) … 134
第130図	溝—24・25断面図 (1/30) … 106	第158図	溝—31出土遺物 … 134
第131図	土器溜り—2 (1/60)・出土遺物 … 107	第159図	溝—32出土遺物 … 135
第132図	建物—21 (1/40)・出土遺物 … 108	第160図	溝—33出土遺物 … 135
第133図	土墳—28出土遺物 … 109	第161図	溝—34・35断面図 (1/40) … 135
第134図	溝—26 (1/60)・出土遺物 … 110	第162図	溝—36断面図 (1/20) … 135
第135図	溝—27 (1/80)・出土遺物(1) … 111	第163図	溝—37断面図 (1/20) … 135
第136図	溝—27出土遺物(2) … 112	第164図	溝—36出土遺物 … 136
第137図	溝—27出土遺物(3) … 113	第165図	溝—37出土遺物 … 136
第138図	溝—27出土遺物(4) … 114	第166図	溝—38～43 (1/60) … 136
第139図	溝—28 (1/30)・出土遺物 … 116	第167図	石組み遺構—2 (1/50) … 137
第140図	溝—29 (1/150・1/75)・出土遺物(1) … 117	第168図	11～13区落ち込み出土遺物 … 137
第141図	溝—29出土遺物(2) … 118	第169図	土墳—33出土遺物 … 139

第170図	土壇—34出土遺物 (1/2)……………	139	第179図	6～15区出土遺物(2)……………	145
第171図	土壇—34・35出土遺物……………	140	第180図	1～5区出土遺物(3) (1/2)………	146
第172図	土壇—36 (1/40) ……………	140	第181図	6～15区出土遺物(3) (1/2)………	146
第173図	石組み遺構—3 (1/100)……………	140	第182図	石器 (1/2)……………	147
第174図	溝—45出土遺物……………	141	第183図	木製品 (1/2)……………	148
第175図	溝—46出土遺物……………	141	第184図	鉄器 (1/2)……………	148
第176図	1～5区出土遺物(1)……………	142	第185図	銅銭 (1/2)……………	148
第177図	6～15区出土遺物(1)……………	143	第186図	旭東平野古地形復元図 (1/50000) ……………	154
第178図	1～5区出土遺物(2)……………	144			

表 目 次

表1	編年対比表……………	12	表3	銅銭出土遺構・層位一覧表……………	148
表2	建物一覧表……………	90	表4	遺物観察表……………	160

図 版 目 次

1—1	調査区調査前全景 (丘陵上から)	8	G3区土器溜り—1 遺物近影
2	南側調査区弥生・古墳・奈良時代 全景 (丘陵上から)	3—1	土壇—1 (西から)
3	溝—4 (左)・2 (右上)・1 (右 下) (南から)	2	2号住居址全景 (北西から)
4	溝—2 遺物出土状態 (東から)	3	1号住居址全景 (南東から)
5	溝—2 土層断面	4	1号住居址全景 (南東から)
6	D4区遺構検出状態 (北東から)	5	灰穴—1 検出状態 (南から)
7	溝—7 全景 (南西から)	6	灰穴—1 土層断面 (西から)
8	溝—7 遺物出土状態 (西から)	4—1	井戸—1
2—1	土壇—6	2	井戸—3 1段掘りの状態 (東から)
2	土壇—2	3	井戸—3 完掘状態 (東から)
3	土壇—3	4	井戸—2 完掘状態 (東から)
4	壺棺墓	5	井戸—4 完掘状態 (東から)
5	P—5—5 遺物出土状態	6	井戸—4 遺物近影
6	G3区土器溜り—1 全景 (北東から)	7	井戸—5 完掘状態 (東から)
7	G3区土器溜り—1 遺物近影	8	井戸—6 完掘状態 (東から)
		9	井戸—6 遺物近影
		5	南側調査区弥生・古墳・奈良時代

- 遺構全景（丘陵から）
- 6—1 建物—1（西から）
- 2 建物—2（東から）
- 3 建物—3（北から）
- 4 建物—2（上）・3（下）（北から）
- 5 建物—3（上）・4（下）（東から）
- 6 建物—5（北東から）
- 7 建物—6（東から）
- 7—1 建物—8（北から）
- 2 建物—13・12・7・11・10（上方より）（北西から）
- 3 建物—10・11・7（左より）（西から）
- 4 建物—12（上）・13（下）（南から）
- 5 建物—12（北から）
- 6 建物—13（北西から）
- 8—1 建物—15（南東から）
- 2 建物—14（左）・16（右上）（北から）
- 3 建物—17（北から）
- 4 南側中世全景・建物—18（左上）・19（中下）・20（中上）（丘陵から）
- 5 柱穴（P—308）遺物出土状況
- 6 柱穴—柱痕検出状況
- 9—1 土壌墓（西から）
- 2 土壌墓出土遺物近影
- 3 北側中世全景（丘陵から）
- 4 石組み遺構—1 全景（北西から）
- 5 土壌—10半掘状態
- 6 北側の近世土壌
- 10—1 シスト状遺構検出状態
- 2 土壌—41検出状態（上層）
- 3 土壌—41出土遺物（櫛）近影
- 4 土壌—41遺物出土状態（下層）
- 5 溝—13その他掘り上げ状況（北側の近世）（南から）
- 6 溝—13北端部石列（南東から）
- 7 溝—13内閉塞石（南から）
- 11—1 北側調査区全景中世・近世（丘陵から）
- 2 南側調査区近世全景（丘陵から）
- 12 溝—7 出土遺物
- 13 溝—7 出土遺物
- 14 溝—7・1・包含層出土遺物
- 15 井戸—1・2・G 3 区土器溜り—1 出土遺物
- 16 住居址・柱穴・包含層出土遺物
- 17 壺棺墓・土壌墓—1・井戸—6・包含層出土遺物
- 18 井戸・近世土壌・包含層出土遺物
- 19—1 発掘調査着手前の遺跡の状況（北西から）
- 2 1 区西調査区土層断面壁（東から）
- 20—1 8 区 土壌—25 検出 状況（南東から）
- 2 7・8 区溝—23検出状況（南東から）
- 21—1 2 区土壌—27・溝—16検出状況（北東から）
- 2 溝—17・18・19検出状況（東から）
- 22—1 4～6 区溝—20遺物出土状況（東から）
- 2 4～6 区溝—20検出状況（北西か

	ら)	29—1	9・10区土壙墓—2 検出状況(北から)
23—1	9・10区土器溜り—2 検出状況(東から)	2	7区石組み遺構—2 検出状況(北から)
2	10・11区 溝—29検出状況(西から)	30—1	11～15区中世遺構検出状況(東から)
24—1	2区溝—26検出状況(北西から)	2	9区石組み遺構—3 検出状況(北から)
2	3区溝—27検出状況(北から)	31	出土遺物(1)(土壙—27・溝—20)
25—1	9区建物—21検出状況(西から)	32	出土遺物(2)(溝—20)
2	9区建物—21柱4 検出状況(西から)	33	出土遺物(3)(溝—20・溝—29)
26—1	1区井戸—7 井底検出状況(北東から)	34	出土遺物(4)(溝—27)
2	5区井戸—8 井底検出状況(南西から)	35	出土遺物(5)(井戸—7・土壙—29)
27—1	1・2区中世遺構群検出状況(南東から)	36	出土遺物(6)(土壙—30・柱穴—69・溝—30)
2	2・3区溝—30検出状況(北東から)	38	出土遺物(7)(土壙墓—2・柱穴群・包含層・溝—30)
28—1	2区土壙—29・30完掘状況(南から)	37	出土遺物(8)(土壙—29・柱穴・包含層)
2	7・8区中世遺構検出状況(南東から)		

第1章 地理的・歴史的環境

百間川は江戸時代（寛文年間）に、津田永忠によって岡山下城を旭川の洪水から守るため築造された一大人工河川である。岡山市竹田から分かれた旭川放水路（百間川）は、旭川左岸を南東に流走して原尾島付近で東に向きを変え、操山山塊の北側を東進し、米田で再び南に流路を変え、沖元で児島湾に注ぐ。その幅200～300m、流程約13kmにおよぶものである。

百間川が位置する旭川の左岸平野（旭東平野）は、北に竜の口山系、東に山王山、南に操山山塊をひかえた肥沃な水田が展開する一大穀倉地であるが、近年市街化の波に押され、その景観は急激に変貌しつつある。

岡山平野は今から約7000年前、縄文時代前期の海進をピークとして、それ以降の海退及び旭川の堆積物によって形成された沖積平野である。この旭川も現在は一流路にまとめられているが、古くは数条に分かれており、また幾筋もの支流が平野一帯に流走していたらしく、それら旧河道の両岸にはいくつもの自然堤防が形成されている。

岡山付近で確認されている遺物のうち、最も古いものとしては、操山旗振台北部遺跡（註1）出土のナイフ型石器がある。これは後期旧石器時代のもので、現在のところこれに前後する時期のものはない。

縄文時代の遺跡は、丘陵に散布する後期の朝寝鼻貝塚（註2）と他に数カ所石器散布地が存在しているが、新たに百間川改修工事に伴い、百間川沢田遺跡（註3）から縄文時代中期の土器片2片、及び同後期の土器片10片を採集した。この中期の土器片は磨滅が激しく、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性も考えられるが、後期の土器片においては残りもよく、また昭和34年の国道2号線百間川橋建設の際にも出土していることなどから、岡山平野においてはこの時期から沖積地における集落の開始が考えられる。

縄文時代晩期の遺跡は、いずれも弥生時代につながる複合遺跡である。調査で明らかにされた例としては、津島遺跡（註4）、百間川原尾島遺跡、同沢田遺跡、雄町遺跡（註5）などがある。百間川原尾島遺跡においては、遺構の性格を明らかに出来なかったものの縄文時代晩期の柱穴状土壌を検出している。津島遺跡は縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺物及び弥生時代の水田遺構、住居址、高床倉庫、貯蔵穴などの遺構が検出されている。雄町遺跡は縄文時代晩期～平安時代にかけての遺物及び、旧河道・溝・住居址・土壌墓などの遺構が検出されており、特に、弥生時代中期の水利施設が明らかにされるとともに居住区と墓域が明確に区別されていることが判明した。



1. 百間川原尾島遺跡 2. 百間川沢田遺跡 3. 百間川兼基遺跡 4. 百間川当麻遺跡 5. 兼基遺跡
6. 雄町遺跡 7. 乙多見遺跡 8. 赤田遺跡 9. 南方遺跡 10. 一本松古墳 11. 神宮寺山古墳
12. 唐人塚古墳 13. 備前車塚古墳 14. 山王山古墳 15. 沢田大塚古墳 16. 金蔵山古墳 17. 旗振台古墳
18. 操山103号墳 19. 操山106号墳 20. 湊茶臼山古墳 21. 網浜茶臼山古墳 22. 操山109号墳
23. 網浜廃寺 24. 幡多廃寺 25. 成光廃寺 26. 實田廃寺 27. 井寺廃寺

第1図 百間川周辺遺跡分布図 (1/50,000)

弥生時代の中期の遺跡は、前述の遺跡の他に南方遺跡（註6）、赤田遺跡（註7）、乙多見遺跡（註8）などがある。南方遺跡からは人骨及び土墳墓、灰穴などが検出されており、赤田遺跡からは、高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川今谷遺跡は弥生時代中期を中心として、古墳時代に及ぶ複合遺跡であるが、特に弥生時代中期の土器片とともにガラス塊が多量に出土しており、また1間×2間～5間までの建物を20数棟検出している。なお当遺跡の南側に位置する操山の谷部からは3個の銅鐸が出土している（註9）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は、急激にその遺跡数をふやし、当平野に形成された微高地の大半は集落が営まれた可能性が強い。一方、百間川原尾島遺跡、同沢田遺跡、同兼基遺跡では、弥生時代後期終末の洪水によって埋没した水田が明らかになった。これによると、微高地縁辺部及び旧河道上に水田が形成されており、前者は10㎡～40㎡前後の小規模な田面積であるのに対し、後者は200㎡前後とその規模も大きい。また最近の調査では百間川原尾島遺跡から弥生時代中期中葉に比定される水田も明らかにされつつある。

古墳時代の遺跡は、百間川原尾島遺跡、同兼基遺跡からは、竪穴住居址群とともに、3間×3間の倉庫群が検出されている。一方古墳についていえば、平野の北にある竜の口山系には13面の舶載鏡を出土した備前車塚古墳（註10）が、南にあたる操山山系には網浜茶臼山古墳、湊茶臼山古墳、金蔵山古墳（註11）、東にあたる山王山には、山王山古墳群がある。これらの丘陵上には、これ以降後期古墳も含め200基をはるかに越える古墳が確認されている。

旭川の左岸に広がる平野（旭東平野）には、ほぼ全体に条里制の遺構が見られる。この旭東平野に見られる条里遺構の仔細は、正確に南北方向（註12）を示している。この平野の北西部には、備前国府跡が推定されている。備前国府は、和名抄（註13）によれば、備前国御野郡に所在すると記されている。その推定地については、大きく二説ある。一説は、国長宮を中心とする説（註14）と他の説は現在の国府市場を中心とする説である（註15）。現状では、いずれとも決し難い。推定国府跡を挟んでその北側には、賀田廃寺（註16）があり、南側には、幡多廃寺（註17）がある。また、国府市場の東には、成光廃寺も所在する。この国府跡の北西部（岡山市祇園）より、南東部（岡山市長利）にかけて、条里制に規制されない状態で、河道の痕跡が見られる。この河道は、平野を斜めに横切っていたものが、長利付近からはほぼ南へ流れを変えて海へ注ぐものである。この流路の変換点に百間川当麻遺跡が所在し、古代倉庫群及び中世の建物群を検出している（註18）。

註

註1 鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史』古代編 岡山市役所 1962

註2 註1に同じ

註3 岡山県教育委員会の昭和53年度の調査において出土している

第1章 地理的・歴史的環境

- 註4 『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会 1970
 註5 「雄町遺跡」「埋蔵文化財発掘調査報告」岡山県教育委員会 1972
 註6 『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会 1971
 註7 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1976
 註8 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』3 1973
 註9 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
 註10 註1に同じ
 註11 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959
 註12 高重進「農村・耕地の歴史地理」『岡山県の地理』福武書店 1978
 註13 正宗敦夫校訂『倭名類聚鈔』風間書房 1970
 註14 石田寛「旭川左岸平地の条里」『岡山市史』古代編 第4編・第3章 滋津政右衛門「備前国府」
 『岡山市史』古代編 第5編 第1章
 註15 木下良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号 1967年9月
 高橋護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』1 岡山県教育委員会 1971
 註16 『貫田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971
 註17 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1976
 註18 同章は、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39の「地理的歴史的環境」に一部加筆して再掲載したものである。

表1 編 年 対 比 表

遺跡				百 間 川	雄 町	上 東・川 入
時代						
弥 生 時 代	前 期	津 島	百 間 川 前 期 Ⅰ			
			百 間 川 前 期 Ⅱ	雄 町 1		
		門 田	百 間 川 前 期 Ⅲ	雄 町 2		
	船 山 2					
	中 期	南 方	百 間 川 中 期 Ⅰ	高 田		
				雄 町 3		
		菰 池	百 間 川 中 期 Ⅱ	船 山 5		
				菰 池		
					雄 町 4	
	後 期	前 山Ⅱ	百 間 川 中 期 Ⅲ	前 山 東		
				雄 町 5		
		仁 伍		雄 町 6	上 東・鬼川市 0	
	後 期	上 東	百 間 川 後 期 Ⅰ	雄 町 7	上 東・鬼川市 Ⅰ	
				雄 町 8		
		百 間 川 後 期 Ⅱ	雄 町 9	上 東・鬼川市 Ⅱ		
			雄 町 10			
グランド上層		百 間 川 後 期 Ⅲ	+	上 東・鬼川市 Ⅲ		
				才 の 町 Ⅰ		
古墳時代	前 期	酒 津	百 間 川 後 期 Ⅳ	雄 町 11	才 の 町 Ⅱ	
			百間川古墳時代 Ⅰ	雄 町 12	下 田 所	
		王 泊 六 層	百間川古墳時代 Ⅱ	雄 町 13	亀 川 上 層	
				雄 町 14	+	
			百間川古墳時代 Ⅲ	雄 町 15	川 入・大溝上層	

第2章 調査の経緯

第1節 調査経過

百間川当麻遺跡の調査は、昭和53年4月に右岸用水路部分の調査に着手して以来、約2ヶ年間調査を行った。調査範囲は、当初は右岸用水路部分のみと考えられていたが、調査の進展に伴いその範囲は拡大していった。最初に注目したのは、右岸用水路の北側に所在する丘陵部であった。そのため、右岸用水路部分の調査中に、丘陵上にトレンチを設定し掘り下げたところ、遺構を検出したことにより、丘陵上にも遺構の存在が確認され、全面を調査することとなった。そこで、右岸用水路部分の調査が終了すると、引き続き丘陵部の調査に着手した。また、丘陵部の調査中に、丘陵の東側の平地部分が問題となった。つまり、百間川が東流していたものが、この米田地区の北側でその流路を大きく変え、南流することになる。そのため、低水路部分の掘削範囲も広く、丘陵東側部分も、そのほとんどが低水路部分となることが判明した。そこで、右岸用水路の調査で判明していた遺跡の範囲等を考慮に入れると、この部分にも遺跡が広がるものと推定された。そこで、その部分を6ヶ所試掘したところ、近世～弥生時代の多くの遺物と遺構を検出したことにより、この部分においても遺跡が広がることが確認された。その遺跡の範囲については、調査中の丘陵の北端部分から始まる百間川の堤防があるが、その堤防が大きく南に弧を描いて曲り、米田地区の南側に所在する丘陵の東端部分まで続く、その堤防に囲まれる部分と想定していた。しかし、平地部分の調査が進行するに従い、遺跡の範囲が拡大する可能性が生じてきた。そこで、百間川の堤防に囲まれる内側において遺物の散布状況や、低水路として掘削されている部分の断面観察等を行った結果、遺跡の範囲は、さらに大きく拡大することになった。また、表面観察等で不明な部分については、トレンチ等を設定して遺跡の範囲を確定した。

平地部分（低水路）の調査は、2期に分けて調査した。第1期の調査は、昭和53年10月に着手し、昭和54年3月に終了した。第1期は、調査範囲の北側約半分で、松本・二宮が担当した。第2期は、その南側で、井上・二宮が担当し、昭和54年4月から同年9月まで調査した。調査面積は、第1期が1,100㎡、第2期が1,100㎡である。第2期の調査が終了する頃に、旧堤防が取り去られる計画のあることを知った。遺跡は、先にも述べたように、さらに東へ広がることが判明しており、その取り扱いが問題となった。建設省岡山河川工事事務所と協議の結

第2章 調査の経緯

果、工事工程との関係から、工事発注後2ヶ月間で調査を行った。調査は、昭和55年1月22日に着手し、3月6日に終了した。調査面積は600㎡である。

百間川当麻遺跡にかかる、右岸用水路建設に伴う第一次調査は、昭和54年4月から9月にかけて実施された。（この結果については、すでに『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』に所収されている。昭和56年刊。これが第一次調査報告である。）しかし、昭和56年3月に開催された県文化課と建設省との打合せ会の席上、この右岸用水路の位置が変更となり、再び発掘調査を行わざるを得なくなった。この新たな計画提示は、かかる地区の工事に伴う、岩盤掘削等の工事に伴う民家におよぼす騒音を軽減したり、市道取付け部分問題や米田橋供用等これに伴う通学路の設定などと密接な関係があり、設計変更はやむを得ないという状況であった。県文化課はこの新たな調査を実施する計画を組んでいなかったが、かかる切迫した状況に対応すべく、2班（4名）の調査パーティを編成した。

工事計画と調査工程の調整については、当初計画の工事面積と、現地に入って杭打後の面積はかなり開きがあったため、最終的に2か月すなわち4月から5月にかけてという合意に達した。この期間については、第一次調査で明らかにされているように800㎡を越す調査面積に加えて、複雑な厩位関係や遺構の密度が高いこと、遺物の出土量が極めて多いことなどを考慮すると、相当厳しい調査期間であったが、6月に入ってから稲作の開始とそれに供するための用水路の完成は密接不可分な、地域住民の強い要望であるため、やむを得ずその期間内に終了することを絶対条件として調査を開始したのであった。そのため、表土の除去等にはパワーシャベル等の重機を導入し、遺構検出作業に着手するのを早めざるを得なかった。また、遺構の実測等についても、満足できるまで現地で検討できなかった。たとえば二つの遺構面における中世柱穴群の分析など意を尽くして調査できなかった遺構もある。

一方、調査区の上流部分、すなわち第一次調査区から第二次調査区へ分岐する1区の部分では、上流側がすでに工事が完了しており、その接続部分から掘削を行うと、降雨時の増水があると、調査区への雨水流入が始まる危険性があったため、境界部分の一部を未掘とせざるを得なかった。更にこの部分は人家の塀に近接しているためもあって平面的な遺構検出はあきらめざるを得ず、壁面観察・遺物採集にとどまった。

3区では、電柱の支線が調査対象区域内に設置されていたが、使用中であったため撤去ができず、わずかながらも未掘部分を残した。

以上のような紆余曲折を経ながら、降雨による数日間の調査期間の延長が認められたため、結局6月2日に調査を終了、撤収するはこびとなった。

今回の調査で明らかにされた多くの事実の中で、とりわけ重要な発見のひとつに「上三宅」の墨書須恵器がある。そして、この奈良時代に比定される総柱の掘立柱建物（倉庫）や溝の発

見は、低水路部分調査で明らかにされた奈良時代遺構群と深く関わる遺構であることが判明している。一方、中世遺構群の中でも井戸・柱穴群・人骨をよく残した土墳墓の発見もまた、出土遺物の多様性や、当時の生活空間の実態をよく示すものである。個々については報文の中で詳述することとするが、調査時期及び編冊上すでに刊行されている百間川当麻遺跡右岸用水路第一次調査報告とあわせて、より一層それらの遺構群や出土遺物について具体的な事実が深められると思われるので併読していただくことを希望する。現地発掘調査の実施にあたっては、地元米田地区住民の方々には、有形・無形のご理解とご協力を賜った。記して謝意を表す次第である。

(井上 弘・岡田 博)

第2節 日 誌 抄

＜低水路調査区＞

昭和53年

10月13日（金）

ボーリングによる確認地点の設定と掘り下げ開始。

10月17日（火）

試掘より柱穴を検出。

10月21日（土）

試掘内の遺構検出作業。

10月28日（土）

遺構の存在を確認し、丘陵部の調査がほぼ終了したため平行して全面調査に着手する。調査区の表土除去。

11月14日（火）

B・C・D—4・5区で遺構を検出する。

11月21日（火）

丘陵部の調査完了する。C・D—2区遺構の検出作業。

12月1日（金）

C・D—2区遺構の全体写真撮影。

12月22日（金）

土壌の掘り下げ、実測、写真撮影等行う。

12月27日（水）

建物の実測。

昭和54年

1月5日（金）

石組遺構の清掃と実測を行う。

1月17日（水）

建物の写真撮影・実測を行う。

1月23日（火）

発掘区の全景撮影。

2月8日（木）

丘陵部・低位部を航空写真撮影。

2月26日（月）

下層への掘り下げ。

3月2日（金）

包含層の掘り下げを終え、遺構の検出作業。

3月9日（金）

遺構の検出と掘り下げ。

第2章 調査の経緯

3月26日（月）

最終遺構面の検出と検出遺構の掘り下げ。

3月31日（土）

南側調査区の表土除去。

4月5日（木）

表土の排土を終え遺構の検出作業に着手する。

4月9日（月）

E・F一3・4区遺構の検出作業と掘り下げ。

4月17日（火）

遺構の掘り下げ及び実測を行う。

5月9日（水）

第1遺構面全体の実測・写真撮影。下層へ掘り下げ開始。

5月16日（水）

第2遺構面を検出し、遺構の検出作業。

5月21日（月）

遺構の掘り下げと、実測を続ける。

5月28日（月）

遺構の掘り下げ・実測・写真撮影等終了した部分より掘り下げる。

6月1日（金）

第3遺構面を検出し、遺構の検出作業を行う。

6月12日（火）

遺構の検出と掘り下げ。

6月27日（水）

大雨が降り続き、以後数日作業休み。

7月4日（水）

排水作業。

7月5日（木）

遺構の検出作業。

7月12日（木）

検出遺構の実測・写真撮影。

7月25日（水）

第3遺構面の全体写真撮影。

7月26日（木）

下層への掘り下げ開始。

7月30日（月）

第4遺構面を検出し、遺構の検出作業。

8月10日（金）

遺構の検出作業を続ける。

8月21日（火）

遺構の検出と実測を行う。

9月1日（土）

溝状遺構内出土遺物の実測を続ける。さらに第5遺構面の存在を確認し掘り下げる。

9月10日（月）

第5遺構面を検出し、住居址の検出、土器溜りの検出。

9月13日（木）

住居址の実測・写真撮影。土器溜りの実測・写真撮影。建物群の検出。

9月17日（月）

第5遺構面の全体写真撮影。

9月19日（水）

建物の掘り下げ・実測。溝（弥生前期）の掘り下げと実測。

9月22日（土）

西側丘陵上より全景写真。

9月27日（木）

補足調査と遺構の実測を続ける。

9月29日（土）

補足実測等終え、調査を終了する。

昭和55年

1月22日（火）

当麻遺跡の旧堤防下の調査を再開する。

2月1日（金）

旧堤防の盛土等の除去。

2月5日（火）

前回調査区の第4遺構面まで掘り下げる。

2月12日（火）

遺構の検出作業を続ける。

2月16日（土）

溝の検出と掘り下げ。

2月20日（水）

井戸・溝・土壌等を掘り下げ、実測・写真撮影を行う。

2月28日（木）

検出遺構の掘り下げ、実測・写真撮影。

3月3日（月）

低水路、右岸用水路部分に確認調査のトレンチを設定し掘り下げる。検出遺構の実測を続ける。

3月6日（木）

調査区全体の実測等を終了し、調査を終える。

＜右岸用水路調査区＞

昭和56年4月6日（月）

調査担当者、現地にて発掘区確認、面積計測。

4月7日（火）～11日（土）

発掘区縄張り設定作業。重機によって表土除去作業開始、10日に終了。器材搬

入、休憩テント、器材小屋等設営。

4月13日（月）～18日（土）

地元あいさつまわり。発掘区南側約150mにわたって金網を張りめぐらし、通学児童や幼児の転落を防ぐ。調査対象地西端の三角形となる部分を、重機で掘り下げ、断面観察と遺物採集を行い、範囲を平板測量。15日終了。レベル杭設置。重機による排土面を清掃、遺構検出作業、側溝掘下げ作業。

4月20日（月）～25日（土）

近世遺構面の遺構検出作業。検出遺構を掘り下げ実施。発掘区側壁の土層断面観察。1～3区で中世遺構面まで掘り下げ。中世遺構面の遺構検出作業。9区近世井戸調査開始。

4月27日（月）～5月1日（金）

1～5区中世の柱穴・土壌を掘り下げ。6区近世井戸を掘り下げ。器材の残部を搬入。6～10区中世遺構検出作業。11～15区中世の溝・土壌・落ち込みの掘り下げ開始。

5月2日（土）

係会議、西古松文化課分室にて。

5月6日（水）～9日（土）

発掘区全体にわたる基準線・ポイント設定作業を行う。近世～近代遺構の掘り上げ作業。中世の柱穴・土壌を掘り下げ。3区で中・近世の溝群検出。9区土壌墓精査開始、人骨遺存。

5月11日（月）～16日（土）

1～3区中世遺構検出作業及び柱穴群測

第2章 調査の経緯

量。井戸一8検出、掘下げ作業。溝一30～32を掘下げ。6～10区中世の柱穴・土城・溝の掘下げ作業。11～15区の中世遺構群実測。

5月18日（月）～23日（土）

1区・2区柱穴群補測。土城一28・29掘り上げ、白磁・土師器など多数出土。溝一24・25掘下げ着手。井戸一7検出、掘下げ作業。溝一17～19掘上げ。6～10区中世遺構調査完了。9～11区奈良時代溝・建物（倉庫）検出。墨書土器（「上三宅」と外底部に書かれる。）・銅製帯金具（丸柄）出土。

5月25日（月）～30日（土）

溝一24・25掘上がり測量及び写真撮影。溝一20掘上げ写真撮影後土器とりはずし。土城一26・溝一16掘上がり写真撮影、土器とりあげ。1・2区土層断面図作成。9～11区奈良時代遺構調査完了。6～11区古墳時代以前の溝・土器溜り・土城検出、調査完了。

5月31日（日）～6月3日（水）

土層断面図、発掘区域図作成。土城一26精査、実測。6月2日発掘作業完了。6月3日、器材等撤収、第二微高地に移動する。

第3節 調査の構成

発掘調査は建設省中国地方建設局と委託契約を締結した岡山県教育委員会があたり、調査にあたる専門的指導及び助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下、対策委員会）の委員を委嘱した。

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員

岡山大学	小野 昭
岡山理科大学	鎌木 義昌
岡山市立岡輝中学校	角田 茂
岡山市教育委員会	出宮 徳尚
岡山大学	春成 秀爾
岡山女子看護専門学校	水内 昌康
岡山大学	近藤 義郎
岡山市立福南中学校	池葉須藤樹

昭和53年度

文化課長

飛田 真澄

課長補佐

主幹

吉光 一修

小川 佳彦

第3節 調査の構成

文化財主幹	難波 進	同	渡辺 光
主事	小倉 昇	同	岡田 博
文化財二係長	光吉 勝彦	同	高畑 知功
文化財保護主査	河本 清	同	二宮 治夫
同	正岡 睦夫	同	中野 雅美
文化財保護主事	下澤 公明	主事	藤井 守雄
同	井上 弘	同	内藤 善史
同	松本 和男	同	平井 泰男
同	岡田 博	同	島崎 東
同	高畑 知功	同	光永 真一
同	二宮 治夫	昭和55年度	
同	浅倉 秀昭	文化課長	近藤 信司
同	福田 正継	課長補佐	吉光 一修
同	江見 正己	主幹	西田 聡一
主事	藤井 守雄	文化財主幹	難波 進
同	中野 雅美	主事	湯浅 保
同	内藤 善史	文化財二係長	河本 清
調査補助員	平井 泰男	文化財保護主査	正岡 睦夫
同	島崎 東	同	井上 弘
同	堀川 純	文化財保護主事	渡辺 光
昭和54年度		同	岡田 博
文化課長	近藤 信司	同	高畑 知功
課長補佐	吉光 一修	同	二宮 治夫
主幹	西田 聡一	同	岡本 寛久
文化財主幹	難波 進	同	中野 雅美
主事	湯浅 保	同	内藤 善史
文化財主幹	光吉 勝彦	主事	金尾 一志
文化財二係長	河本 清	同	平井 泰男
文化財保護主査	正岡 睦夫	同	島崎 東
文化財保護主事	下澤 公明	同	光永 真一
同	井上 弘	昭和56年度	
同	松本 和男	文化課長	早田 憲治

第2章 調査の経緯

課長代理	吉光 一修	同	浅倉 秀昭
文化財主幹	高原 健郎	同	岡本 寛久
主事	湯浅 保	同	中野 雅美
埋蔵文化財係長	河本 清	同	内藤 善史
文化財保護主査	正岡 睦夫	主事	金尾 一志
文化財保護主事	渡辺 光	同	平井 泰男
同	山磨 康平	同	島崎 東
同	岡田 博	同	光永 真一
同	二宮 治夫		

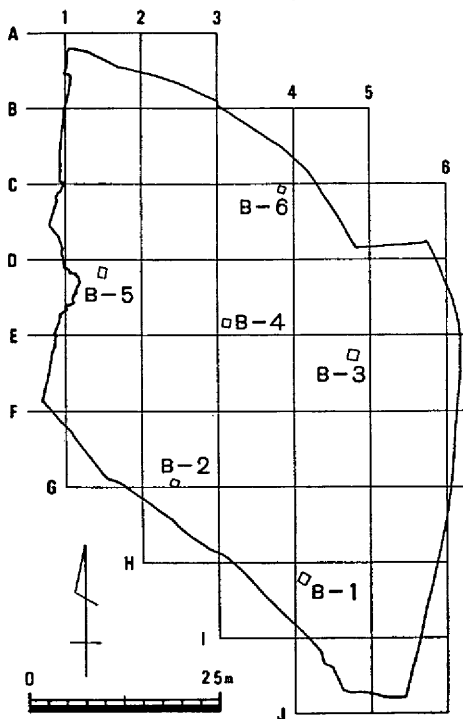
第3章 低水路調査区

第1節 調査区の概要

百間川当麻遺跡は、岡山市米田に所在する。遺跡は、操山山塊の東北端に位置するものである。百間川は、岡山市原尾島付近で操山に沿い東流するが、この米田で、大きく南に流路を変える。遺跡は、その右岸側に展開するものである。遺跡の発見は、昭和52年度に、右岸用水路に関係する確認調査において発見した。その結果に基づき、昭和53年4月から右岸用水路部分の調査を実施した。その結果は、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46として刊行している。その調査中に、丘陵部及び低水路部に遺跡を発見した。そのため、右岸用水路部分の調査が終了すると、それに引き続き丘陵部の調査に着手した。さらに、丘陵部の調査が終了すると、低水路部分の調査に着手し、昭和54年9月末に一応の終了を見た。しかし、工事により、調査区

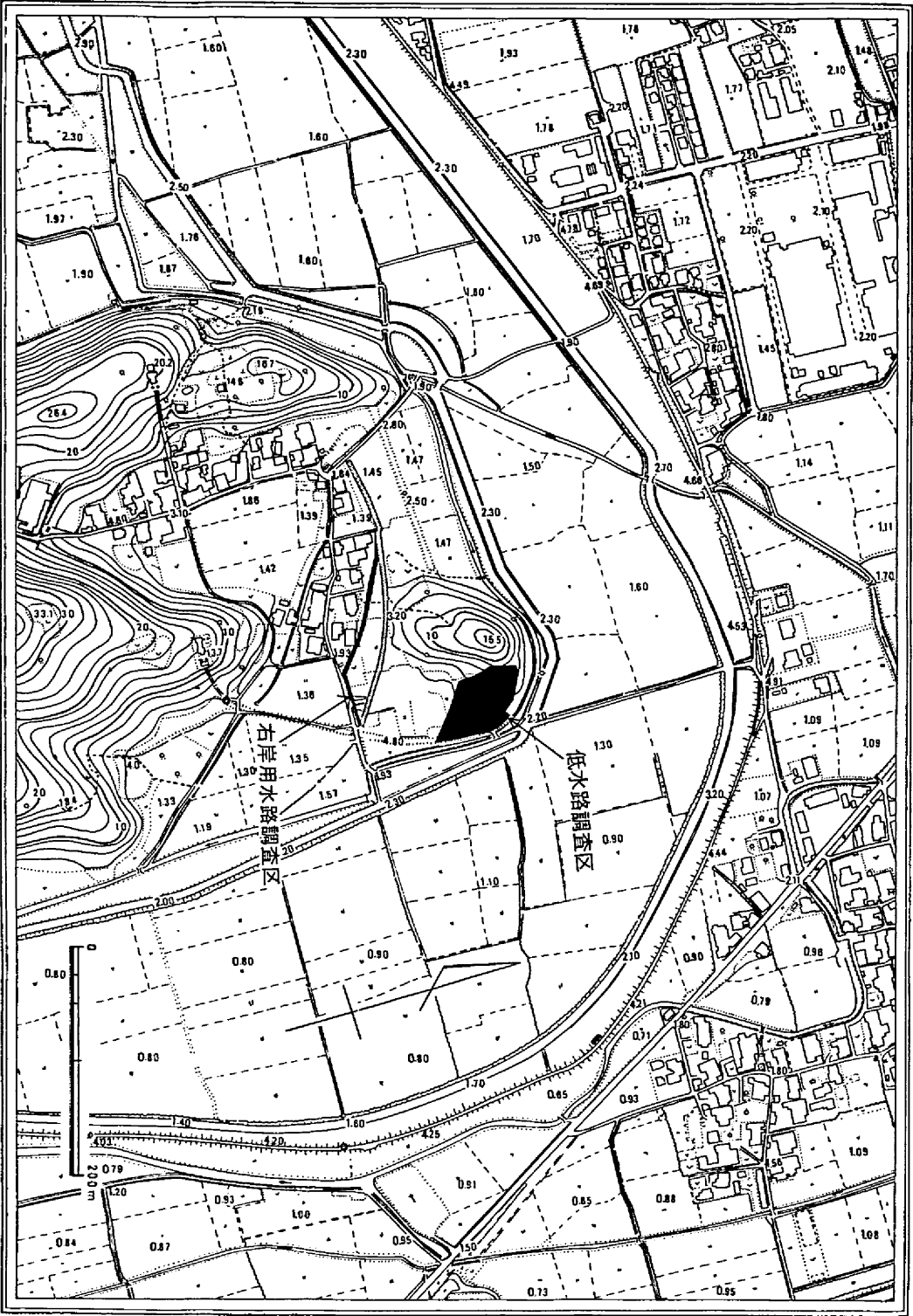
の南側の高水位敷が掘削され、遺跡が削平されることが判明したため、その部分の調査が必要となったが、今後に残すこととなった。また、百間川当麻遺跡の範囲もさらに東へ拡大することが判明した。その部分も、今後の調査に残した。

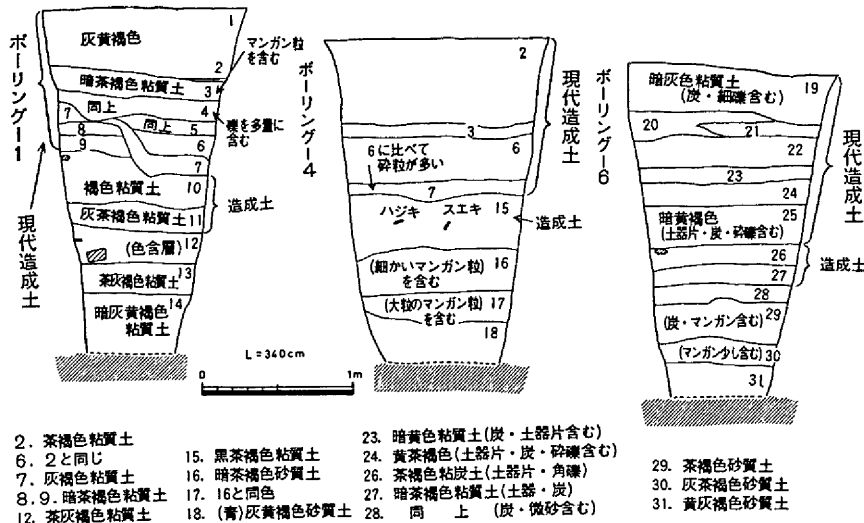
今回報告する低水路部分の調査は、丘陵部分の調査中に発見した。遺跡の存在を予測した調査員は、低水路予定部分に、2m四方のトレンチを6ヶ所設定し、調査した。その結果は、第4図に示すような層序を呈していた。土層図にも見られるように、近・現代の埋土が厚く堆積している。その下層には、層位は多いが、3～4面に分離できる遺構面が存在することが判明した。また、各時期の遺物が非常に多く出土した。その結果に基づき、本格的な調査を



第2図 区割り及びボーリング位置図(1/1000)

第3図 当麻遺跡周辺地形図及び調査区設定図 (1/6,000)





第4図 ボーリング土層断面図 (1/50)

実施した。調査は、範囲内を2期に分けて実施した。調査した遺構面は、上層から、近世・中世・古代・古墳～弥生の4面を調査した。

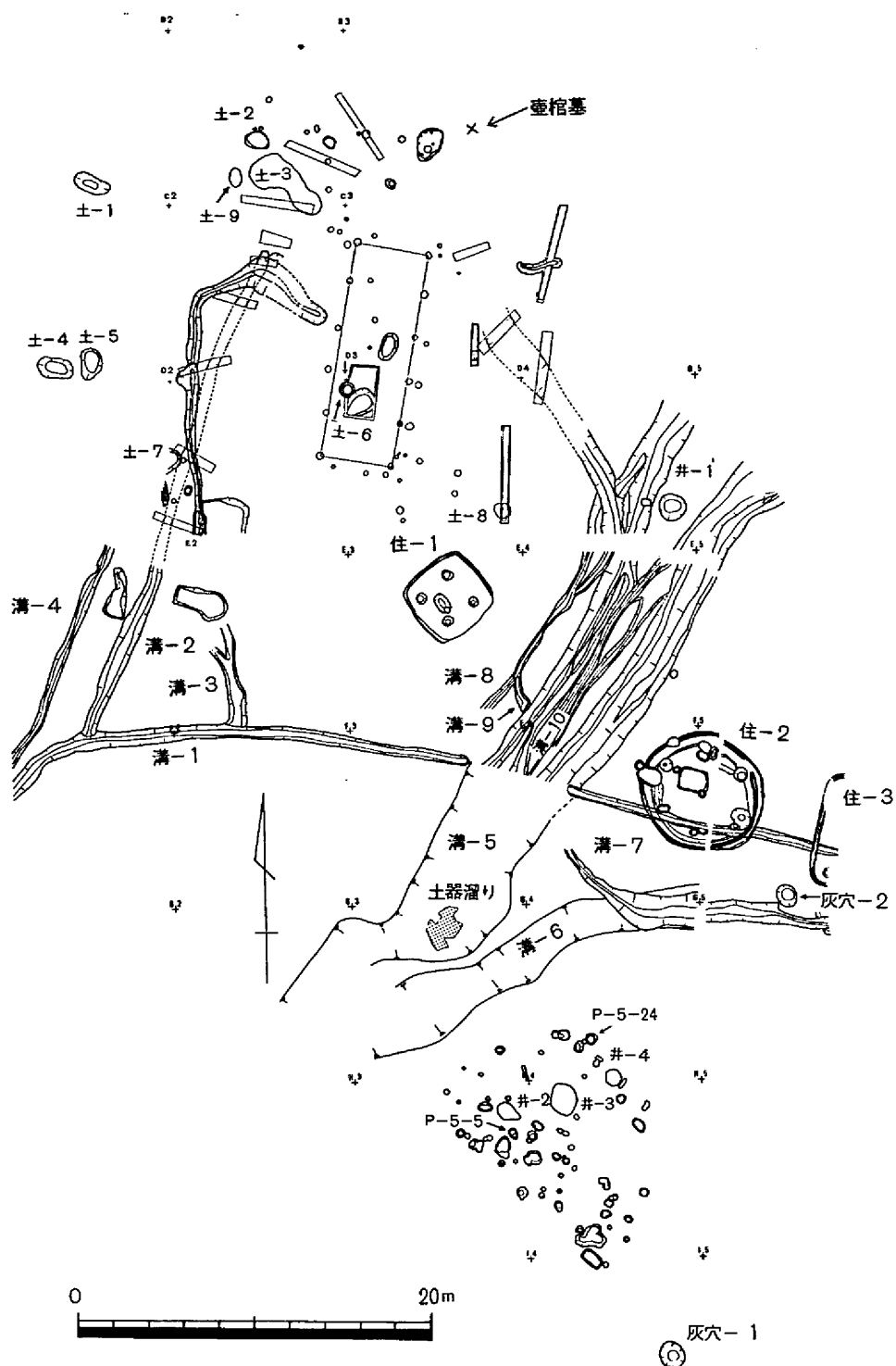
第2節 弥生・古墳時代の遺構・遺物

溝—1

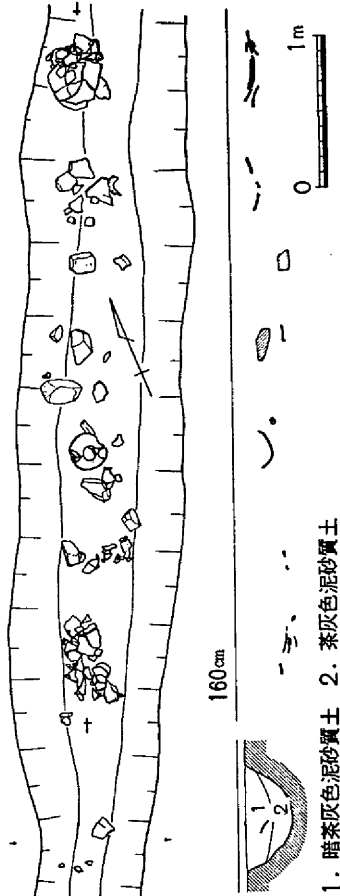
丘陵の裾よりゆるく弧を描いて東へ伸びる溝で、延長距離約50mを調査した。溝は、淡灰黄褐色を呈する砂層の上面において検出した。検出した溝の上端の最大幅は80cm、最小幅は30cmを測る。底部の幅は、60cm～20cmを測る。溝の側壁は、ほぼ垂直に掘られており、その断面は、逆台形を呈している。この溝は、溝—5を検出した付近において一度途切れ、約6m東において、また深く掘り込まれており、陸橋部を推測させる。溝の最上層からは、前期弥生式土器(百・前・Ⅱ)が出土したことからして、弥生時代前期に位置付けられるものと考えられる。

溝—2

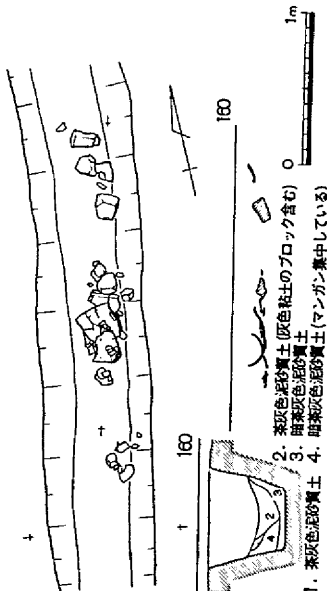
溝—1と分岐して北に伸びるもので、延長距離30mまで確認した。この溝は、その形状においては、溝—1とほぼ同様である。溝の上端の幅は、110cm～60cm、底部の幅は、60cm～30cmを測る。断面逆台形を呈するこの溝の最上層からは、前期弥生式土器(百・前・Ⅱ、第8・9図)が出土しており、溝—1と同時に存在したものと考えられる。



第5図 弥生・古墳時代遺構配置図 (1/400)



第6図 溝-2平・断面図(部分)(1/50)



第7図 溝-2平・断面図(部分)(1/50)

溝-3

溝-2の東約7mの位置に検出した溝で、溝-1とはほぼ直交する。しかし、溝-1の南側においては、その延長と考えられるものは検出されなかった。この溝は、ほぼ真北に伸び、約24m北の位置で大きく東へ曲る。検出した溝の深さは浅く、断面はゆるく弧を描くものである。検出した溝の深さは、15~12cm、幅は、100~60cmを測る。

溝-4

溝-2の西約2mの位置に検出した溝で、溝-2とはほぼ平行する。検出した溝の幅は、約60cmと細めであるが、深さは、33~20cmを測り、断面形は、逆台形を示しており、良好な残存状態を呈している。

溝-5

北東から南西方向に流れる溝群である。この遺構は、溝-5と一括して調査したが、5本の溝が、下流部において合流し、1本になったものと考えられる。北端部においては、4本の溝を検出したが、途中において、同一場所に溝が集中するが、新旧の分離はできる(第10図)。

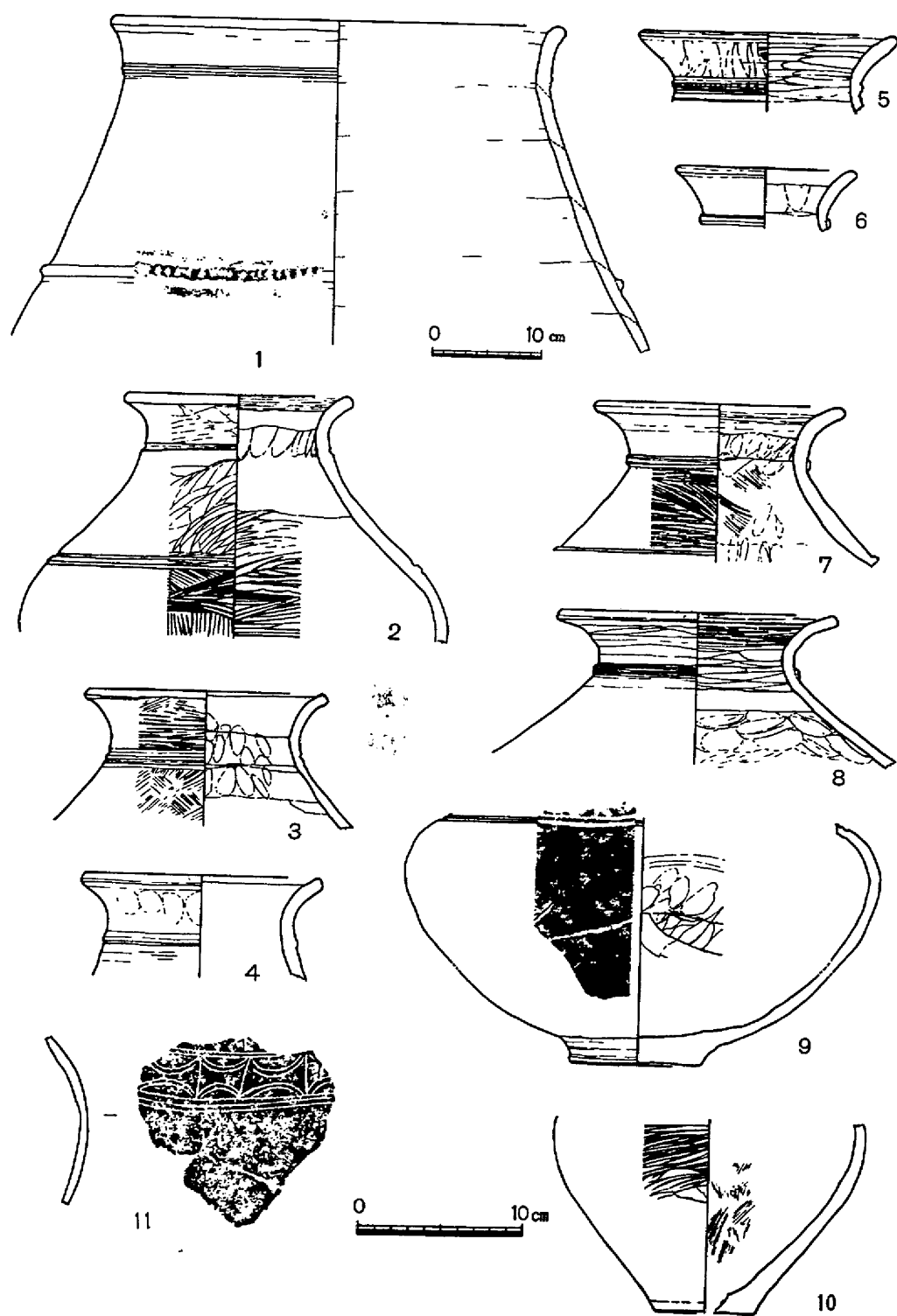
しかし、南端部においては、土層断面等の観察によっても分離することはできない(第11図)。北端部においては、3本の溝の一群と、2本の溝の一群の二群に分かれさらに北へ伸びるにしたいがい3本の溝に分離される状況を呈してくる。この溝は、東側が古く、西側の一群が、新しくなる傾向を示している。

溝-6

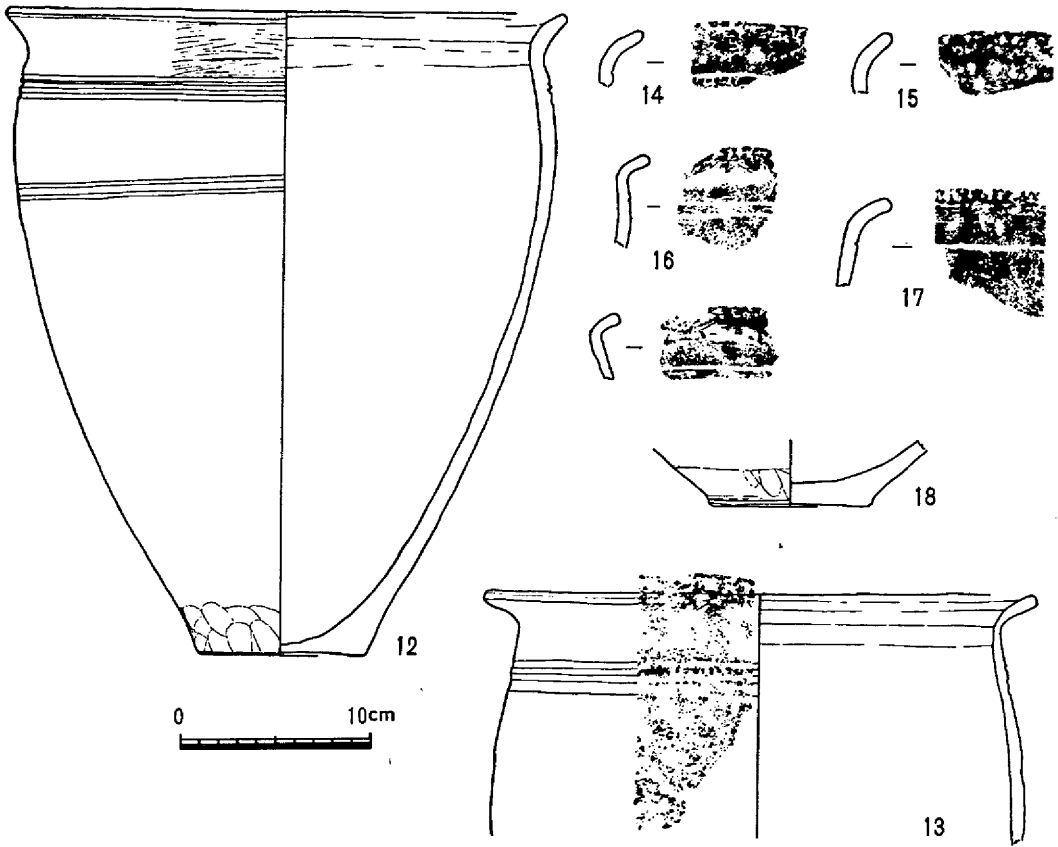
溝-5の東側に接して検出した溝で、ゆるやかに弧を描き、溝-5と離れてゆく。溝-7と重複する部分においては、ほぼ東に向く。検出した溝の最大幅は、約400cmを測る。検出した最小幅は、260cmを測る。検出した溝の深さは、50~70cmを測る。溝は、22mを調査した。

土壌-1 (第14図)

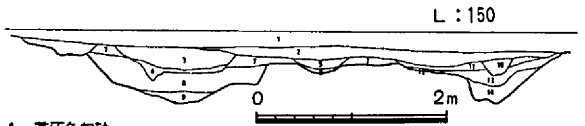
(井上)



第8図 溝-2 出土遺物

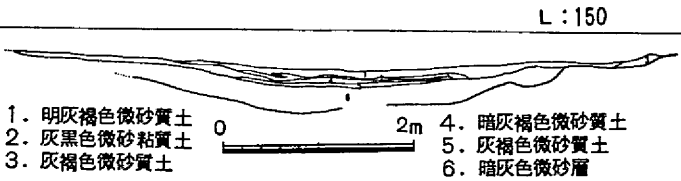


第9図 溝-2 出土遺物



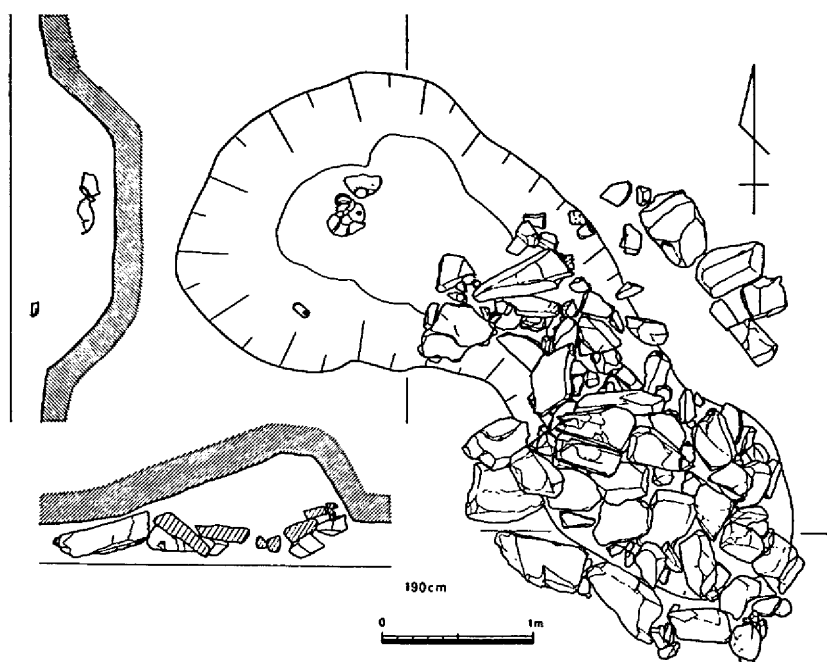
- | | | | |
|-----------|-----------|----------------------|------------|
| 1. 茶灰色粗砂 | 6. 灰白色泥砂 | 9. 淡暗灰色粘質土 | 12. 灰白色泥砂 |
| 2. 淡灰灰色泥砂 | 7. 暗茶灰色粗砂 | 10. 暗茶灰色粗砂 | 13. 灰黄褐色泥砂 |
| 3. 暗茶灰色泥砂 | 8. 暗灰色泥砂 | 11. 暗茶灰色粗砂
(弱い粘質) | 14. 淡暗灰色泥砂 |
| 4. 暗茶灰色粗砂 | | | |
| 5. 暗茶灰色泥砂 | | | |

第10図 溝-10 土層断面図 (1/80)

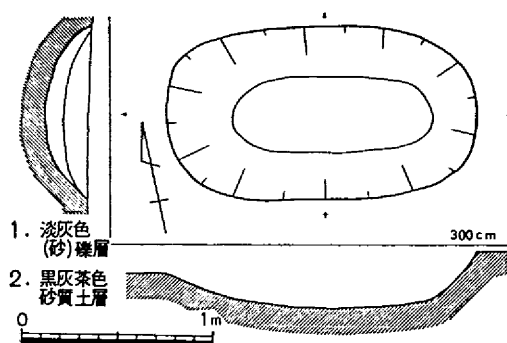


- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 明灰褐色微砂質土 | 4. 暗灰褐色微砂質土 |
| 2. 灰黒色微砂粘質土 | 5. 灰褐色微砂質土 |
| 3. 灰褐色微砂質土 | 6. 暗灰色微砂層 |

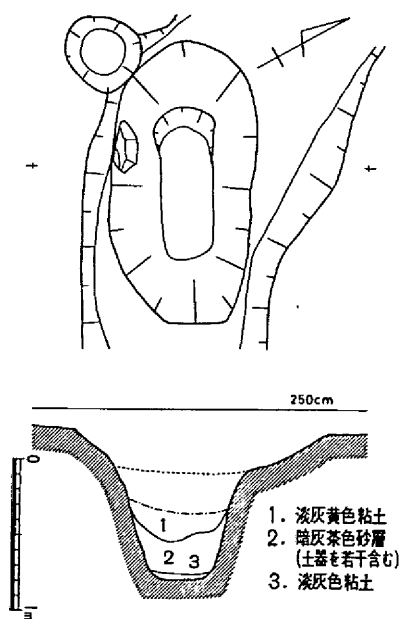
第11図 溝-10 土層断面図 (1/80)



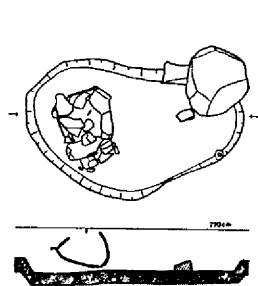
第12図 土坑—3 平・断面図 (1/50)



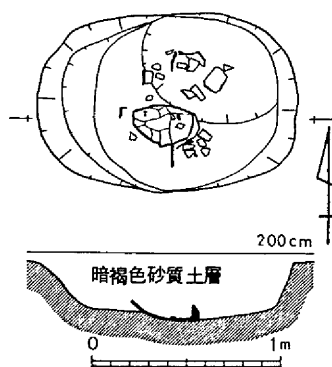
第13図 土坑—4 平・断面図 (1/40)



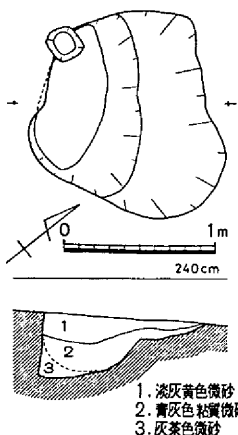
第14図 土坑—1 平・断面図 (1/50)



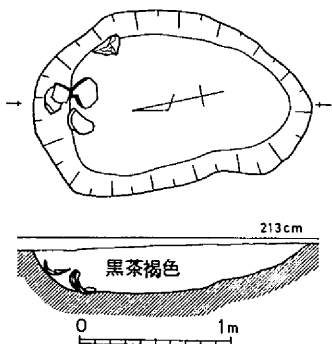
第15図 土坑—43
平・断面図 (1/40)



第16図 土坑—2 平・断面図 (1/40)



第18図 土坑—8
平・断面図 (1/50)



第17図 土坑—5 平・断面図 (1/50)

丘陵裾部に近い所に位置し、北西—南東方向で若干歪な長楕円形を呈し、長辺1.9m、短辺92cm、最深部で97cmを測る事が出来た土坑である。出土遺物から、弥生時代のものである。

土坑—3 (第12図)

遺構は基盤層を掘り込んだ歪な不整楕円形を示す土坑である。土坑の最大幅は1.95m、最も深い所で40cmを測る。北西側の基底部より約10cm位浮いて1個体分の土器、最上層においては刃部の欠けた石斧、南西側には石蓋を思わせる様に石を積み上げている。内部より石斧片(刃部)が検出された。反対側においても同様の石蓋らしき石

積みが行なわれていたものと思われる。石は後世に抜き取られた可能性がある。遺物からみて、弥生時代の遺構であろう。

土坑—4 (第13図)

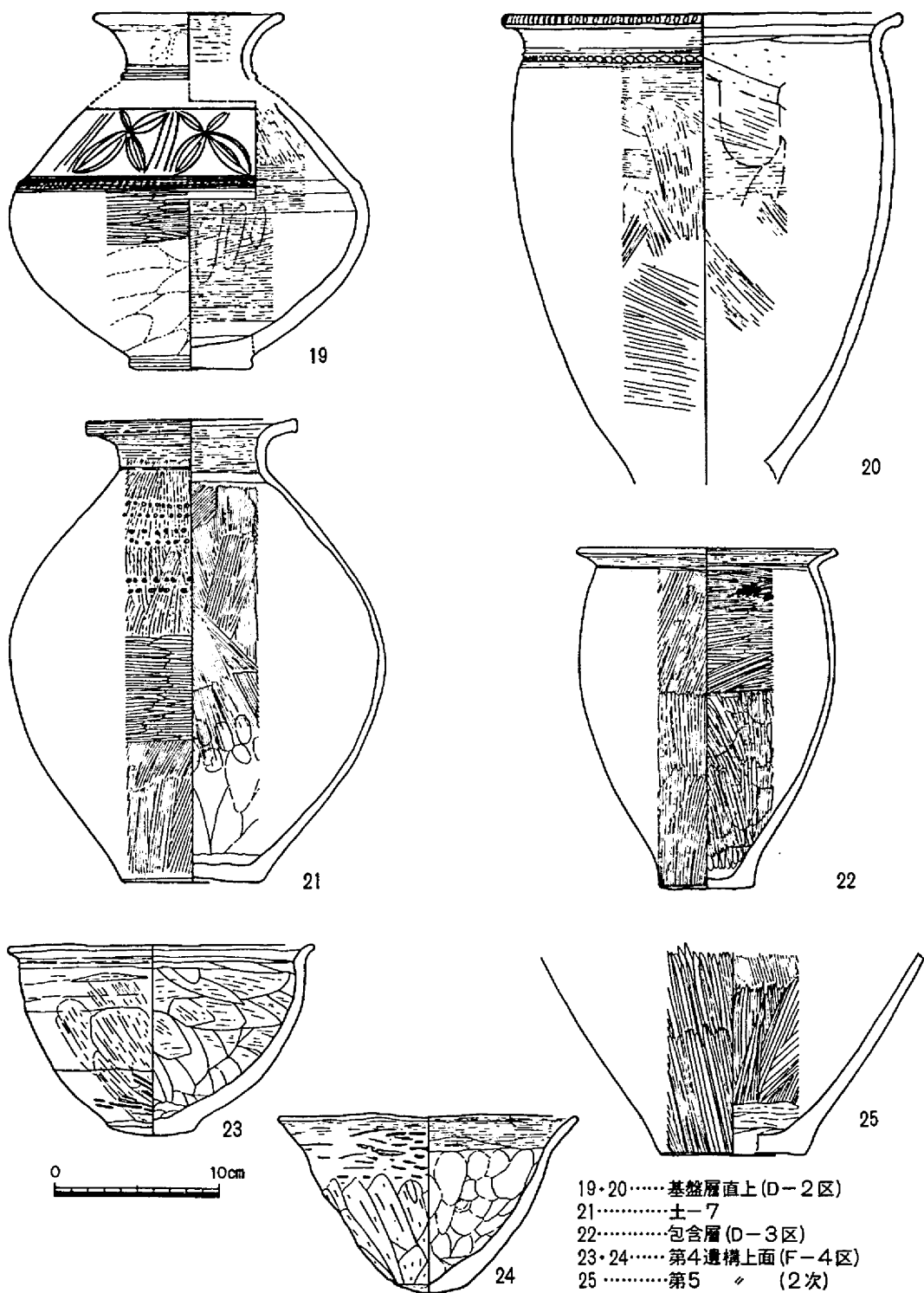
調査区北半分で溝—3の西、丘陵裾に近い所に位置し、ほぼ東西向きの長楕円形である。規模は長辺2m、短辺1.14m、最も深い所で27cmを測り、底部は丸味をおびた土坑である。

土坑—5 (第17図)

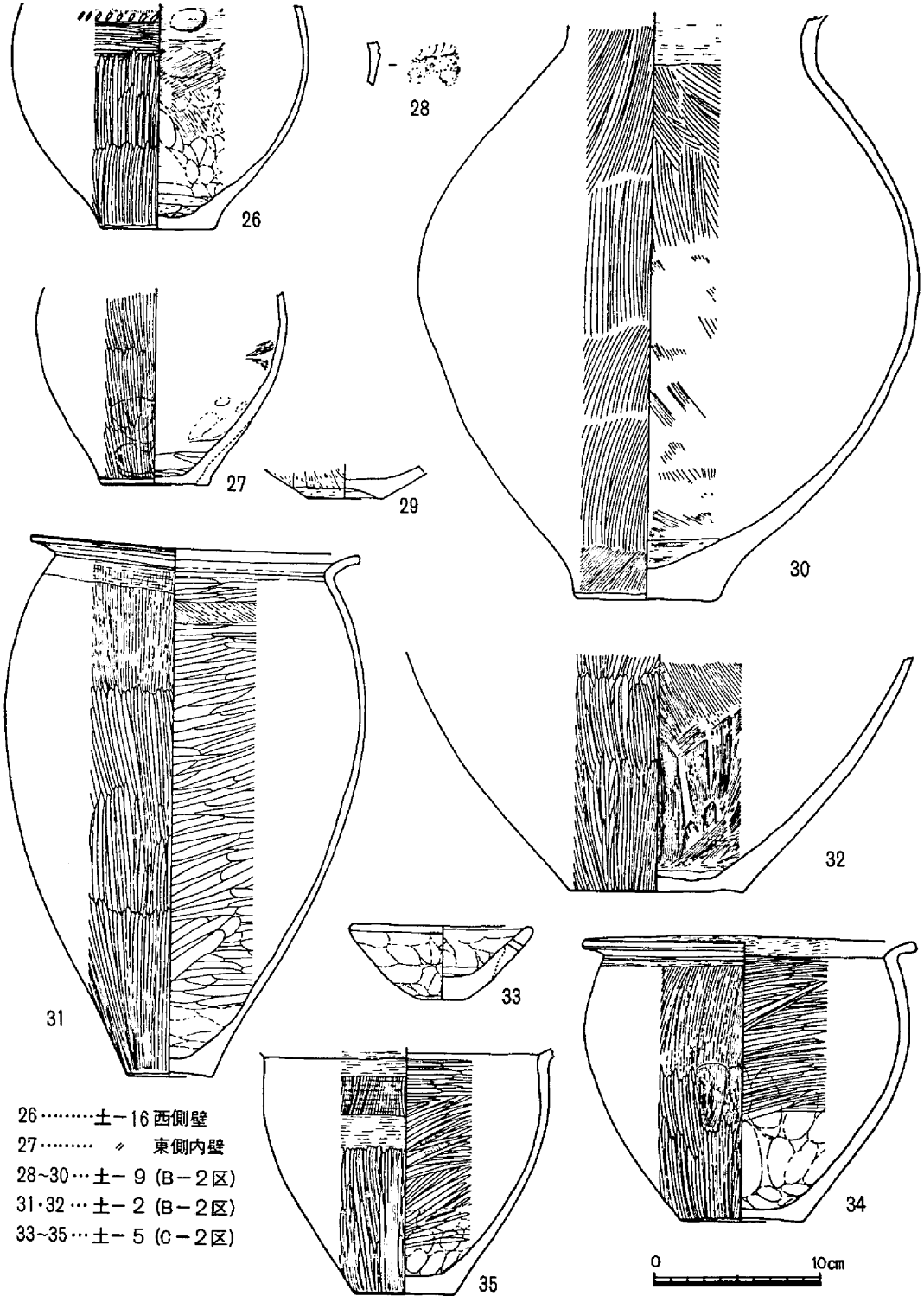
土坑—4の東に接している不整楕円形で、底部は南から北へ向ってゆるやかに掘り上げられている土坑である。内部には1個体分の土器が出土している。規模は長辺1.85m、短辺1.17m、最深部で31cmを測ることが出来た土坑である。時期は弥生時代である。

土坑—6 (第5図)

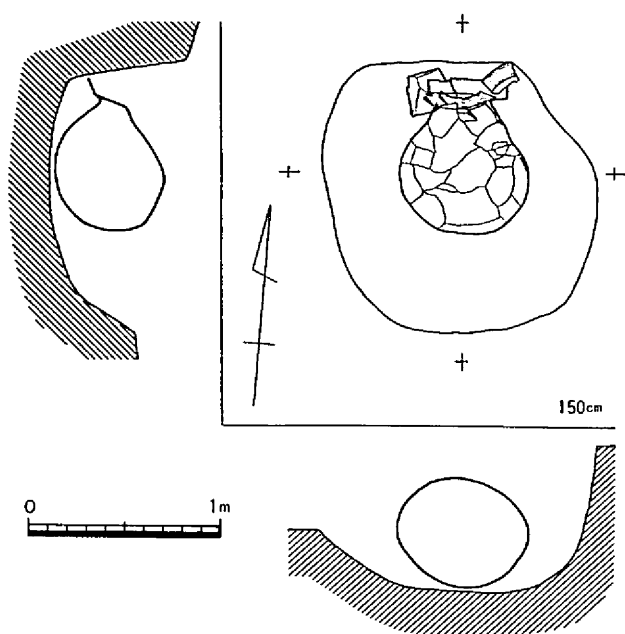
調査区北半分で、ほぼ中央グリッド杭D3に接した所に位置する径約90cmを測る円形の土坑である。形態は厚さ2～3cmの黄白色粘土で壁を作り上げている。出土遺物は確認されなかつ



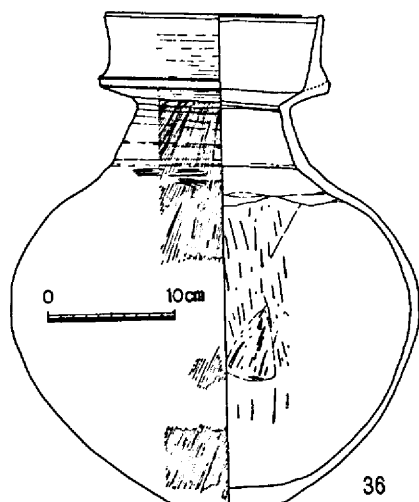
第19図 土墳・基盤層直上層・第4・5遺構面出土遺物



第20図 土 墳 出 土 遺 物



第21図 壺棺墓平・断面図 (1/40)



第22図 出土遺物

たが、遺構検出面は第5面（古代）を若干下げた所であり、時期的にみれば弥生時代の遺構と考えるのが妥当ようである。

土壌-8（第18図）

1号住居址の北東に位置し、北東側が2段、南西がほぼ垂直に掘られ、 $1.32 \times 1.1m$ 、最も深い所で43cmを測る不整楕円形を示している土壌である。時期の決め手となる遺物は出土していない。

壺棺墓（第21・22図）

基盤層に径1.4m、深さ70cmの不整円形の掘り方の土壌である。土壌内には口縁を北で横向きになった壺が検出された。充滿している土の中からは何も発見されなかった。しかし、木板で蓋をした小児用の壺棺の可能性が強い遺構である。（二宮）

土壌-43（第15図）

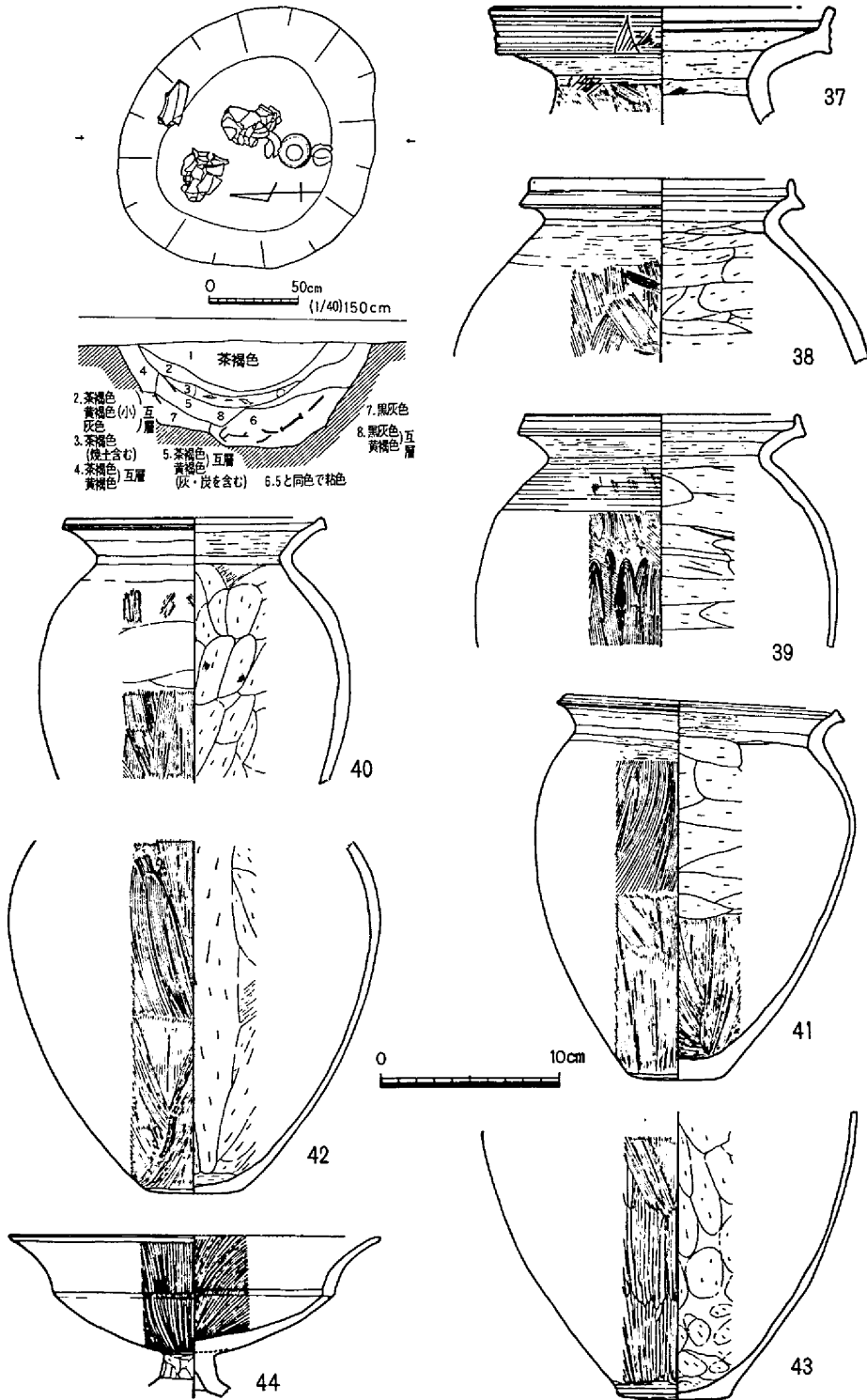
この土壌は調査区の北西部において地山層で検出された遺構である。平面は長径が115cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さは検出面から8cmであった。遺物の出土状況からみて恐らく50~60cmの深さはあったと考えられる。土層は暗褐色の砂層が一層のみである。

出土遺物としては、弥生時代中期の甕が1個体分出土しており、弥生時代中期のものと思われる。

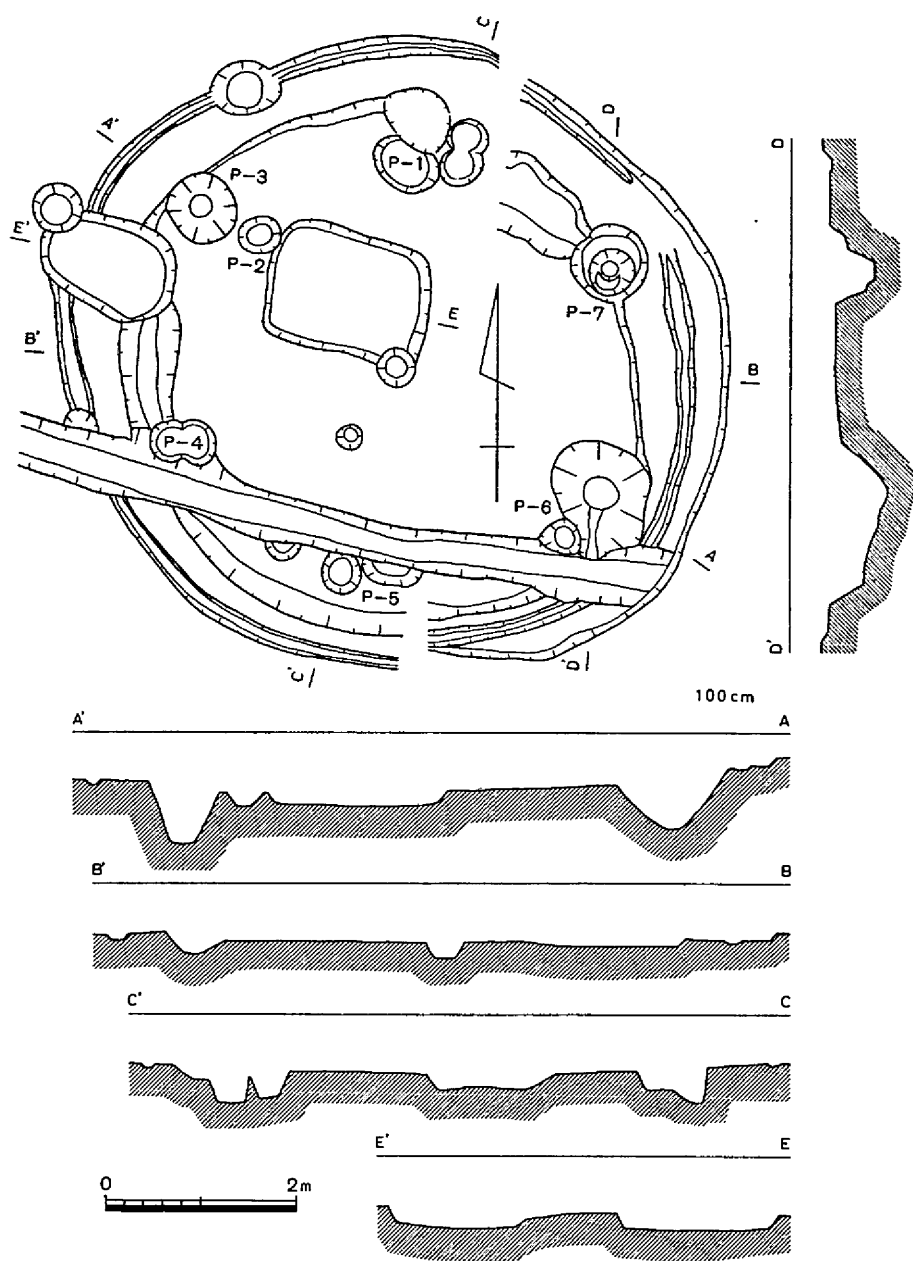
（松本）

土壌（灰穴-1）（第23・24図）

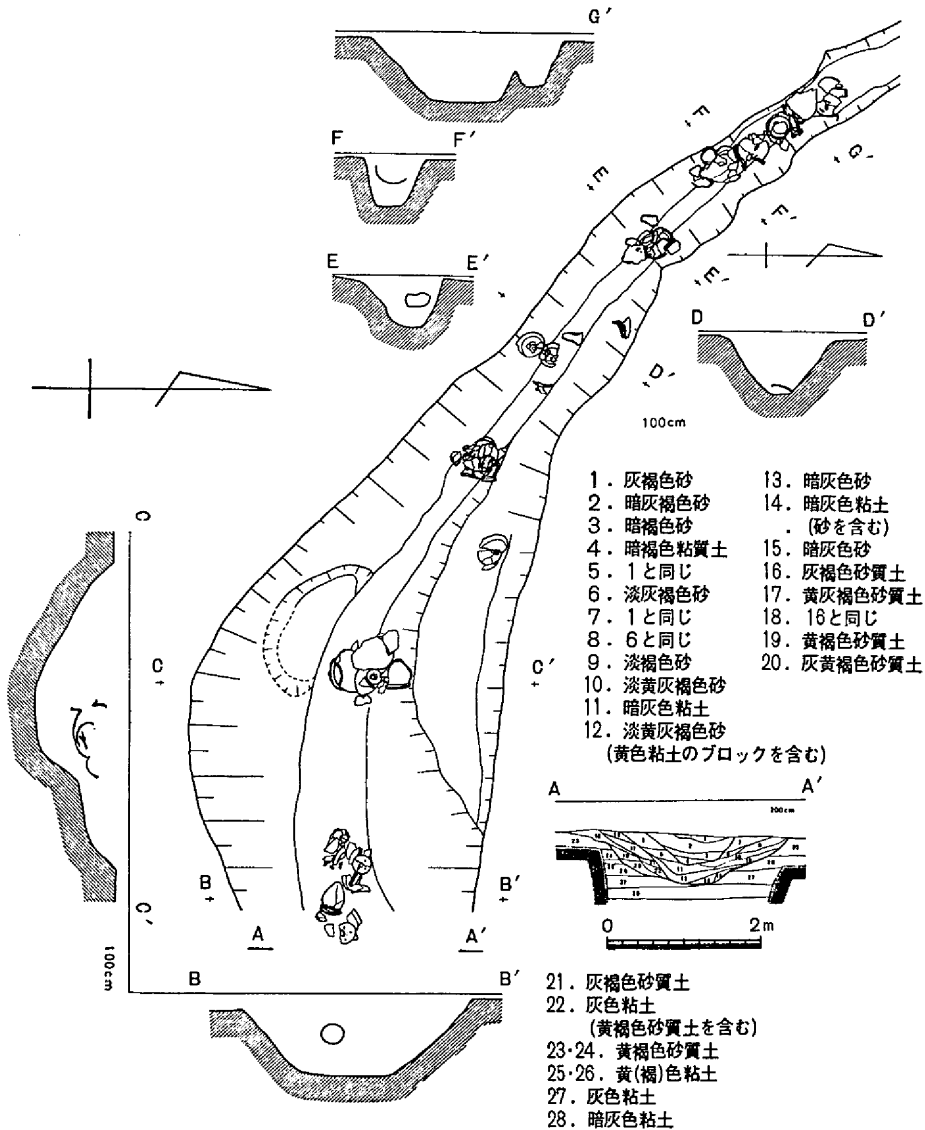
調査区南東端に位置し、平面形は $1.4 \times 1.6m$ の不整円形を示し、最も深い所で60cmを測るものである。底部形態は断面図に示した如く、段状になっている。埋設土層内には、炭、灰、焼



第23・24図 土坑（灰穴—1）平・断面図及び出土遺物



第25図 2号住居址平・断面図(1/80)

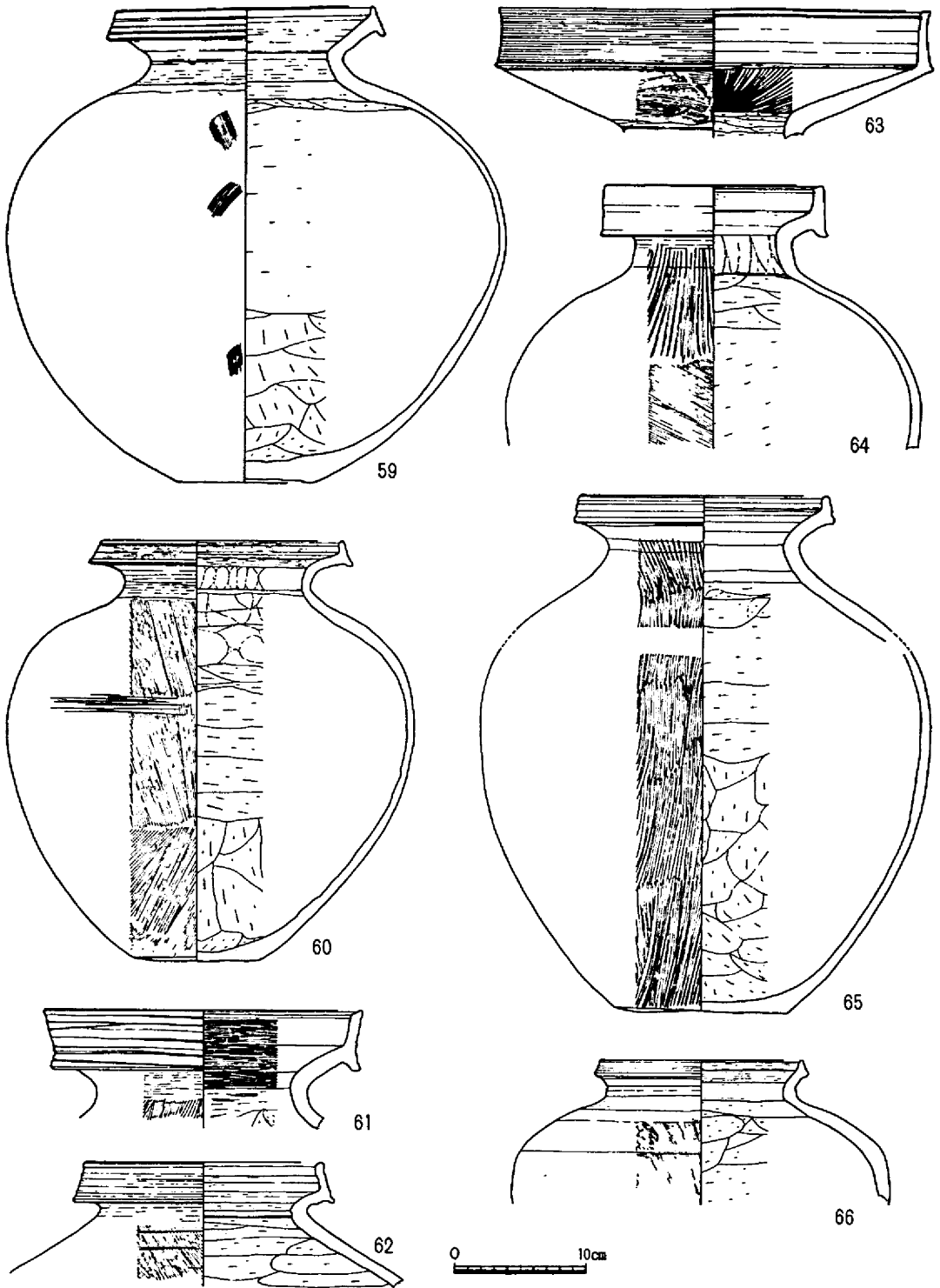


第26図 溝-7 土器溜り平・断面図 (1/100)

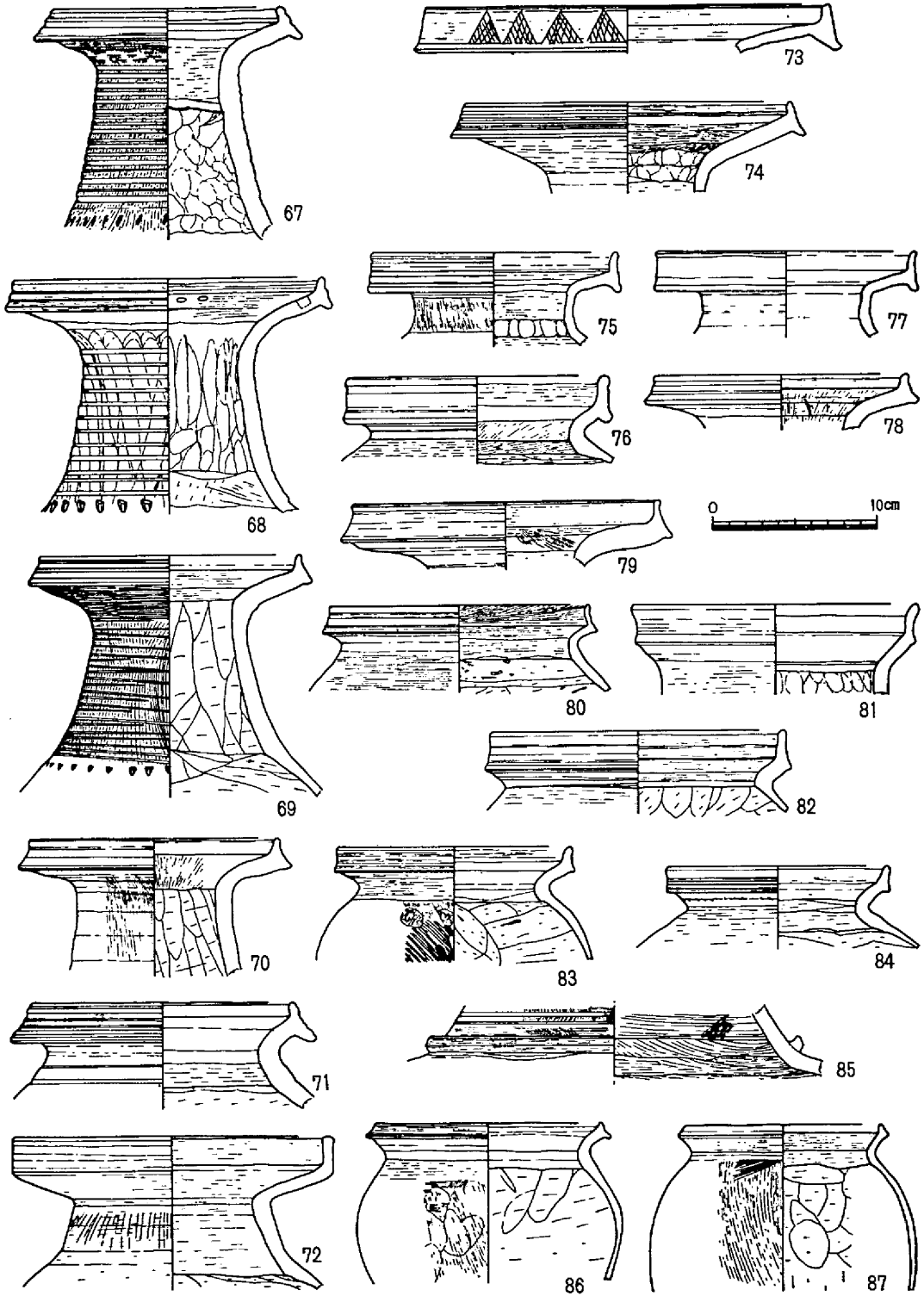
土が認められた。遺構の性格については日常生活時の不用物の放棄場所（ゴミ捨て場）と考えられる遺構である。出土遺物は第24図があり、古墳時代と言えよう。

2号住居址（第25図・39図・40図）

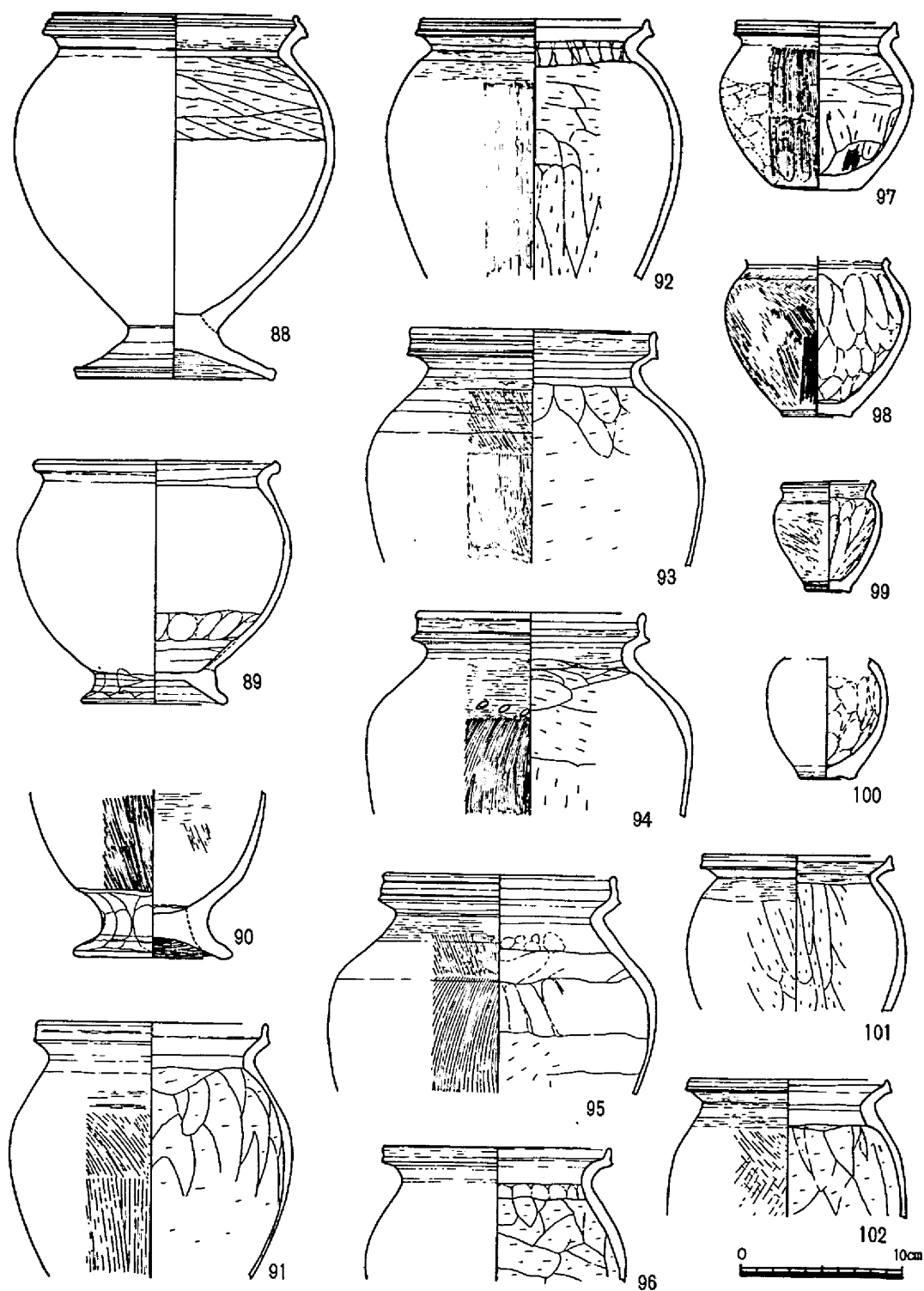
ほぼ円形を呈する住居址で、6本の柱をもつものと考えられる。検出した住居址の最大径は、7.2cmを測る。壁は残存せず、検出面において壁体溝を検出した。この壁体溝は、住居址内をはばめぐる。この溝と柱穴の間は、一段高く、ベット状を呈している。住居址の床面において、方形の土塊及びピットを検出したが、住居址に伴うものであるか否かについては不明で



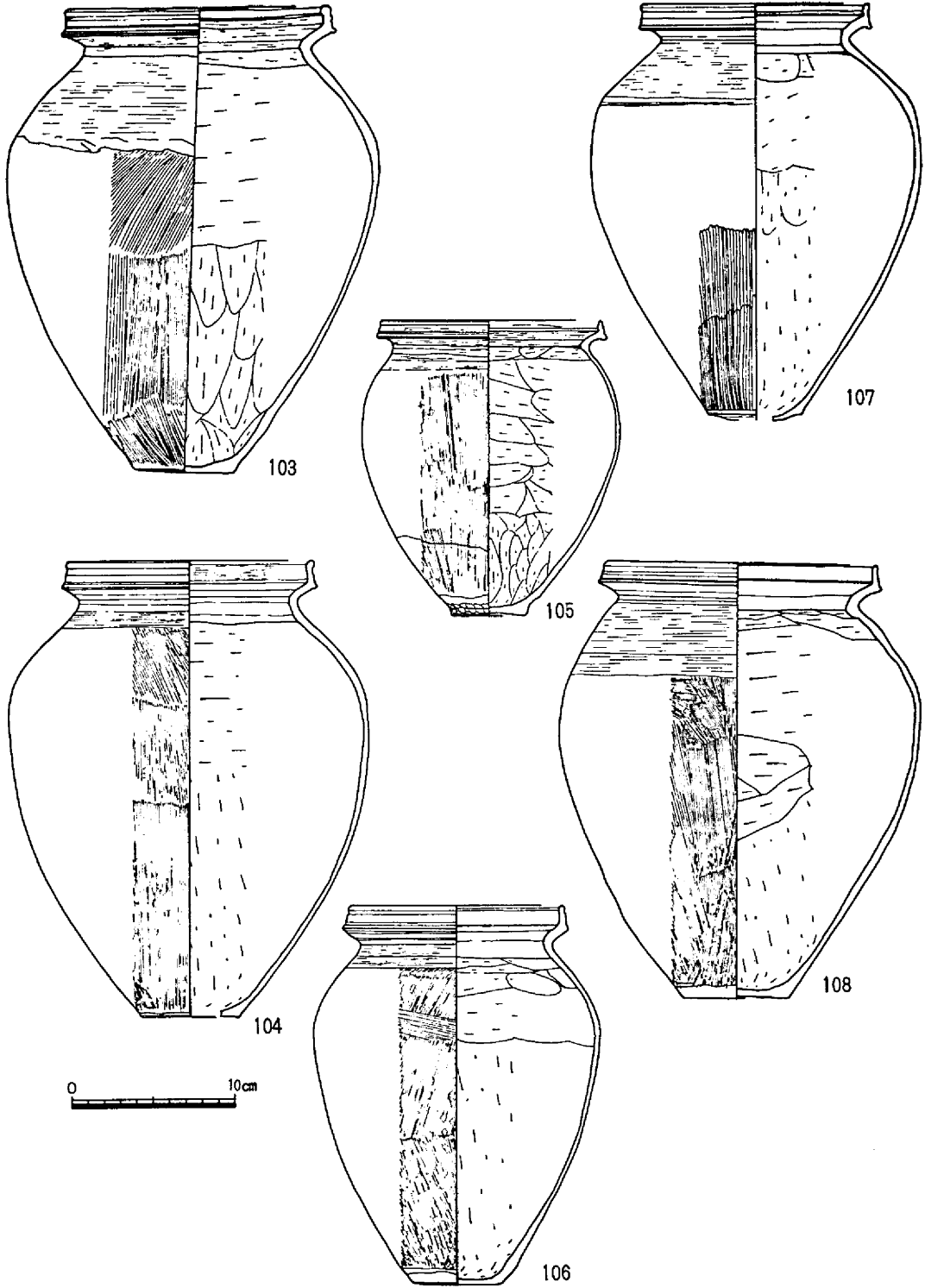
第27図 溝-7 出土遺物



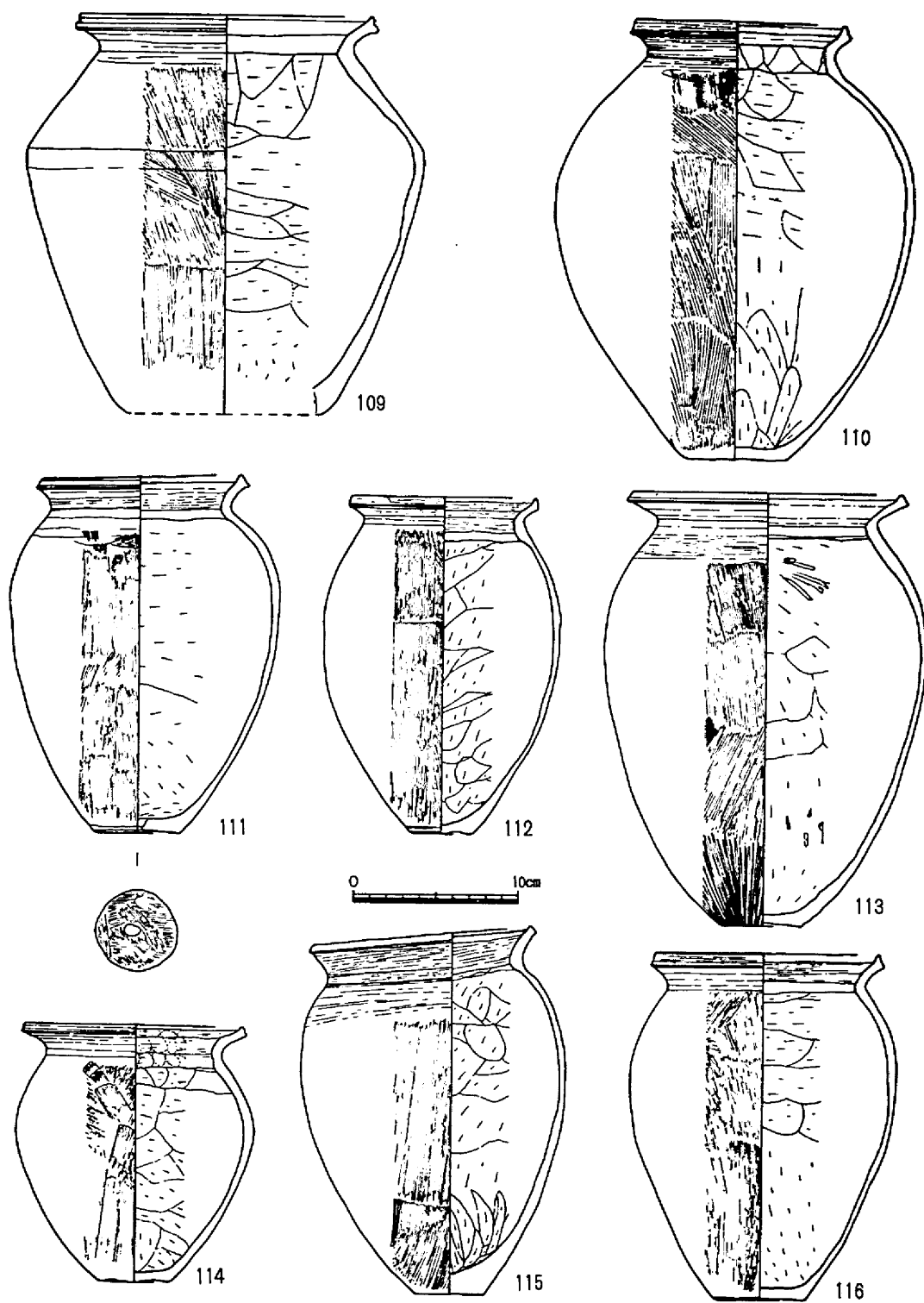
第28図 溝-7 出土遺物



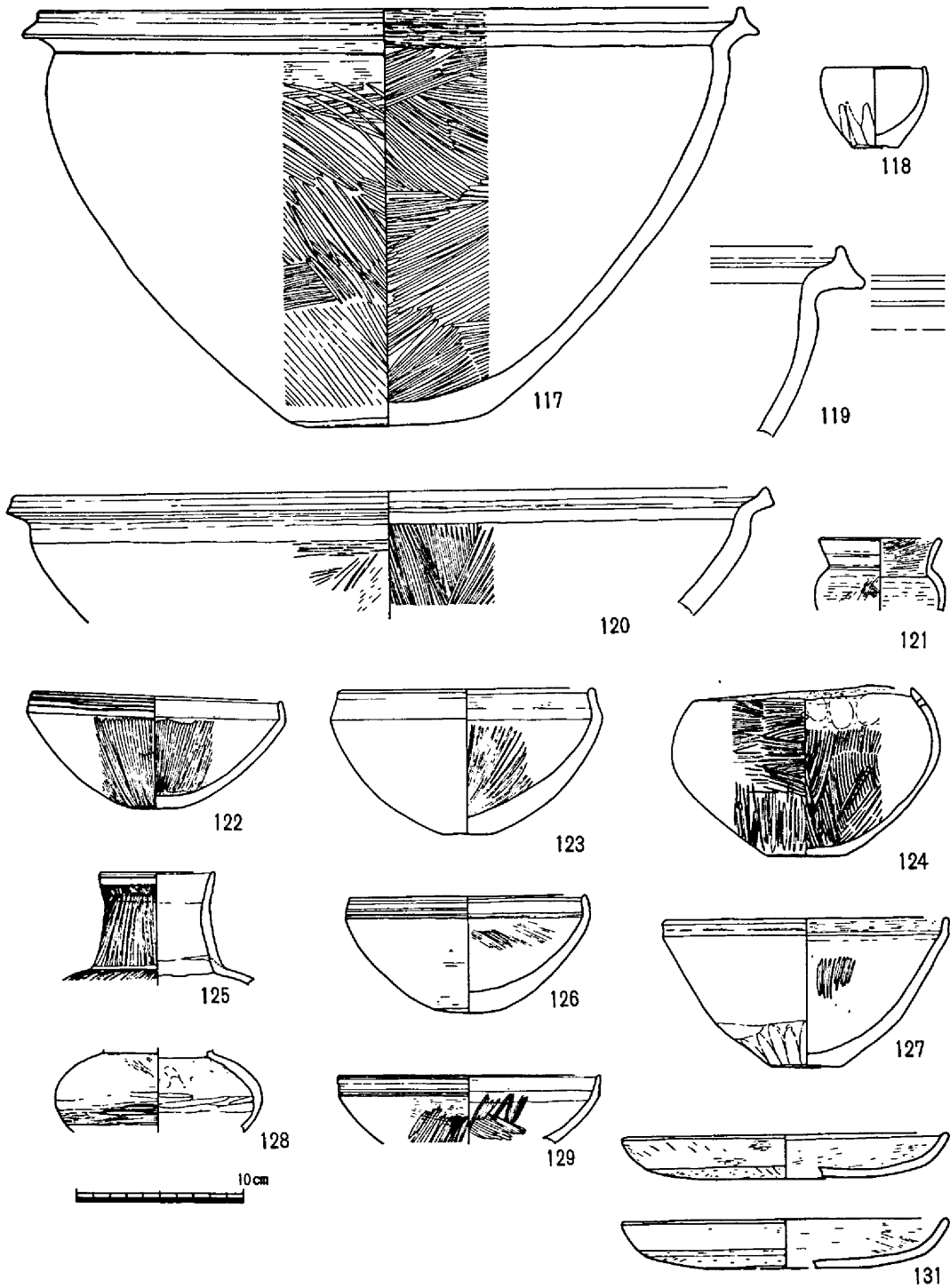
第29図 溝-7 出土遺物



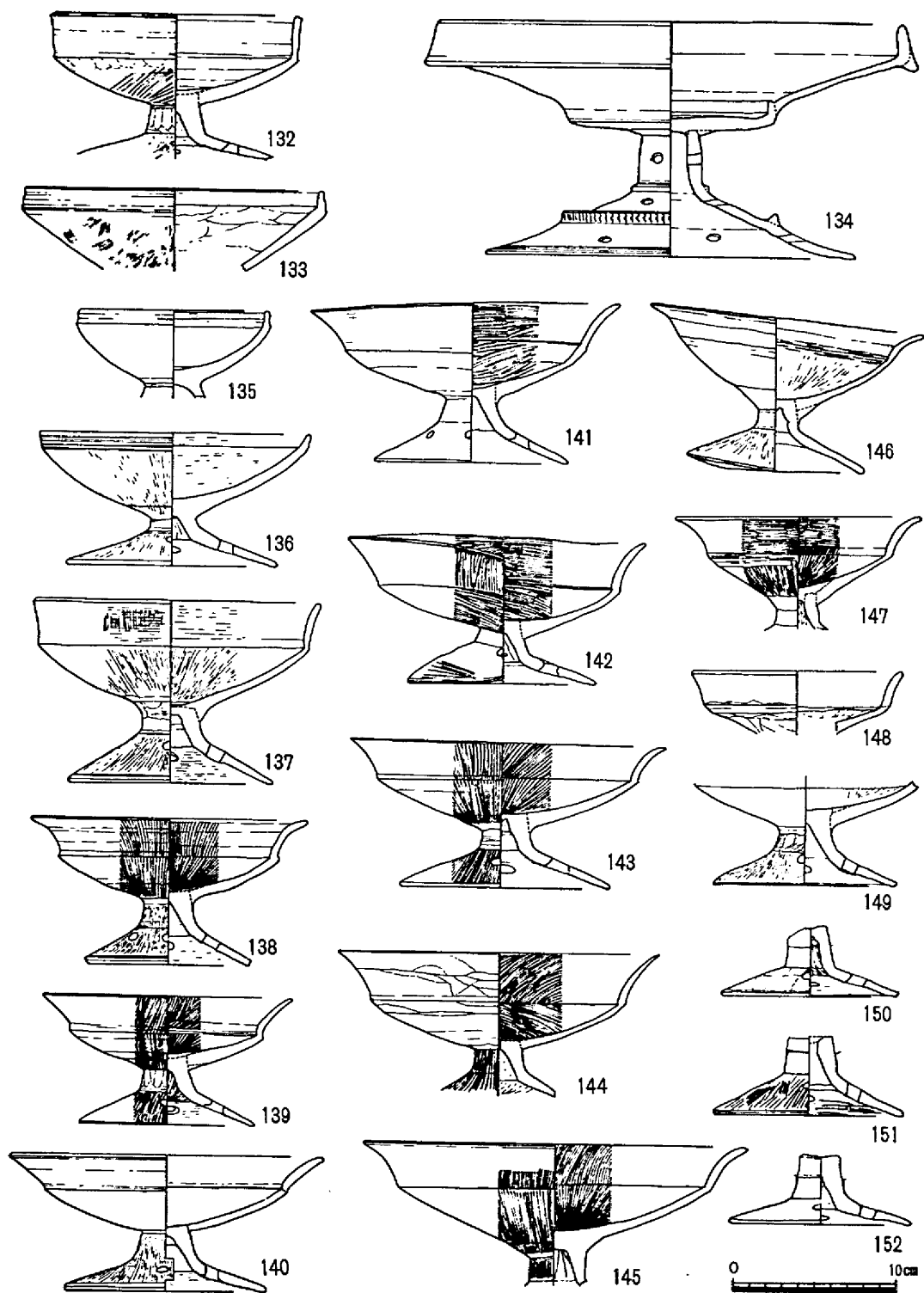
第30図 溝一7 出土遺物



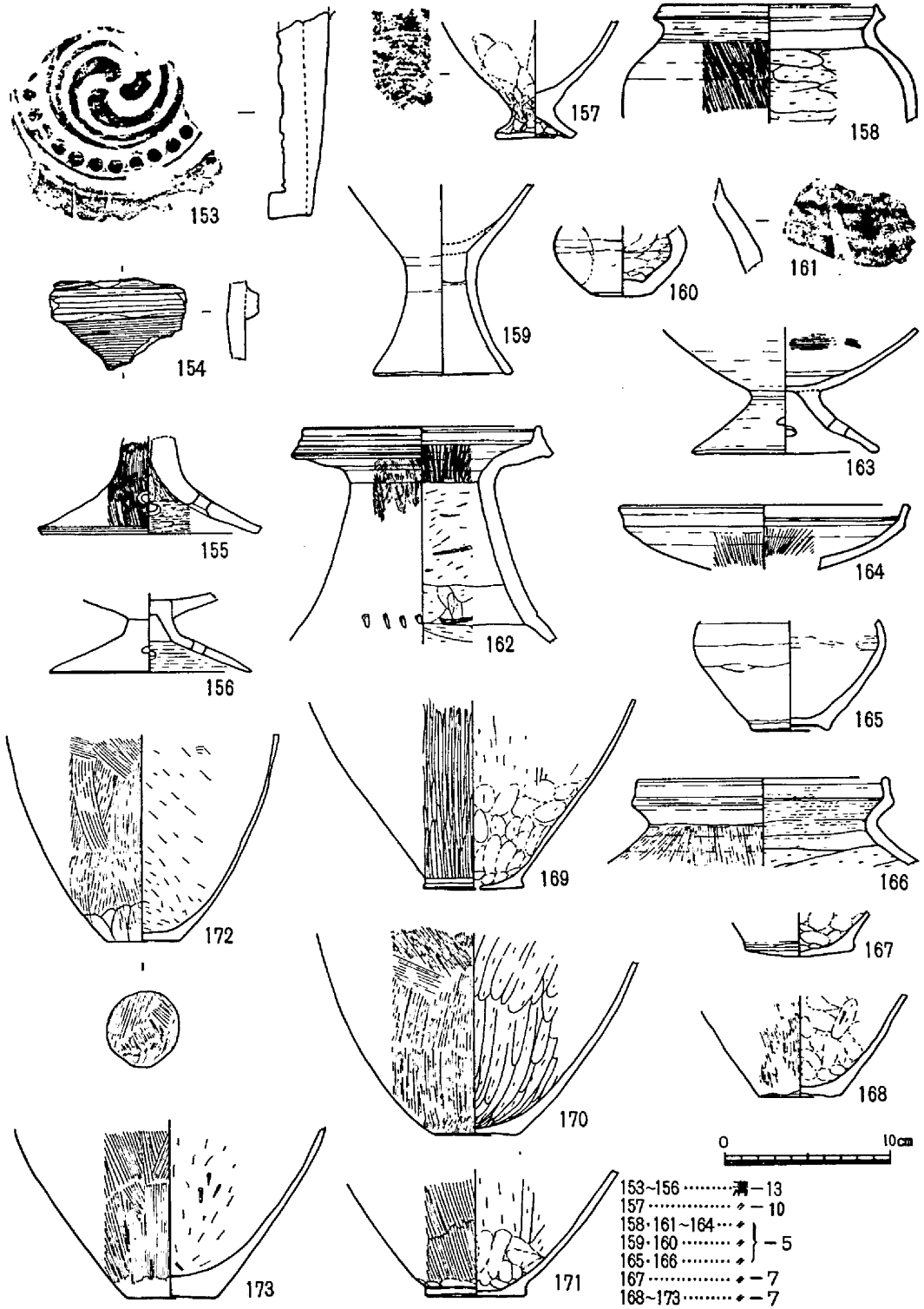
第31図 溝-7 出土遺物



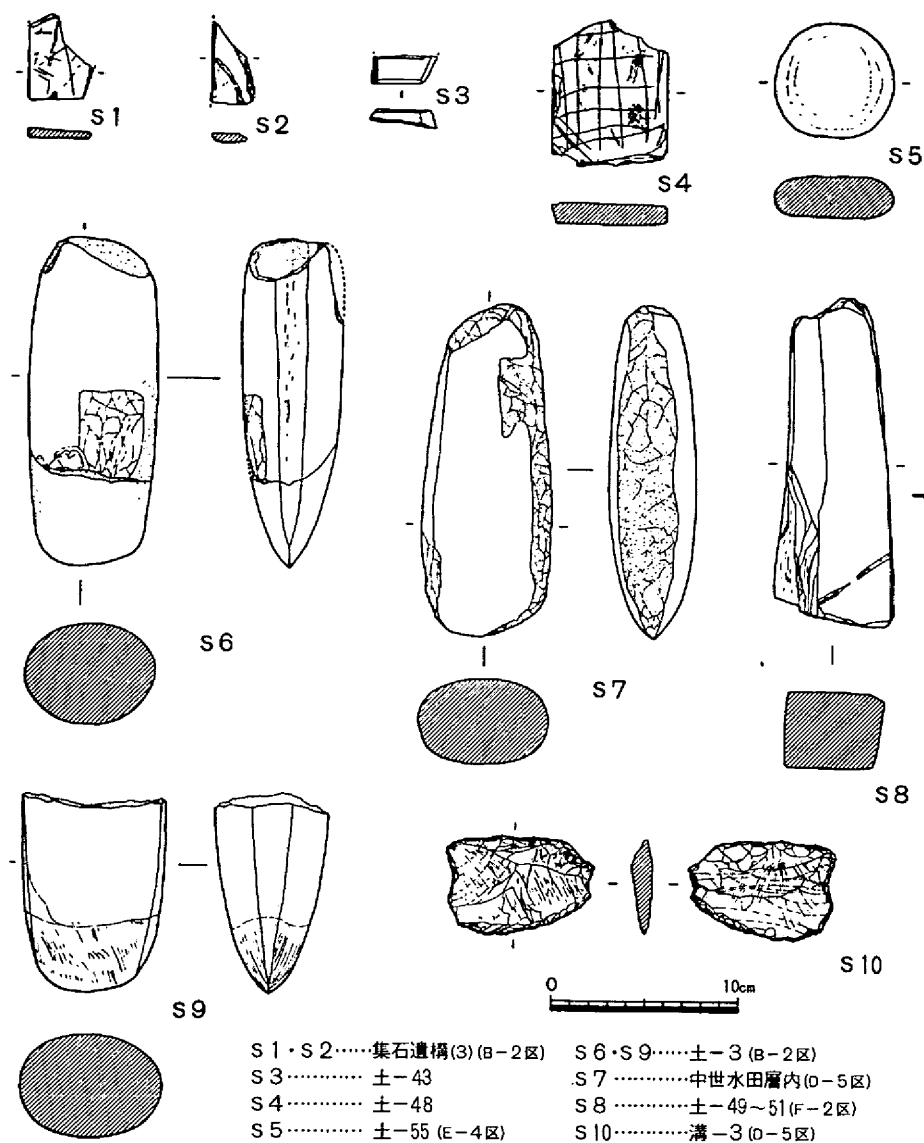
第32図 溝-7 出土遺物



第33図 溝-7 出土遺物



第34図 溝出土遺物



第35図 溝・土壌・水田層・集石遺構出土遺物

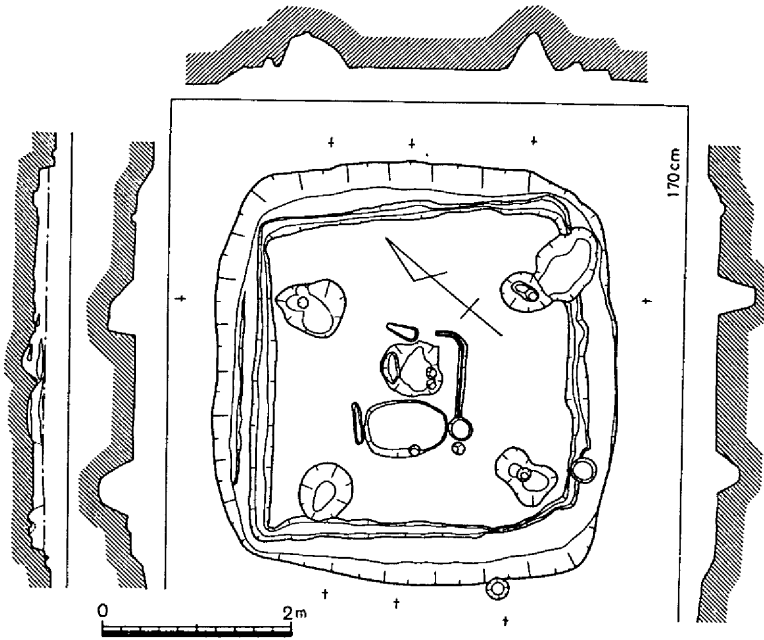
ある。住居址のP-3, 11内から、弥生時代後期の土器が出土しており（第29図53～56）、同時期の住居址と推定される。

（二宮）

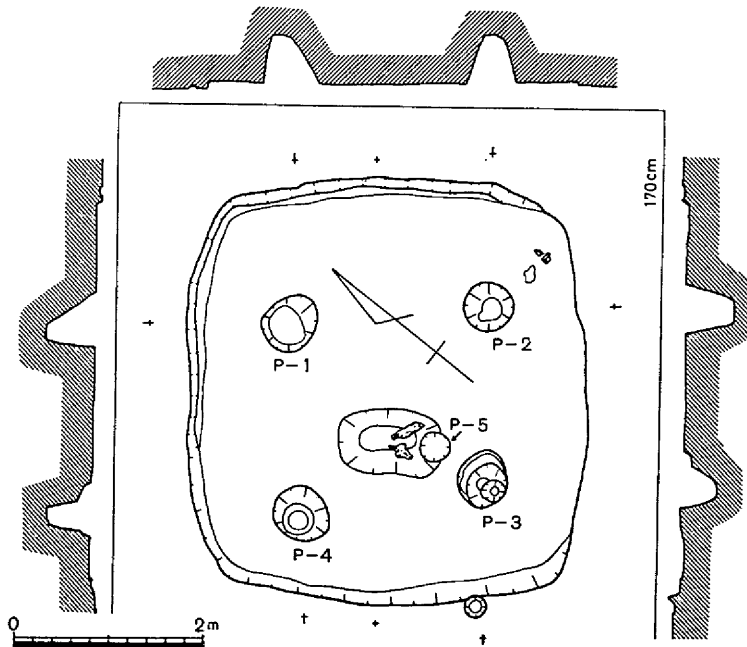
古墳時代の遺構

溝-7（第26図）

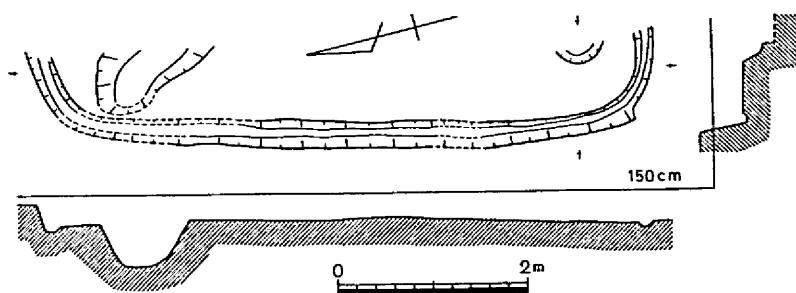
溝-6とほとんど重複して検出した。溝は、北西からゆるやかに曲り東へ向く。検出した溝



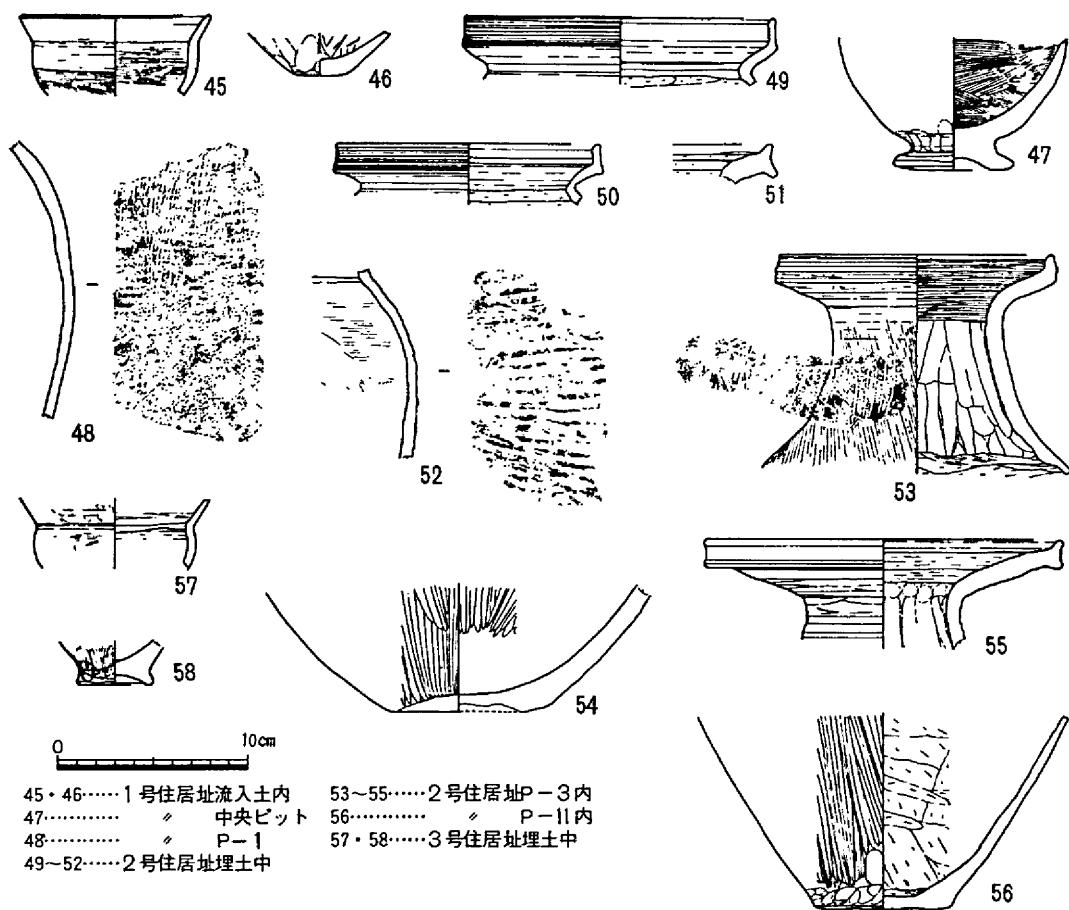
第36図 1号住居址（旧）平・断面図（1/80）



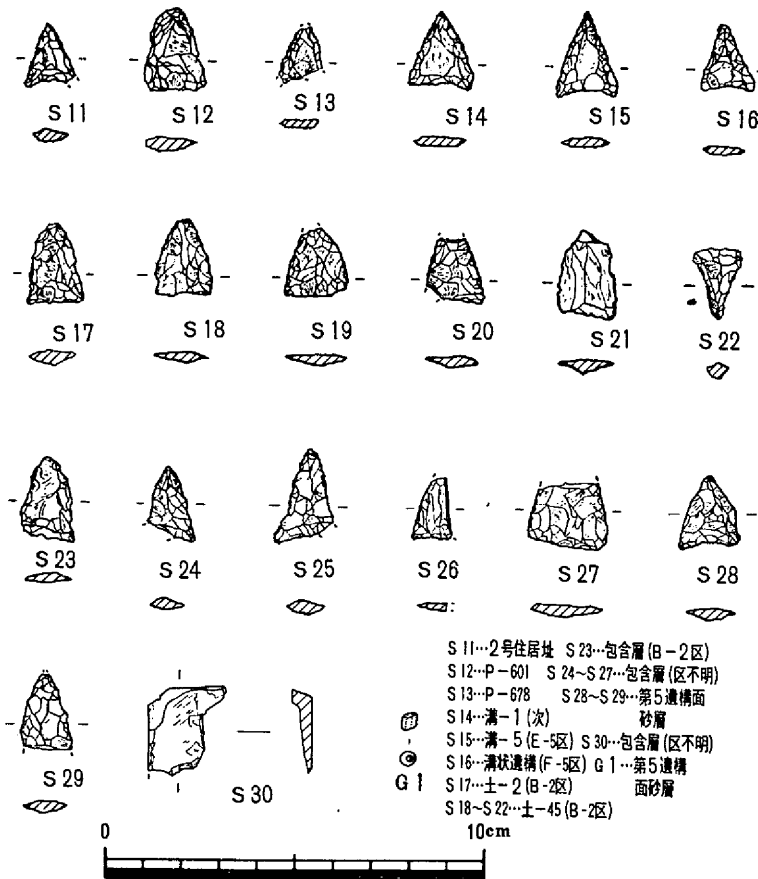
第37図 1号住居址（新）平・断面図（1/80）



第38図 3号住居址平・断面図 (1/80)



第39図 住居址出土遺物



第40図 住居址・溝・土壌・包含層出土遺物

の幅は、120～40cmを測る。残存する深さは、60～70cmを測る。この溝の中央部分には、連続して多量の土器が出土した。(第27～33図)出土した土器からして、古墳時代前期と考えられる。

溝-8・9

溝-5の西岸にほぼ平行して検出した。溝-8は、直線的に流れるが、溝-9は、緩やかに曲線を描く。この両溝は、調査部分の約半分

は重複している。溝は、8が古く、9が新しい。検出した溝の幅は、30～50cm、深さ6～12cmを測り、断面を見ると、丸くくぼむものである。また、この溝-9は、溝-7と続く可能性がある。溝は、全長約11mを調査した。

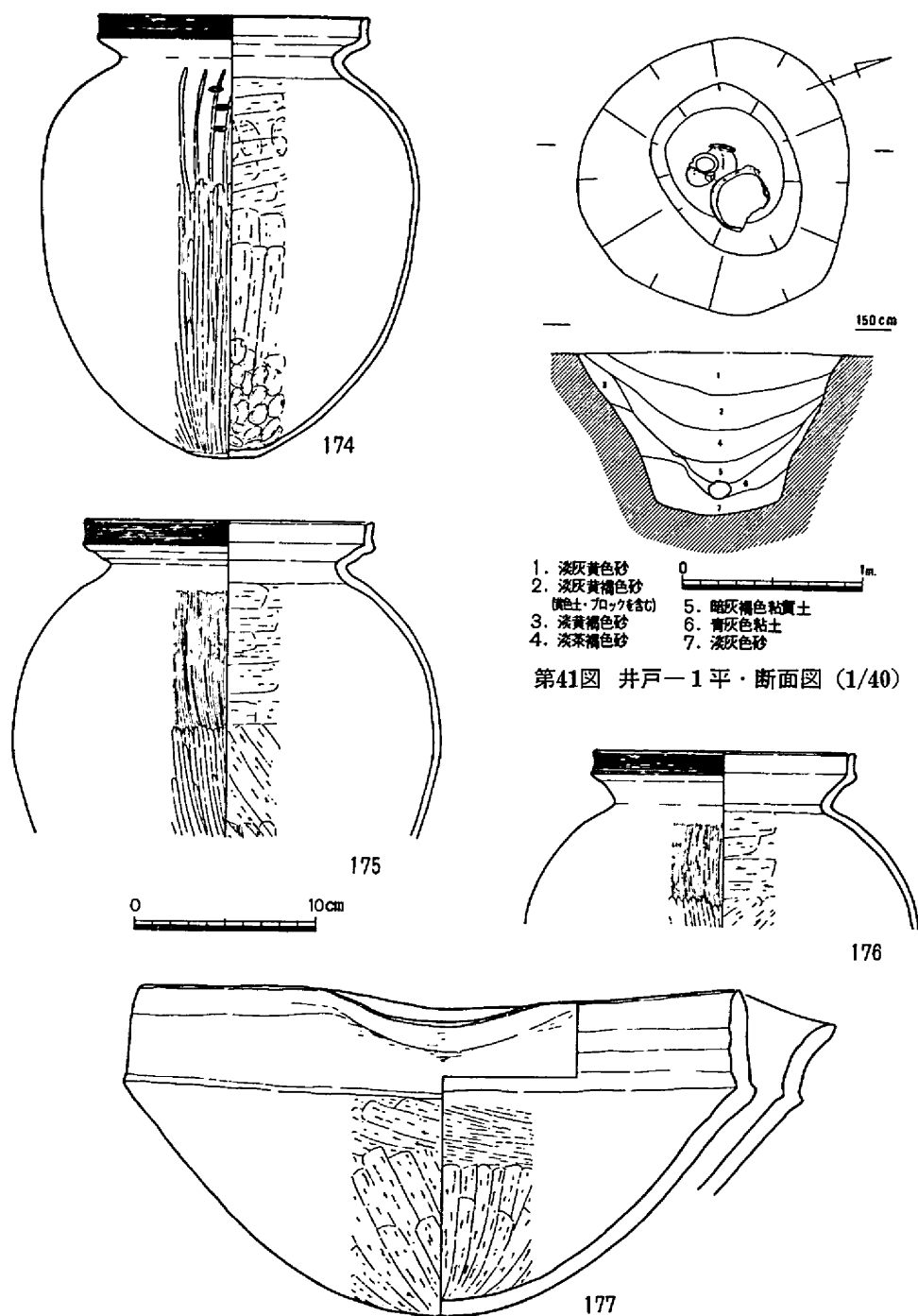
溝-10

溝-5の上層において検出した。溝の幅、形状は、溝-8・9とほぼ同様で、溝-8とほぼ平行する。検出した溝の幅は、60～40cmで、深さは、8cmを測り、断面は、丸くくぼむものである。溝は、全長約12mを調査した。溝-10からは、製塩土器が1点(第34図157)出土した。

(井上)

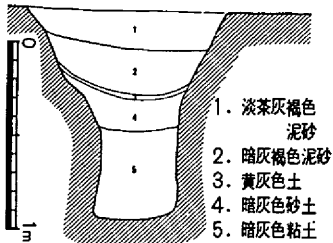
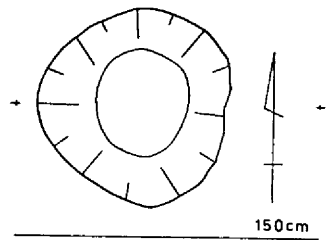
1号住居址(第36図・37図・39図)

調査区のほぼ中央部に位置し、若干隅に丸味を持つ四本柱で方形の竪穴住居址で、変則的な方向を示している。竪穴は重複し、上層の住居址においては中央やや南西側に楕円形で比較的浅い土壌を有するのみである。また北隅で一部分の壁体溝が検出された。しかしこの溝は上下

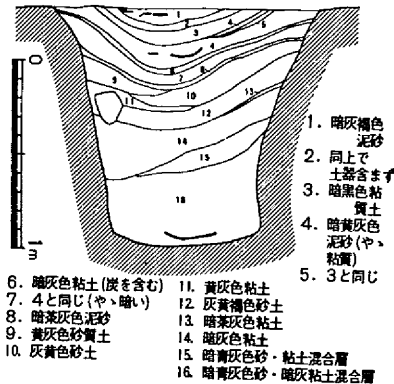
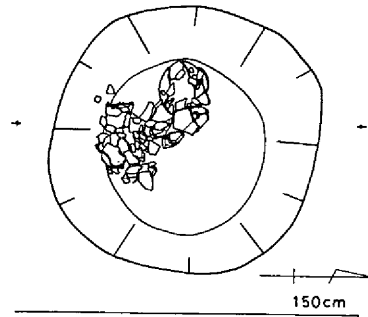


第41図 井戸-1 平・断面図 (1/40)

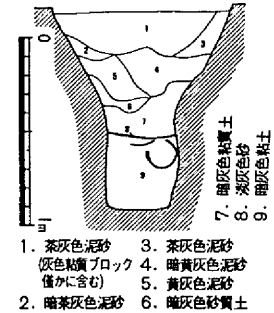
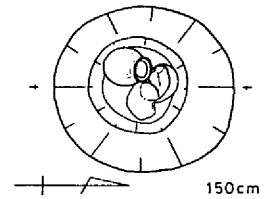
第42図 井戸-1 出土遺物



第43図 井戸一2平・断面図 (1/40)



第44図 井戸一3平・断面図 (1/40)



第45図 井戸一4平・断面図 (1/40)

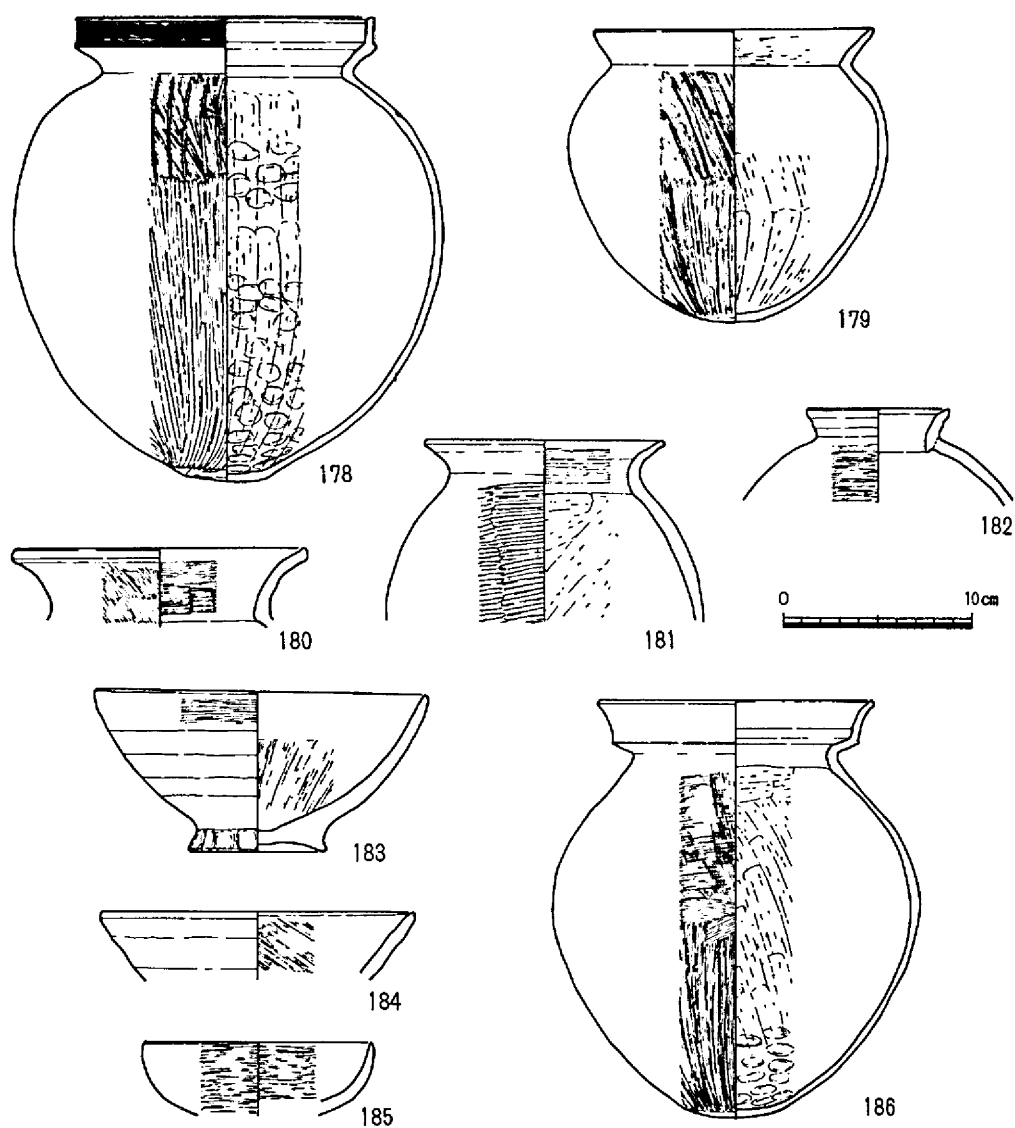
の住居址にも属するものではない。さらに貼り床除去後、下層の住居址が、中央ピット、壁体溝（一部歪で他は方形）を伴って検出された。中央ピットの周りには浅い溝が部分的に残存していた。柱穴は建て替えられても同一の柱穴を使用している。遺物としては（第39図45～48）壺・甕等があり、また柱穴内より軽石等が出土している。時期的には古墳時代といえる。

3号住居址（第38図・39図）

2号住居址の東側に位置し、隅が丸味を持って、一辺約6mの隅丸方形の竪穴住居址と推定しうる住居址である。住居に伴うと思われる柱穴は南西隅に確認されたが、北西隅は後世の不整形土壌のため検出することが出来なかった。なお、東側の部分については削平が行われて消滅している。時代的には古墳時代のものである。（二宮）

井戸一1（第41・42図）

検出面においては、径153cmを測る円形を呈する井戸である。井戸の壁は、底から中位まではやや急に立ち上るも、検出面に近づくにしたがい大きく外方に開き、壁面の傾斜は、緩くなる。井戸は、ほとんど砂により埋っており、最下層の上面において、甕・鉢が出土した。検出した井戸の深さは、約90cmを測り、底面の海拔高は、42cmである。井戸の時期は、出土した土器から古墳時代前期と考えられる。



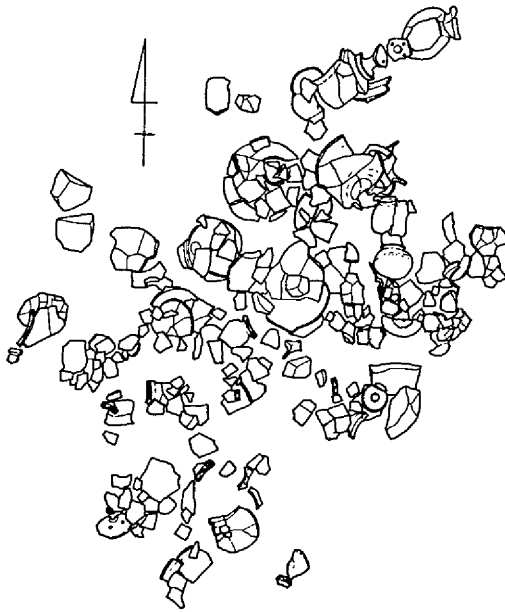
第46図 井戸-2・3 出土遺物

井戸-2 (第43図)

検出面における平面形態は、ほぼ円形を呈するもので、径106cmを測る。底面の平面形もほぼ円形を呈し、径58×48cmを測る。底面の海拔高は、20cmである。断面形を見ると、底面から約50cmは、ほぼ垂直に立ち上り、それより上は、大きく外反しながら立ち上るもので、全体的に細い形態を呈している。

井戸-3 (第44図)

検出面において、平面形がほぼ円形を呈するもので、径140cmを測る。検出した深さは、126



第47図 G-3区土器溜り-1平面図(1/30)

検出面における平面形は円形を呈し、径94×88cmを測る。底面の平面形も円形を呈し、径32cmを測る。検出した深さは107cmで、底面の海拔高は、19cmである。井戸は、底面より50cmまでは、ほぼ垂直に立ち上り、そこより上部は大きく外反するものである。井戸の最下層の砂層から、完形の土器一点を含む2個体分の土器片が出土した。

土器溜り-1 (第47図)

溝-5・6の上層で検出したもので、壺・甕・高坏、と各器種のものが混在している。土器が集中するのは、2.2m×2mの範囲で、溝-5・6が埋没した後の浅いくぼみに、一括して遺棄されたものと考えられる。器種の中には、山陰地方で見られる器形のものもある。(井上)

cmを測り、底面の海拔高は、ほぼ0mである。底面も、ほぼ円形を呈し、径88cmを測る。断面形を見ると、底面より約40cmは、ほぼ垂直に立ち上り、それより上方は、外反しながら立ち上るも、全体的に太めな形状を呈している。

検出面直下において、まとまった状態で土器が出土した。完形品は存在しなかったが、残存状態の良好なものもある。土器は、有機物を多量に含む層の直上、及び直下から多く出土した。最下層には、木片・木葉の堆積が見られた。

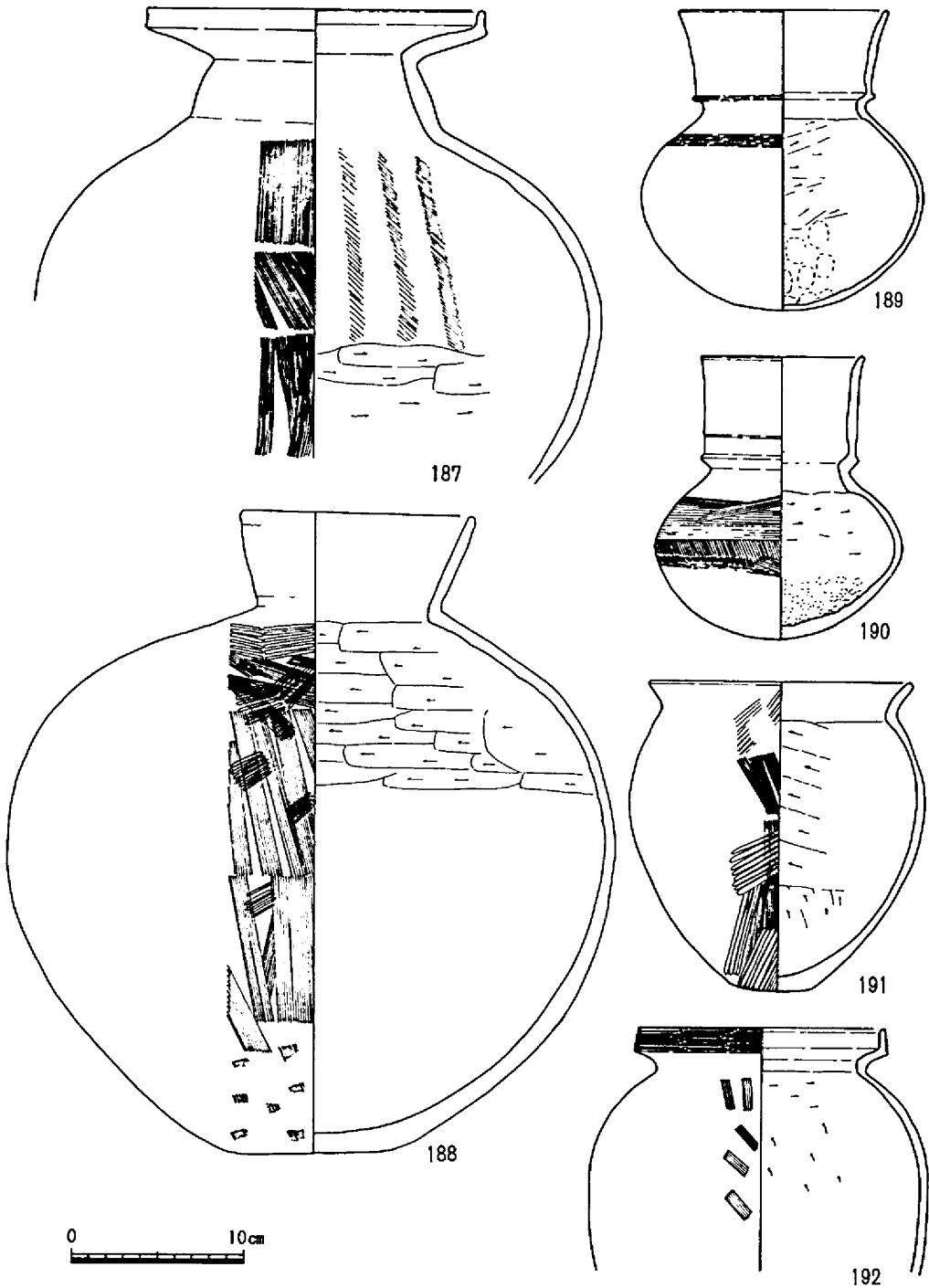
井戸-4 (第45図)

第3節 奈良時代の遺構

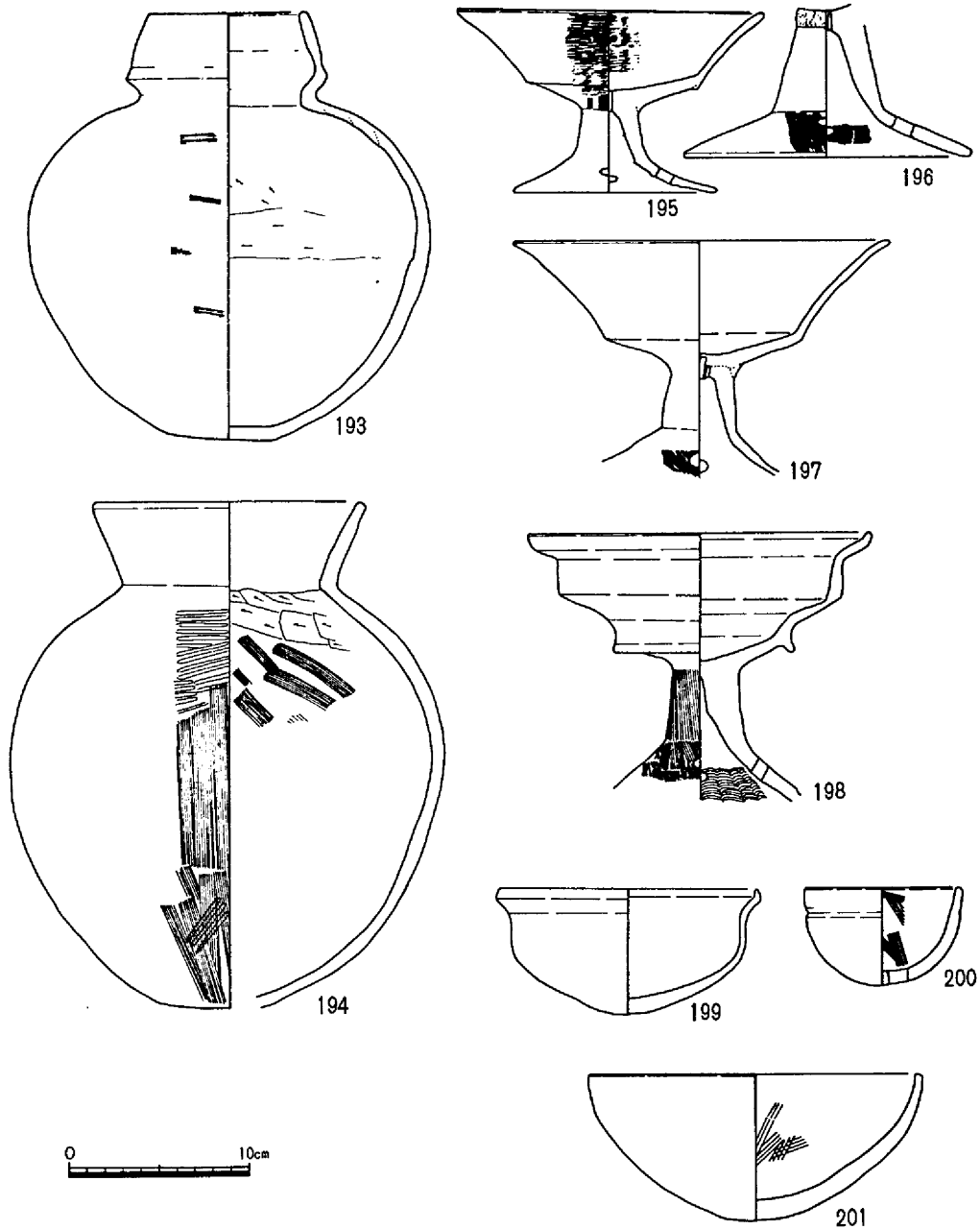
建物-1 (第52図)

桁行3間、梁間3間の総柱の建物である。建物の規模は、桁行552cm、梁間408cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は、方形を主体とし、ほとんどの柱穴に柱痕跡を検出した。南側柱穴列の東側2本の柱穴は、近世の土壌により削平されており、残存状態は良くなかった。特に2本目の柱穴は、建物の重量により沈下したと考えられる柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は、N-16°-Eを示す。

建物-2 (第53図)



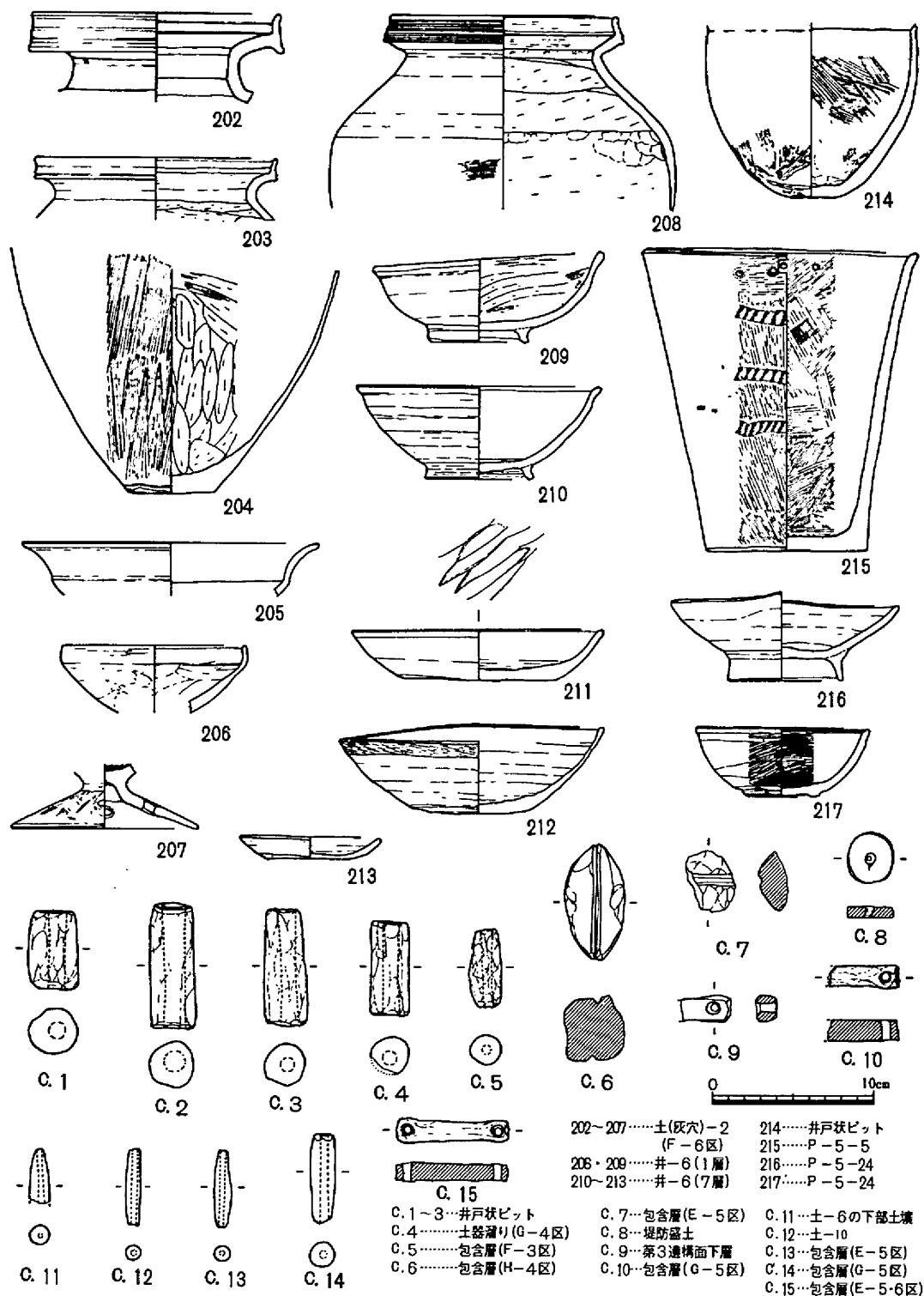
第48図 G-3区土器溜り-1出土遺物



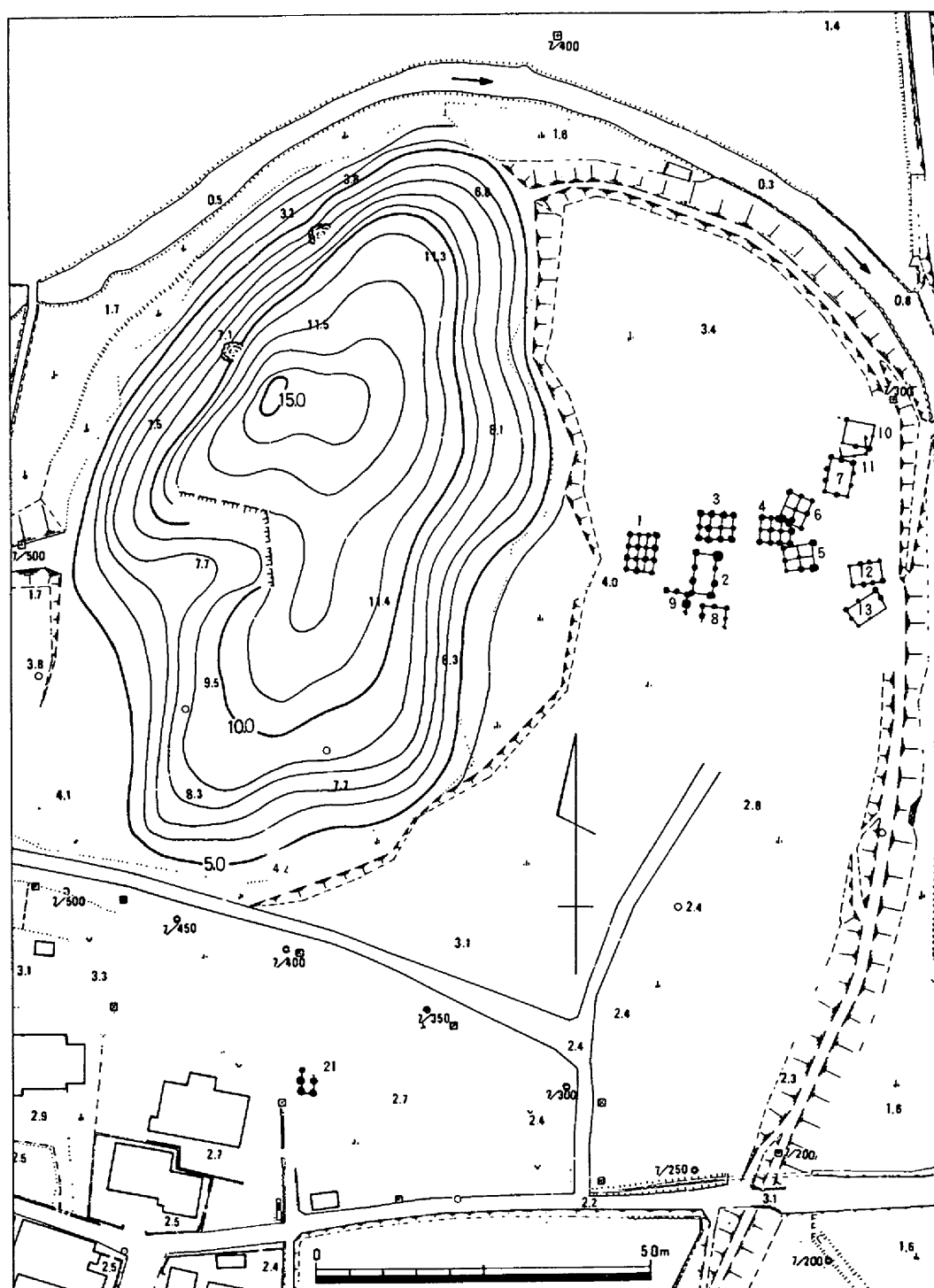
第49図 G-3区土器溜り-1出土遺物

建物-1の東側約500cmの位置に検出したもので桁行3間、梁間1間の建物である。桁行は、546cm、梁間316cmを測る。掘り方の平面形は、方形を主体とする。西側柱穴列の北側2本の柱穴に柱痕跡を検出した。また、北側柱穴列の東側柱穴の底面には石が敷かれていた。建物の長

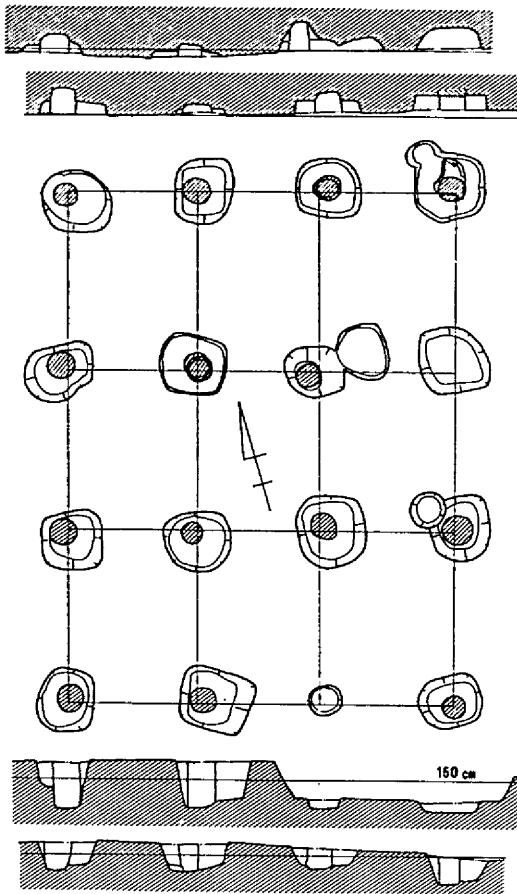
第3章 低水路調査区



第50図 灰穴・井戸・井戸状ピット・土塊・柱穴・包含層出土遺物



第51図 地形図及び奈良時代建物配置図 (1/1,000)



第52図 建物一 1 平・断面図 (1/80)

建物である。建物の規模は、桁行600cm，梁間464cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は，方形を主体とし，ほとんどの柱穴より柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は，E-2°-Sを示す。

建物一 6 (第57図)

建物一 4 の北東側に一部重複して検出した。桁行，梁間ともに 2 間の総柱の建物である。建物の規模は，桁行588cm，梁496cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は，方形を主体とする。この建物の南側柱穴列西から 2 本と，建物一 4 の北側柱穴列東から 2 本は，図面では，重複する状態を示しているが，同所の基盤層が砂層であり，降雨等で掘り方の肩部が崩れたこともあって，柱穴の平面形が大きくなったために生じたものである。そのため，建物の新旧の関係についてはその点からは不明である。建物の長軸の方向は，N-34°-Eを示す。

建物一 7

建物一 6 の北東約180cmの位置に検出した。桁行 3 間，梁間 2 間の側柱の建物である。建物の規模は，桁行520cm，梁間360cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は，ほぼ方形を呈するもので

軸の方向は，N-15°-Eを示す。

建物一 3 (第54図)

建物一 2 の北側約 180cmの位置に検出した。桁行 3 間，梁間 2 間の総柱の建物である。建物の規模は，桁行504cm，梁間368cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は，方形を主体とし，ほとんどの柱穴より柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は，E-15°-Sを示す。

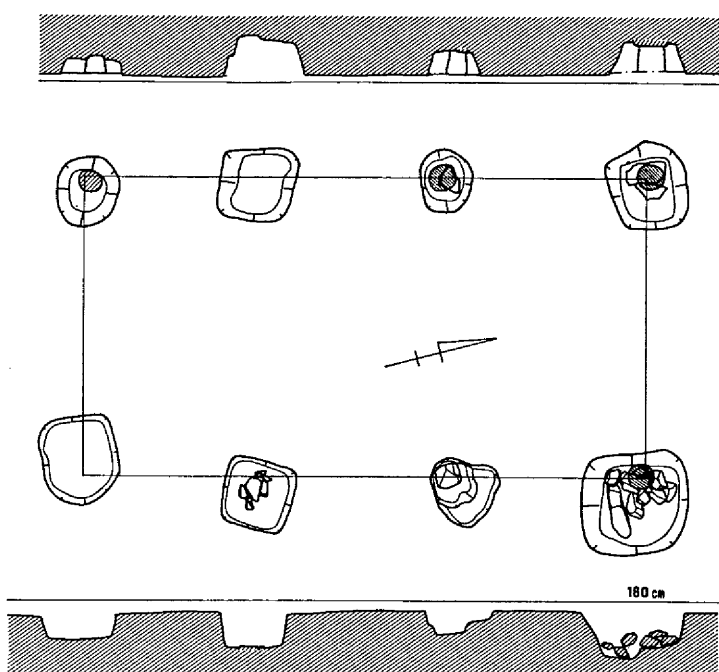
建物一 4 (第55図)

建物一 3 の東側約 340cmの位置に検出した。桁行 3 間，梁間 2 間の総柱の建物である。建物の規模は，桁行460cm，梁間 364cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は，方形を主体とし，約半数の柱穴に柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は，E-15°-Sを示す。

建物一 5 (第56図)

建物一 4 の南東側に接して検出した。桁行，梁間ともに 2 間の総柱の建物

第3節 奈良時代の遺構



第53図 建物—2 平・断面図 (1/80)

ある。建物の長軸の方向は、 $N-19^{\circ}-E$ を示す。

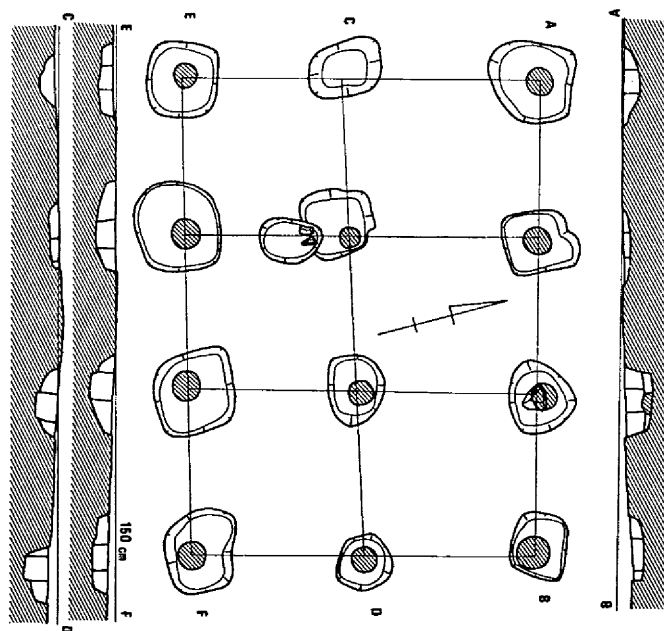
建物—8 (第58図)

建物—2の南東約100cmの位置に検出し、梁間2間、桁行は2間まで検出した。建物は、さらに南に伸びるものと推定されるが、今回の調査範囲外であるため、建物の全体は確認できなかった。建物の規模は、梁間340cmで桁行の柱間は、

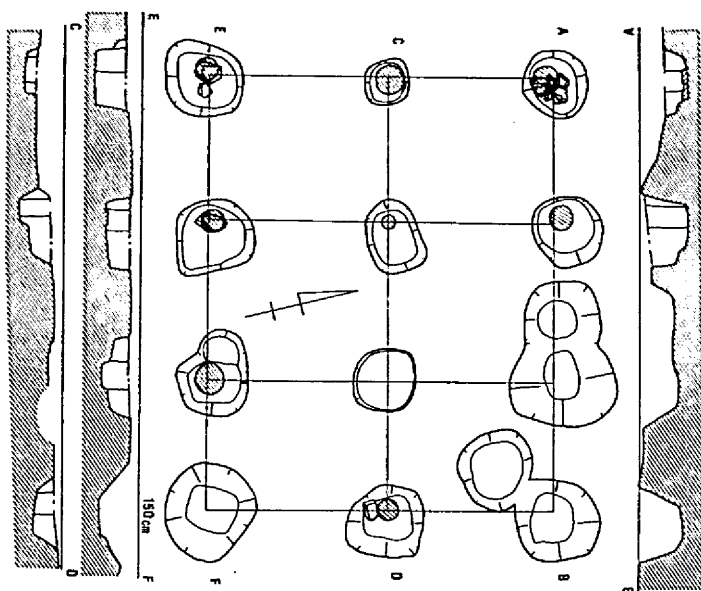
150cmを測る。掘り方の平面形は、方形を呈している。建物の長軸の方向は、 $N-16^{\circ}-E$ を示している。

建物—9

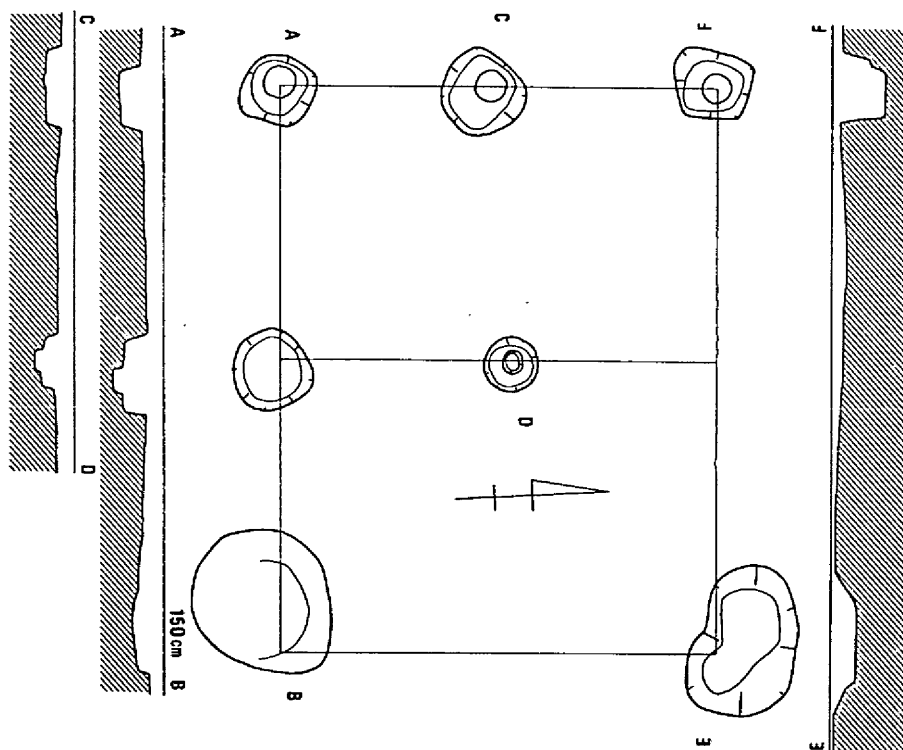
建物2の南西側にはほぼ接して検出した。調査区の南側に接して検出したため、桁行、梁間ともに2間までを調査した。桁行、梁間の柱間の距離は、前者が170cm、後者が170cmを測る。掘り方の平面形は、方形を呈している。建物の長軸の方向は、 N



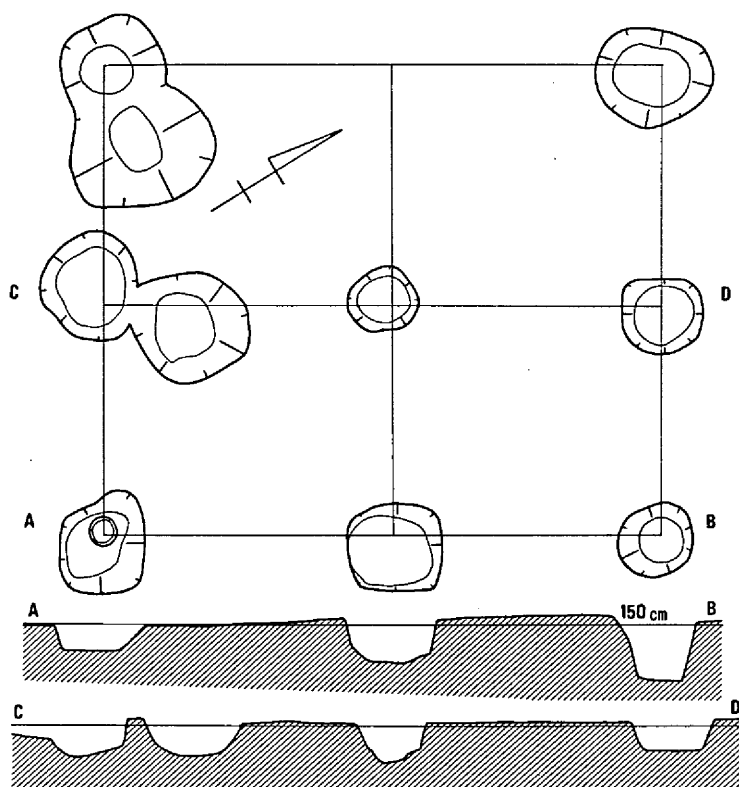
第54図 建物—3 平・断面図 (1/80)



第55図 建物—4 平・断面図 (1/80)



第56図 建物—5 平・断面図 (1/80)



第57図 建物－6 平・断面図 (1/80)

—14°—Eを示す。

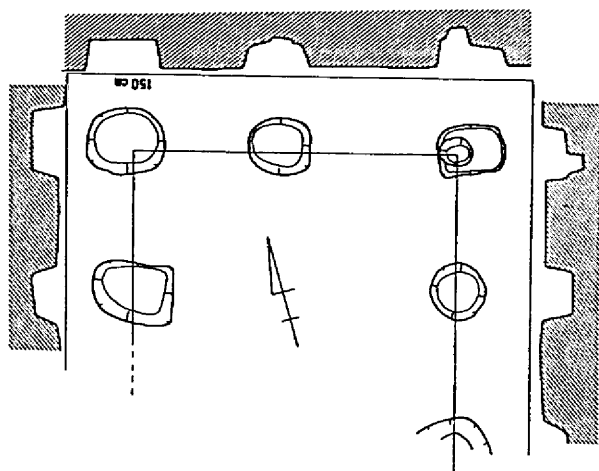
建物－10 (第59図)

建物－7の北北東約2mの位置に検出した。建物は、中世の溝状遺構に切断されているため、全ての柱穴を確認することはできなかったが、4本の柱穴を検出し、さらに北側には柱穴が検出されなかったことから、桁行2間、梁間2間の総柱の建物と推定される。建物の規模は、桁行406cm、梁間340cmを測る。掘り方の平面形は、方形を主体とする。建物の長軸方向は、N—19°—Eを示す。

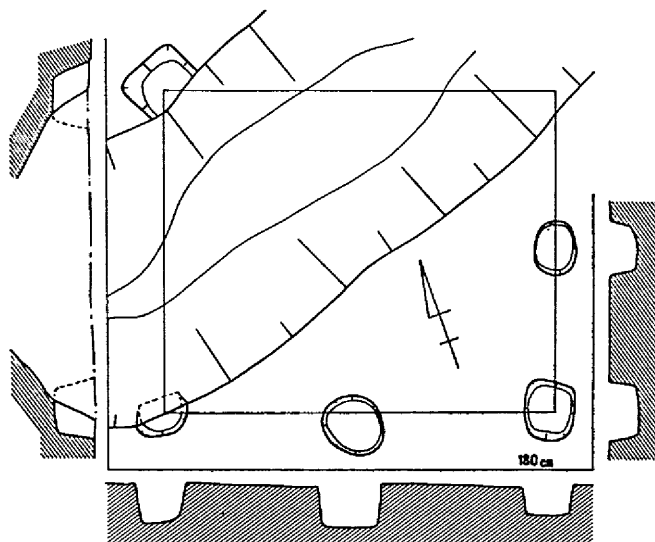
建物－11

建物－10と重複した状態で検出した。この建物も、中世の溝状遺構によって切断されているため全ての柱穴を確認することはできなかった。また、溝状遺構を越えて北側には、この建物に対応する柱穴は検出されなかったことからすれば、桁行、梁間ともに2間の建物と推定される。建物の規模は、梁間360cm、桁行の柱間の距離は240cmを測る。柱穴の掘り方の平面形は、円形を呈する。建物の長軸の方向は、N—3°—Eを示す。

建物－12 (第60図)



第58図 建物-8 平・断面図 (1/80)



第59図 建物-10 平・断面図 (1/80)

建物-5の東約4mの位置に検出した。桁行3間、梁間1間の側柱の建物である。建物の規模は、桁行448cm、梁間304cmを測る。掘り方の平面形は、方形を呈する。建物の長軸の方向は、E-0°-Sを示す。

建物-13

建物-12の南側にほぼ接して検出した。桁行2間、梁間2間の側柱の建物である。建物の南東隅の柱穴は検出されなかった。建物の規模は、桁行540cm、梁間320cmを測り、桁行の柱間が梁間のそれに比べて非常に大きいことに注目される。掘り方の平面形は、円形を呈する。建物の長軸の方向は、E-25°-Nを示す。 (井上)

第4節 中世の遺構・遺物

井戸-5 (第64図)

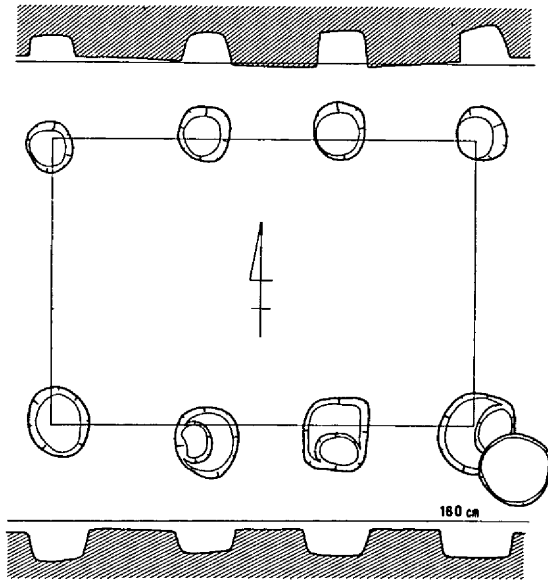
この井戸は調査区の北西端部において検出された遺構である。遺構は室町時代の包含層を切ってつくられたもので、長径170cm、短径130cmの楕円形を呈する。遺構検出面からの深さは130cmであった。底部付近には直径5~35cm程の角礫による構築が一部認められたが、上部に

はそのような痕跡は認められなかった。土層は5層に区分される。最下層には角礫まじりの灰色微砂層、それより上層は粘質土が充填していた。最上層には角礫、山土があり、意図的に埋め、廃棄したものと思われる。

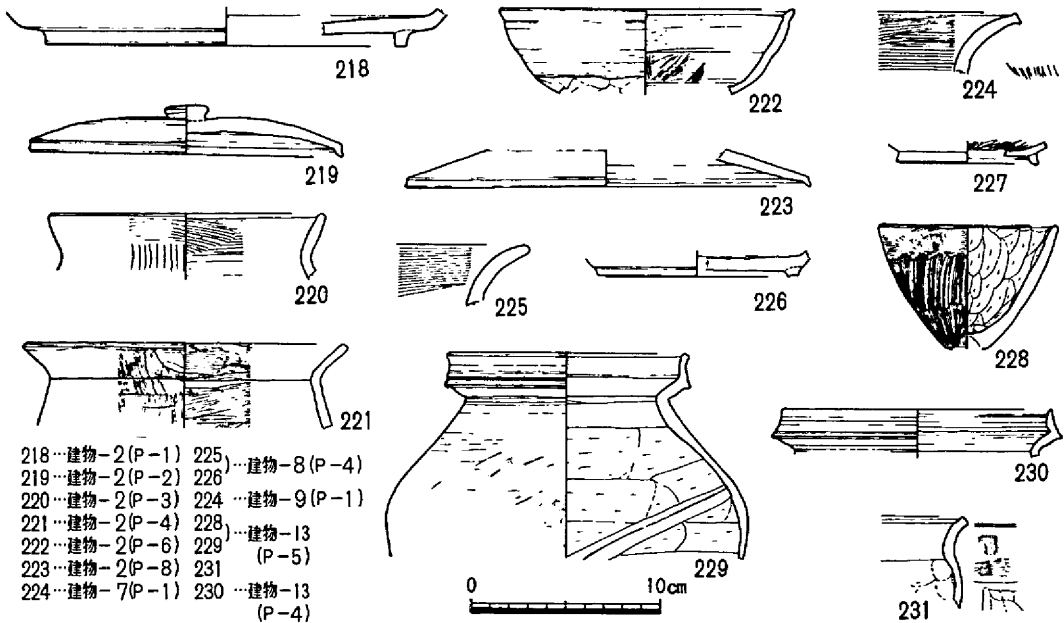
出土遺物は最上層で1点出土しているが、下層ではない。検出遺構面からみて、鎌倉～室町時代のものと考えられる。(松本)

井戸-6 (第65図)

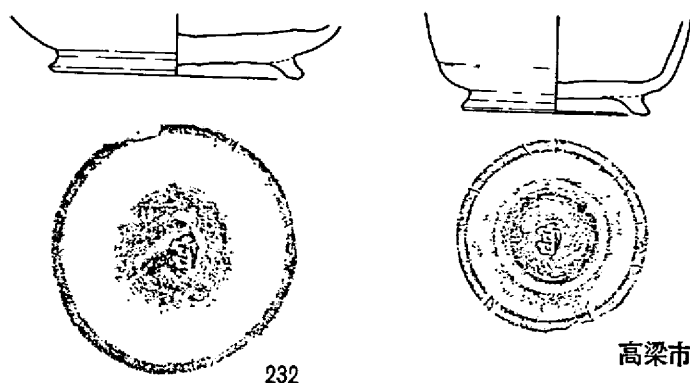
石組み遺構東側に隣接して検出され、平面形は不整円形を示している。規模は180×175cm、深さ160cmを測る。断面形態は、中ほどがくびれて若干狭くなり底部においてはやや広がっていく中細りを呈している。埋土内には、石組み遺構に使用されていたと思われる石が数個落ち込んでいた。さらに1層・7層内より土器・木器が出土している。これらの遺物から室町



第60図 建物-12 平・断面図 (1/80)



第61図 建物柱穴出土遺物



高梁市中井出土

第62図 「官」印 須恵器 (1/3)

時代の遺構と推定する。

(二宮)

建物—14 (第66図)

桁行2間、梁間2間の総柱の建物である。建物の規模は、桁行490cm、梁間420cmを測る。掘り方の平面形は、円形を呈しており、全ての柱穴から柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は、E—45°—Eを示す。

建物—15 (第67図)

建物—14の東約2.6mの位置に検出した。建物は、桁行2間、梁間2間の総柱の建物である。建物の規模は、桁行460cm、梁間350cmを測る。掘り方の平面形は、円形を呈し、全ての柱穴から柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は、N—15°—Eを示す。

建物—16 (第68図)

建物—14と一部重複して南側に検出した。建物は、桁行2間、梁間2間の総柱の建物である。建物の規模は、桁行420cm、梁間370cmを測る。掘り方の平面形は、円形を呈し、全ての柱穴より柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向は、E—11°—Sを示す。

建物—17 (第69図)

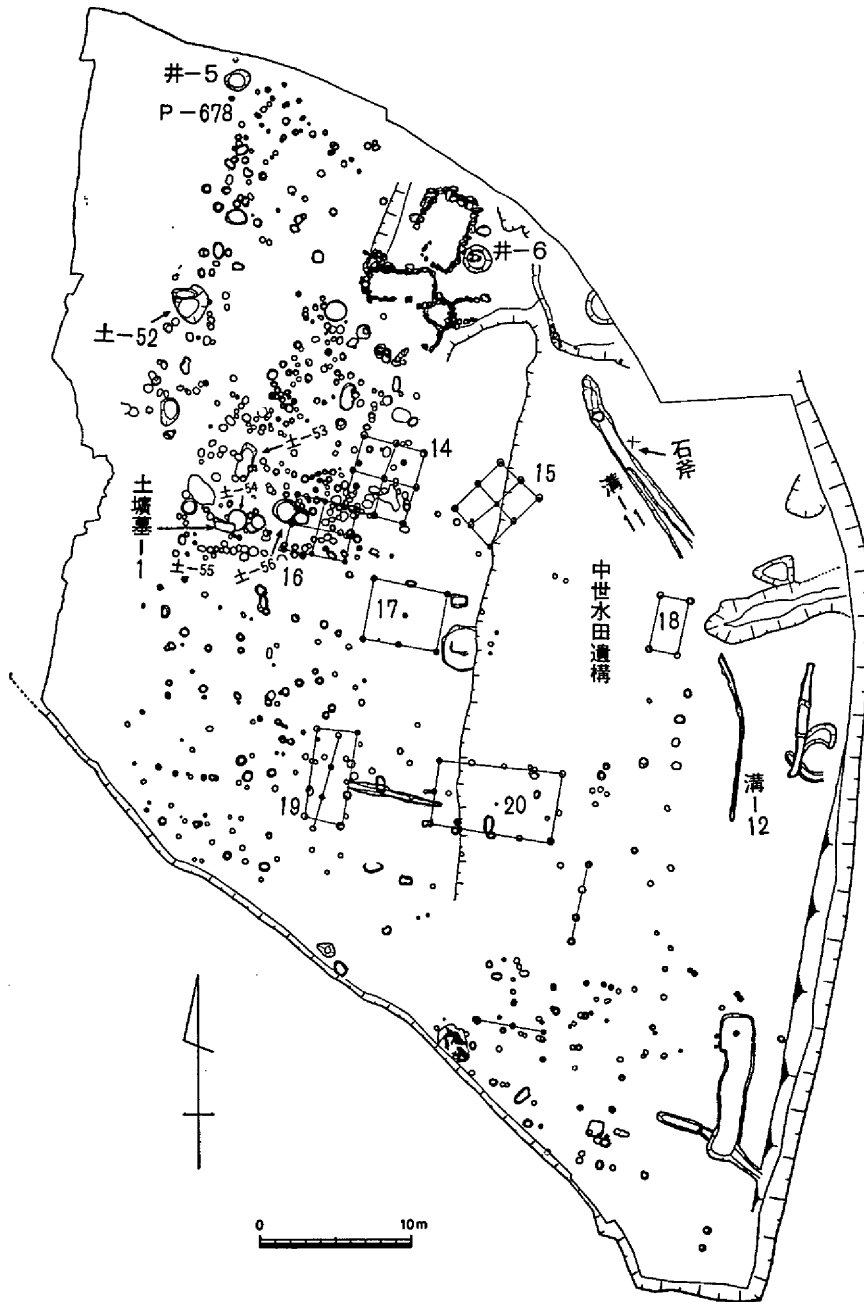
建物—16の南東約2mの位置に検出した。建物は、桁行2間、梁間1間の側柱の建物である。建物の規模は、桁行480cm、梁間420cmを測る。建物の長軸の方向は、E—10°—Sを示す。

建物—18 (第70図)

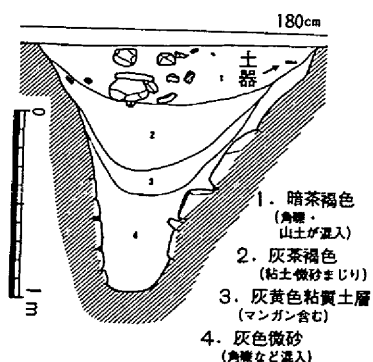
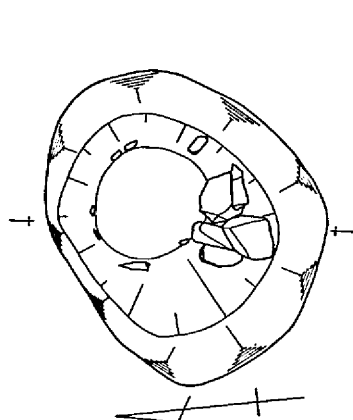
建物—17の東約14.4mの位置に検出した。桁行、梁間ともに1間の建物である。建物の規模は、桁行370cm、梁間190cmを測る。掘り方の平面形は、円形を呈している。建物の長軸の方向は、N—13°—Eを示している。

建物—19 (第71図)

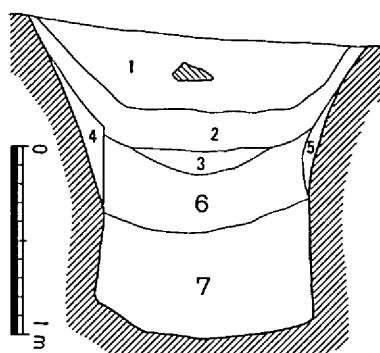
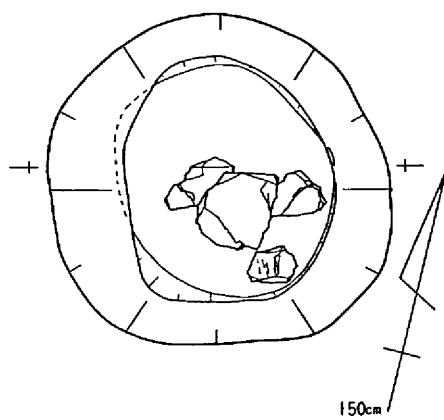
建物—17の南約5.6mの位置に検出した。建物は、桁行3間、梁間1間である。建物の規模



第63図 中世遺構配置図 (1/500)



第64図 井戸-5 平・断面図 (1/40)



第65図 井戸-6 平・断面図 (1/40)

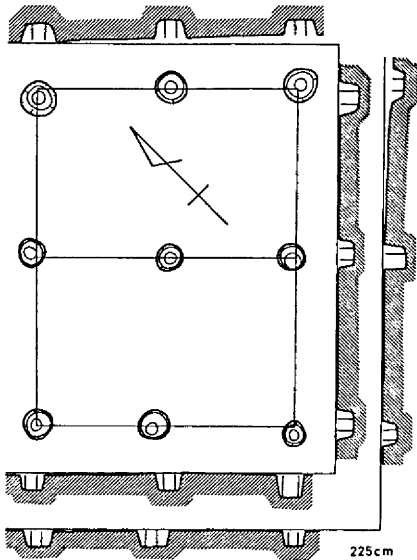
は、桁行630cm，梁間255cmを測る。掘り方の平面形は，円形を呈している。建物の長軸の方向は，N-10°-Eを示している。

建物-20 (第72図)

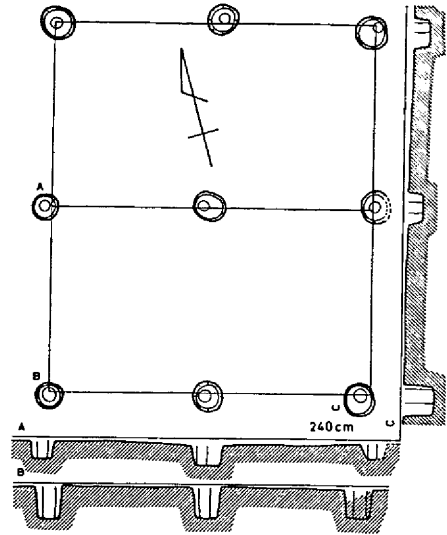
建物-19の東約5mの位置に検出した。建物は，桁行4間，梁間2間の側柱の建物である。建物の規模は，桁行800cm，梁間420cmを測る。掘り方の平面形は，円形を呈している。建物の長軸の方向は，E-10°-Sを示している。 (井上)

石組み遺構-1 (第74図)

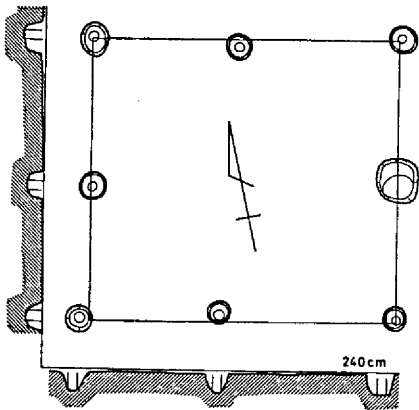
調査区北端部に位置し，大小様々な角礫を縦に埋め込み，長方形或いは，楕円形の形に並べている。このような配列形態から推定し庭園の一部と思われる遺構である。庭園遺構の一部であるならば，池と考えたいが，後世の削平を受け，導入水路，排水路は検出されていない。また池とするならば，底部に粘土を貼った様な形跡も確認されていない。しかし，水を溜める事は十分出来たと考えられる。さらには西側に山を控え，山裾を利用した立体的な石組みの庭園



第67図 建物—15平・断面図 (1/100)



第66図 建物—14平・断面図 (1/100)



第68図 建物—16平・断面図 (1/100)

といえよう。しかしこの遺構に伴う遺構・遺物は確認されていない。(二宮)

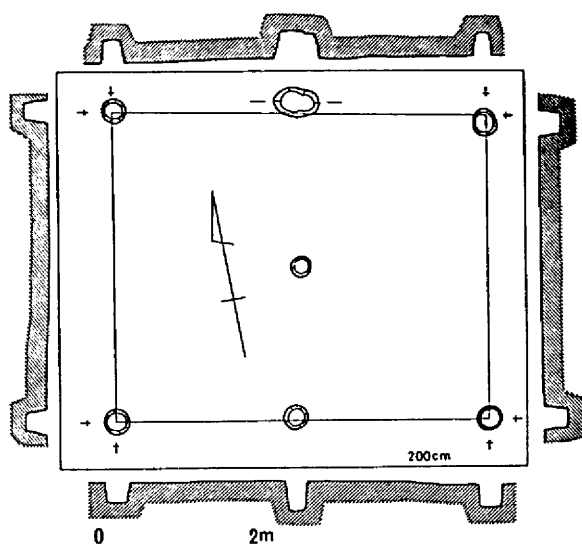
土壌墓—1 (第75～76図)

この遺構は調査区の南東、丘陵端部において検出された長方形土壌墓である。掘り方は頭部付近が土壌によって削平されているため正確ではないが、長径約140cm、幅約60cmを測る。深さは約20cmを測り、二段掘りである。木棺は土壌墓内の鉄釘出土状態からみて106×45cmと考えられる。人骨は頭部、胸部、

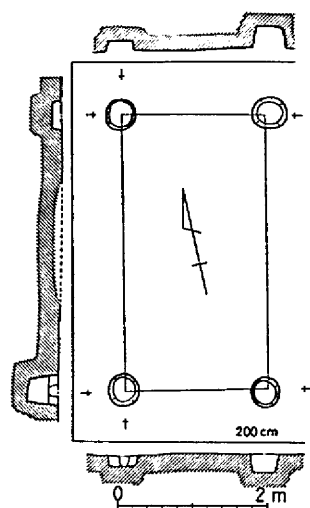
脚部が残存しているが、検出状況からみると屈葬の可能性はある。遺物は、頭に隣接して白磁碗と土師質の高合付碗が重ねて置かれ、胸部付近には土師器小皿が1個副葬されていた。これらの遺物からみて、この土壌墓は鎌倉時代のもと考えられる。(松本)

土壌—41 (第78図)

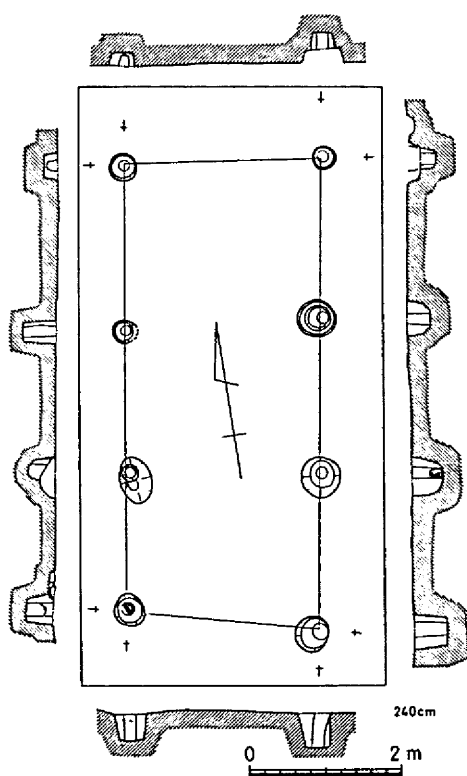
2基の土壌が重なっているもので、下部土壌は素掘り、上部土壌は段状に掘り下げ、石敷き、石積みが行なわれ、小型の竪穴式石室の形態がうかがえる石組み土壌である。なお敷石中心部には板材をはめ込んである。上部の規模は、長辺1.98m、短辺1.72m、敷石の下部までの深さは43cm、下部土壌は掘り鉢状の掘り方を呈しているが、深さは推定76cm位いと推測する。



第69図 建物一17平・断面図 (1/100)



第70図 建物一18平・断面図 (1/100)



第71図 建物一19平・断面図 (1/100)

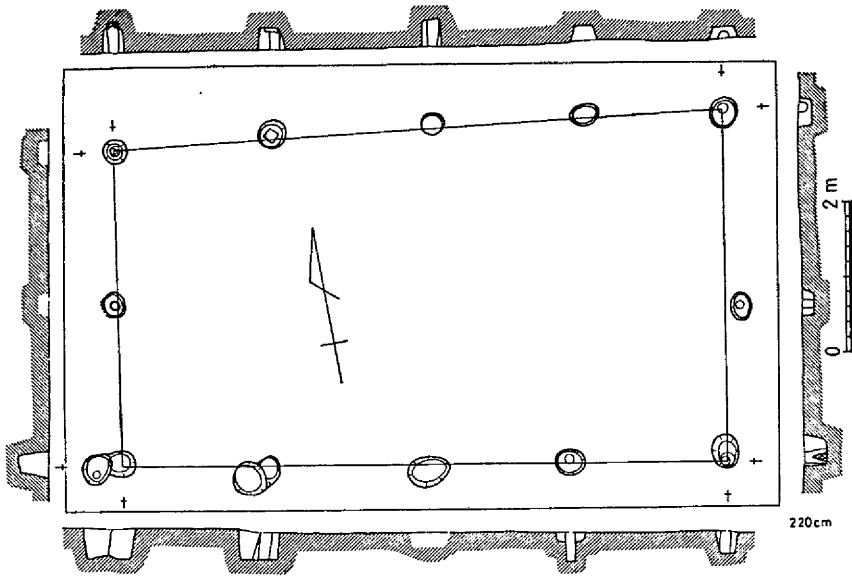
各土境内からは、上部石積み内より瓦、内部より櫛、朱漆、下部の底部より碗の底部片が出土している。これらの遺物からこの2基の土墳は中世の土墳墓である可能性が出る遺構である。

土墳一40 (第77図)

若干隅に丸味を持った長方形を呈し、土墳底部中央が一段深く楕円形に掘り込まれているもので、長辺1.44m、短辺1.16m、最も深い所で36cmを測る。土墳西側半分には石積みが残っている。この事から土墳は簡素な竪穴式石室の形を呈した土墳墓であった可能性が強い。しかし、時期の決め手となる遺物等は確認されなかった。いずれにせよ中世のものであろう。(二宮)

シスト状遺構 (第79図)

これは土墳45を切ってつくられた遺構である。平面は一部不明であるが、長径約90cm、短径約70cmの楕円形を呈するものと思



第72図 建物—20 平・断面図 (1/100)

われる。深さは上部が削平されているため正確ではないが、検出面から30cmである。この素掘りの土壌内に二段に角礫を構築した長方形（35×15×23cm）石組がみられた。なお、上部及び底部には石が確められなかった。出土遺物がないため時期は不明である。（松本）

中世水田遺構（第63図）

調査区のほぼ中央で南北向きに東が一段低くなる。この低い部分が水田面である。その差約20cm位あり、水田層特有の暗灰色粘質土の面が確認された。しかし調査範囲内において畦畔並びにそれらしき遺構又は、用排水施設は何ら確認することは出来なかった。中世の水田区画は古代のものよりはるかに広い区画といえるのではなかろうか。（二宮）

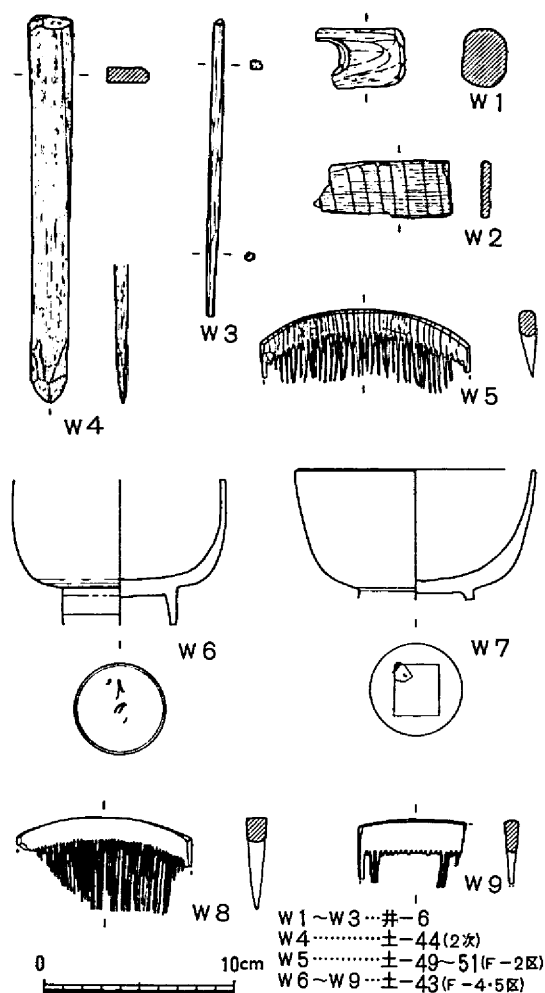
第5節 近世・近代の遺構・遺物

溝—11 （第63図）

調査区の北東部に位置し、南東から北西にゆるやかに傾斜する溝である。北西部は浅く歪なくぼみとなって終ってしまい、南東側は徐々に浅くなり端部までは検出することが出来ず、幅80～140cm、長さ13.6mを測りえたにすぎなかった。

溝—12 （第63図）

調査区の東端中央部に位置する南北向きの溝で、若干逆「く」字状に曲がり、両端をほぼ丸く止じた形で終る溝であり、幅20～40cm、全長約11mを測る。



第73図 井戸・土壌出土遺物

溝-13・及びその施設

(第80・81・82図)

西側の丘陵裾部に接して、南西—北東方向に伸び、徐々に丘陵と離れていく溝である。検出した溝の内部には大小さまざまな角礫で埋没している。埋没内には須恵器・土師器・備前焼・瓦・骨等が混入していた。検出した溝の最大幅は2m、最小幅80cm、深さは10～36cmを測り、調査した総延長は47mである。溝の下流(中・北東部)には第81・82図に示した遺構の検出も見られた。

第78図は溝の西側で、部分的に逆台形に掘り込みが行われ、石が埋め込まれた状態で検出した。第79図は溝の中程で、土壌-16の西側に位置する遺構である。石は双方とも内側に倒れているが、一時的に水を塞ぎ止めるための施設と思われる遺構である。

溝-14 (第80図)

溝-13の中央やや南よりで直交し

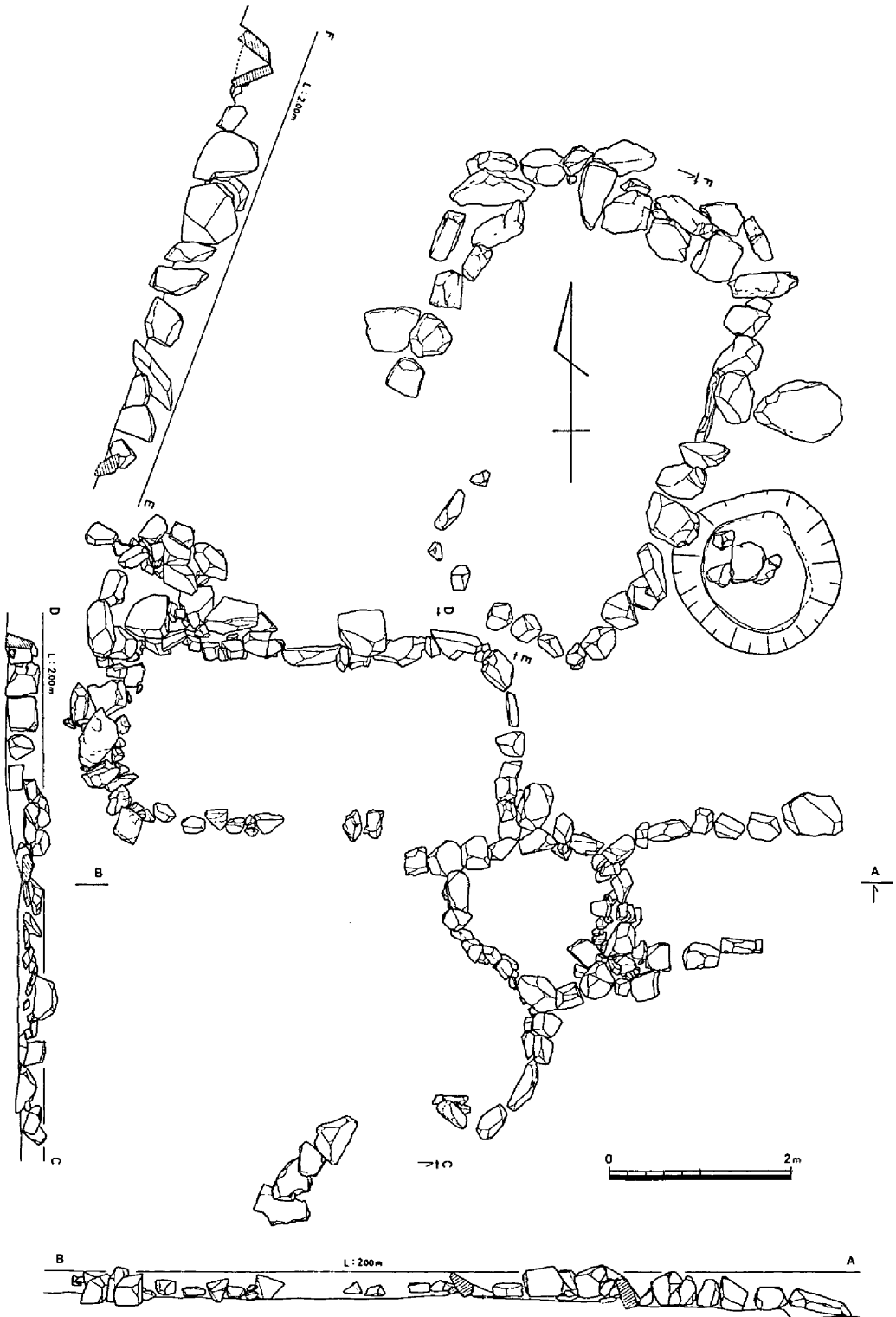
ている溝、幅40cmで非常に浅いものである。3次調査(南半分)においては、続きとおぼしき溝はわずかな部分が検出されなかった。

溝-15 (第80図)

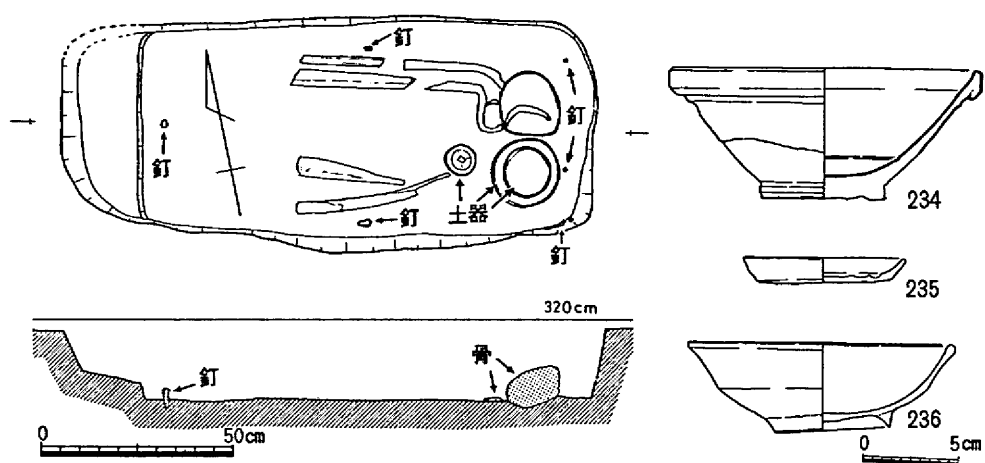
ほぼ東西に走る溝で、東側は削平により消滅しているが、幅約30cm、全長11mを調査する事が出来た。溝の西端は丸く終り、東側の一部分では角礫のつめ込みが確認された。検出された状況から推定すれば、排水施設の暗渠の可能性のある遺構である。

土壌

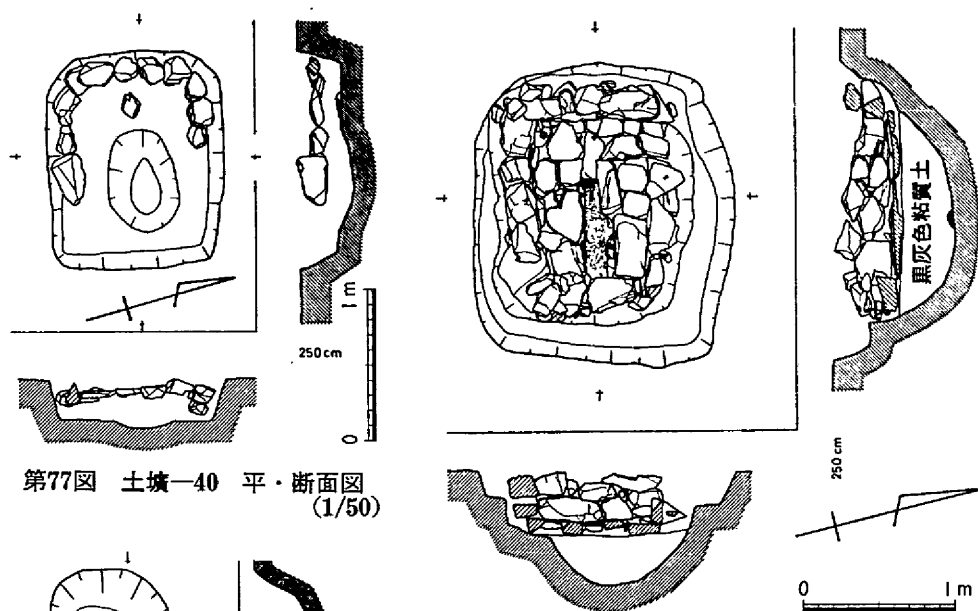
今回の調査(2次・3次)で近世～近代の土壌は数十基が確認されているが、今報告においては、無作意に数基を記述することにしてみる。



第74図 石組み遺構-1 平・断面図

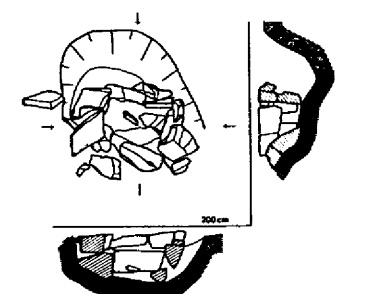


第75・76図 土墳墓—1 (中世) 平・断面図 (1/20) 及び出土遺物



第77図 土墳—40 平・断面図 (1/50)

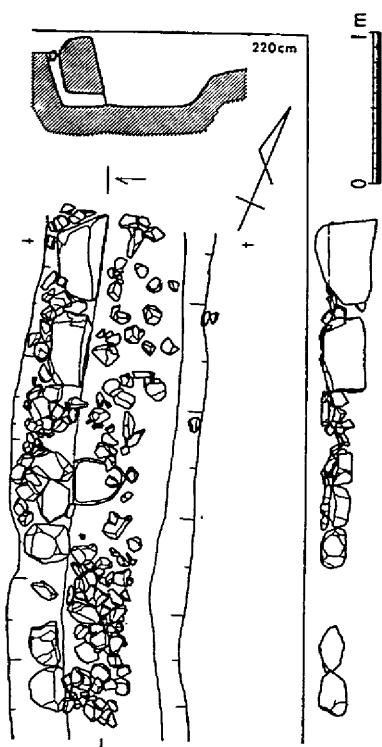
第78図 土墳—41 平・断面図 (1/50)



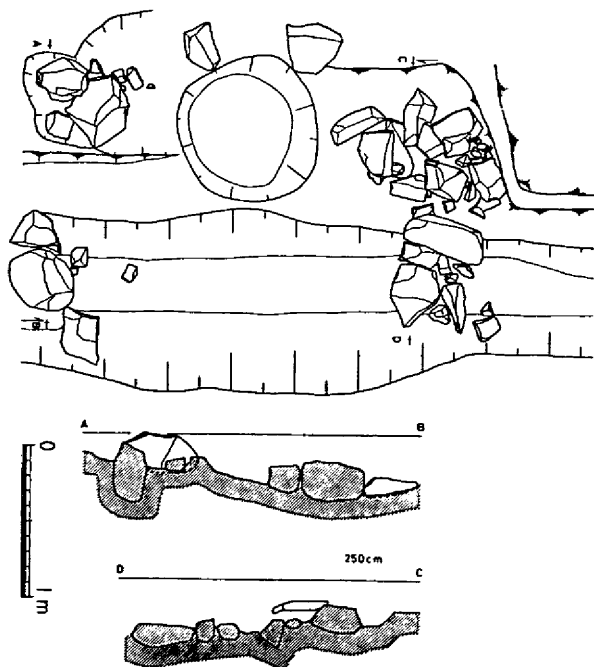
第79図 シスト状遺構平・断面図 (1/50)



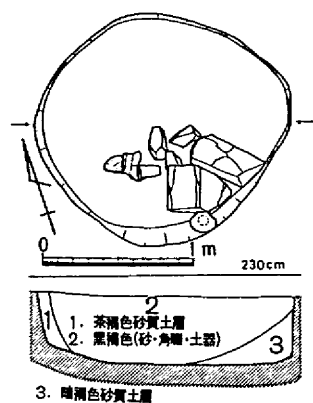
第80図 近世・近代遺構配置図 (1/500)



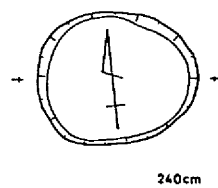
第81図 溝一13平・断面図（北端部分）（1/50）



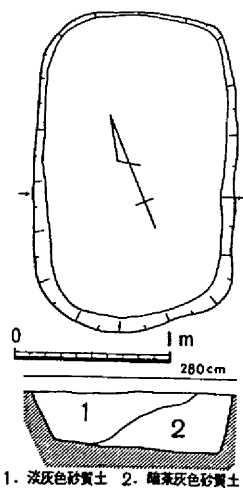
第82図 溝一13閉塞石平・断面図（1/50）



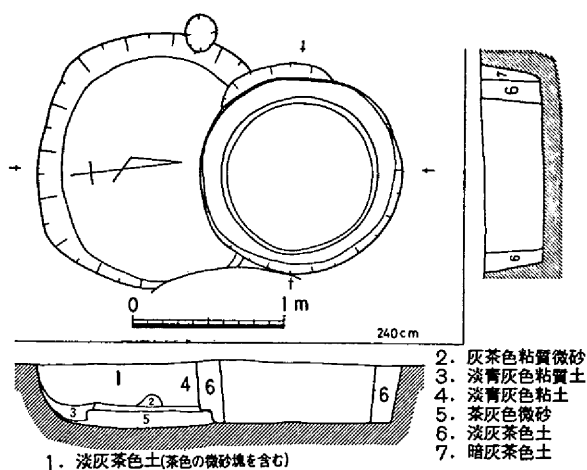
第83図 土境一10平・断面図（1/50）



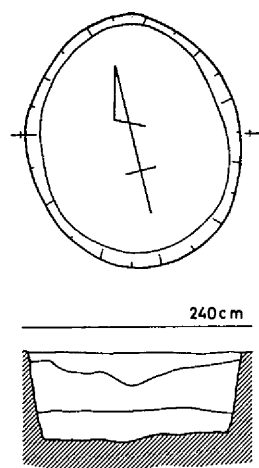
第84図 土境一11平・断面図（1/50）



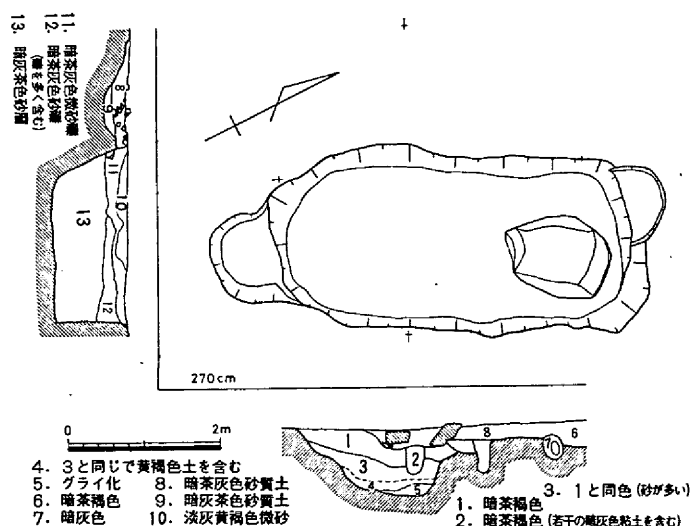
第85図 土境一12平・断面図（1/50）



第86図 土壌—13・14平・断面図 (1/50)



第87図 土壌—15平・断面図(1/50)



第88図 土壌—16平・断面図 (1/100)

土壌—10 (第83図)

建物—16の西に接する位置にあり、土壌南隅には大小数個の石、並びに土師器の小皿が埋没している。規模は $1.5 \times 1.7m$ の歪な不整隅丸方形を示し、深さは $45cm$ 程度を測るものである。遺物・検出状況から中世の土壌墓であろう。

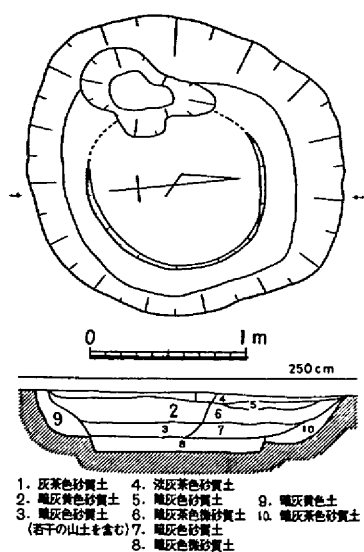
土壌—12 (第85図)

溝—13中央部分の西に接した所にあり、長軸がほぼ南北に向いた隅丸長方形であり、長辺 $2.1m$ 、短辺 $1.3m$ を測るものである。この遺構は、土壌墓と考える方が妥当なものである。

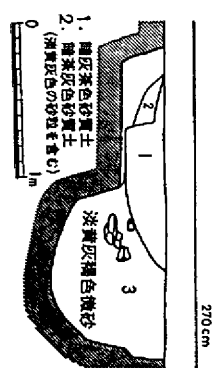
土壌—13・14 (第86図)

土壌—16の北に接した所に位置し、3基が切り合い関係にある。2基は共にほぼ円形で、13は素掘り、14は素掘りで内側に径 $103cm$ の桶の埋め込みがなされている。いずれにせよこのような土壌は肥溜め等の施設と考えるのが妥当ではなかろうか。このように桶跡のある土壌は、土壌—17・23で、13に類似するものには、土壌—18~22、さらに土壌—11・15・24のように

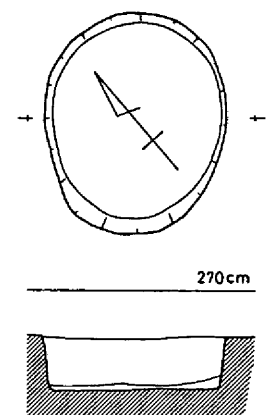
第3章 低水路調査区



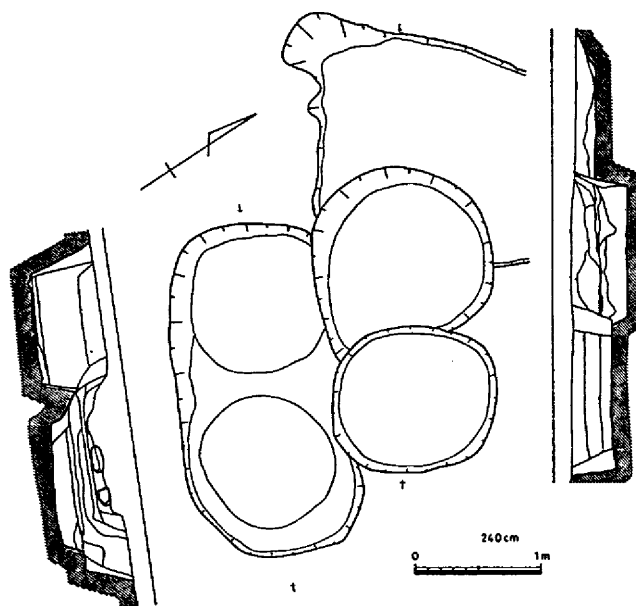
第89図 土塊-17平・断面図
(1/50)



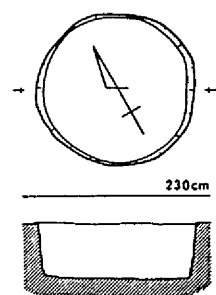
第91図 土塊-22-1(下)・22-2(上)平・断面図
(1/50)



第92図 土塊-23平・断面図
(1/50)



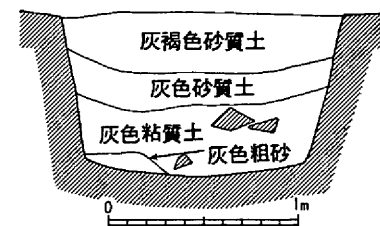
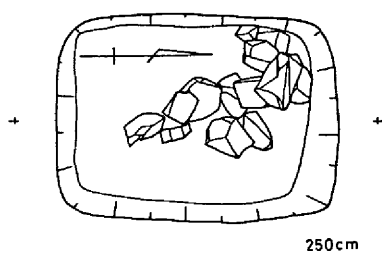
第90図 土塊-18(左上)・19(左下)・20(右下)・
21(右上)平・断面図 (1/60)



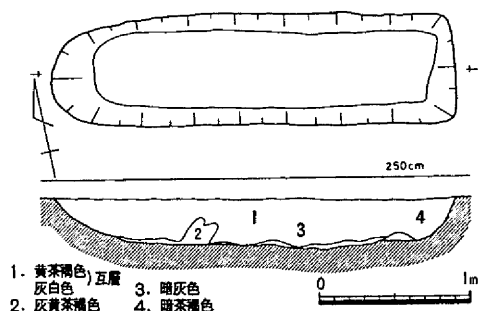
第93図 土塊-24
平・断面図
(1/50)

簡素な素掘り土塊も見受ける事ができた。平面形態から見ても、円形もしくは楕円形を呈している土塊である。

土塊-16 (第88図)



第94図 土壕—38平・断面図 (1/40)



第96図 土壕—42平・断面図 (1/50)

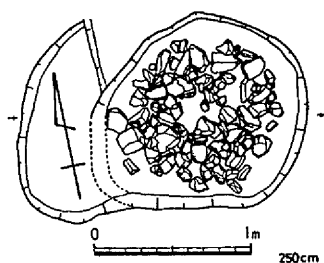
土壕—42 (第96図)
土壕—41の東に隣接する所にあり、西側が丸く止った長方形の比較的浅い土壕である。規模は長辺2.69m, 短辺70~75cm, 最も深い所で32cmを測る事ができる土壕である。出土遺物の大部分は近世のものであり、土壕はおのずと近世のものといえるものである。

土壕—39 (第95図)

土壕—38の南東に位置し、切り合った土壕である。規模は1.4×1.3m, 深さ10cm程度を測る不整形のものであり、内部は角礫が詰め込まれ埋没している。中世~近世の遺構であろう。

土壕—43

溝—15の北に接して位置し、3ヶ所で中世~近世の土壕を切って、ほぼ東西方向に長く伸び

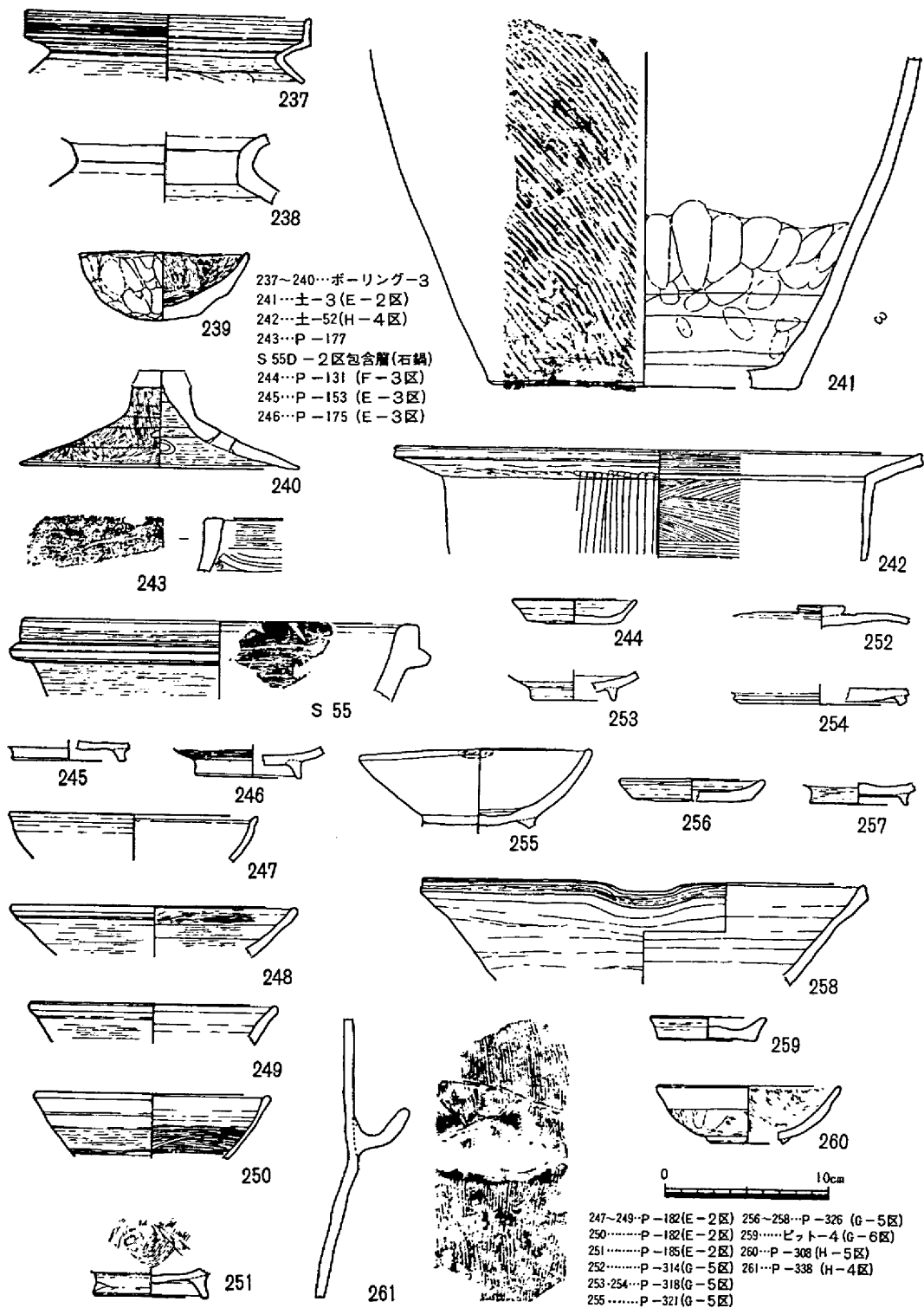


第95図 土壕—39平・断面図 (1/50)

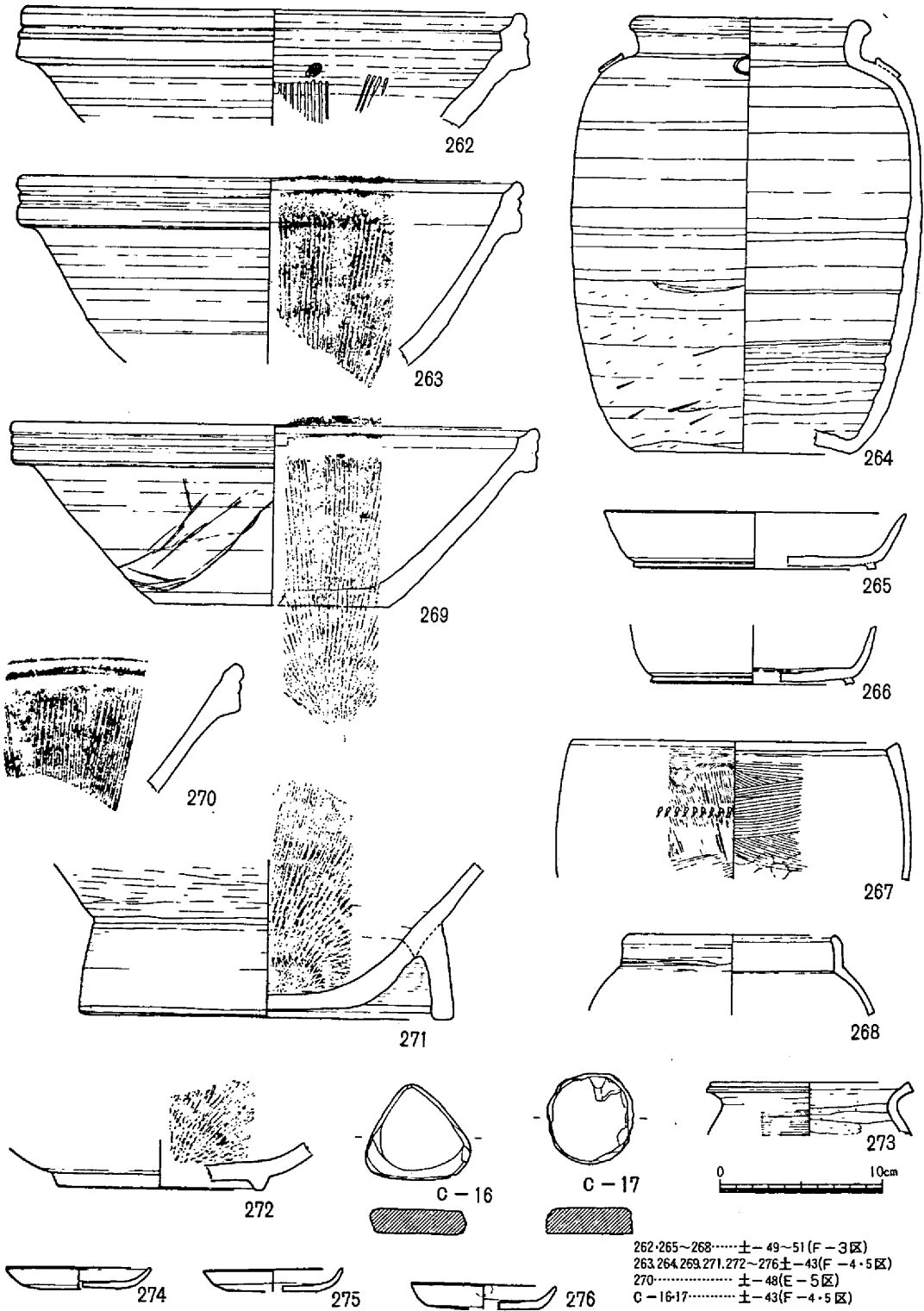
調査区北半分の中央やや西よりに溝—13を切った状態で検出され、幅約2.3m, 長さ約5m, 深さ1mを測る大型の土壕である。土壕底部はほぼ平らに掘り上げ、最下層はグライ化していた。埋没状態は、土壕が使用不能になり、ゴミ捨て穴となって大小様々な石が主体で土器・木製品等を混入し放棄している。土壕の当初の使用目的は何であったかについては不明である。

土壕—38 (第94図)

調査区のほぼ中央部に位置し、南北に長い

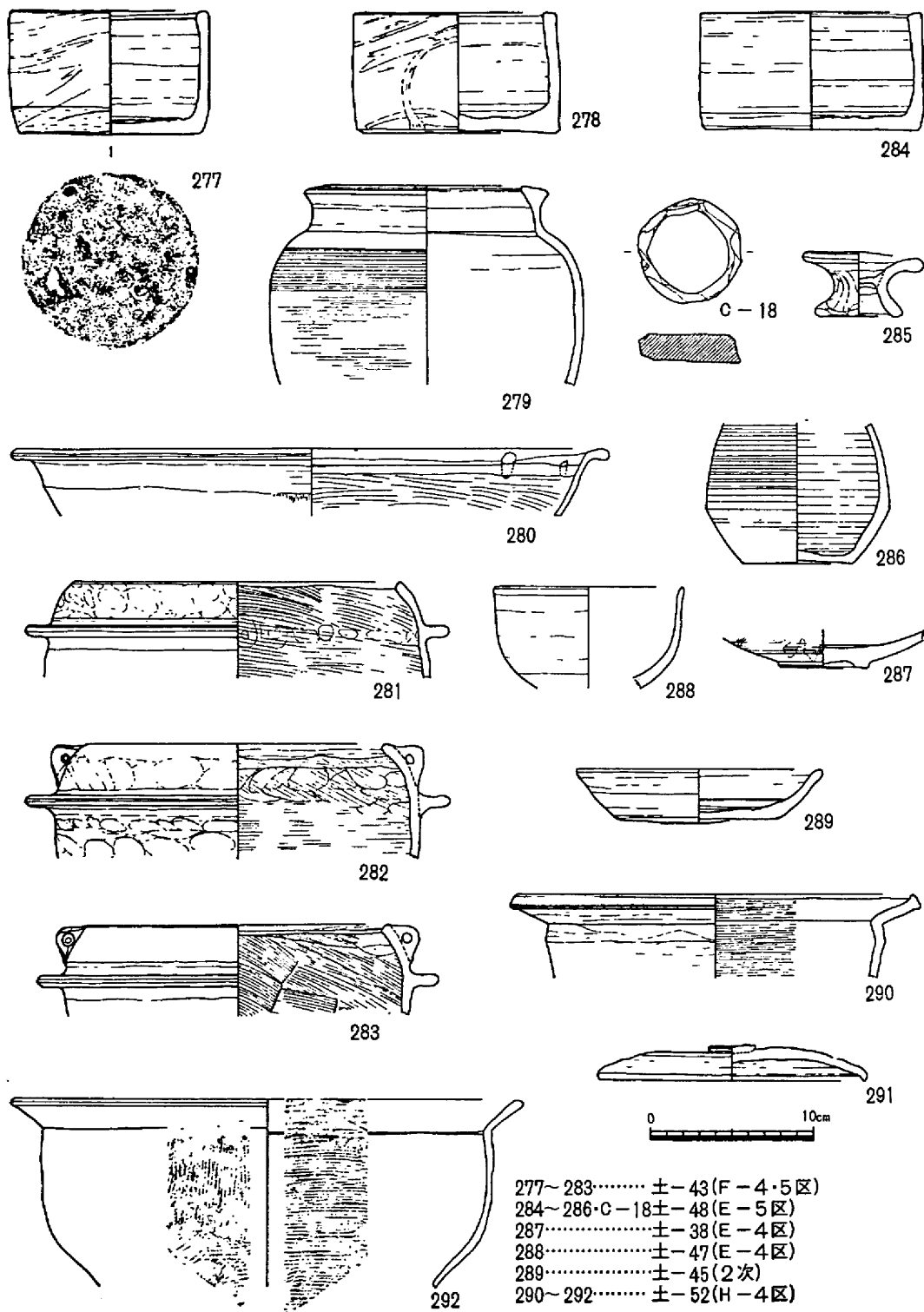


第97図 ボーリング-3内・土壌・柱穴・ピット・包含層出土遺物

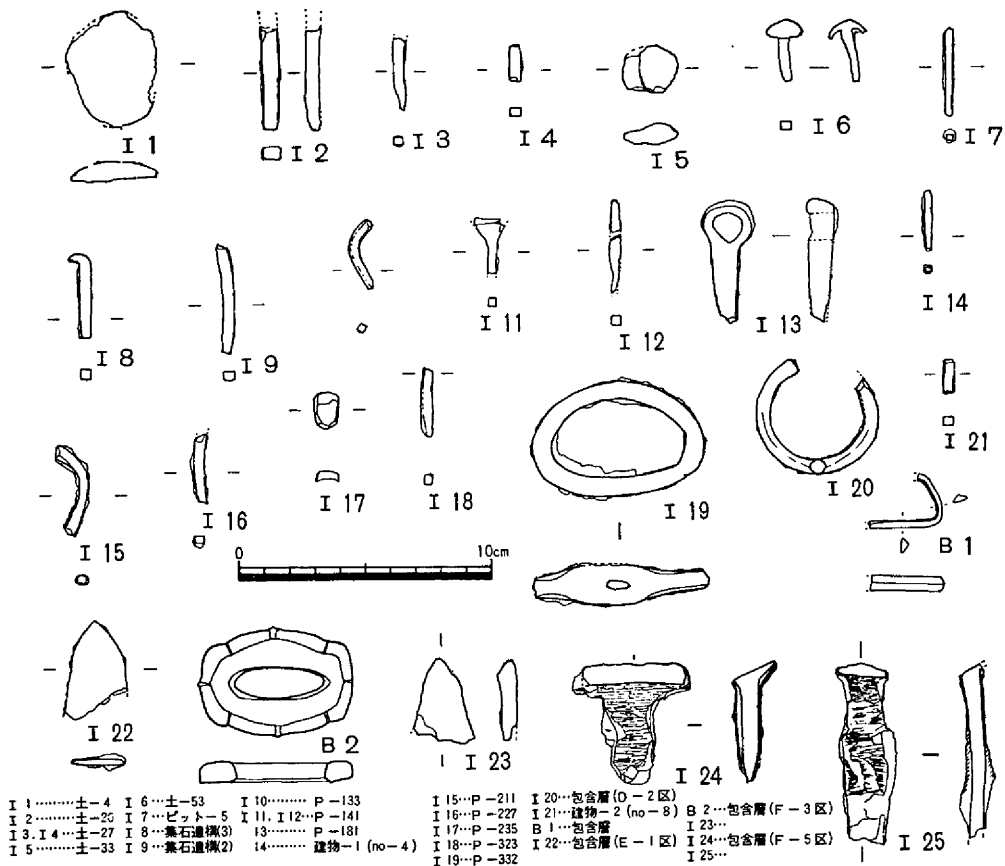


第98図 土 墳 出 土 遺 物

第3章 低水路調査区



第99圖 土 壙 出 土 遺 物



第100図 土壌・包含層出土遺物

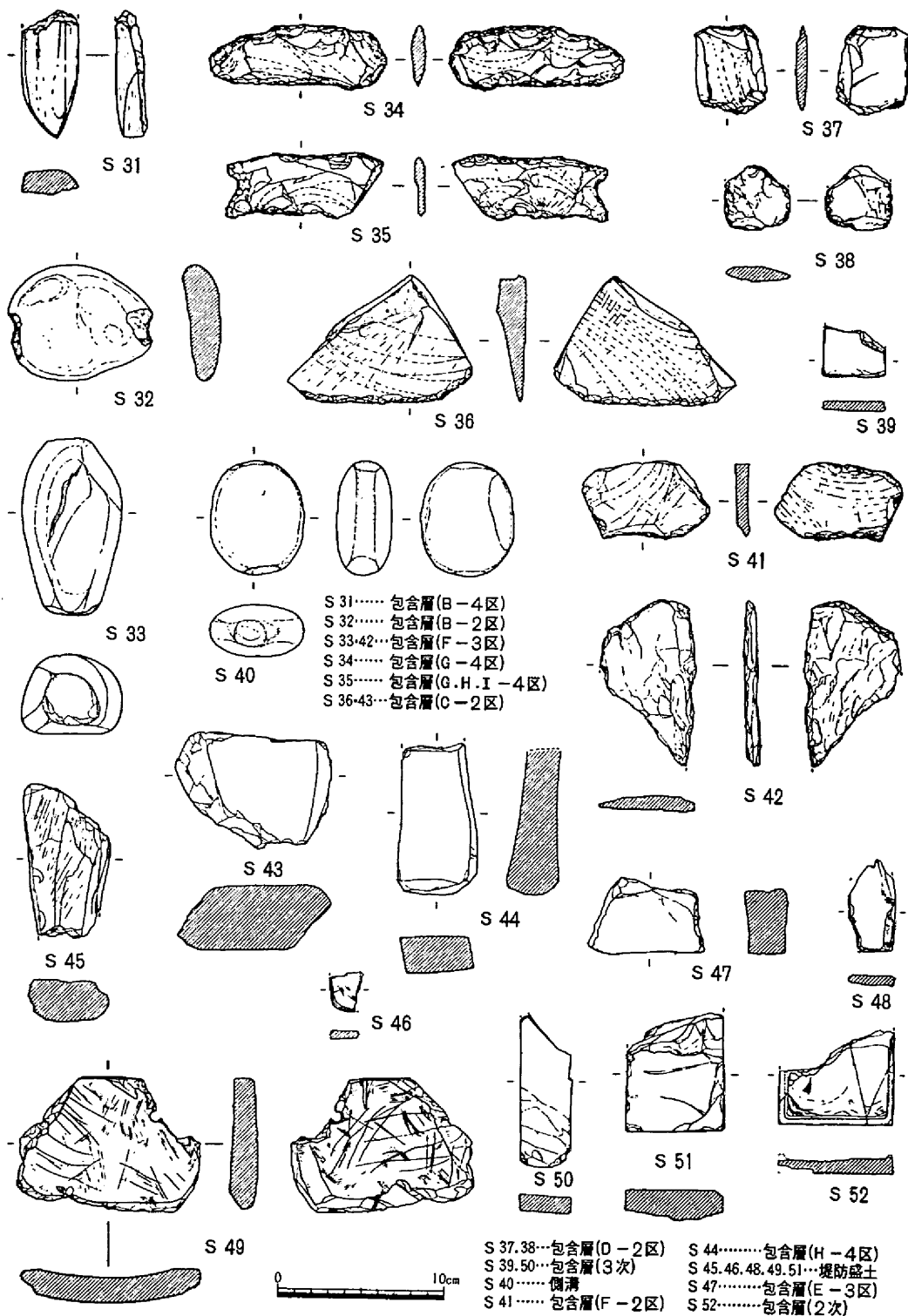
る歪で不整長方形を呈した土壌、規模は長辺9.6m、短辺1.8~2.5m、最も深い所で約1.2mを測った。時期は、遺構の検出状況・出土遺物・放棄の状態から近代の遺構と判断した。

集石遺構（第80図）

調査区の北西端で丘陵裾部から溝-13にかけて溝に直交する形で3本が並行している。集石遺構-③は幅40~60cm、長さ3.8mを、②の幅は1.8~2.2m、裾部からの長さは10.3mを、①の幅は1.1~1.7m、②との交わり部から6.6mを測るものである。②の東側は溝-13と交わり、西側では丘陵裾部において南北に広がっている。①~③の平面形はいずれも歪で不整長方形の溝状の様相を示している。また、その性格・機能から推察し、故意に角礫で満たしている事は、何らかの排水施設と考えるのが妥当な遺構と思われる。

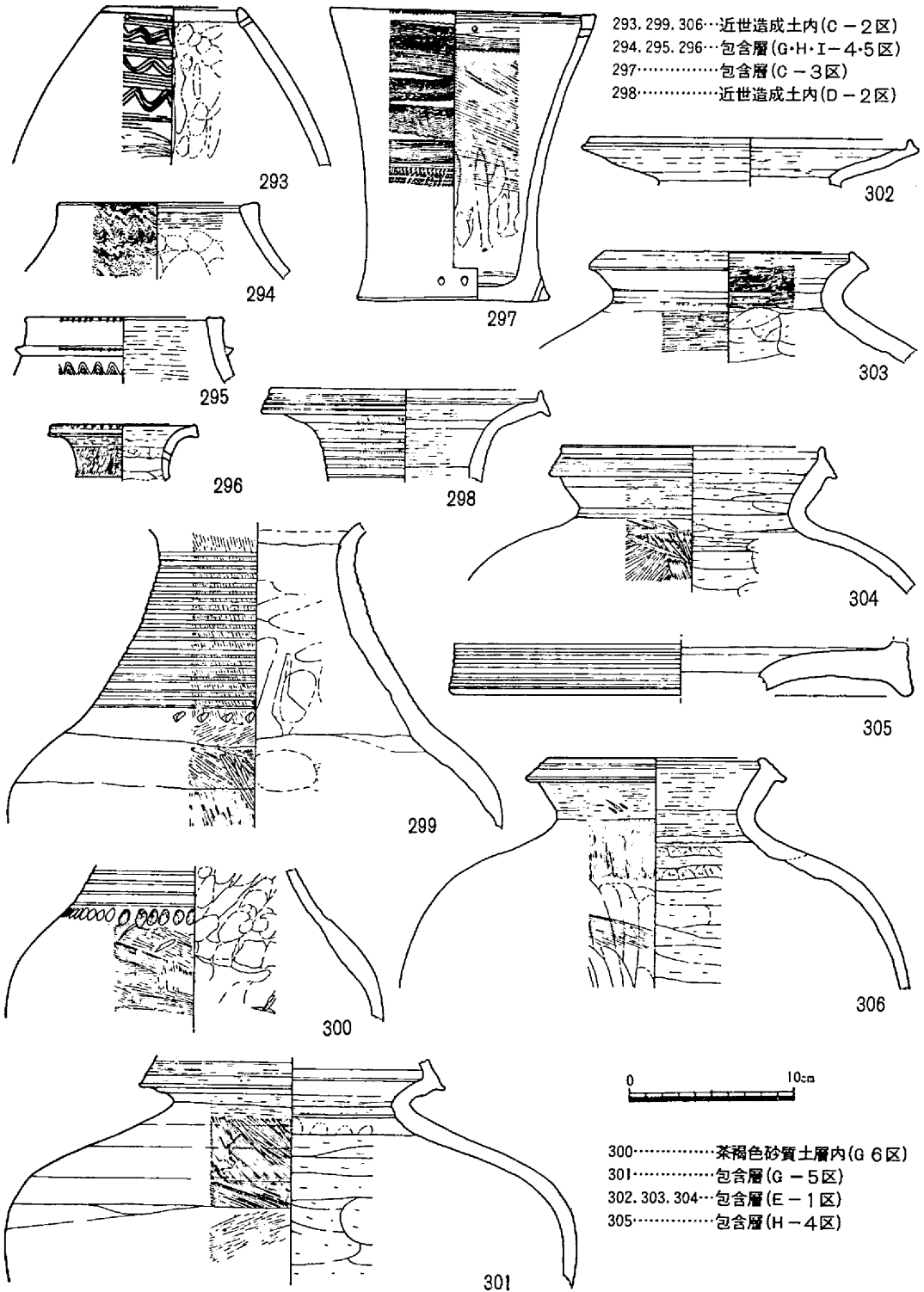
(二宮)

第3章 低水路調査区

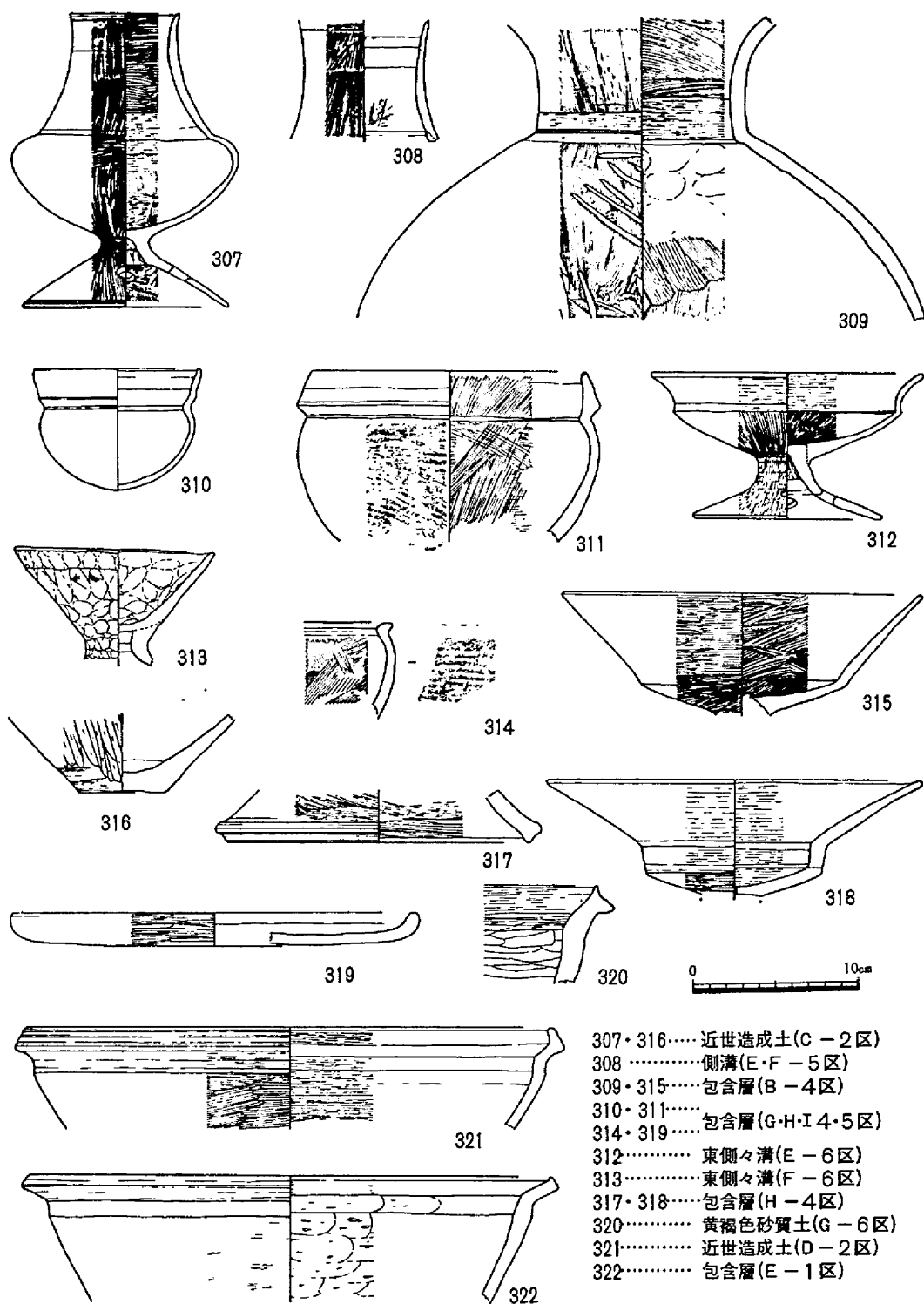


第101図 包含層・第3遺構面・堤防盛土出土遺物

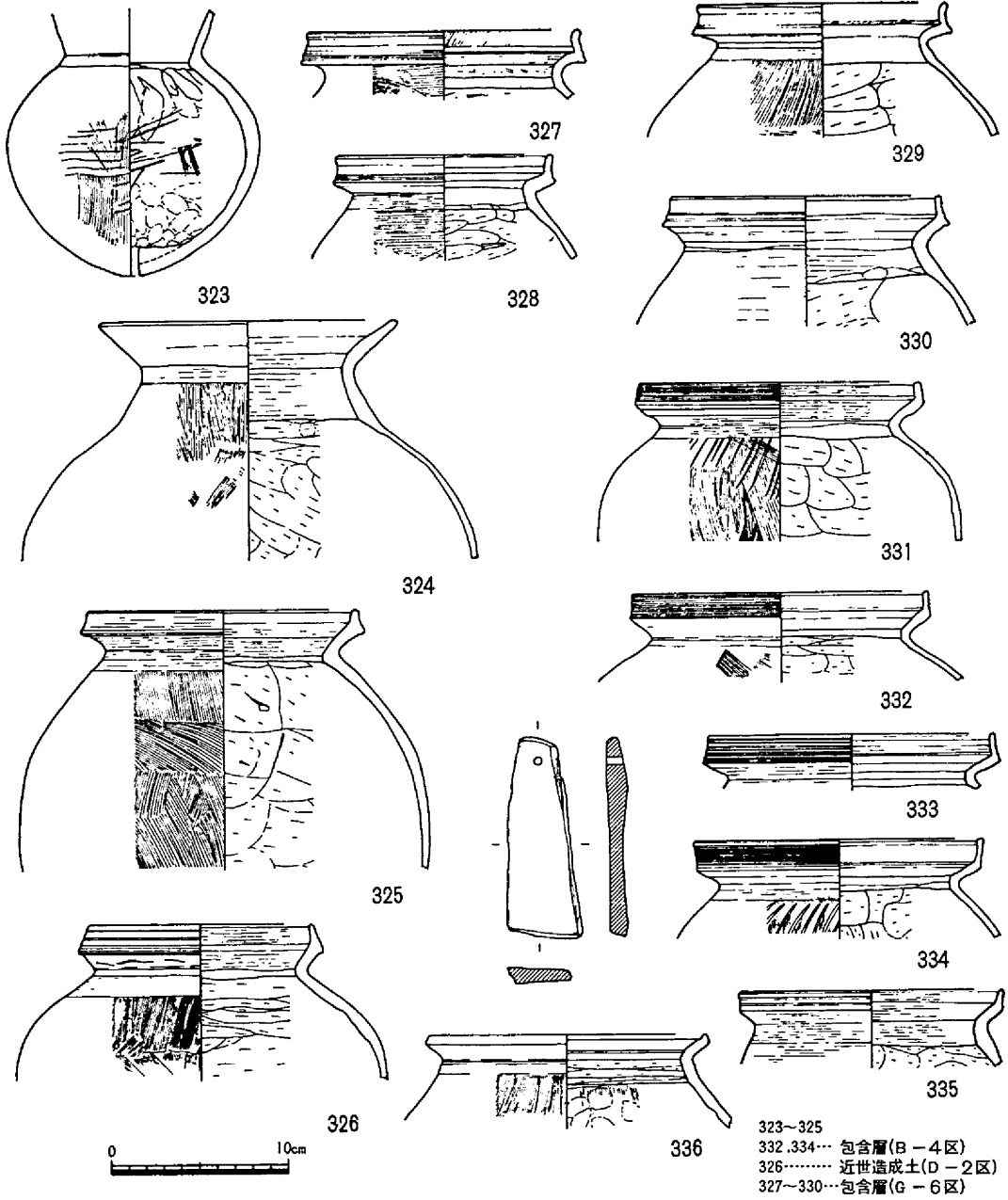
第5節 近世・近代の遺構・遺物



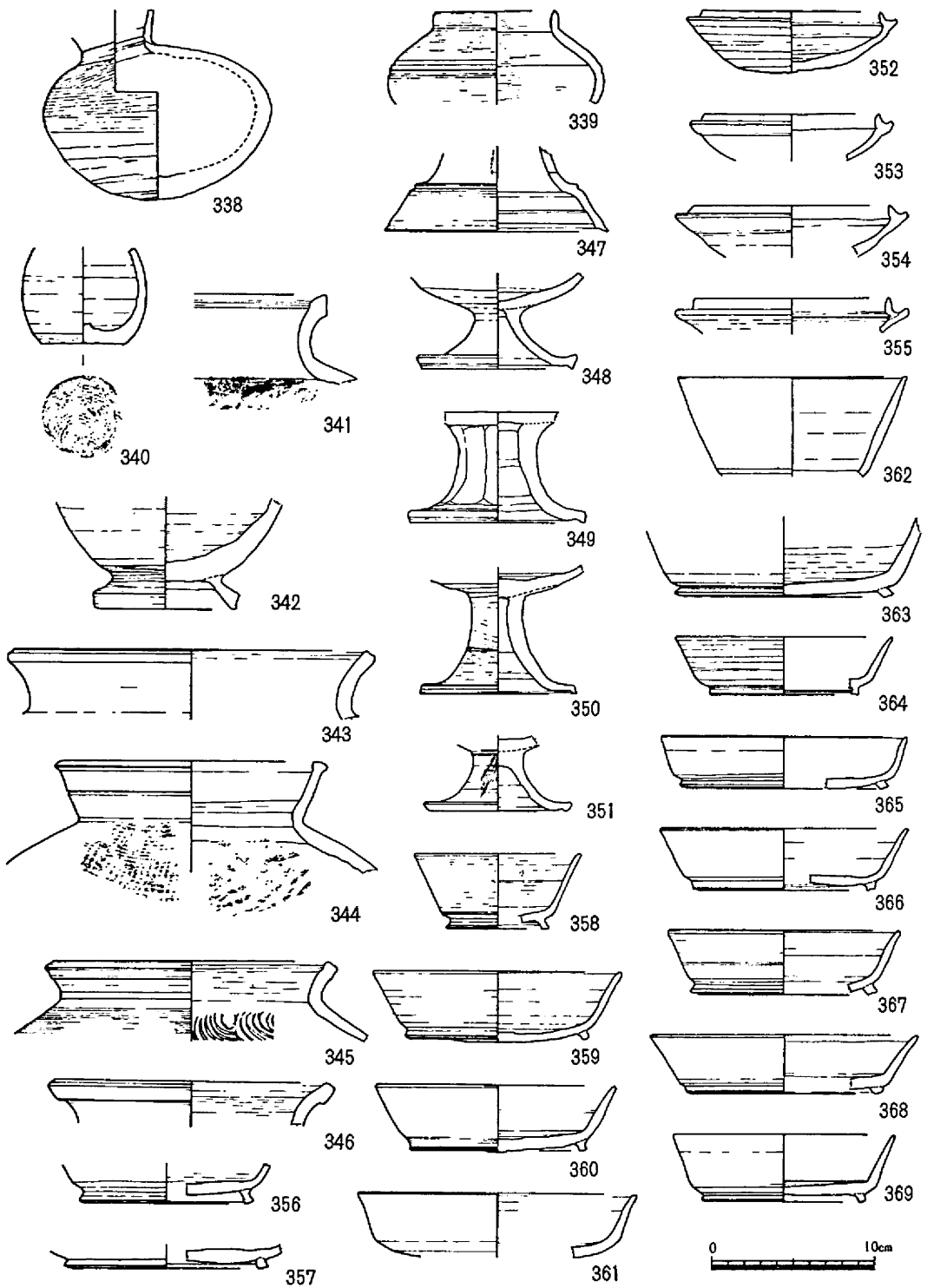
第102図 包含層・近世造成土出土遺物



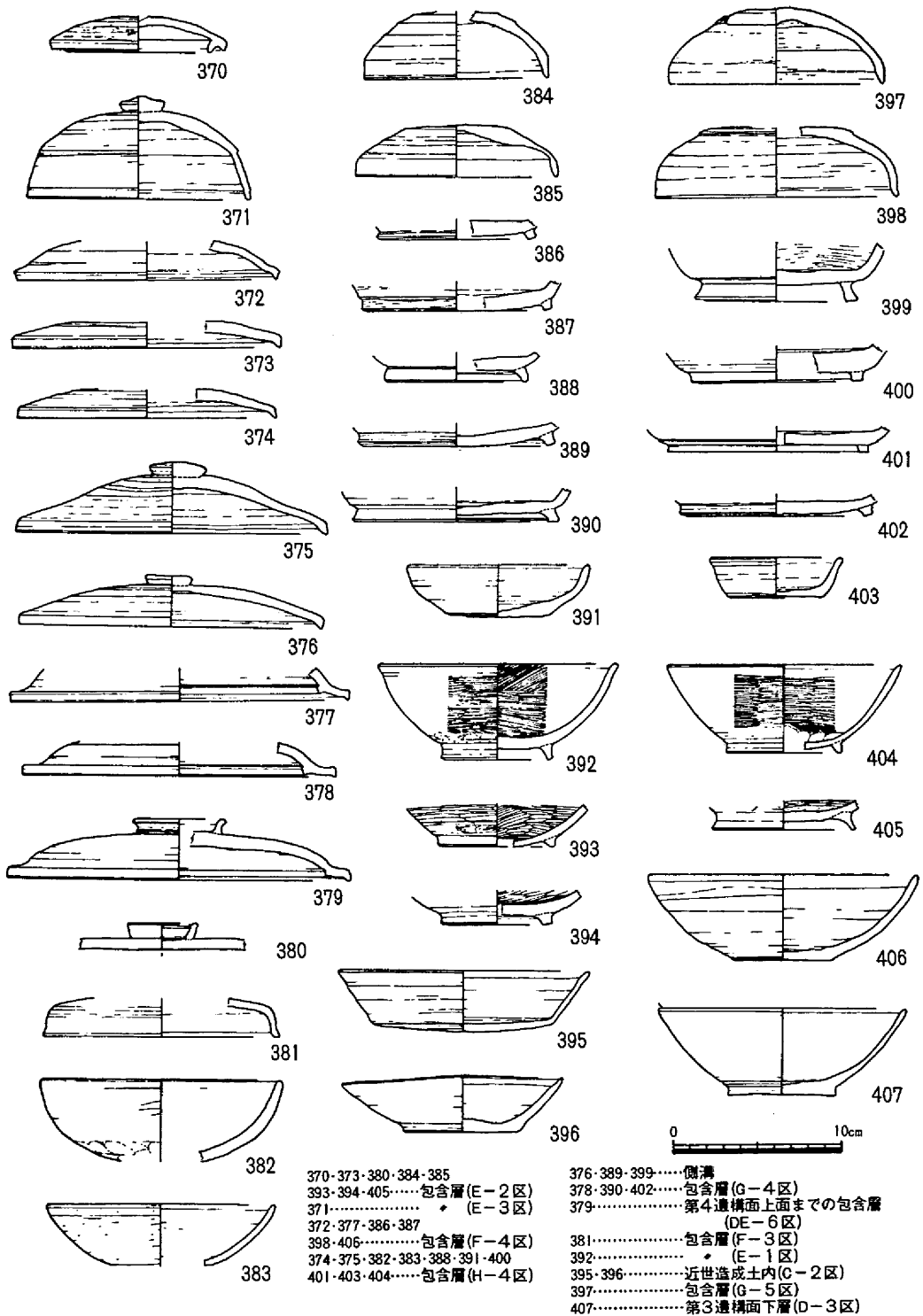
第103図 包含層・近世造成土出土遺物



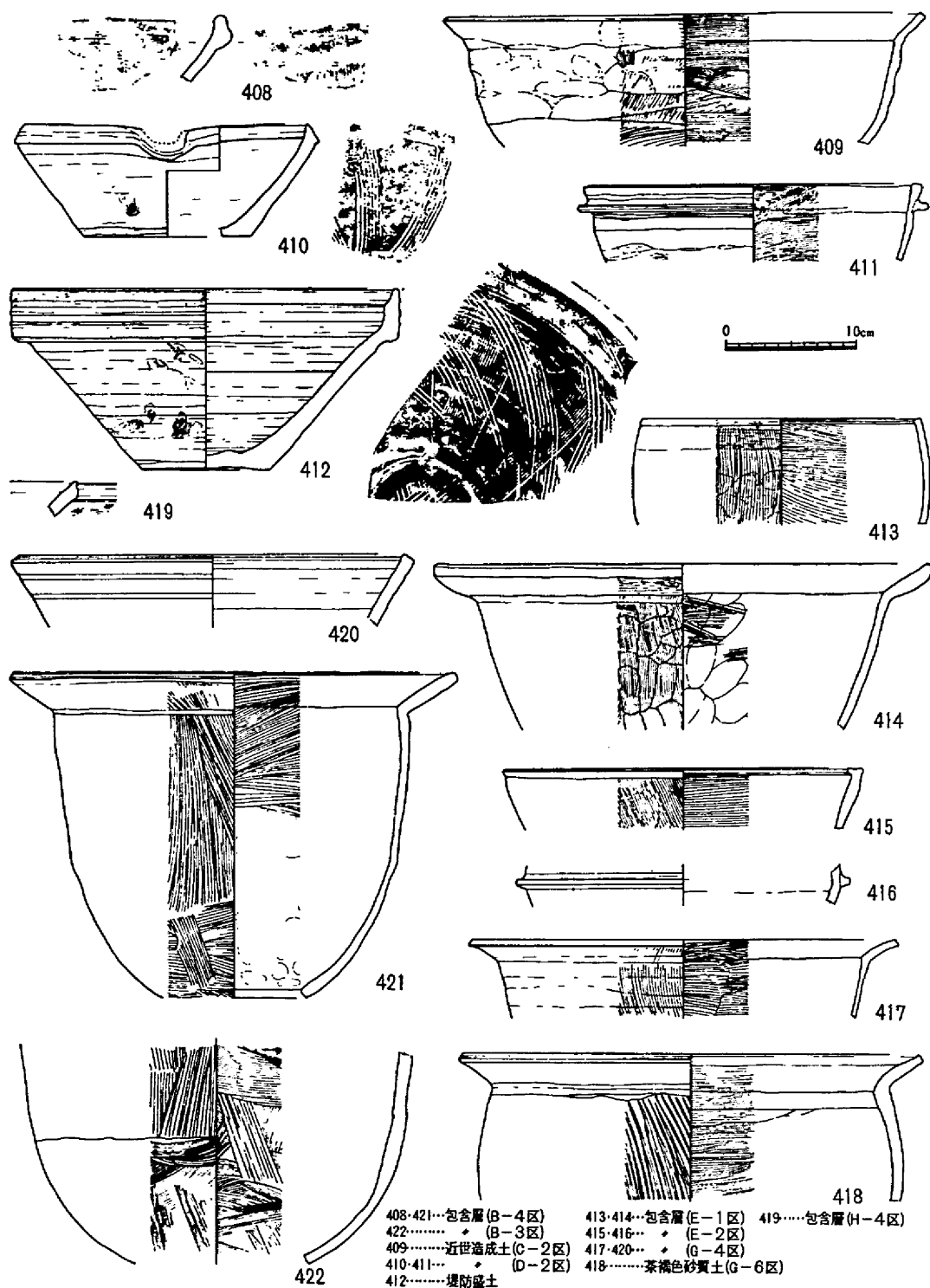
第104 包含層・側・第2遺構面下出土遺物



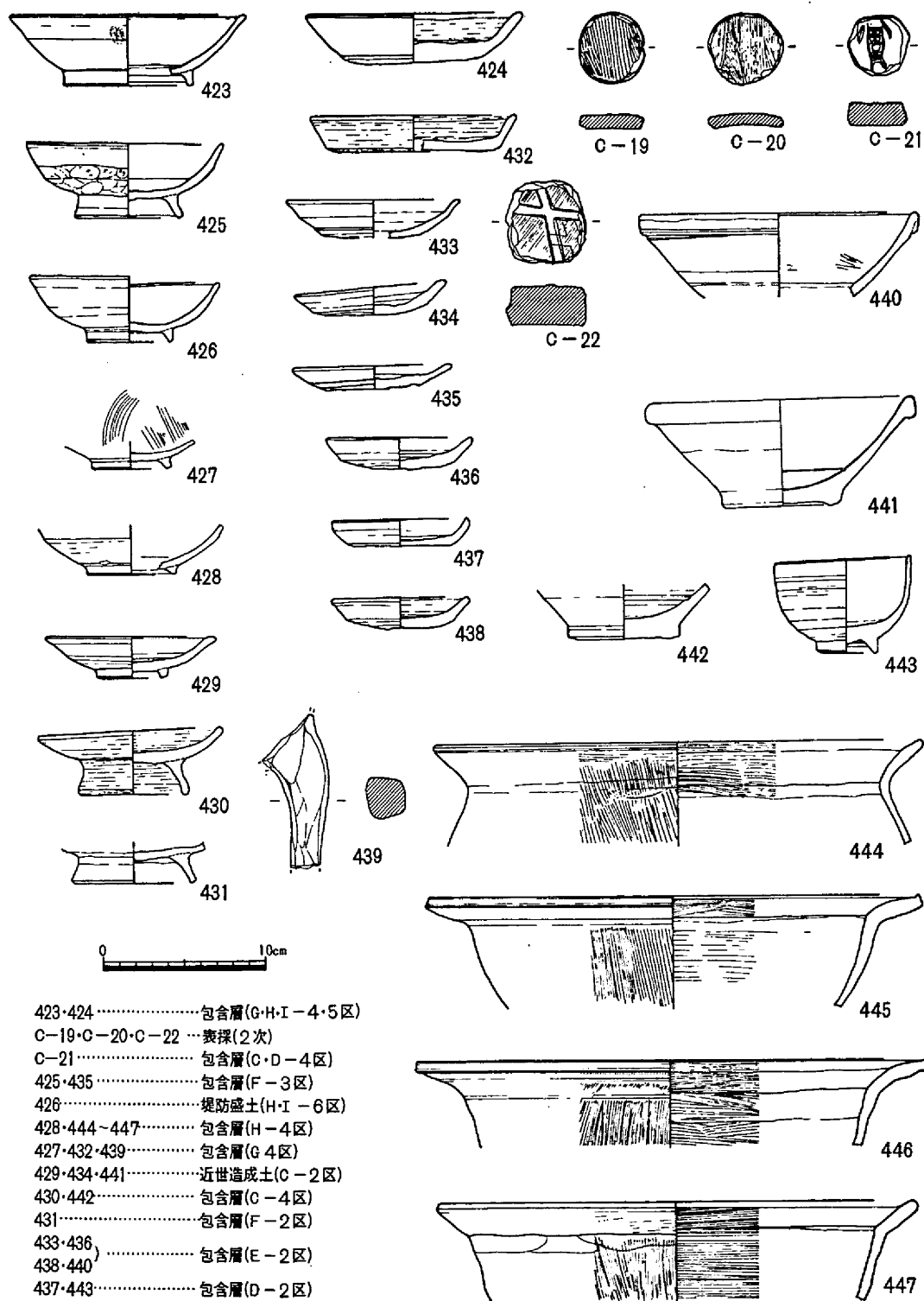
第105図 包含層・堤防盛土出土遺物



第106図 包含層・近世造成土出土遺物



第107図 包含層・近世造成土出土遺物



第108図 包含層・表土層出土遺物

第6節 小 結

低水路調査区に検出した遺構の概要は、前節で述べた通りである。ここでは、それらを概観してみたい。上層より概観してゆくと、まず近世の遺構面がある。この遺構面では、大型の土壇の多いことに気が付く。長大な長方形・長方形・方形・円形等々、形も種々ある。また、遺構の遺存状態も良好で、深さが100cmを越えるものも多くある。埋土には、同時代の磁器・陶器が多く混入していた。また、方形の土壇の内部を切り石で壁及び床面を構築したものもみられる。その構築は入念であり、その性格は、充分には解明されてはいない。さらに、漆器を出土した土壇もある。土壇の総数は70個を数える。

溝は、3本を調査した。2本は、小さなものであるが、1本は、幅約100cmを測るもので、北北東から南南西へ、ほぼ直線的に伸びるものである。溝の中は、石と瓦で充満していた。溝は、西側にある丘陵の裾にほぼ沿うもので、それを越えて西側では、土壇の密度が非常に低くなる。また、この溝を切り込む土壇があることを考慮すれば、溝の機能していた時期においては、一つの区画性を持っていたことが推測される。

他に、柱穴とも考えられる小ピットを多数検出したが、建物としてのまとまりは見られなかった。また、先に述べた溝からは、多くの瓦片が出土していることからすれば、同時代には、瓦葺の建物が当然予測される。とすれば、建物としては、礎石を用いたものが考えられる。この地区に建てられた建物が、全て瓦葺であったとは考えられないにしても、主要な建物にあっては、瓦葺きであったと推測される。そのことが、掘立柱による建物の確認されないことにも関連するものと考えられる。出土遺物としては、伊万里・唐津・備前焼・漆器碗・下駄・櫛・面子等が出土している。

中世の遺構面では、建物7棟・井戸2個・土壇16個・溝2本・土壇墓1基を調査した。建物は、2間×2間の総柱のもの2棟・2間×2間・1間×2間、1間×3間、1間×1間、2間×4間のもの各1棟を調査した。建物は、その棟の方向から3群に分けられる。第1群は、建物—14・18の2棟である。第2群は、建物—16・17・19・20の4棟である。第3群は、建物—15、1棟のみで、この建物のみがその方向を大きく異にしている。これ等の建物群の中にあって、第2群としたグループは、最北端に2間×2間の建物を置き、その南東に1間×2間の建物があり、その南側に東西方向を向く建物と、南北方向を向く建物が、東西に対峙する配置を呈している。この建物群の建物—16と建物—14とは、一部で重複するが、掘方の重複が見られないため、その前後関係は、不明である。他に、柱穴と考えられる小ピットは、多数検出したが、建物としてのまとまりは、以上の7棟である。

井戸は、2個を調査した。両者ともに素掘りの井戸で、調査の北端部において検出した。井戸―5からは、完形となる遺物は出土しなかったが、井戸―6からは、その底部から中世土器 碗・小皿等が出土している。

井戸―6の西及び南西には、石組遺構を検出した。これは、石組が、方形もしくは円形に巡るものであるが、その性格については不明である。溝は、2本を調査したが、調査区を縦横断するような溝は、検出されていない。

土壌は、16個を検出した。平面形は、円形を呈するものが多く、他に、方形を呈するものがある。土壌は、調査区の西側の半分に集中する傾向がある。特に、建物―14・16を中心とする付近に多く見られ、北に密度が高く、南に薄くなる。それは、小ピットにおいても同様な傾向が見られる。

中世の墓は、1基調査した。墓壇は、素掘りであるが、墓壇内の調査中に釘が出土しており、木棺は存在していたものと考えられる。副葬品として青磁碗一点と、中世土器2点が出土している。

中世の遺構の概要は、以上であるが、出土遺物としては、備前焼、青磁、中世土器（早島式土器）、土鍋、石鍋、瓦器、面子（備前焼を打ち欠いたものや、瓦を打ち欠いたもの）等が出土している。

古代の遺構面においては、建物群を検出した。調査した建物は、13棟である。これら建物全体を概観してみると、まず、建物―1の北側柱穴列と建物3・4の南側柱穴列が直線的であることに気付く。また、建物―2の西側柱穴列と、建物―3の西側柱穴列が、直線的である。さらに、建物―8・9の方向性も前記の建物とほぼ同一である。この様に、建物―1～4・8・9においては、統一性が見られる。ただ、建物―2と建物―9とは、接しすぎているため、同時存在は考えられない。しかし、以上の建物群は、同一の企画のもとに建築されているものと考えられる。また、建物―5と建物―12・13が同一方向であり、建物―7と建物―10が同一方向を示している。建物―5と建物―13は、方向性を同じくするものは、今回の調査では検出されなかった。以上のように、建物をグループとしてとらえるとすれば、5群に分けることができる。

建物群の平面形態を見ると、総柱建物が6棟と全体の約半数を占め、この建物群の性格の一端を示すものと言えるであろう。特に、建物が、棟方向を同じくし、また、同一中心線上にあることは、双倉の様相を推測させる。そのような点を考慮すれば、この一群は、倉院の一部かと推定される。

出土遺物としては、須恵器、土師器、緑釉陶器等が出土している。また、須恵器杯の裏面に「官」字の左文字が押印されたものが、出土している。これは、高梁市出土のものと非常によ

第3章 低水路調査区

く似ていることが指摘されるであろう。

古墳～弥生時代の遺構としては、住居址、井戸、溝、土壇等を検出した。住居址は、3棟を調査した。平面形態が方形を呈するものは、2棟あり、いずれも古墳時代前期のものである。円形の住居址は、1棟を調査した。これは、弥生時代後期（百・後・Ⅲ）のものである。

溝は、10本を検出した。時期は、弥生時代前期（溝－1・2）、同中期（溝－3・4）、同後期（溝－5・6）のものと、古墳時代（溝－7～10）のものである。溝は、ほぼ東西に伸びる前期の溝を除いて、2群に分れる。調査区の西側丘陵の掘付近の一群が古く、東側の一群に新しい時期のものが集中する。

土壇は、円形、方形、不定形と種々あるが、遺物を出土したものが少なく、時期不明のものが多。円形のもの、その底部において完形の土器を出土したものもある。その他に、小ピットを多数検出している。出土遺物としては、弥生式土器・土師器・石斧・石鏃等が出土している。また、包含層からではあるが、縄文時代晩期の土器片が出土している。

（松本・二宮・井上）

表2 建物一覽表

建物	規模	柱間寸法 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘方	検出区	備考
		桁	梁							
1	3×3	552	408	136	184	22.5	N-16°-E	方		
2	3×1	546	316	316	208	17.3	N-15°-E	方		
3	3×2	504	368	168	184	18.5	E-15°-S	方		
4	3×2	460	364	154	182	16.7	E-15°-S	方		
5	2×2	600	464	290 310	232	27.8	E-2°-S	方		
6	2×2	588	496	294	248	29.1	N-34°-E	方		
7	3×2	520	360	170	180	18.7	N-20°-E	円		
8	×2		340	150	170		N-16°-E	方		
9	×			170	170		N-14°-E	方		
10	2×2	406	340	203	170	13.8	N-19°-E	方		
11	×2		360	240	180		N-3°-E	円		
12	3×1	448	304	150	304	13.6	E-0°-N	方		
13	2×2	540	320	300 240	160	17.3	E-25°-N	円		
14	2×2	490	420	245	210	20.6	N-15°-E	円		
15	2×2	460	350	230	175	16.1	N-45°-E	円		
16	2×2	420	370	210	185	15.5	E-11°-S	円		
17	2×1	480	420	240	420	20.1	E-10°-S	円		
18	1×1	370	190	370	190	7.03	N-13°-E	円		
19	3×1	585 630	255	210 255	255	16.06	N-10°-E	円		
20	4×2	800	420	200	210	33.6	E-10°-S	円		

第4章 右岸用水路調査区

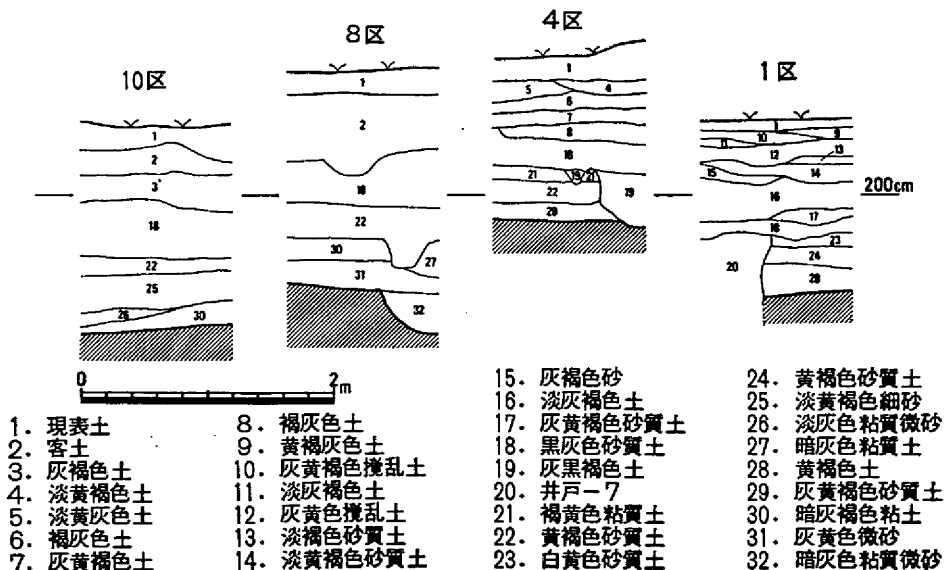
第1節 調査区の概要

当調査区は、昭和53年度調査の右岸用水路調査区のうち、1～9区の南側にあたる幅約5m・延長約147mの調査区であり、これを西から15の区域に分けている（第115図）。

丘陵部調査区から南へ延びる尾根の端部は4区に達しており、ここが調査区内での基盤層の最高所となっている。この尾根の西側の3区には、奈良時代以降の溝が重なっている。また、11区から13区にかけては奈良時代以降に形成された落ち込みが南へ下っている。

基本層序は、1層が現表土層であり、2～17層については近世・近代の造成土・攪乱土である。18層は1区から11区にまで広がっており、中世（鎌倉・室町時代）の包含層である。21・22層も中世遺物包含層であり、4～11区に見られる。25・26層は溝—27の堆積土であり、奈良時代に属する。28層も奈良時代の包含層と考えられる。古墳時代の包含層と断定できるものはないが、29層は溝—20上に堆積し、溝—26に切られており、弥生時代後期以降奈良時代以前の包含層と考えられる。30・31層も弥生時代後期～奈良時代に堆積したものと考えられる。

調査・整理にあたっては、上層から近世、中世、奈良時代、弥生・古墳時代の4遺構面に分



第109図 調査区南壁土層柱状図（1/60）

けて考えた。近世遺構面は21層上面にあたる。中世遺構面は、18・22層の二つの中世遺物包含層の下面がそれにあたるが、第4節では一括して扱っている。奈良時代遺構面についても、特に整地面として捉えられるものではなく、同時に弥生・古墳時代の遺構を検出している。

(光永 真一)

第2節 弥生・古墳時代の遺構・遺物

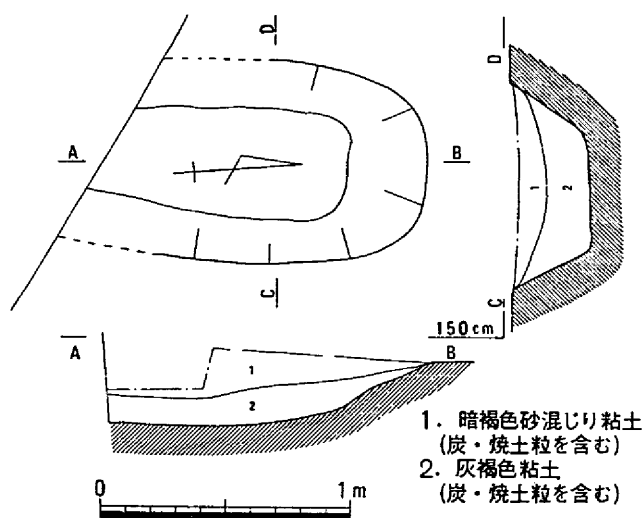
1. 土 墳

土墳-25 (第110・116図,
図版20-1)

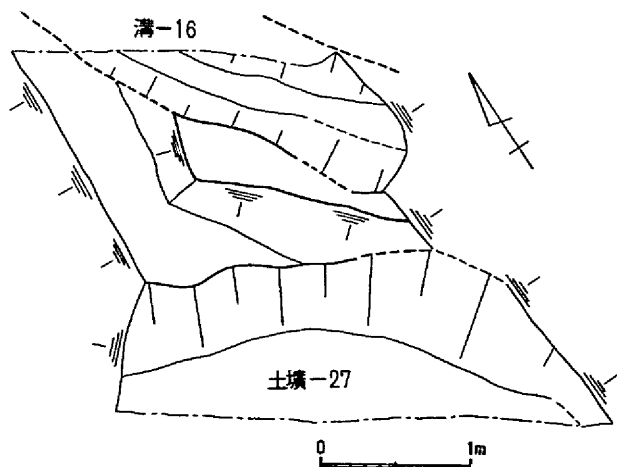
8区のほぼ中央の南端に位置し、一部は調査区域外に当たり全体の約 $\frac{3}{4}$ を検出した土墳である。平面形は、ほぼ舟形を呈すると思われる。深さは検出面より約30cmを測る。埋土は2層あり、いずれも炭や焼土を含んでいる。遺物は、須恵器の甕や土師器の甕や碗が出土している。452は内面に放射状に細い暗文が観察できる。時期は6世紀末～7世紀初めであると考えられる。(平井 泰男)

土墳-26

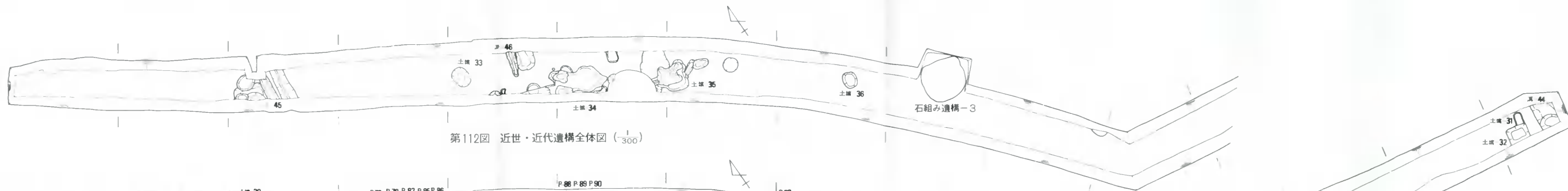
4区の南壁際にあり、南半は未調査である。現存最大径100cm、深さ40cmを測る。遺物は弥生式土器小片を出土するのみであるが、直上層が奈良時代の遺物包含層であり、時期はこれ以下限とみなしうる。(光永)



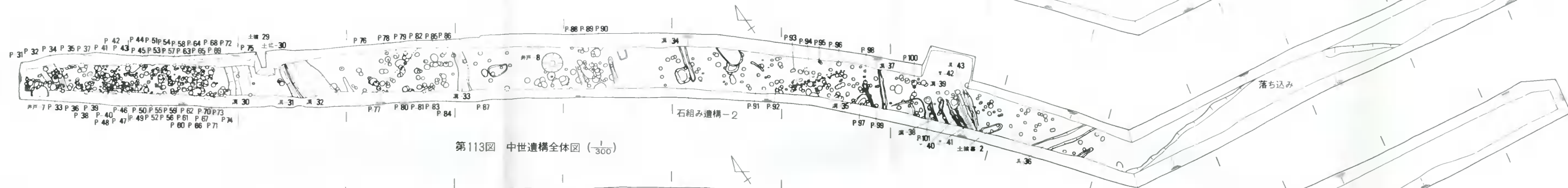
第110図 土墳-25 (1/30)



第111図 土墳-27, 溝-16 (1/50)



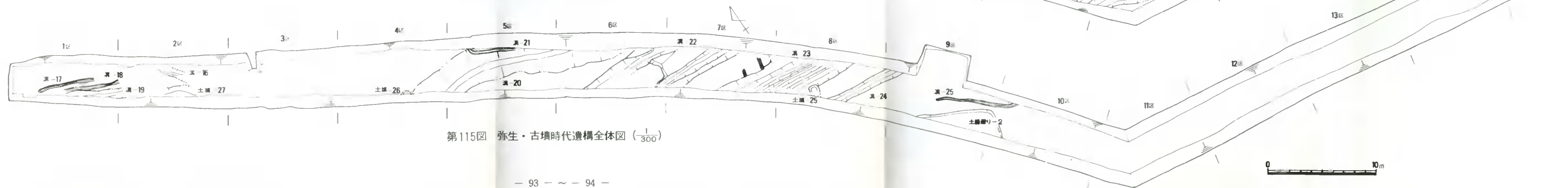
第112図 近世・近代遺構全体図 (1/300)



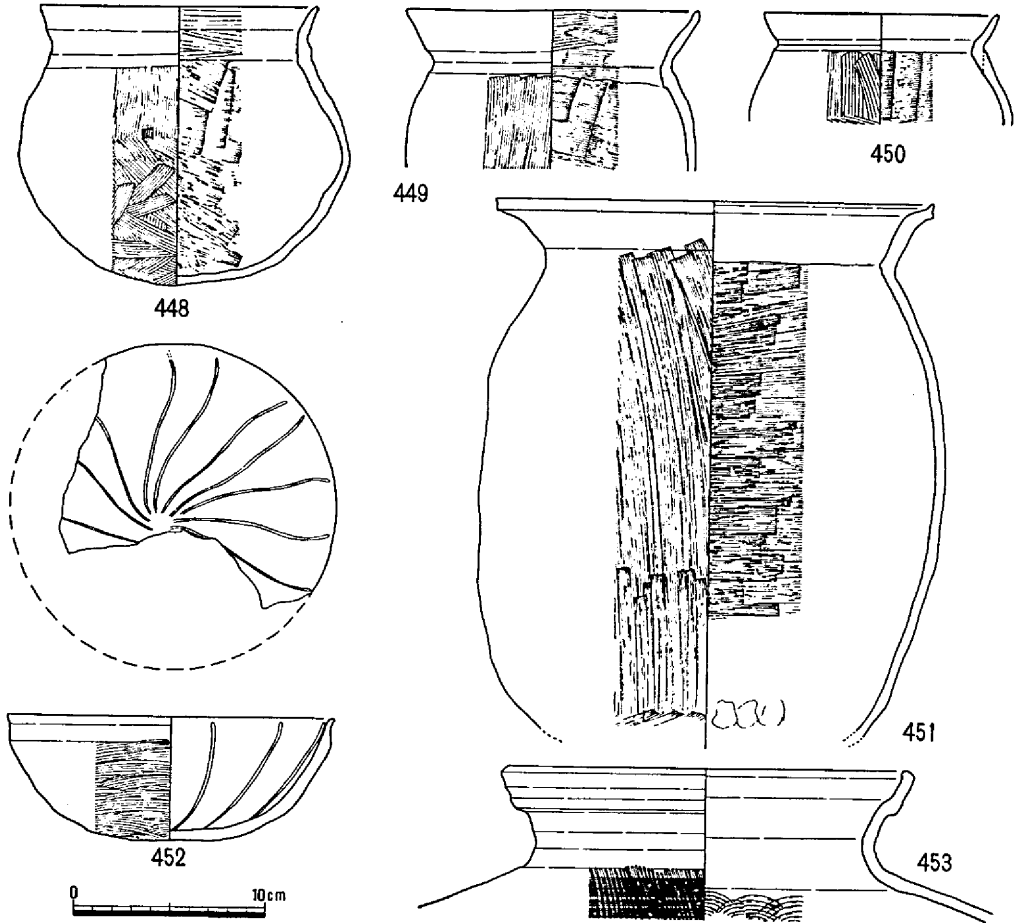
第113図 中世遺構全体図 (1/300)



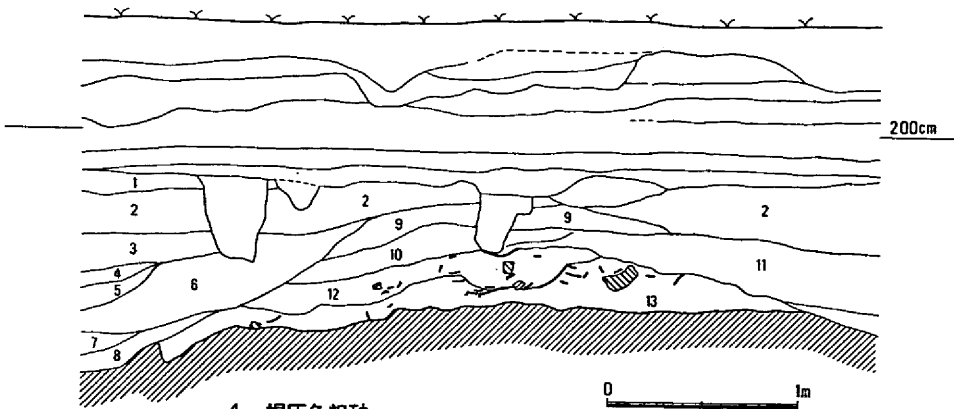
第114図 奈良時代遺構全体図 (1/300)



第115図 弥生・古墳時代遺構全体図 (1/300)



第116図 土壙-25 出土遺物

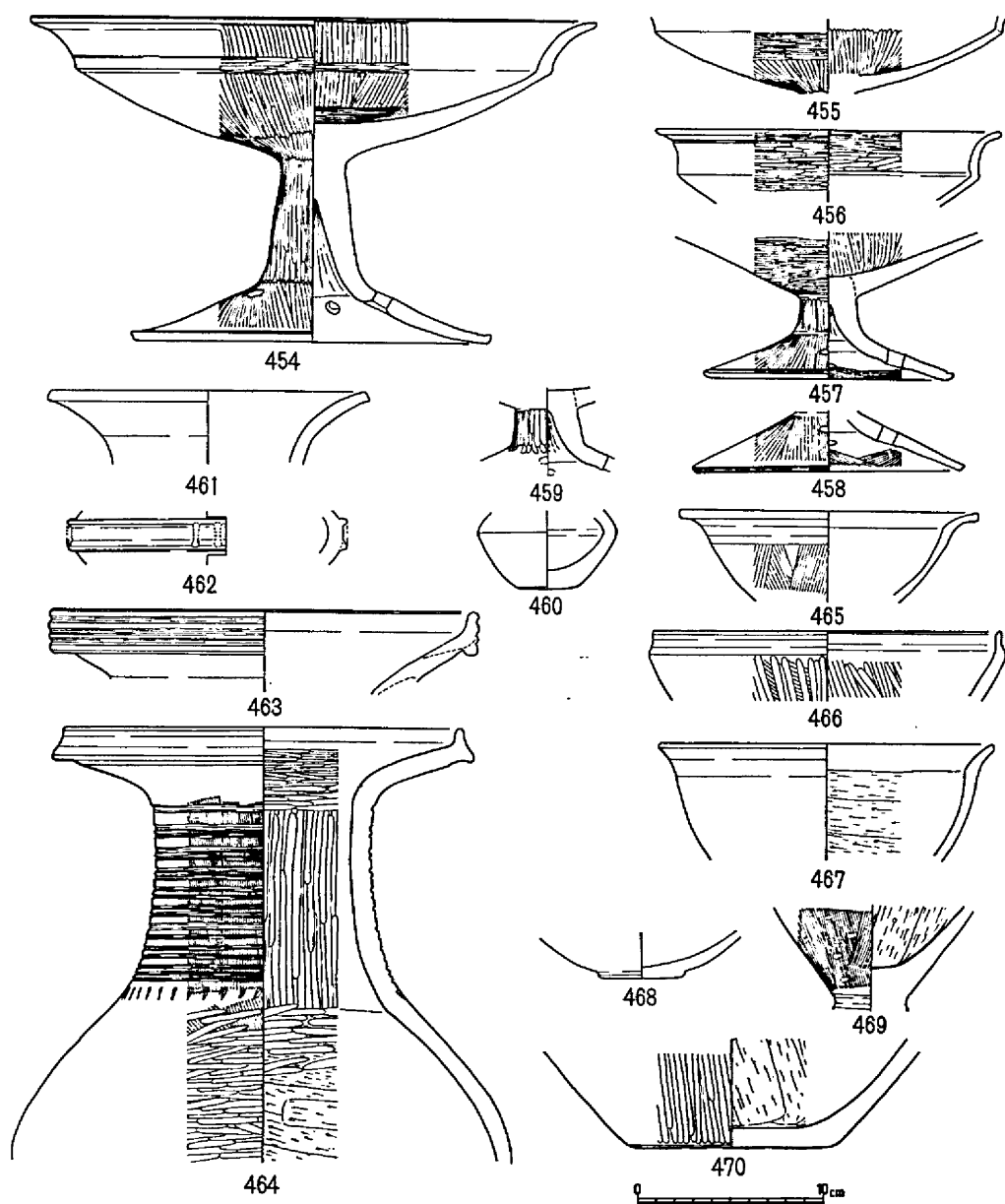


4. 褐灰色粗砂
 1. 暗灰褐色土 5. 粗砂・微砂の互層 8. 暗青灰色微砂粘質土 11. 黄灰色砂質土
 2. 淡灰黄褐色微砂 6. 淡青灰色微砂粘土 9. 明灰褐黄色土 12. 淡褐灰色砂質土
 3. 淡褐灰色砂 7. 暗青灰色砂質粘土 10. 淡黄褐灰色土 13. 褐灰色土・黒褐色土混層

第117図 土壙-27 断面図 (1/40)

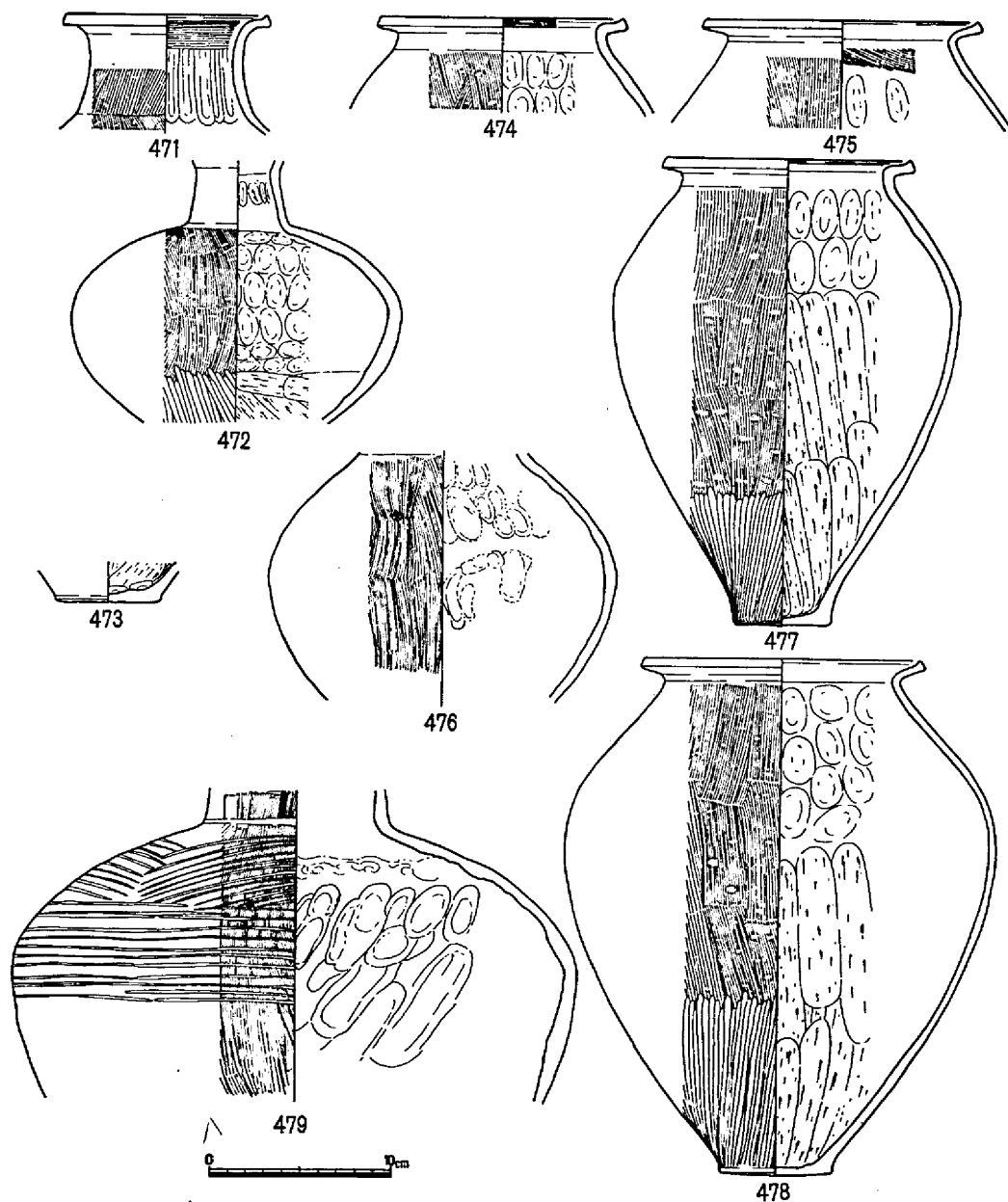
土壙—27 (第111・117～120図, 図版21—1・31)

2区で検出された土壙状の遺構で、淡黄色基盤層を切りこむ深さ20～30cmを測り、検出長約3mを測る。溝—24・25に切られて全容は残していないが、土器を中心とした出土遺物は多量である。埋積土は上層が淡褐色砂質土、下層が黄灰色砂質土である。土器は、そのほとんどが破片となっていることから、土器溜状の遺構とも考えられる。しかし、第118～120図のように

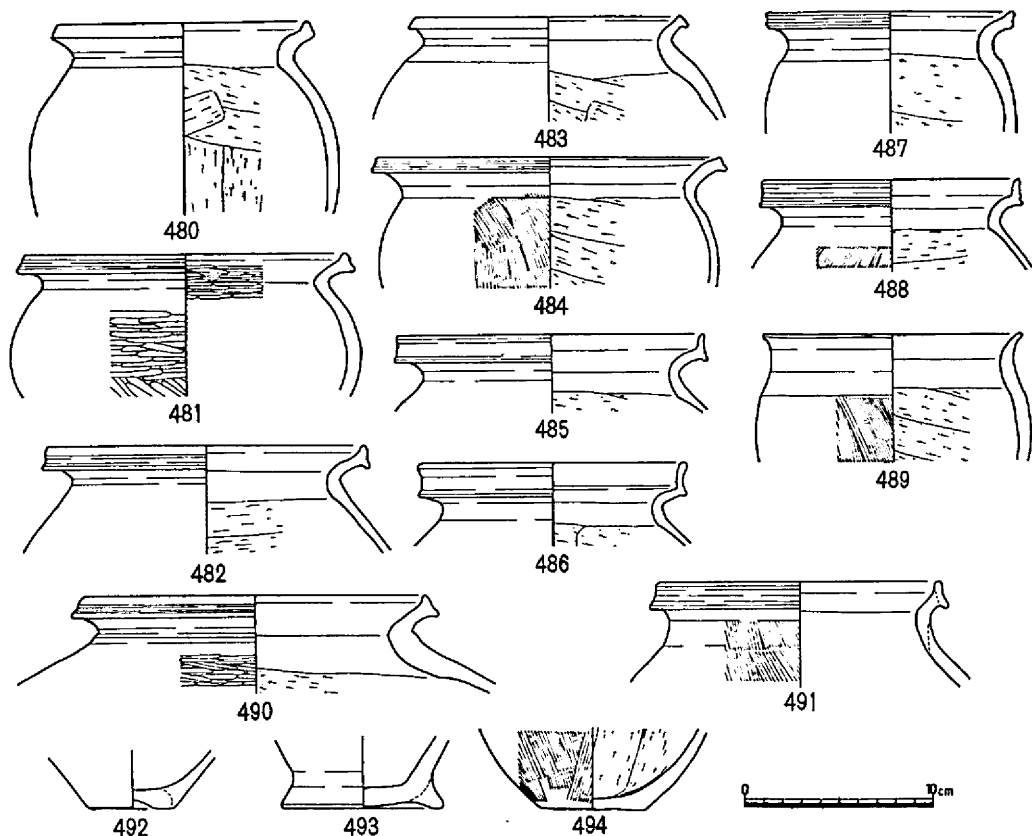


第118図 土壙—27 出土遺物(1)

完形近く復原できる破片も多く、時期と器種構成を良好に示している。454は大型の高杯で、出土土器の全体が示す時期、すなわち弥生時代後期後半より古いタイプに属するものであろう。第119図に掲げる一群の土器は、かつて「川島・立岡遺跡」（註1）で指摘された特徴的な土器で、雲母を多く含み暗褐色を呈する器体の色調と器体内面上半に指頭圧痕を多く残す独特な成形技法が認められる。近年の研究では、香川県地方（讃岐地方）にその出自が求められて



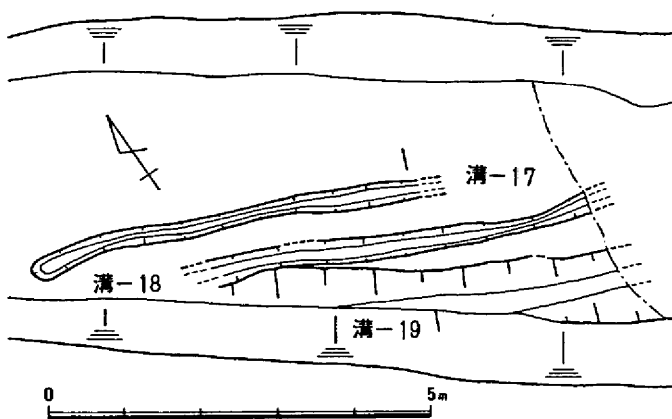
第119図 土壙-27 出土遺物(2)



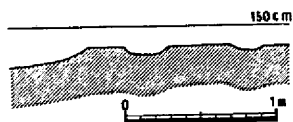
第120図 土境-27, 溝-16出土遺物(3)

いる。472のように頸部の極端に細いものや、やや大型で、体部上半の刷毛調整のあとに暗文風のヘラミガキを施したものもみられる。甕は一般にみられる第120図のような器形とは異なり、長胴で鋭角に頸部から屈曲する口縁部をもち、わずかに内傾して肥厚する端部をもつ。体

部上半は、壺・甕のいずれも縦方向の刷毛目調整を施し、下半は縦方向のヘラミガキを施して仕上げる。内面も、上半は指頭圧痕をよく残し、オサエ痕跡が顕著であるが、下半は縦方向のヘラケズリ痕跡



第121図 溝-17・18・19 (1/100・1/50)



をそのまま残す。これらの出土土器は、若干の時期差のある器形を含みながらも、ほぼ百・後・Ⅲの時期に比定される一群の土器と理解される。

2 溝

溝一16（第110図，図版21—1）

土壇一27の北に位置し、残存長約230cm、残存部推定幅80cm、深さ約20cmを測る。埋積土は淡褐灰色を呈する。出土遺物は、わずかに弥生式土器細片が出土しているにすぎないが、ほぼ百・後・ⅢからⅣにかけての土器片と推定される。

溝一17（第121図，図版22—2）

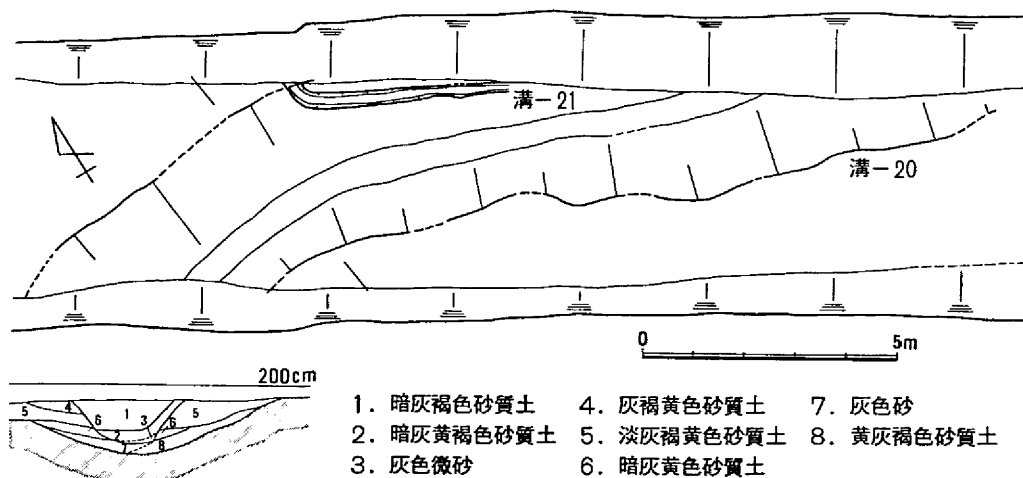
1区から2区西端部にかけて検出した、幅20～30cm、深さ3～5cm、検出長500cmを測る細溝である。ほぼ東西方向を示すが、やや北に振っている。断面は凸レンズ状を示し、西端は丸味をもって立ち上り溝は消滅する。埋積土は白っぽい淡灰色土で、出土遺物は土器細片がわずかに出土している。

溝一18（第121図，図版21—2）

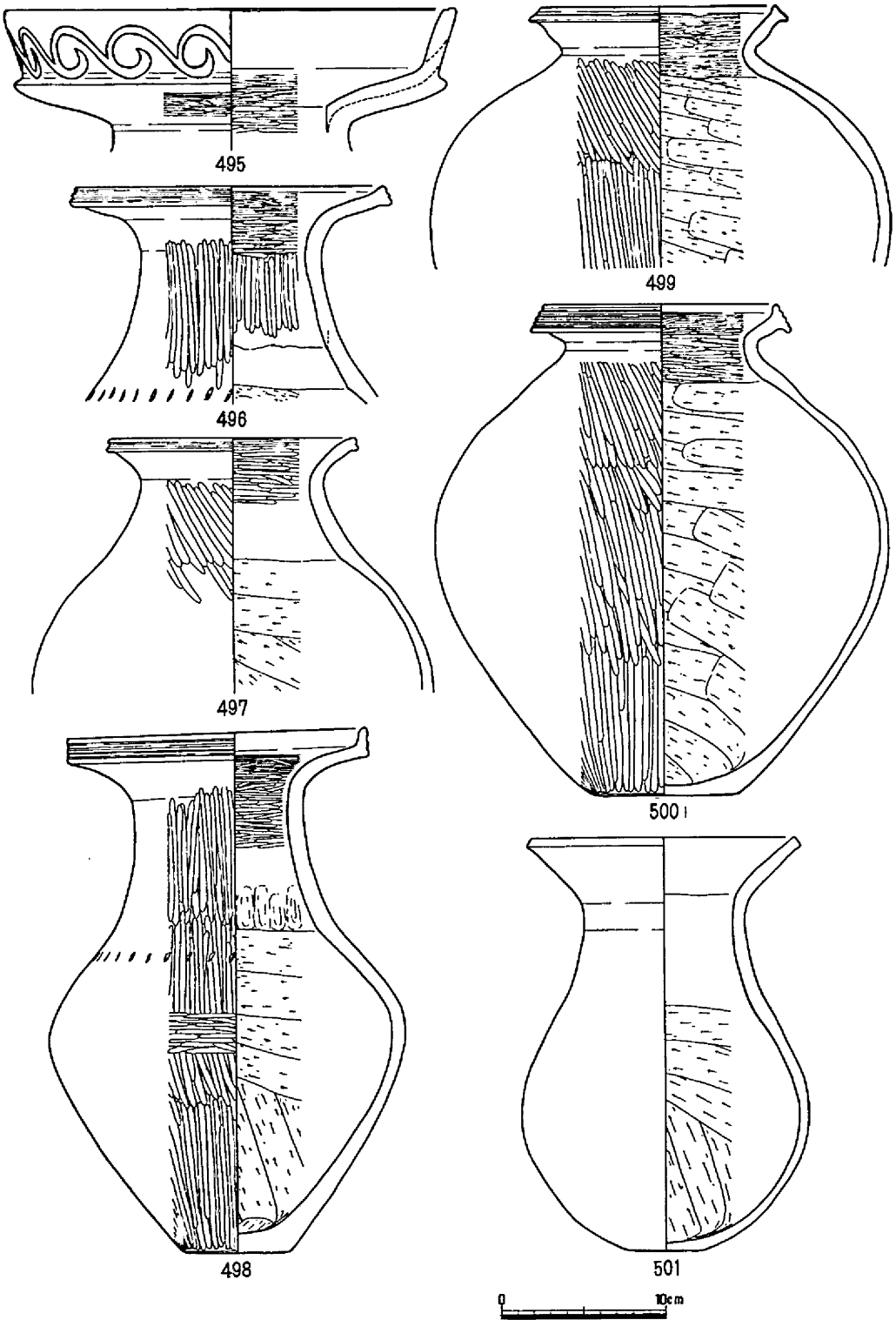
溝一17の南に位置し、ほぼ並行して検出された。幅は15～35cm、深さ約5cm、検出長約520cmを測り、溝一17よりやや規模はまさる。断面は台形状を示し、淡灰褐色土が埋積する。出土遺物には土器細片がわずかに認められるが、器種は不明である。

溝一19（第121図，図版21—2）

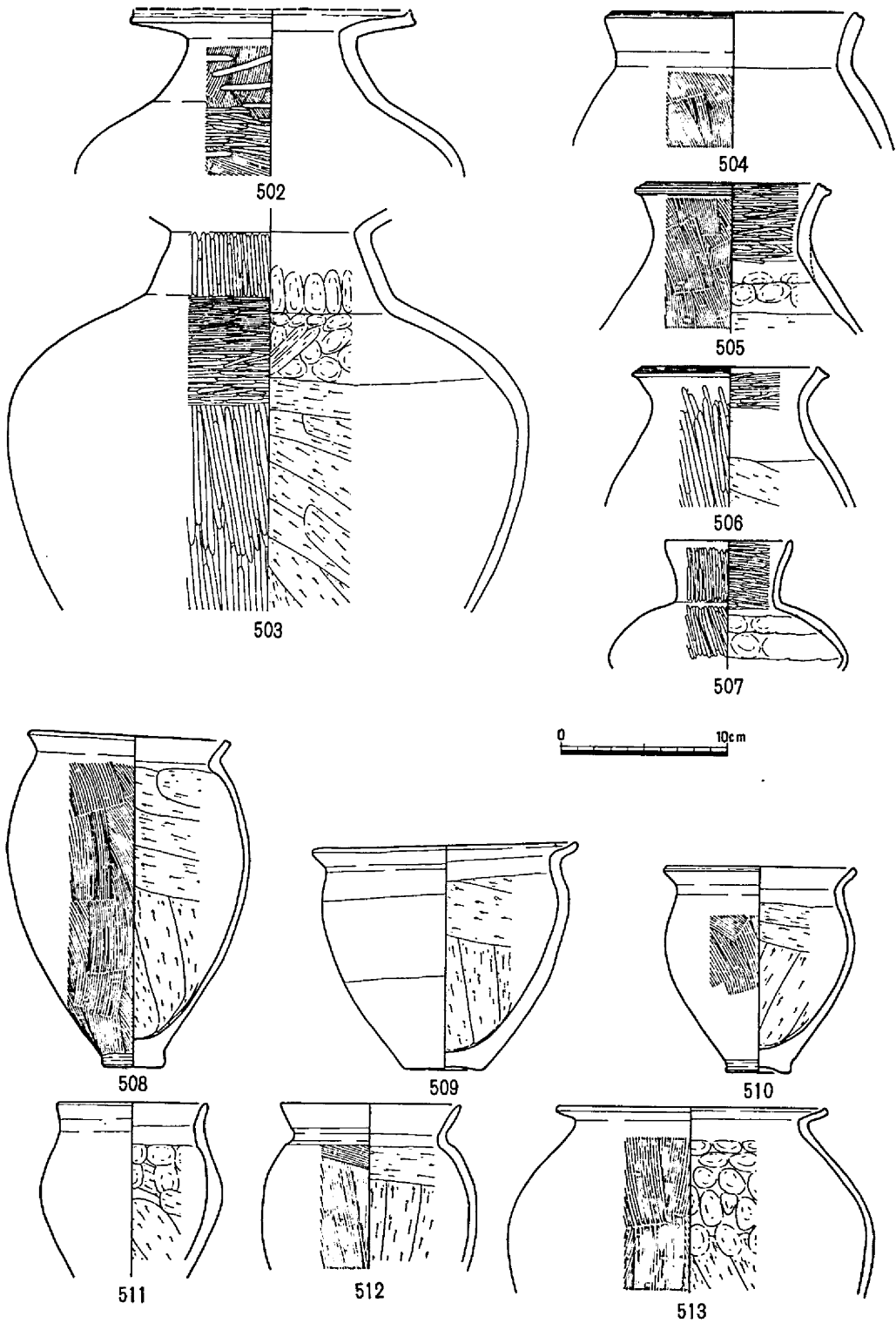
溝一18の南に近接して位置するが、西端部は溝一18に切られる。幅は約100cmを越える規模と推定され、深さ約10cm、検出長500cmを測る。断面形は凸レンズ状を呈し、暗灰黄褐色土が



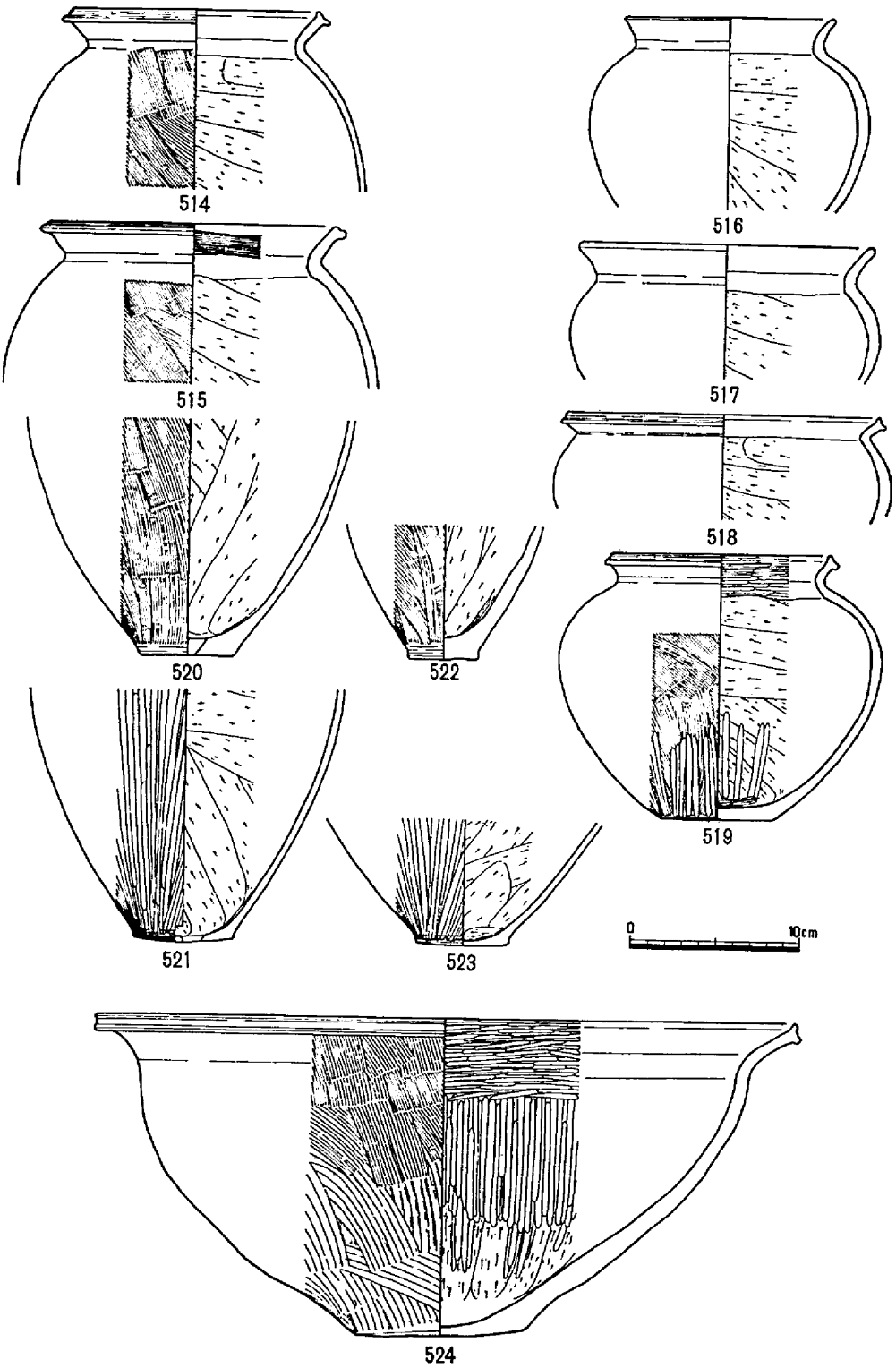
第122図 溝一20・21（1/150）



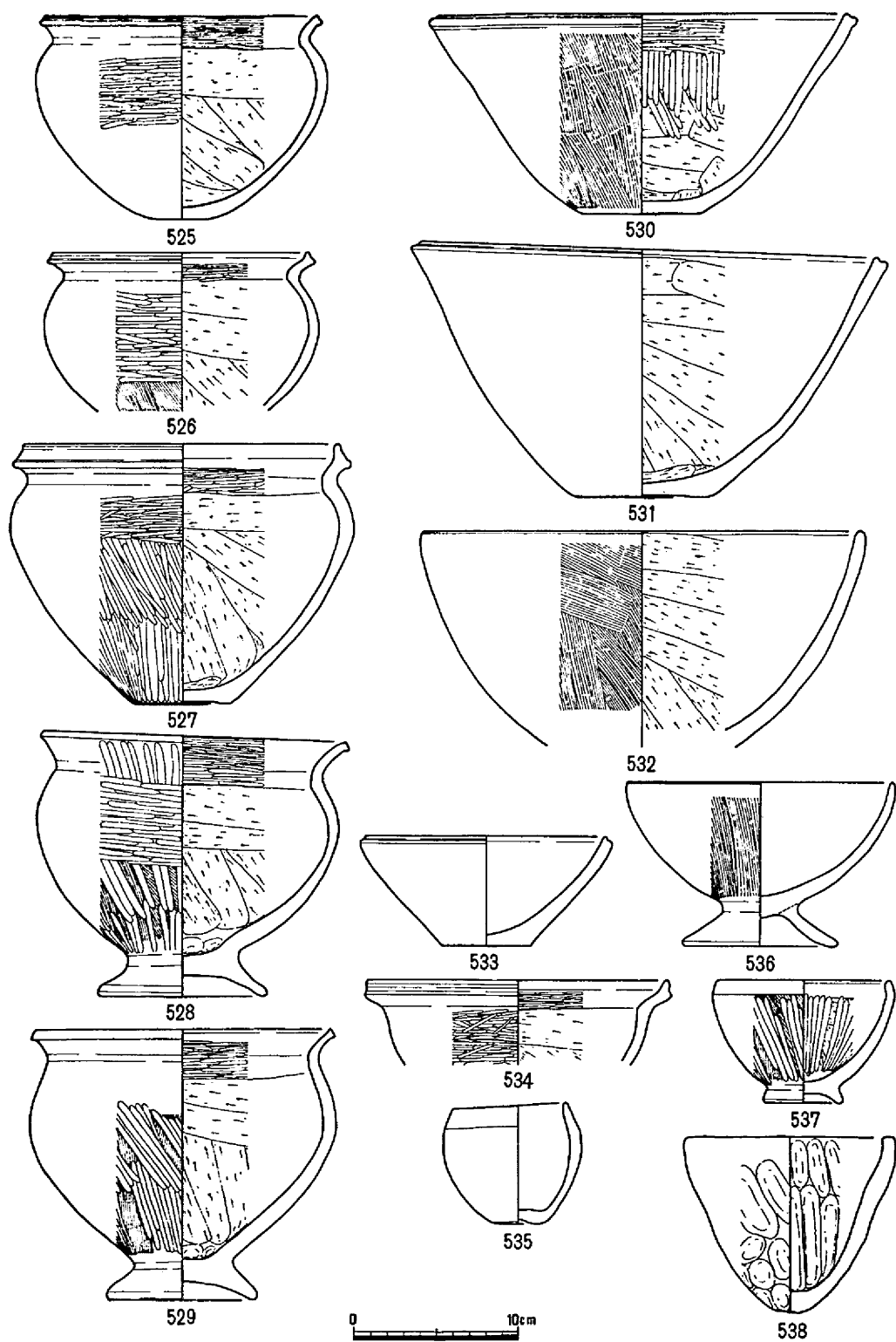
第123図 溝-20 出土遺物(1)



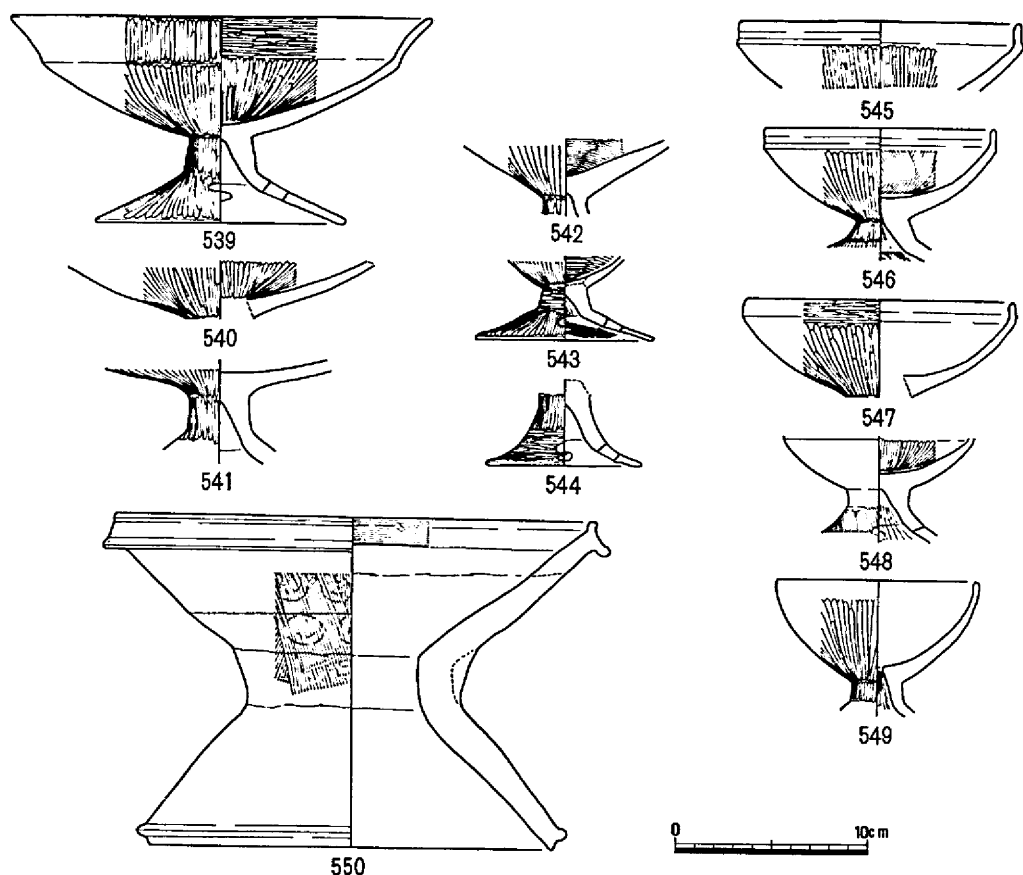
第124図 溝-20 出土遺物(2)



第125図 溝-20 出土遺物(3)



第126図 溝-20 出土遺物(4)



第127図 溝-20 出土遺物(5)

埋積する。奈良時代に比定される土城-28に切られており、包含層出土遺物からも弥生時代後期に比定され、土城-27に近い百・後・ⅢからⅣの時期と考えられる。(岡田)

溝-20 (第122~127図, 図版22・31~33)

4区から6区に位置し、東西方向からやや南へふっている。幅約330cm、深さは北岸との比高差で約75cmを測る。調査区南側壁の観察によれば、5層はもう少し南へ延びており、溝として機能していた時点の幅は400cmにちかいと考えられる。水流方向は底面の比高差が少なく断定しがたいが、周辺地形等からみて西から東へと考えられる。また、この流路位置は溝-28に踏襲されており、1~3層は溝-28の堆積土である。昭和53年度調査区においては、本遺構に比定しうる溝は検出されていない。

遺物は主に5層から出土しており、溝-21の位置周辺に集中していた。壺495~507、甕508~523、高杯539~549、鉢524~538、器台550の各器種にわたって多量に出土している。甕513は兵庫県南西部から香川県・愛媛県東部においてみられる整形技法の特徴を示す。壺495の口

縁外面にはヘラ描きによる連続S字状文がみられる。

これらの遺物のうち壺505・506は古い様相を示すが、時期としては百・後・Ⅲに比定する。これにより溝一20の埋没は百・後・Ⅲの時期と考えられる。

溝一21（第122図）

5区において、溝一20の掘り上げ後、その法面に調査区に平行する形で検出された。水流方向は南東方向と考えられる。幅約30cm、深さ約18cmを測る。遺物は出土していないが、溝一20に切られていることから、時期は百・後・Ⅲをくだらないものと考えられる。（光永）

溝一22（第128図）

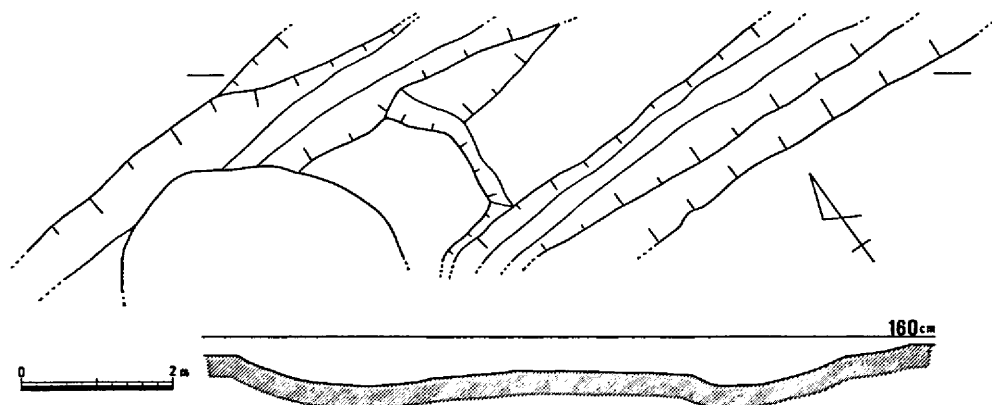
6区から7区にかけてほぼ東西方向に検出された溝である。検出した範囲が狭く、また西部部分は井戸によって切られているため、はっきりしたことはいえないが、検出した範囲内ではほぼ両側が溝状を呈し中央部に高まりをもっている。時期についても土器などの遺物が全く出土していないため明らかではないが、土層関係から、古墳時代以前であることは確かである。

溝一23（第129図、図版20—2）

7区から8区にかけてほぼ東西方向に検出された溝である。検出した範囲内ではほぼ3本の溝が並行している状況を示している。深さは、最も深い所で検出面より約25cmを測る。埋土中には炭や焼土を含んでおり、炭は底面に多い。時期については、土器などの遺物が全く出土していないため明らかではないが、南部分において土層一25に切られていること、及び土層関係から古墳時代以前であることは明らかである。

溝一24（第130図）

8区から9区にかけてほぼ東西方向に検出された溝である。幅は約1m、深さは検出面より約20cmを測る。埋土は、暗灰色粘質微砂が1層のみである。時期については、出土遺物が全くないため明らかではないが、奈良時代の建物の柱穴によって切られていること、及び土層関係



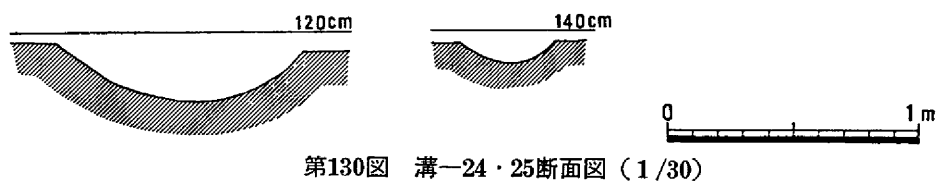
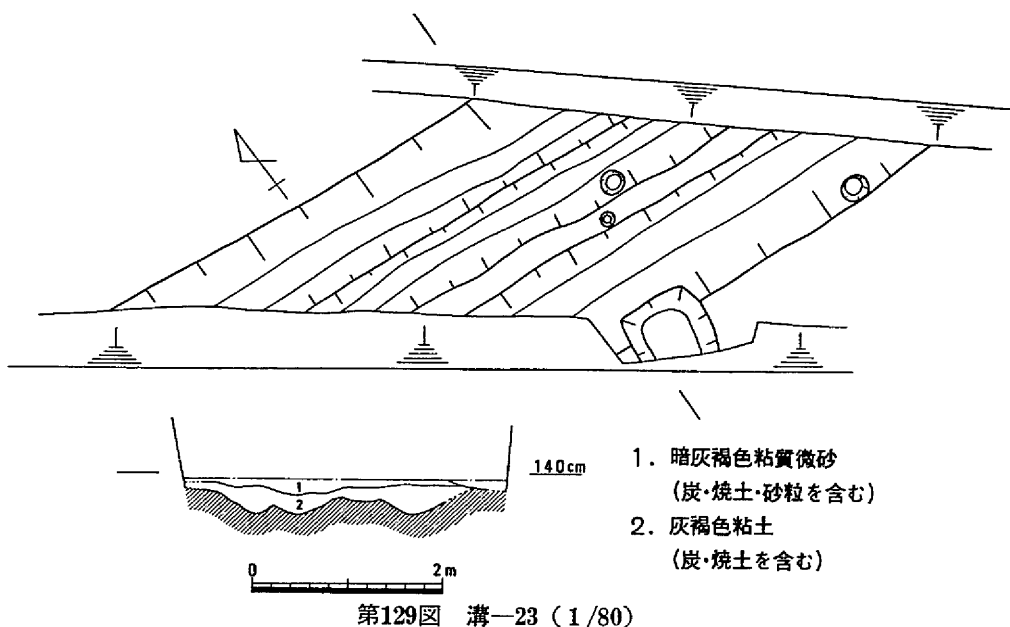
第128図 溝一22（1/80）

第4章 右岸用水路調査区

から古墳時代以前であることは明らかで、また溝—22・23よりも古いことが考えられる。

溝—25 (第130図)

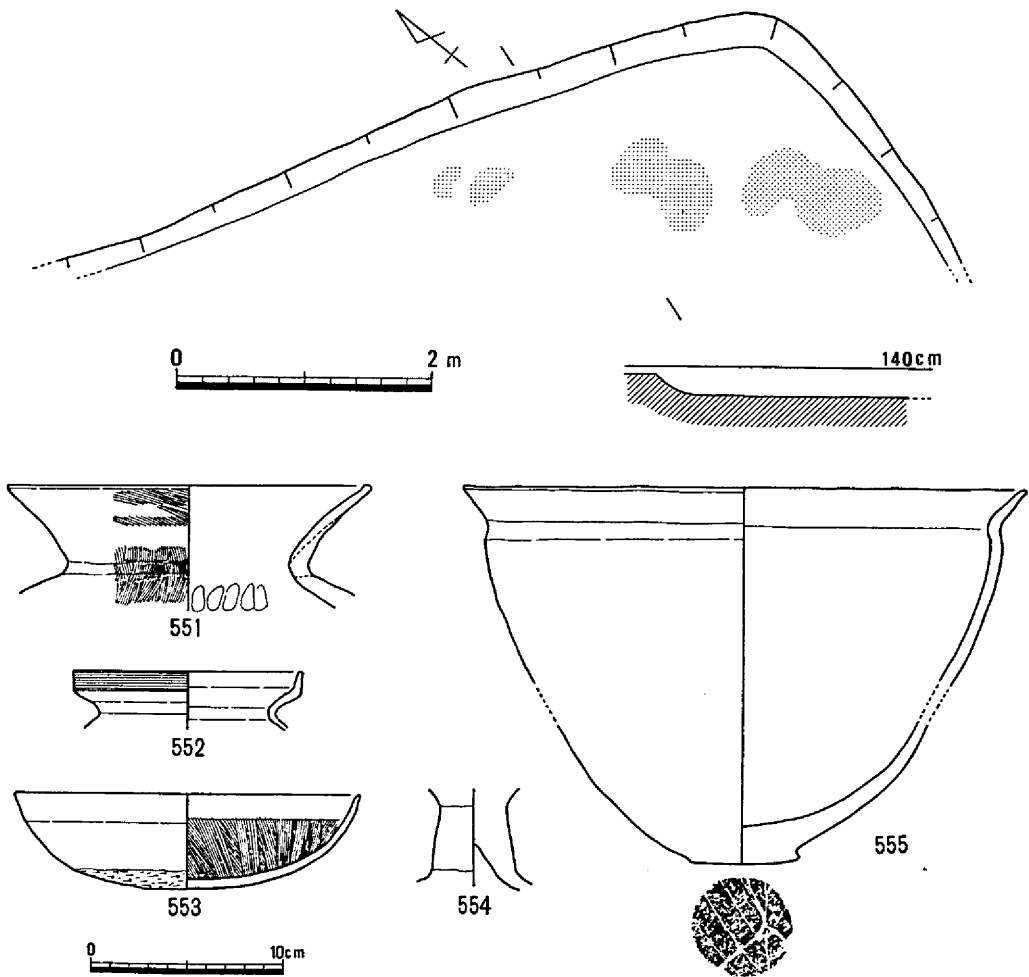
9区から10区にかけて検出された溝である。検出された幅は最大で約40cm、深さは約10cmを測るにすぎない。時期については、出土遺物が全くないため明らかではないが、土層関係より古墳時代以前のものであると考えられる。



3. 土器溜り

土器溜り—2 (第131図, 図版23—1)

9区及び10区の南部分において検出された。平面形及び断面形から住居址の可能性も考えられるが明確ではなく土器溜りとして報告したい。埋土は暗褐色粘土が一層のみである。土器はほぼ4ヶ所に集中して出土したが、いずれも磨滅が著しい。555の底部にはヘラ描きによる木葉文が観察できる。時期は、百・古・Iであると考えられる。(平井)



第131図 土器溜りー2 (1/60)・出土遺物

第3節 奈良時代の遺構・遺物

1. 建物

建物ー21 (第132図, 図版25)

9区の西半で石組み遺構ー3の西側にあたり、これに一部柱穴を切られている。建物の全様は不明であるが、調査区内では1間×2間が確認されたにすぎなかった。柱間も南北で155～160cm, 東西195cmを測る。柱穴掘り方の平面形は不整円形あるいは隅丸方形・隅丸長方形とさまざまな形で、ほとんどの柱穴において柱痕跡と根石が敷かれているのが確認された。さらに

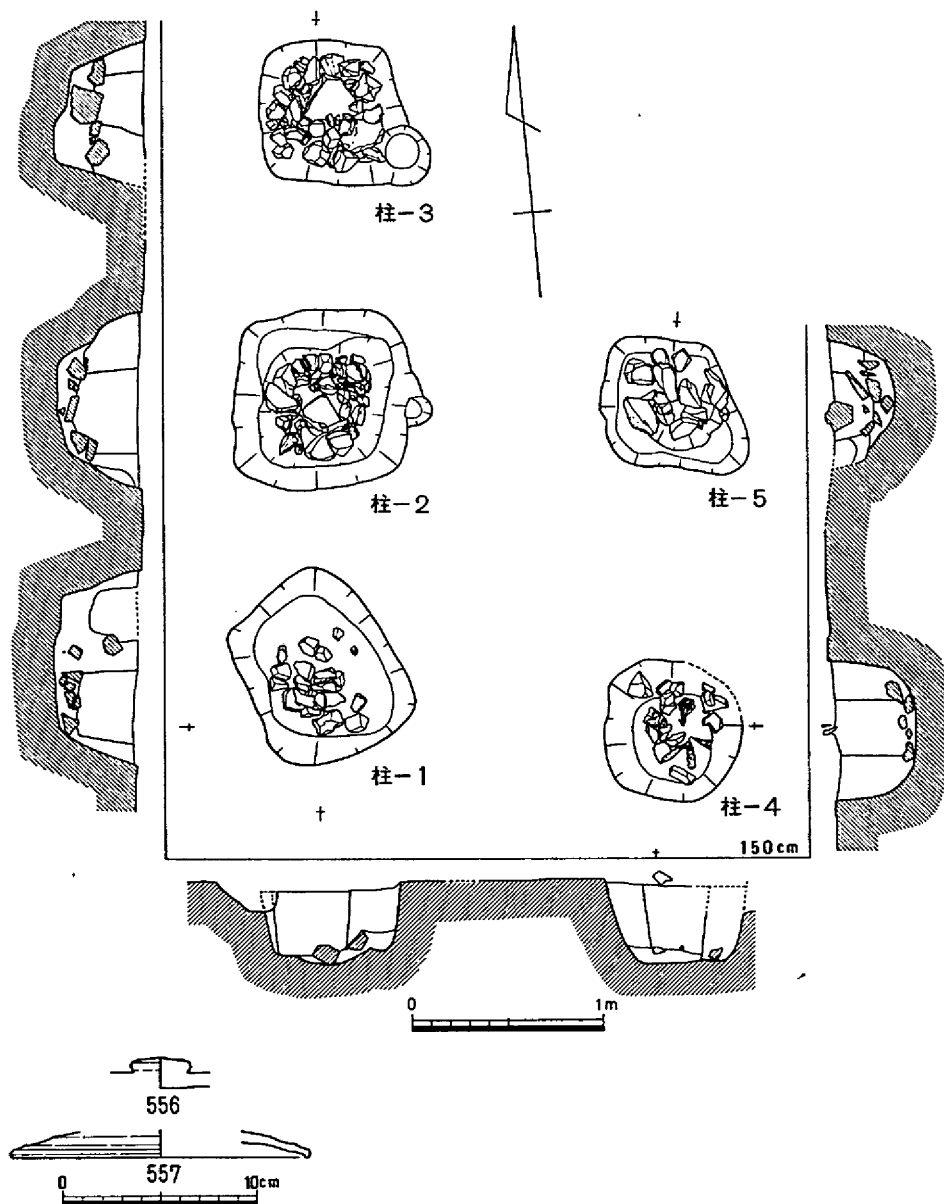
第4章 右岸用水路調査区

南東隅の柱穴（柱－4）内では使用された木柱の節がほぼ元位置で5節検出され、これにより柱は径35～40cmと推定される。建物長軸の方向はN－7°30′－Eを示す。 （二宮）

2. 柱 穴 列

柱穴列（第114図）

5区の中央部に位置し、3本の柱穴からなる。柱穴は平面形方形を呈し、1辺約70～80cmを



第132図 建物－21（1/40）・出土遺物

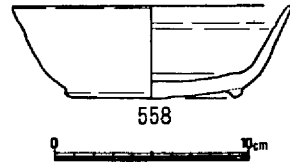
測り、深さは約25cmを測る。柱間は約210cmと約240cmである。方向は、磁北から西へ約67度ふっている。

遺物は、中央の柱穴から土師器皿の底部小片が出土しているのみである。溝一28との関係は不明であるが、堆積土の観察により、奈良時代の遺構と判断される。(光永)

3. 土 境

土境一28 (第133図)

2区の壁面近くで検出された土境で溝一26に切られている。平面形はおそらく不整円形を呈するとみられ、長径約80cm、深さ約30cmを測る。埋積土は黄褐灰色砂質土で、下層は若干グライ化して暗青色を呈する。出土遺物としては、須恵器杯558が下層から出土しており、奈良時代に比定される。



(岡田) 第133図 土境一28出土遺物

4. 溝

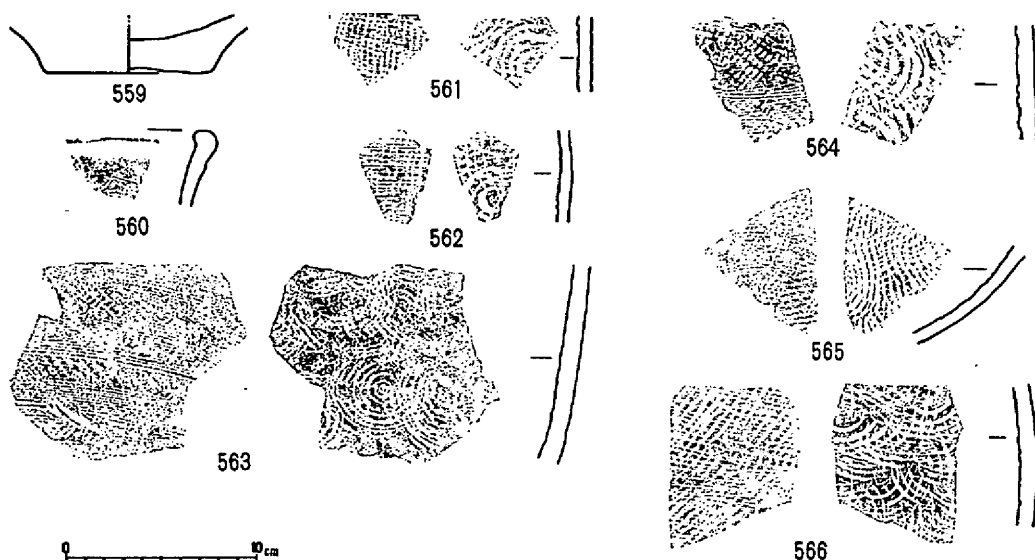
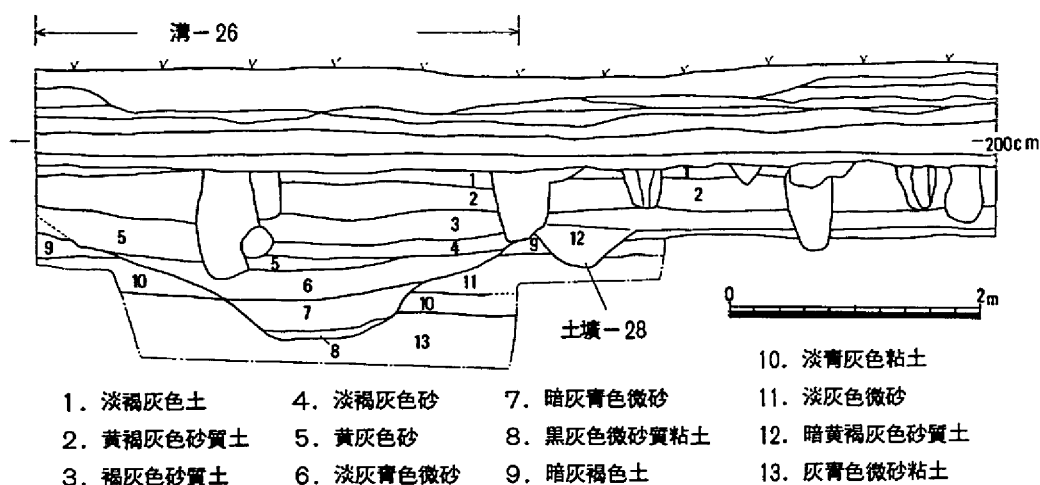
溝一26 (第132図, 図版24-1)

幅3.5m、深さ1mを測り検出全長は約3mである。やや弱いV字溝を呈する溝ではほぼ南北方向を示す。下層はグライ化しており暗青灰色微砂質粘土層が堆積している。最下層は湧水層でもある淡灰色微砂層に達している。上層は中世遺構によって損傷をうけているが、淡褐灰色砂層が最終的に埋積して、溝の廃絶を示す。溝一27と同様、溝としての機能を失って徐々に埋没したことがわかる。出土遺物には、土境一27から流れこんだ弥生式土器片がみられ、中には559のように、弥生時代前期に属する壺底部片もみられるが大半は百・後・Ⅲに属する破片の出土が多い。この溝の時期を示す遺物としては須恵器がある。貼付高台を有する杯片や、壺・甕片が少量ではあるが出土しており、主に奈良時代を中心に存続した溝であることが、層序関係とあわせて示されている。最下層からはドングリの種子も出土している。

溝一27 (第135～138図, 図版34)

2～3区で検出された幅約10m、深さ約120cmを測る溝ではほぼ南北方向を示す。東岸部は露頭岩盤を掘削して東肩が形成され、内側に小規模な2列の杭列を伴う。この杭列の約30cm西側に小さな肩が形成される。上面は溝一30などによって原状を維持していないが、この部分に後世の溝が集中していることを考えてみても、周辺の地形の中で重要な地割の境界を示している可能性がある。溝は全体的に青灰色砂質層で埋積しており、流砂によって徐々に埋積したことを示す。

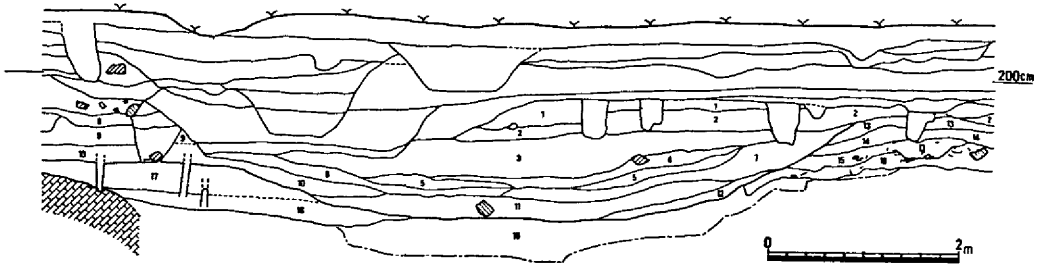
出土遺物として注目されるものに埴輪がある。直接この溝に伴う遺物ではなく、北側丘陵部



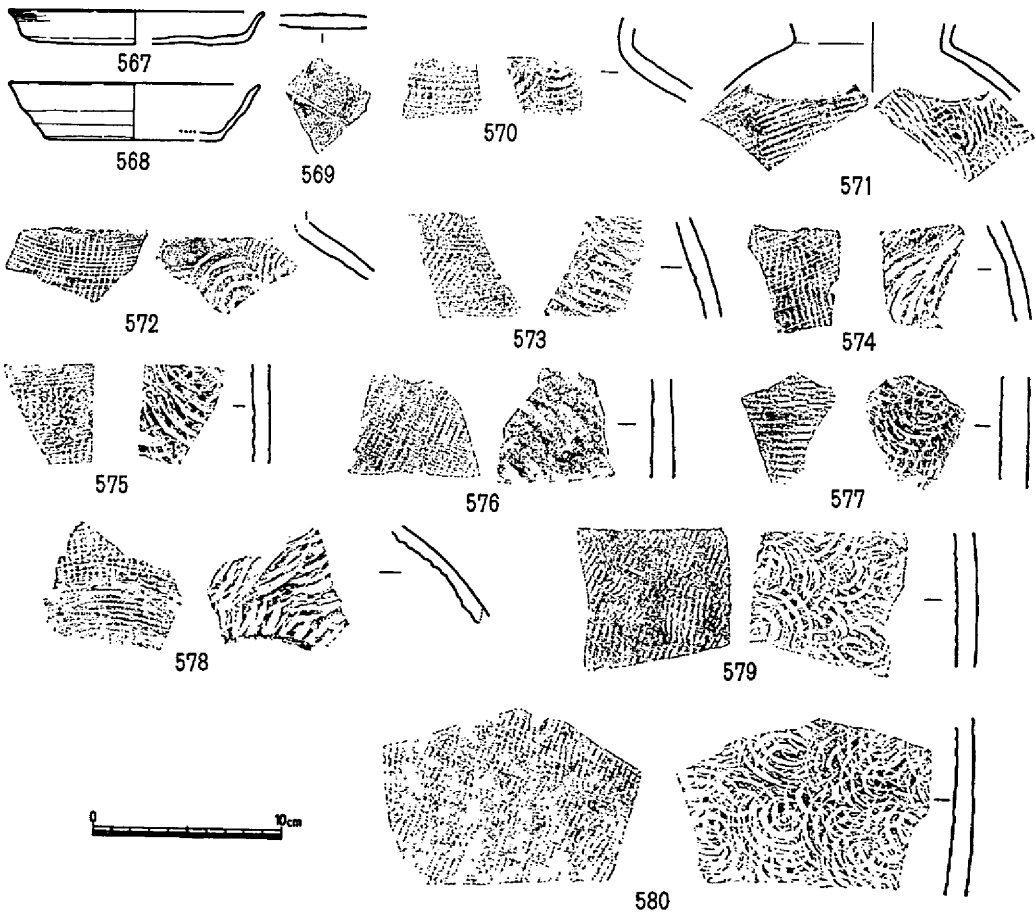
第134図 溝-26 (1/60)・出土遺物

に存在した古墳の破壊によって移動あるいは流入した埴輪片と考えられる。時期的には、他の出土遺物によって示される奈良時代に、周辺の地形が大幅に改変されたことが推定される。埴輪のほか須恵器・土師器はもとより弥生時代後期後半の土器片もみられる。また、下層から人骨が1点出土している。以下、出土遺物の概略を述べる。

(1) 土師器567・568 いずれも青灰色あるいは褐灰色砂礫土中から出土している。いずれも器表面はていねいに仕上げられ、胎土も精選された良質土器である。その形状から平安時代前



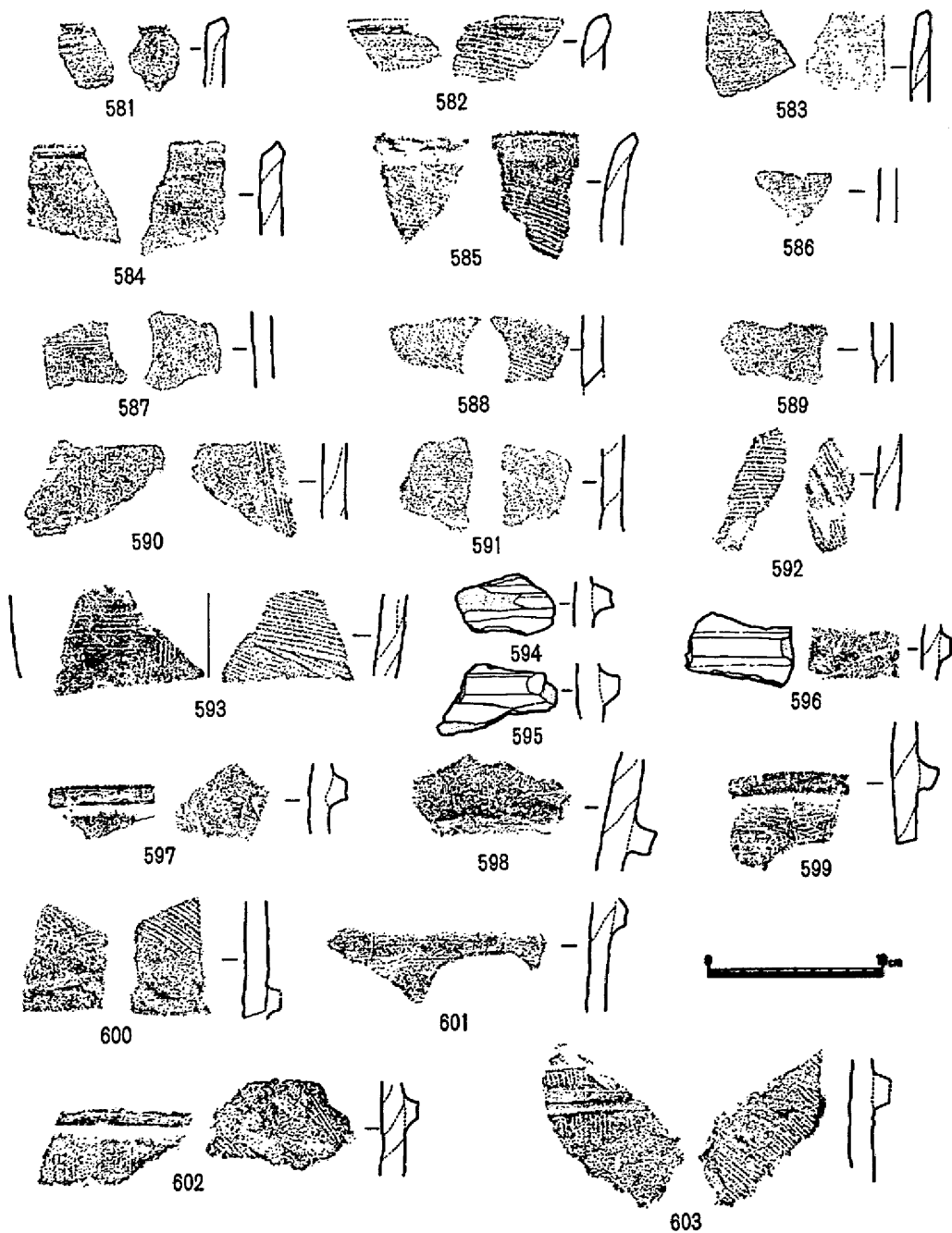
- | | | | |
|------------|--------------|---------------|----------------|
| 1. 暗褐色土 | 6. 青灰色微砂 | 11. 暗青灰色砂質粘土 | 16. 褐色土・黒褐色土混層 |
| 2. 淡褐黄灰色微砂 | 7. 淡青灰色微砂質粘土 | 12. 暗青灰色微砂質粘土 | 17. 黒灰色粘質土 |
| 3. 淡褐色砂 | 8. 淡黄褐色砂質土 | 13. 明灰褐黄色土 | 18. 黒灰色粘土 |
| 4. 褐色粗砂 | 9. 淡黄褐色砂 | 14. 淡黄褐色土 | 19. 暗青灰色砂 |
| 5. 淡青灰色微砂 | 10. 青灰色粗砂 | 15. 淡褐色砂質土 | |



第135図 溝-27 (1/80) ・出土遺物 (1)

期に比定される。

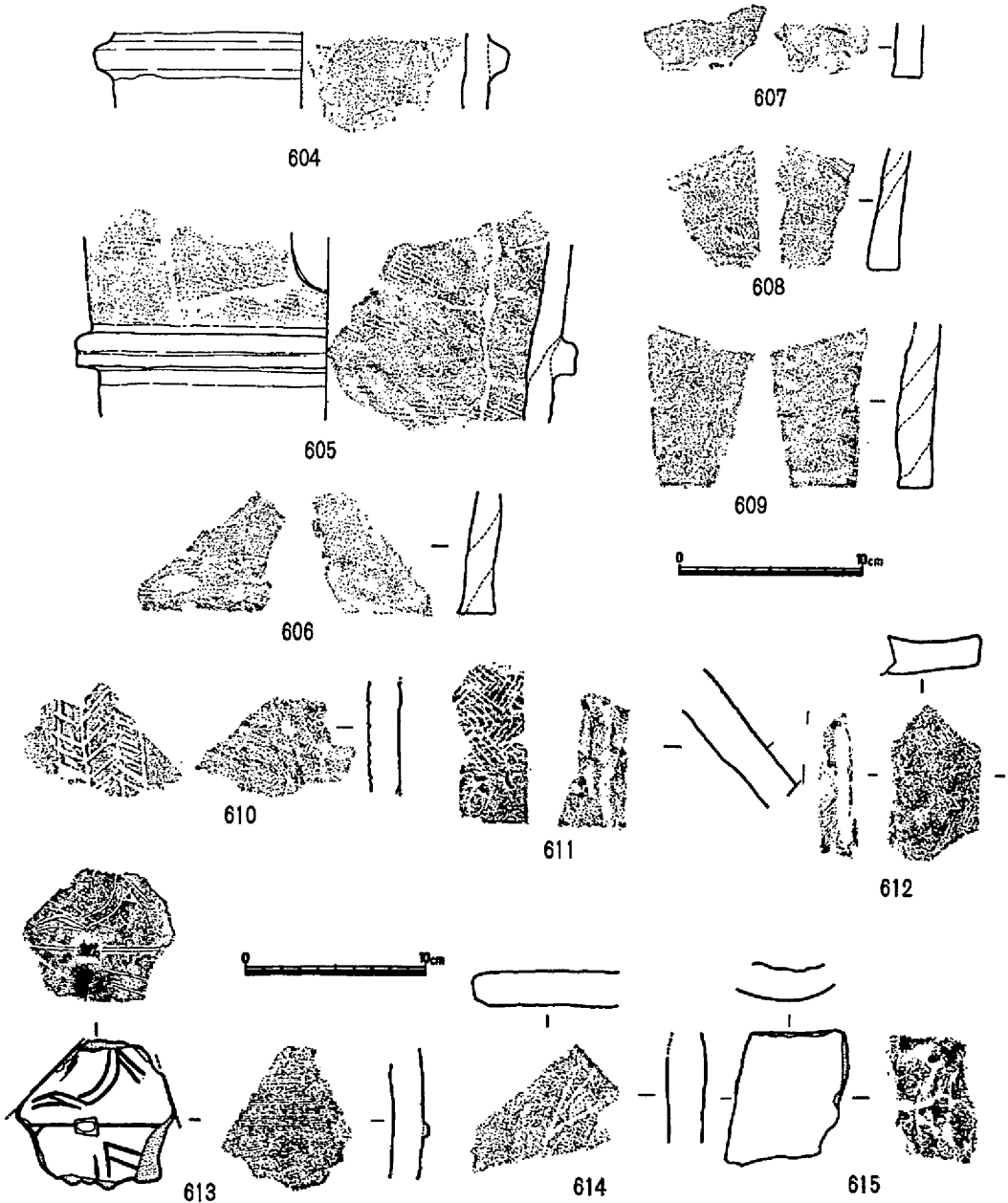
(2) 須恵器569～580 すべて破片であるが、569のように カマジルシの一部が観察できる杯片もある。他は壺・横瓶・甕片が多い。579・580などはかなり大きい甕の破片である。時期的



第136図 溝一27出土遺物(2)

には多少の幅があると思われるが、7～8世紀代に比定できよう。

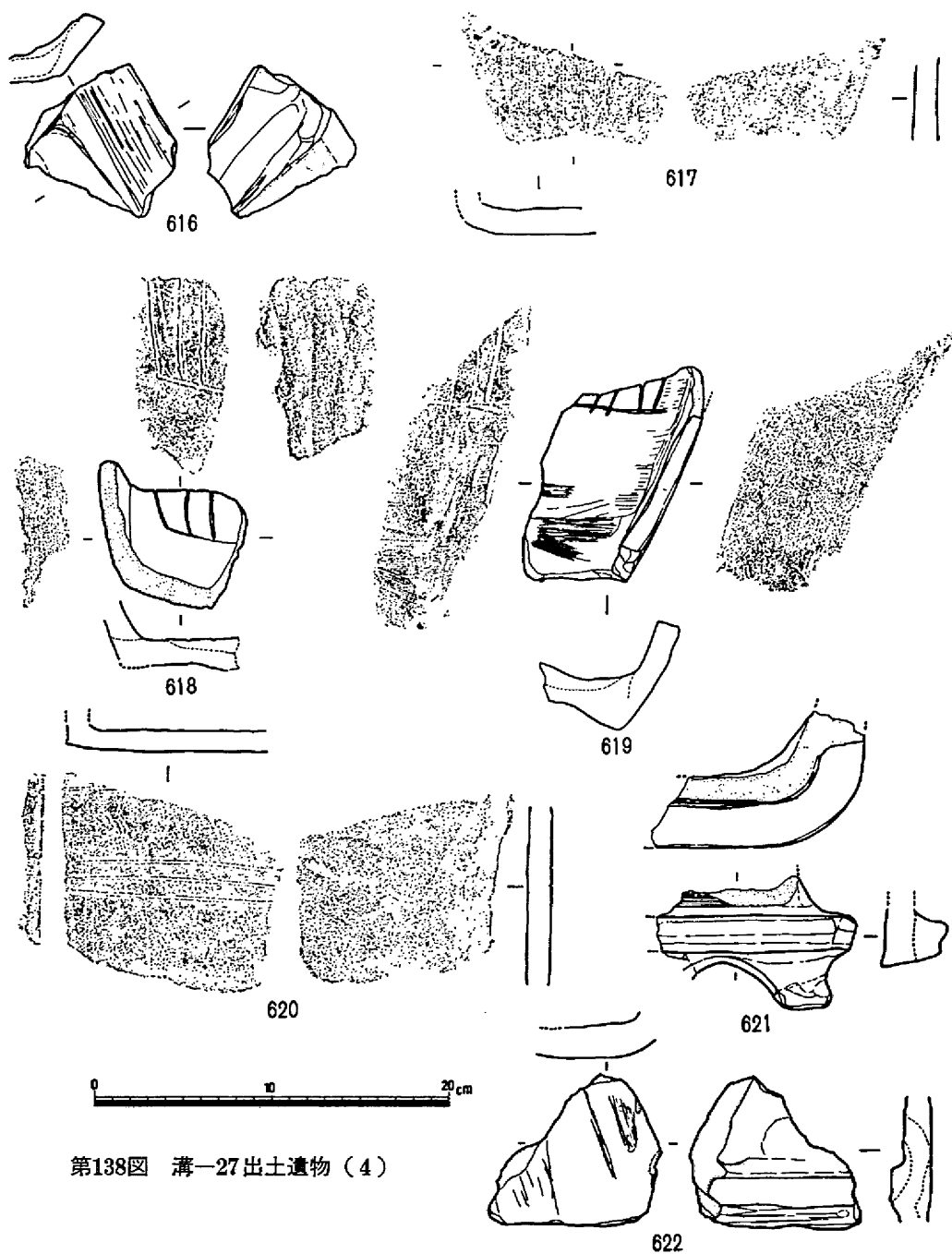
(3) 埴輪581～622 円筒埴輪と形象埴輪に大別され、前者は84点、後者は13点出土している。いずれも破片となっているものが大半を占め、形象埴輪片の中には原形不明なものもみられる。円筒埴輪については、詳細な観察は巻末の観察表に掲げるが、成形技法調整から観察す



第137図 溝-27 出土遺物(3)

ると基本的にはほぼ同一時期を示す手法が識別できる。

円筒埴輪は第136・137図に掲げたように、各部位、すなわち口縁部・体部・透し部・基部と分類している。透し部はすべて円孔で長方形や三角形のものは全くみられない。口縁部は、や



第138図 溝-27出土遺物(4)

やくせをもって外反するものが多く、端面はナデ調整で仕上げている。外面の調整は、タテ方向、ヨコ方向のハケによる調整痕を残し、第1次調整が前者、第2次調整が後者の破片もみられる。内面は、斜方向ないしはヨコ方向のハケ調整のものが多く、中にはユビナデあるいはオサエ痕のみ残すものもみられる。粘土の接合は、すべて内傾接合である。基底部は、体部下半部よりやや肥厚し、端面はやや幅広となり、端面には植物性繊維の圧痕を残している。**594・596**などは、丹塗りの円筒埴輪片で胎土も精製され、焼成も堅緻である。焼成は総じて堅緻で、黒斑を有するものは全く含まれない。

形象埴輪片の中ではとりわけ家形埴輪片の多さが目につく。また器財形埴輪と思われる破片もみられる。**610**は綾杉文様を表現したものであるが原形は不明である。甲冑埴輪の草摺の表現にもみられる手法や、家形埴輪の壁下部にも時たま見受けられる表現である。**611**は家形埴輪の屋根の一部と考えられ、網代葺を線刻で巧みに表現しており、比較的細かなハケメ調整を全面に施したのち、軒先を表現するための突帯を貼付けている。裏面はハケメ調整は認められず粘土紐の接合痕が認められる。このように屋根に網代葺を表現する例は極めて多く、遺跡西方約2kmの金蔵山古墳(註2)にも類例が見うけられる他、各地の5世紀代を中心とする古墳の出土品の中にも見出せる。また、**612**は前面に丹塗りが施された鱗状の断片であるが原形の性格は不明である。接合面からみると楕形埴輪の可能性も考えられる。**613**は短甲で三角板革綴短甲で前胴部右側の破片と推定される。三角板は線刻で表現しているが、欠損部分の割れ口がその2辺にあたる。また、長方形の小突起を貼り付けて皮綴じを表現している。上方からあたかも装飾的な紐が垂下する表現がみられるが、これはいわゆるワタカミ懸緒に付属する革紐あるいは綴じあわせの可能性もある。また下方にも装飾的な線刻がみられる。切妻造の家形埴輪の屋根および破風部分の破片は3点みられる。**616**は破風板の前面に丹彩が施され、華美的な建物を想起させる。**618・619**はいずれも屋根の一部と破風板部分の埴輪片で屋根には押し縁様の太い線刻がみられる。いずれも破風板の傾斜が急で、入母屋造り家の特徴を具現している。**617・620**はやはり家形埴輪の壁(平)部分の破片である。**620**は3条の平行線が描かれ、横板造りの家壁を表現するものと考えられる。この表現は四注造り家などにもみられ、建物の種類は限定できない。いずれも外面には丹彩が施される。**621・622**は家形埴輪の裾廻り部分で**622**には壁の一部がみられる。**621**は台部で半円形の透窓がみえる。**617**は壁下部と思われる破片で、わずかに袴腰となっている。

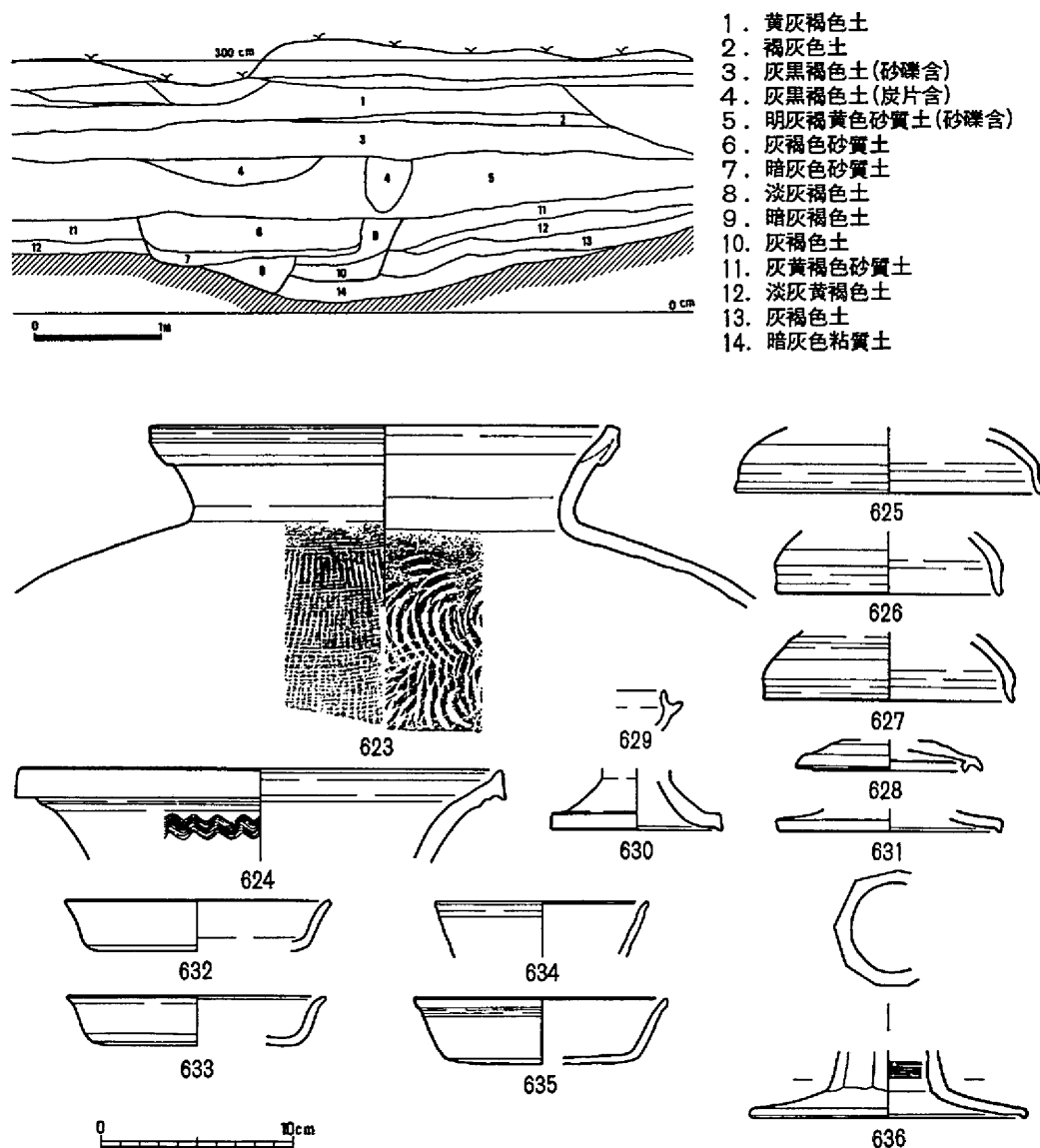
(4) 人骨 下層から単独で出土している。現存長22cmを測る成人骨で脛骨と推定される。両端の関節部分は失われており、全体に灰褐色を呈している。今なお堅硬さを保持しており、極端な磨滅は認められないが、擦痕が多くみられる。端部の一方には、犬によるものとみられる咬痕が観察される(註3)。時期は不明である。(岡田)

第4章 右岸用水路調査区

溝-28 (第139図)

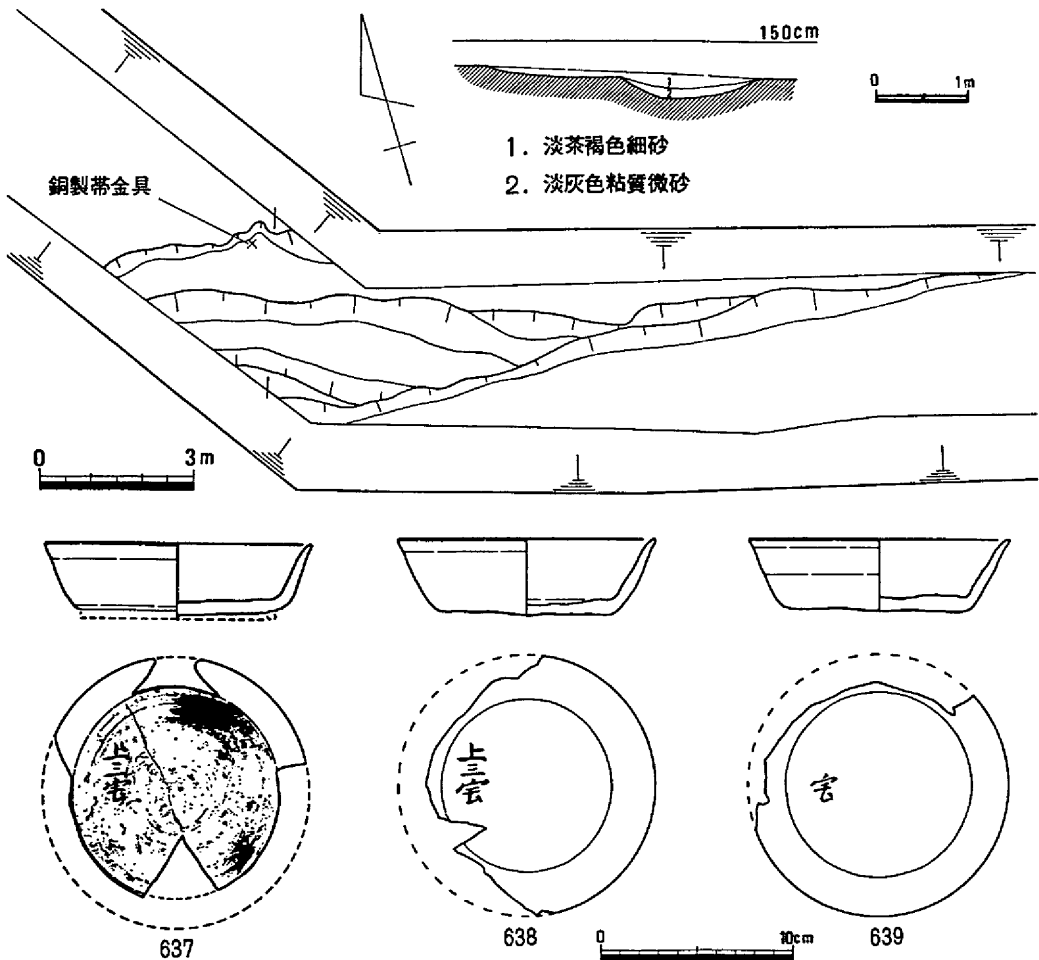
5・6区に、東西方向からやや南へふって位置する。調査時の当初は溝-20の堆積土上層と誤認して掘り下げたため、平面図を示せないが、調査区両側壁と溝-20土層断面の観察によってその位置を想定している。したがって、柱穴列との前後関係は不明である。9・10層による埋没後に再び溝として機能し、6～8層によって埋没している。(光永)

溝-29 (第140～143図, 図版23-2・33)

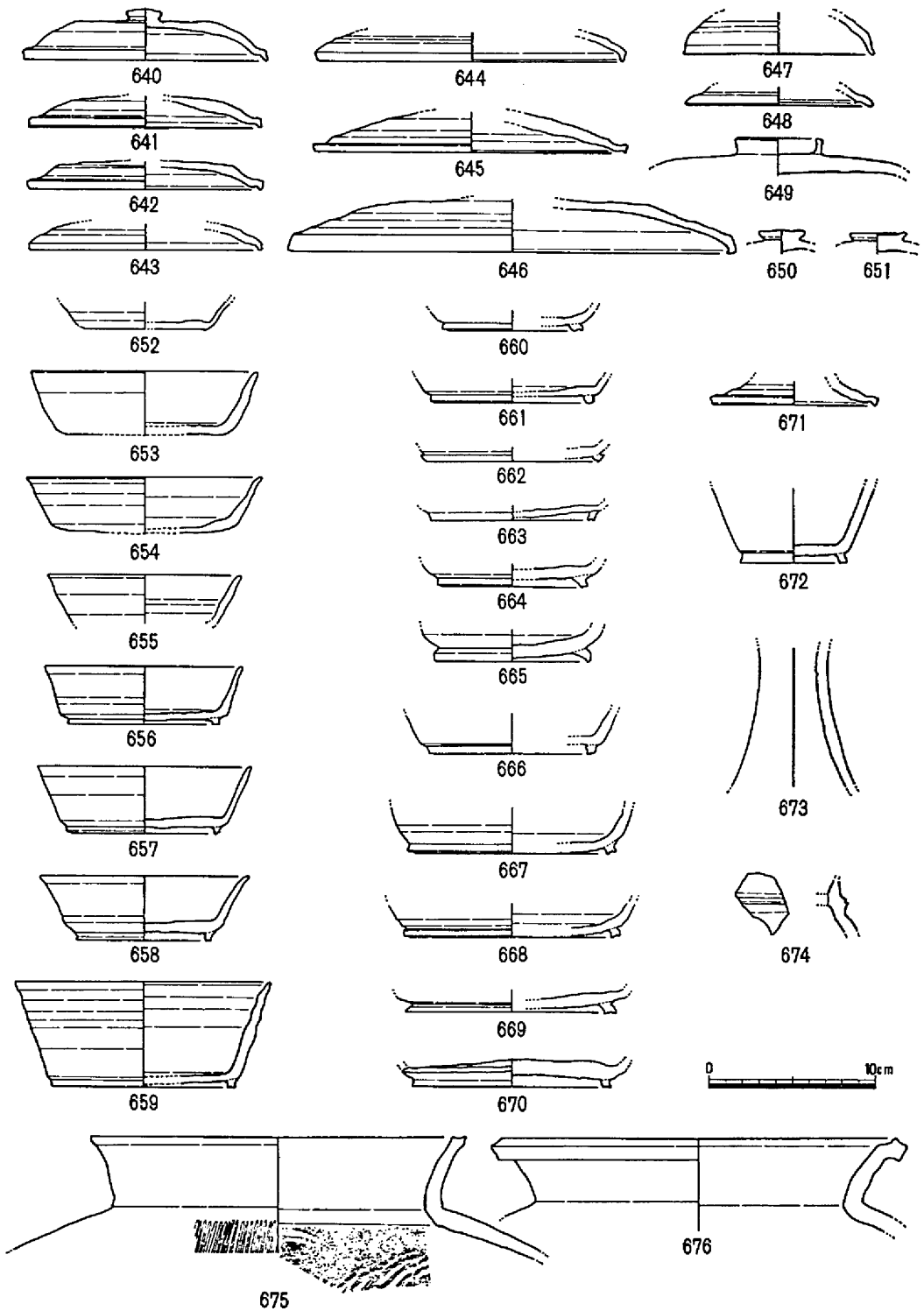


第139図 溝-28 (1/30)・出土遺物

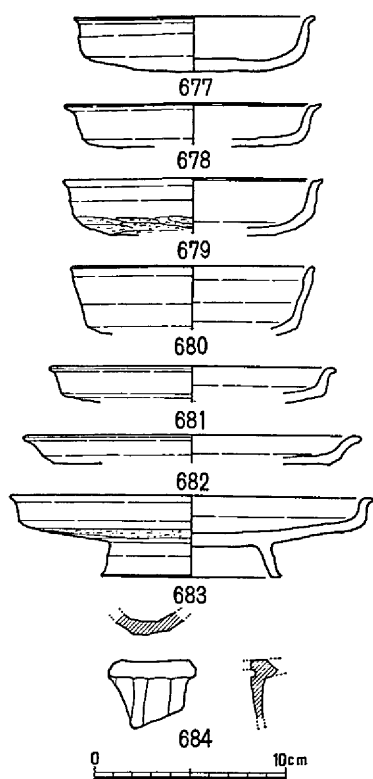
10～11区にわたって検出された溝である。ほぼ東西方向に走る溝であるとも考えられるが、検出した範囲がせまく、かつ東側部分は後にのべる落ち込みの遺構によって切られているためはっきりしたことはいえない。検出した溝の幅・深さについても、第140図に示したように南側部分に幅140～220cm、深さ約25cmを測るやや深い溝があり、その北側も幅100～150cm、深さ5～10cmの浅い溝状を呈している。底面は平坦ではなく凹凸が著しい。また埋土は2層ありいずれも砂が堆積している。いずれにしてもこの地区は中世において削平が行なわれており幅・深さとも本来の姿を示しているとは考え難い。遺物は、主に南側の一段深い溝を中心にして須恵器・土師器がコンテナ約2箱分出土しているが、特筆すべきものに墨書の施された須恵器の杯（第140図）と銅製帯金具（第143図）がある。墨書土器は3点出土しておりいずれも須恵器の杯（637は高台の部分が剥がれており、638・639は無高台の杯である。）の底部外面に縦書き



第140図 溝-29 (1/150・1/75)・出土遺物(1)

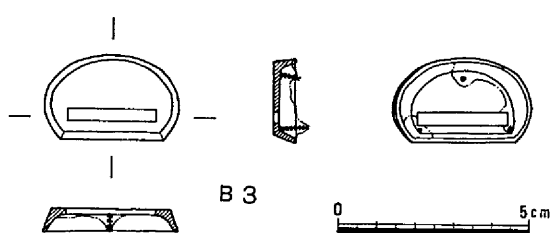


第141図 溝-29 出土遺物(2)



第142図 溝一29出土遺物（3）

平面形は、楕円形の下辺を直截したような形態を呈し、縦2.2cm、横3.6cm、幅0.6cmを測る。下方には0.35×0.6cmの長方形の孔がある。断面形は、台形を呈し厚さは1～1.5mmを測る。また、裏面には3本の鋸が存在する。ところで、この種の「丸靱」には金銀を鍍金したものと、黒漆を塗ったものがあるとされている（註4）が今回の資料ではそのどちらであるか明確ではないが、どちらかといえば黒漆の可能性がより強いと考えている。第141図は須恵器で674は硯の破片である。また第142図は丹塗りの土師器である。これらの遺物はほぼ8世紀の後半のものが主体で一部7世紀代のものが含まれていると考えられる。（平井）



第143図 溝一29出土遺物（4）（1/2）

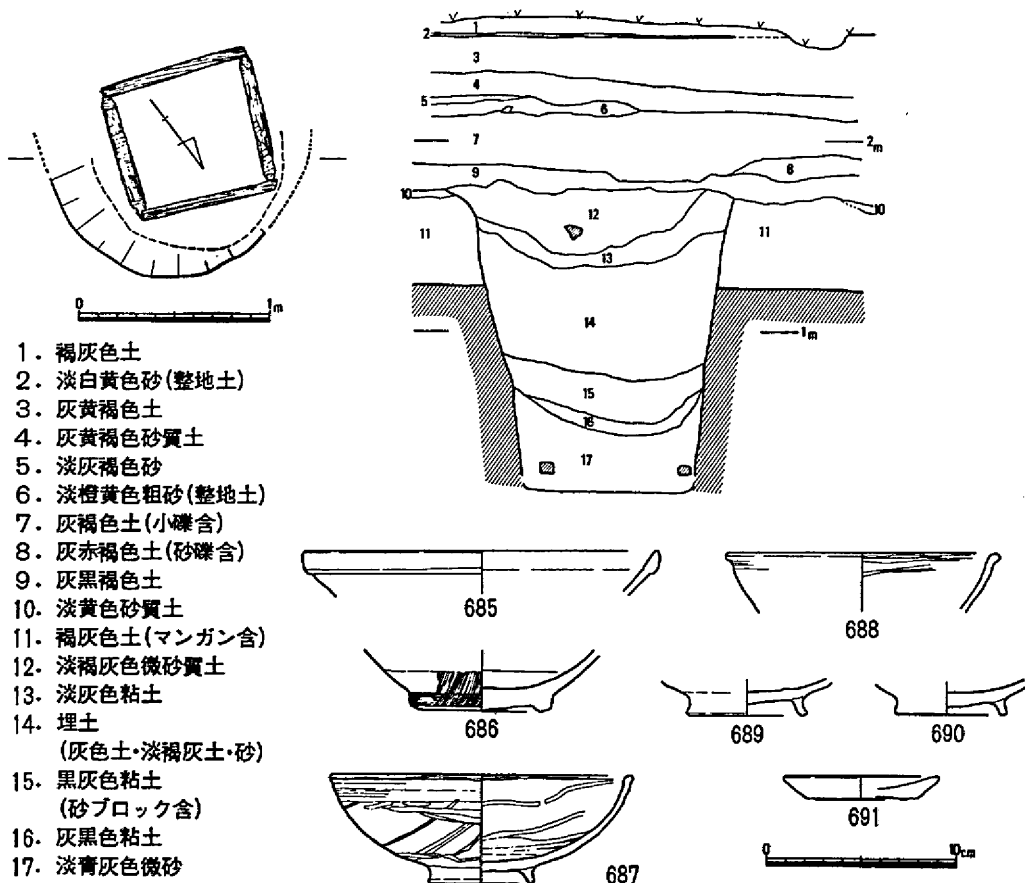
されている。墨書内容は、637では肉眼でも明瞭に「上三宅」と判読できる（図版33）。また638については637ほど明確ではないがほぼ「上三宅」に間違いのないと考えられる。639は「宅」の字は明確に判読できるが、その上部に「三」ではないかと思われる墨痕が僅かに観察でき、これも本来「上三宅」と墨書されていた可能性が強いと考えられる。この3つの墨書を比較すると、638がやや大きめの字であるものの書体という点では非常に類似しているといえよう。一方、銅製帯金具は、検出した溝の中央の北部肩口より出土しており、「丸靱」と呼ばれているものの表金具である。

第4節 中世の遺構・遺物

1. 井 戸

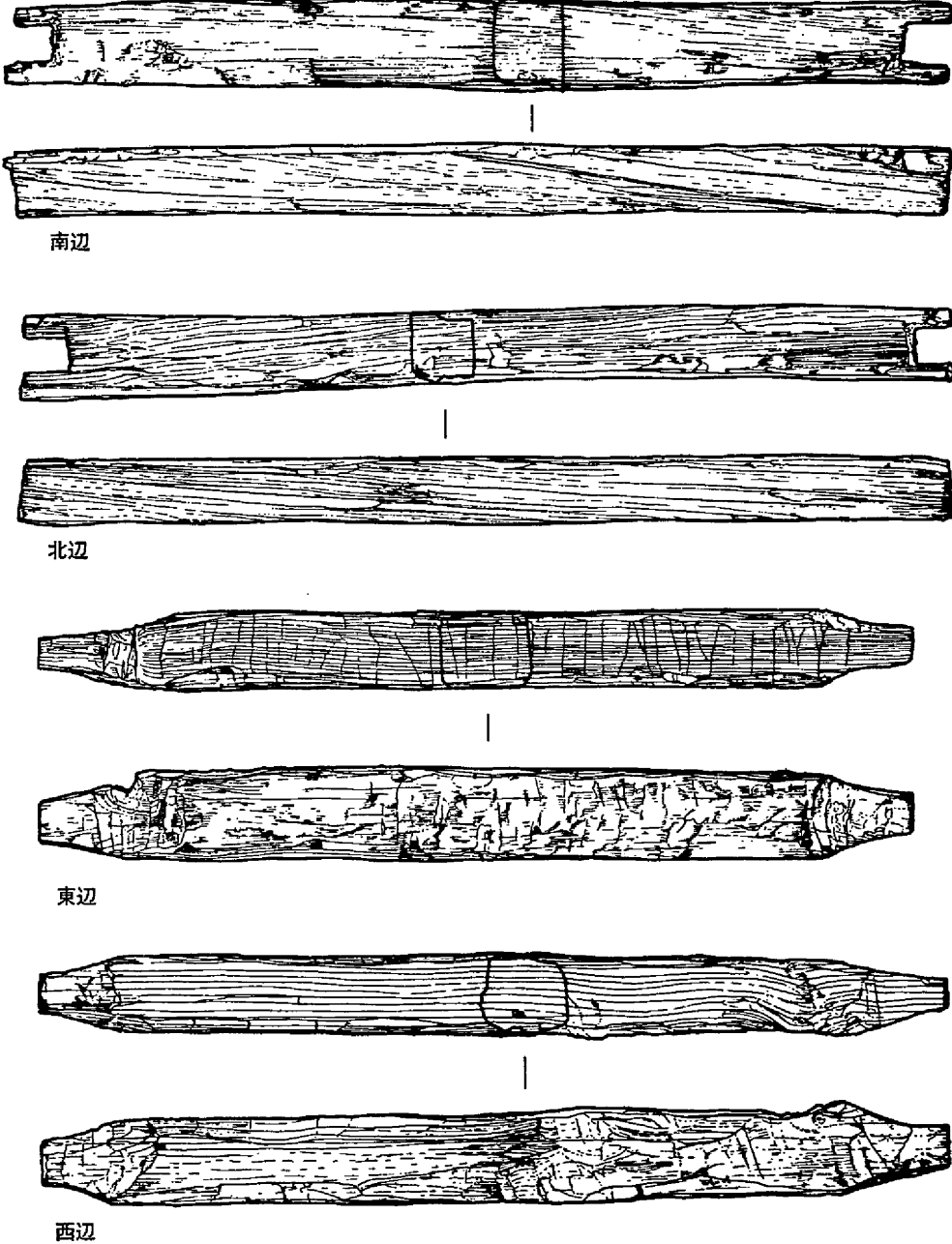
井戸-7 (第144・145図, 図版26-1・35)

調査区の西端部第1区で検出した井戸で、復元径約1.4m、深さ1.6mを測る掘方円形を呈する。調査区域の関係で、全掘はできなかったが、残存部は、ほぼ全掘が可能となった。付属施設としての井桁はもちろん、井側・井筒は遺存せず、おそらく抜き取って転用されたものと考えられる。しかし、井戸の最下部、淡灰色湧水層部分では小礫（円礫）が多く認められ、この位置で横棧の最下段と思われる木組が遺存していた。これは、小口端部を凹凸にそれぞれ加工したものを2本ずつ納組みにしたもので前者は幅約7cm、厚さ約6cm、長さ約77cm、後者は幅



第144図 井戸-7 (1/40)・出土遺物

約6cm、厚さ約7cm、長さ約75cmを測る杉材を用いたもので第145図のような形状を示し、表面は荒い手斧によるハツリ痕を残している。これらを組み合わせると一辺75～80cmを測る矩形の枠が完成する。前述のように、井側を形成する他の付属部材は全くみられず、層序的に観察



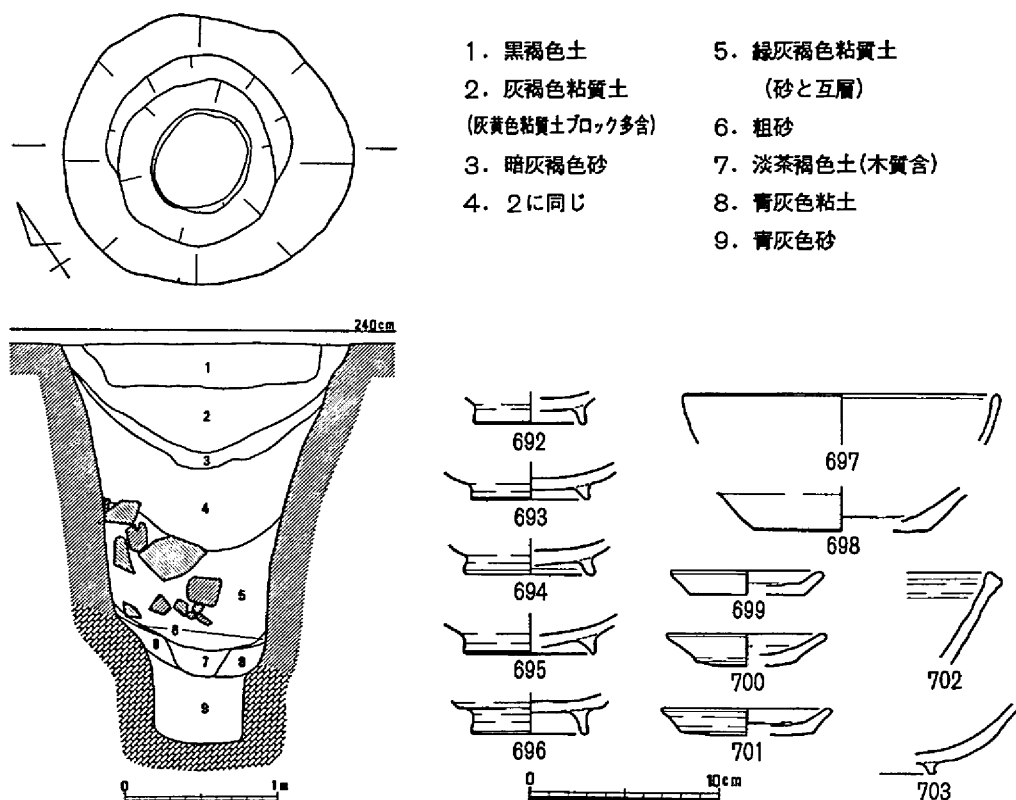
第145図 井戸一7 棧 (1/6)

第4章 右岸用水路調査区

すると、それらの部材をぬきとってまもなく埋められたことが推定される。第144図における第14層は、明黄色ブロック土を含む埋土で、地下水位の低下による井戸としての機能が失われたため他に湧水源を求めたことを示すと共に、人畜の転落防止のため埋め戻されたことがわかる。第12層もまた埋め戻しの最終堆積土であるが、一人持ち大の比較的大きな角礫が5・6個埋めすえられていることから、人為的な井戸廃絶を示している。これもまた、井戸を丁重に扱うという当時の習俗の一端を示しているといえるかもしれない。

出土遺物には第144図に掲げる白磁碗・瓦器・土師質土器・椀・皿があるが、いずれも後述の溝—30・土壌—30などの出土遺物と時期的に近いものである。白磁は、太宰府における出土資料の検討（註5）によれば12～14世紀にわが国にもたらされたものである。687は調整方法は全く瓦器と同様で内外面に暗文をもつが、色調は淡黄褐色を呈し高台も通有の土師質土器の椀に近い。瓦器製作技術を在地の日常什器生産に導入したかのような印象をうける土器である。688は最上層淡褐灰色微砂質土層から出土した土師質土器であるが、他はすべて、下層淡青灰色微砂層から出土したもので、むしろ井戸廃絶時に伴うというより、使用中に落下したものと考えられる。

（岡田）



第146図 井戸-8 (1/50)・出土遺物

井戸—8 (第146図, 図版26—2)

5区東端に位置し、径約190cm、深さ約260cmを測る。掘方平面形はほぼ円形で、海拔約50～20cmの岩盤に達するところで径約100cmを測る。ここで一つの段を形成し、さらに径約70cmでほぼ垂直に海拔-30cmまで掘り下げている。埋積土のうち1層は、井戸埋没後に掘り込まれた可能性がある。他の埋積土は、基本的に砂と粘土の互層となっている。5層の西半には角礫が集中しているが、原位置をとどめたものではなく、放り込まれた状況を示している。井桁・井筒等の施設は残っていない。

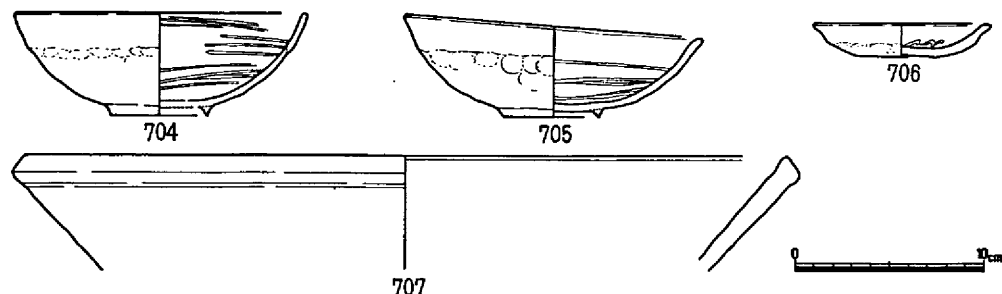
遺物は4層より上層からの出土がほとんどであり、6層以下からは出土していない。692～696は「早島式」と呼ばれる土師質の高台付碗であり、698、699～701はそれぞれ土師質の皿、小皿である。697・702は須恵質土器であり、703は内外面に暗文をもつ瓦器高台付碗である。これらの遺物の示す時期には幅があるが、ここでは大きく鎌倉～室町時代前半ととらえるにとどめたい。

(光永)

2. 土 壙

土壙—29・30 (第147・148図, 図版28—1・35・37)

いずれも検出時には、他の柱穴より一段と大きく、土壙と推定していたが、壙底で柱痕跡様の凹みが検出され、規模の大きい建物を構成する柱穴の可能性もある。土壙—29は約100×70cm、深さ70cmを測る。掘方内には黒灰色土が埋積し、土師器皿・土師質土器碗・甕・須恵質土器・瓦器・「早島式土器」などが出土している。いずれも細片が多く、第147図に掲げる出土遺物が形状を明らかにできるものである。土壙—30も土壙—29にほとんど同様な検出状態を示す。復元推定径約80cmを測る不整円形プランを描き、深さは約40cmを測る。掘方内からは土師器の皿が多量に出土しており、他にも土師器甕・碗や、須恵質土器・須恵器・瓦器・陶磁器などが出土している。これらは、いずれも祭事等に用いられた土器群の一括投棄が考えられる。出土状況からみると、いずれも柱を抜き取られた部分に埋められた状態に近く、これらの土壙

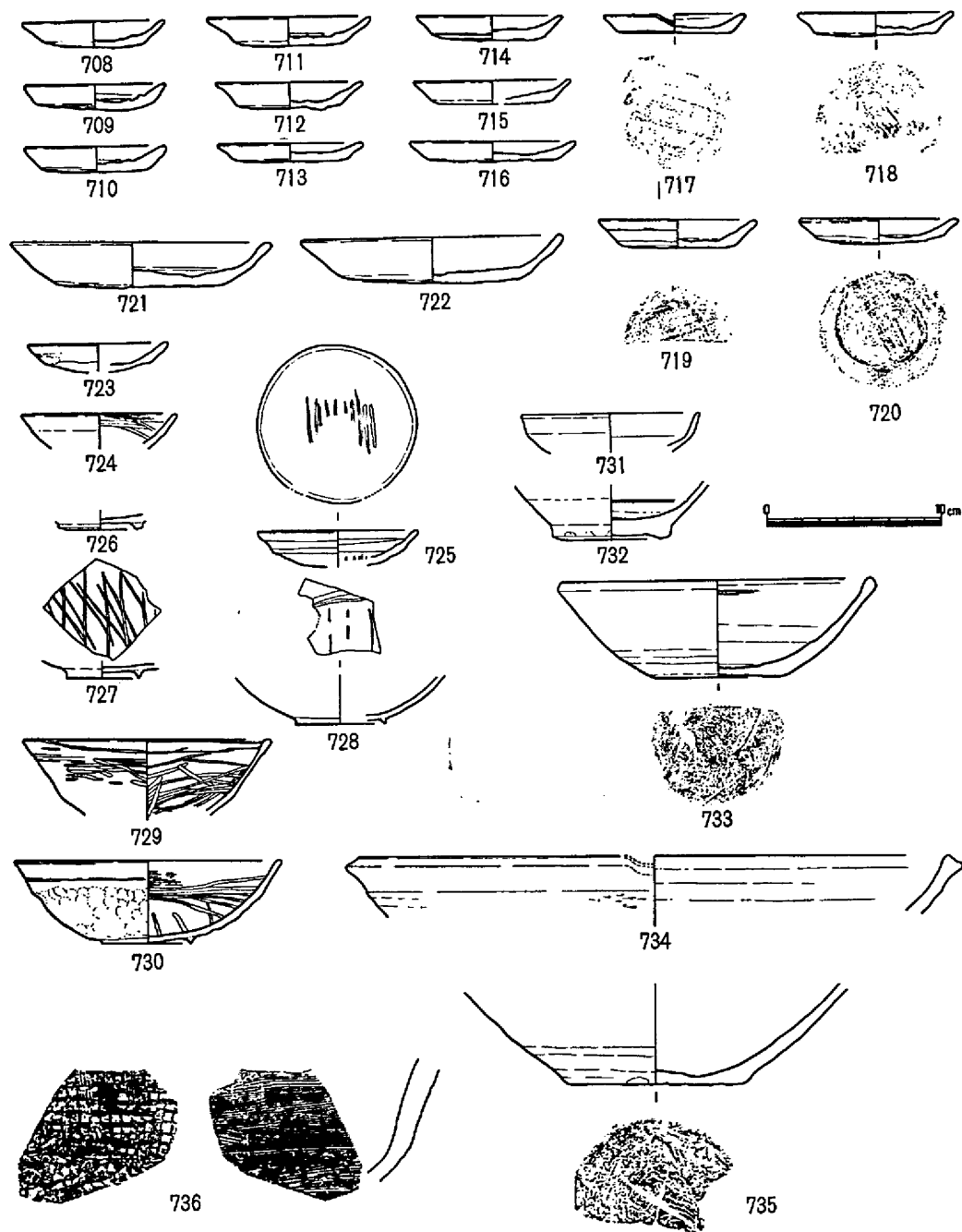


第147図 土壙—29 出土遺物

第4章 右岸水路調査区

の柱穴としての可能性を強めているが、本稿では土壌として述べておく。

これら二つの土壌から出土している遺物の大半は、中世、ことに鎌倉時代（13世紀代）の日常生活用具としての土器・土製品・輸入陶磁器の構成をよく示しており、質・量ともに注目さ



第148図 土壌-30 出土遺物

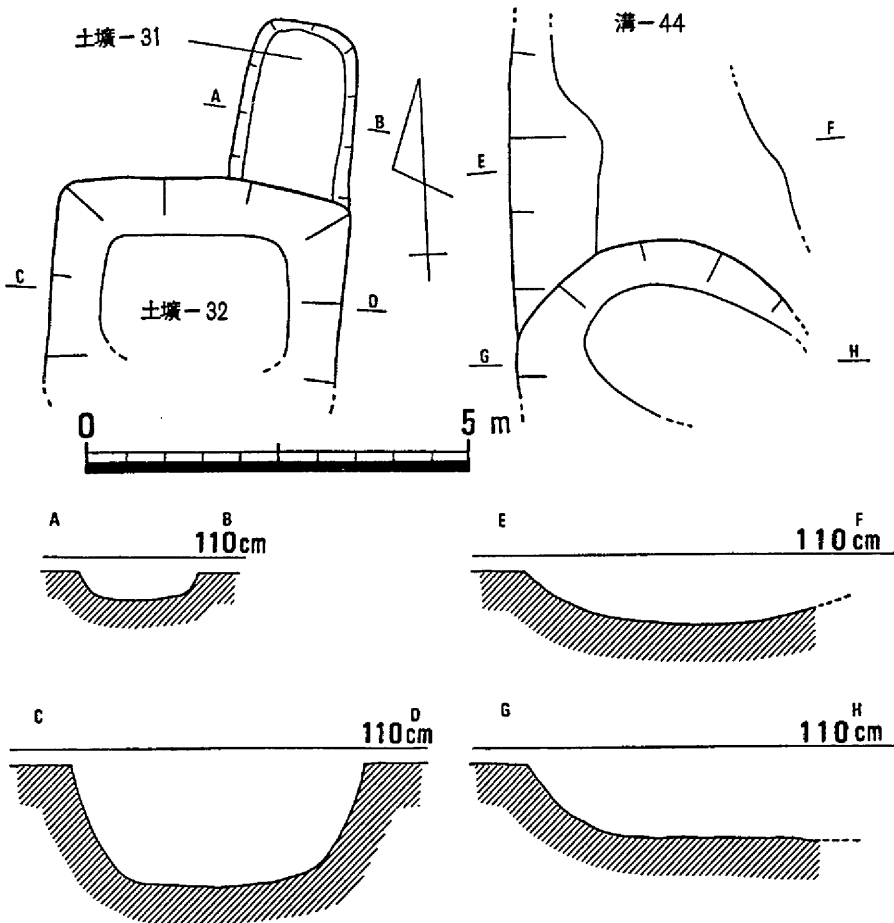
れる。たとえば、太宰府遺跡などで検出されている出土遺物の構成（註6）に類似する点も多く、ことに輸入陶磁器や輸入銅銭（宋銭）によって絶対年代の推定に有力な手がかりとなるものが多い。この事実は後述の溝—30出土遺物とも比較検討すると、この時期の集落における日常生活土器の実態が明らかにできる。（岡田）

土壇—31（第149図）

調査区域全体の東端部に当る15区において検出された土壇である。平面形は、土壇—32によって一部を切られているため全体の形状は明らかではない。深さは、検出面より最大で約10cmを測るにすぎない。時期については、土器などの遺物が殆ど出土していないため明らかではないが、土層関係などから中世のものであると考えられる。

土壇—32（第149図）

15区の西端部において検出された土壇で、土壇—31を切っている。平面形は南端部が調査区



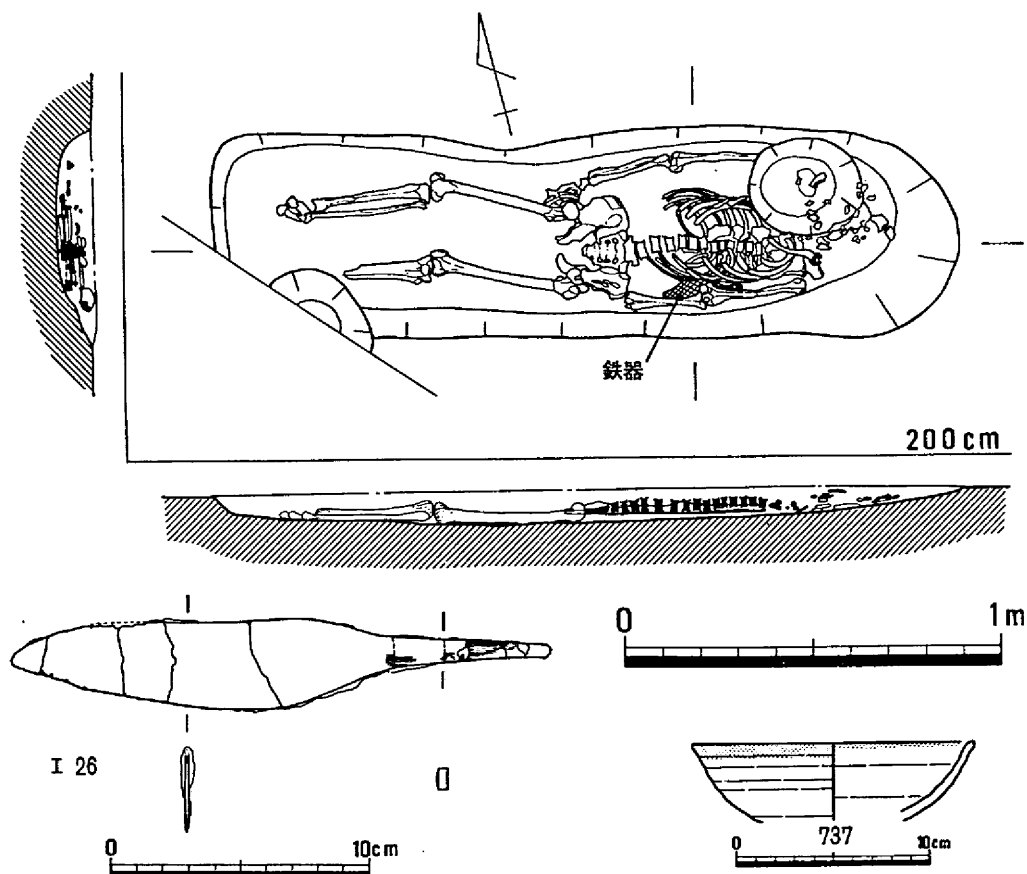
第149図 土壇—31・32，溝—44（1/100）

域外にのびるため明確ではないが、ほぼ長方形を呈すると考えられる。深さは、検出面より約80cmを測る。時期については、埋土中より小片ではあるが土師質の碗・土鍋、瓦器などが出土しておりこれらはいずれも中世の範疇に入るものである。

3. 土 墳 墓

土墳墓—2（第150図，図版29—1・37）

9区の東端部において検出された。平面形は約300×80cmの長方形を呈する。深さは、検出面より最大で約12cmと浅いが、人骨の残存状態は第150図に示したように良好であった。人骨は、頭骨及び左足首周辺を後世の柱穴によって損傷されてはいるが、他の部分はほぼ完全な形で残存していた。木棺等の痕跡はみつからなかった。また、左脇腹部分には鉄製品（第150図I 26）が副葬されていた。この鉄製品は、全長21.1cm，最大幅3.6cm，厚さ約0.15cmを測り、図の右端から約7cmの部分には僅かではあるが木質が残存していた。また、図の下縁部に向っ



第150図 土墳墓—2（1/20）・出土遺物（1/3・1/4）

で薄くなっており刃部を形成している。この土城墓の時期については、埋土中から図示したような須恵質の椀及び土師質の椀や小皿の小片が出土していること、及び土層関係から中世のものであろう。(平井)

4. 柱 穴

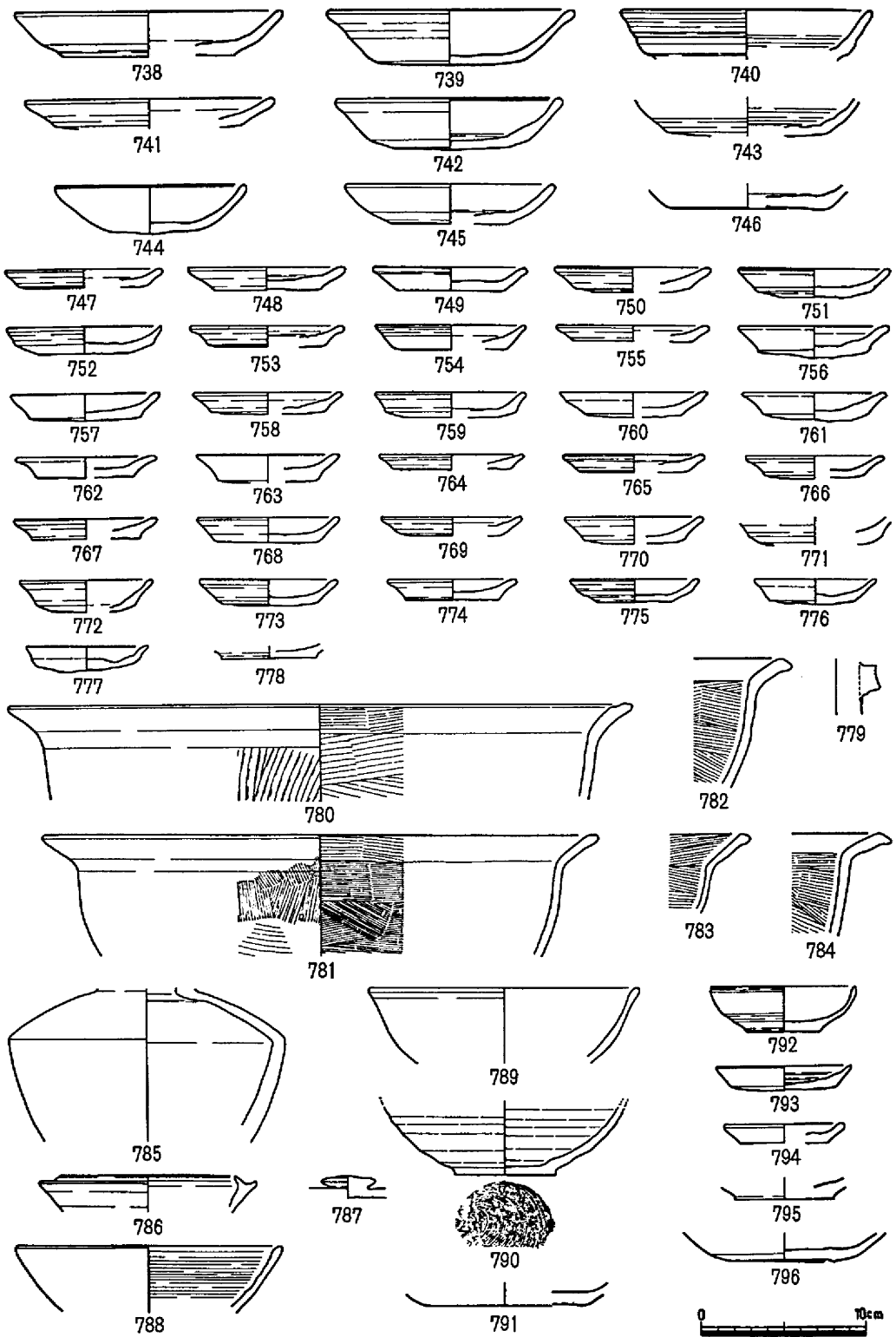
柱穴(第113・151～153図、図版27—1・28—2・36～38)

1区から11区にかけて、多数の柱穴が検出されている。検出面は2面あり、これはそのまま時期差を示すものであるが、第113図においては一括して掲載している。1～11区のはほぼ全面で検出しているが、1・2区と8～10区に集中している。ことに1・2区においては、10本ちかい柱穴が土壌を含めて切り合う状況がみられる。1・2区は、露頭岩盤の西側を走る溝—30等の溝によって区画される形となっており、4区から一段下った平坦面となっている。1区には井戸—7もあり、継続して集落が営まれていたことがうかがわれる。8～10区の集中度は1・2区には劣るが、ここでは溝34～43の10本の溝との関係が注目される。前後関係は、相互に切り合っているため、複雑であるが、直接これらの溝に規制される状況は認められない。また、8区では東西に並ぶ杭列が検出されている。一列の杭列という形ではなく、数本ずつの集合列の形をとっている。問題となるのは、その方向である。溝は、溝—36を除いてほぼ南北に流路をもっており、これに溝—36とこの杭列が直交するものである。それぞれの時期を細かく限定して、その関係を考えることはできないが、それぞれが何らかの区画を意図するものと考えることができよう。

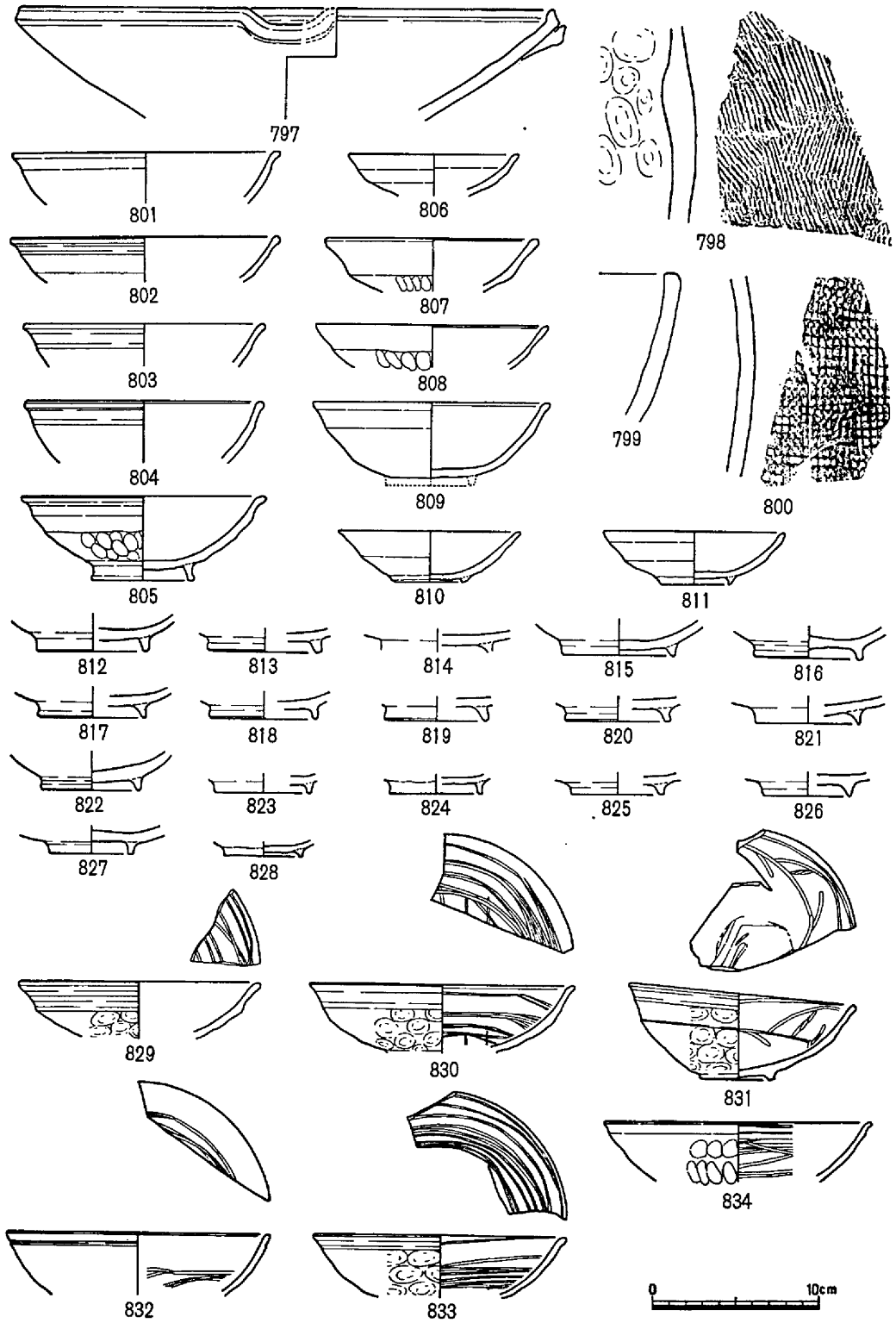
個々の柱穴の規模は、前述の杭列を除いても多様である。径は10～50cm、深さも10～80cmとそれぞれ幅をもっている。平面形も、円形から不整円形・楕円形と多種ある。断面形では、下半が脹らむものが多い。柱根が遺存するものは少ないが柱痕跡の解るものは、第113図中に黒塗りで示している。

調査区の幅が6mと狭く、これらの柱穴による建物の復元は困難であり、行っていない。

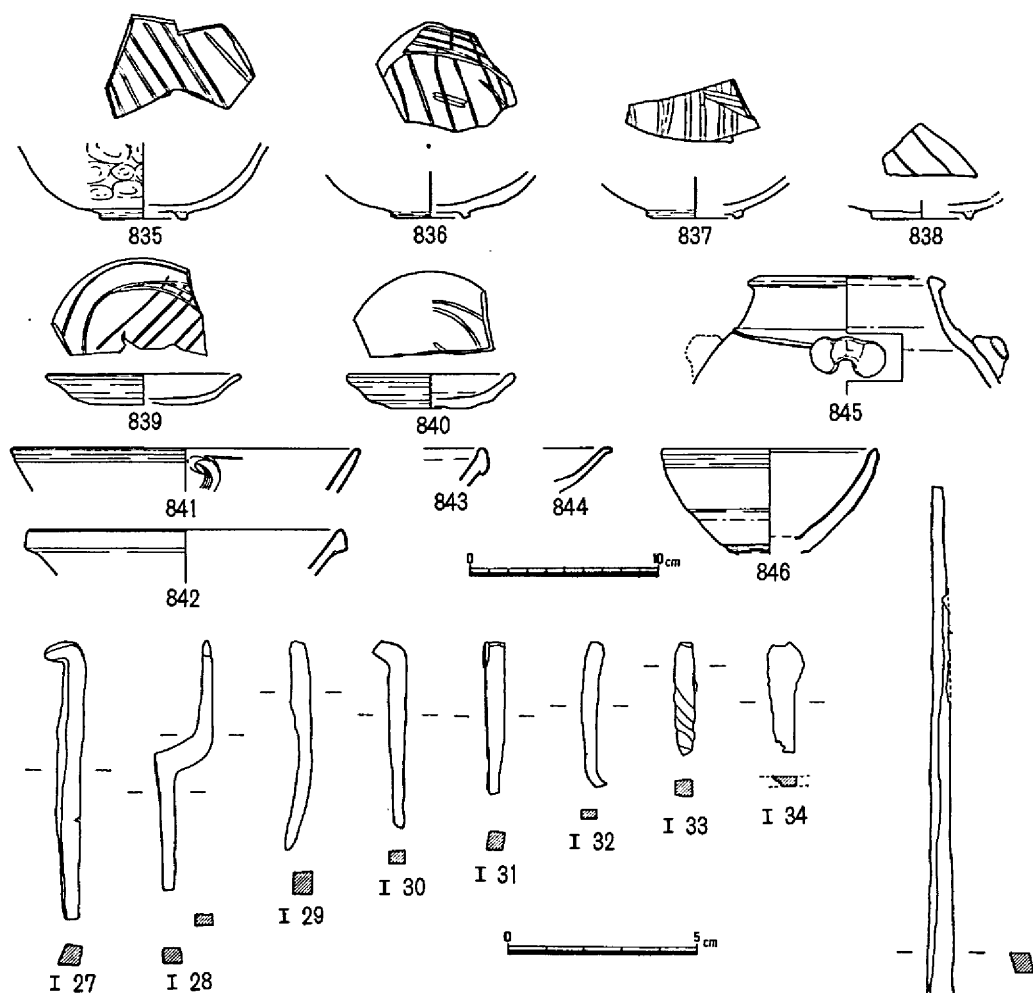
柱穴掘り方埋積土からは、須恵器・須恵質土器・土師質土器・「早島式土器」・瓦器・備前焼・亀山焼・輸入陶磁器・輸入銅銭・鉄器等が出土している。738～746は土師質土器の皿である。胎土は精製粘土を用いており、淡橙灰色で焼成は堅緻である。747～778は土師質土器の小皿である。精製粘土を用い、淡橙灰色を呈す。皿に比べて焼成のあまいものが多い。口縁部は内湾するものと外湾するものに大別できるが、752・771・775などの二段に屈曲してやや外湾するものもある。779は埴輪片である。780～784は土師質の土鍋であり、内外面ともハケメ調整を施している。785～787は須恵器で、788～797・799は須恵質土器であり、底部はいずれも糸切底である。797は魚住系のものとみられる。798・800は亀山焼片である。亀山焼片は他に



第151図 中世柱穴出土遺物(1)



第152図 中世柱穴出土遺物（2）



第153図 中世柱穴出土遺物（3）（鉄器1/2）

も大甕底部の破片がある。801～828は従来「早島式土器」と呼ばれてきた土師質土器で、いずれも灰白色で焼成は堅緻である。口径のわかるものには805などの大形品と811などの小形品がある。829～840は瓦器の高台付椀および小皿である。図示したものはいずれも外面に暗文をもたないが、他に外面に暗文をもつものも出土している。いずれも「和泉型」のものである。841～844は輸入磁器で、842・843が白磁である。845は俗称「南蛮」と呼ばれる輸入陶器であり、846は天目茶碗と呼ばれる黒釉陶器である。鉄器I 27～I 35のうち、I 27・I 29～I 32は鉄釘と考えられる。I 35は火箸と考えられる。

出土遺物の組み合わせとしては、柱穴-69に例をとれば、土師質小皿768・

I 35

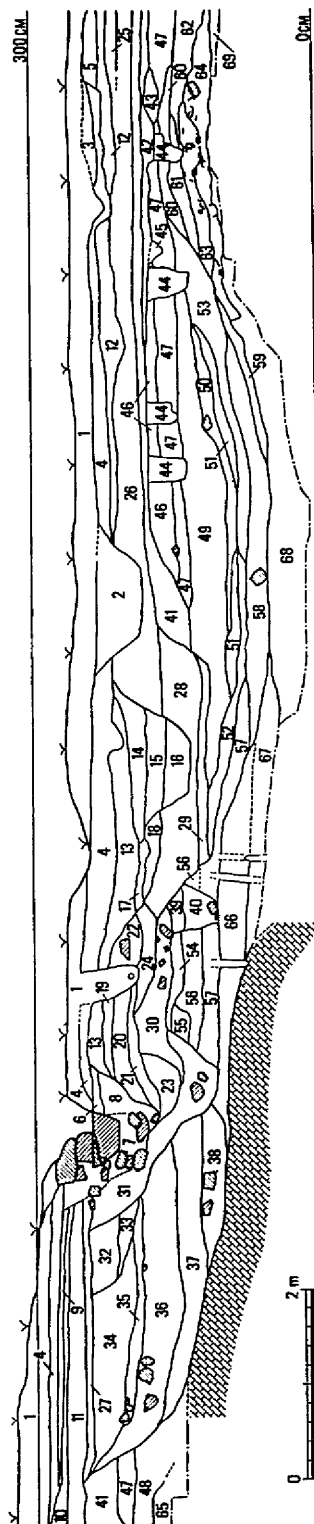
土師質土鍋**782**・須恵質土器**797**・「早島式土器」**815**・瓦器碗**829**・瓦器小皿**839**・白磁**843**・青磁**844**・鉄器**I 34**を出土しており、これに代表されるものと考えられる。(光永)

5. 溝

溝—30 (第154～157, 図版27—2・36・38)

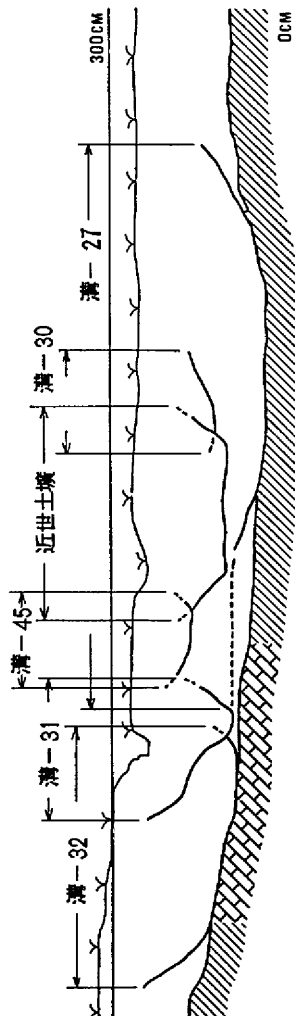
2～3区で検出した浅い溝で、幅約220cm、深さ約25cm、検出長3mを測る。方向はやや東に振る南北方向を示す。埋積土は砂礫を含む黒灰色土で、炭・焼土を比較的多く含み、それらに伴う土器片が多量に出土している。溝の性格は明確ではないが、丘陵部と低位部の境界よりやや西方に位置し、しかもこれより西に建物群を構成するとみられる柱穴群が増加・集中することを考えると、ひとつの地割的な重要な性格も見出される。

出土遺物は極めて多量で、主として日常生活用具としての土器・土製品が圧倒的に多い。煮沸あるいは什器としての土師器・土師質土器では、竈・鍋・碗・皿などがあり、ついで碗・甕などの須恵器、皿・碗などの瓦器、そして輸入陶磁器類がそれらにつぐ。また、瓦が1点出土している。第156図に掲げる**847～851**はほぼ正確な計測値が得られた土師器で、燈明皿と思われる小皿と、やや大き目の皿がある。これらはいわゆる橙褐色を呈する軟質の土師器で、いずれも外底部はヘラオコシ痕跡を残し、更に板目状の圧痕を残す。**854～856**は従来「早島式土器」と呼称されている土師質土器で、白っぽい淡黄白色～淡黄白褐色を呈し、器種は碗に限定される。体部上半部に必ず粘土接合痕・おさえ痕を残すのが一般的で、瓦器製作技法と類似するが、高台の形状は全く異なる。**852・853**はいずれも青灰色を呈する須恵器で、底部は糸切底である。**852**は小型の皿、**853**は碗と考えられる。**868**は須恵器の甕片であるが、外面は斜方向の平行タタキ目に特徴がある。**857～860**は瓦器碗である。いずれも外面には暗文は認められず、内面に横方向及び斜方向の暗文が施される。高台は断面形三角形を呈し、いずれも瓦器特有の色調を示す。瓦器片の出土は比較的多く、他に小皿片が多くみられる。**861～867**は輸入磁器で白磁がもっとも多い。**861**は壺の口頸部片で装飾的な耳がつく。**866**は青磁である。**869～872**は土師器鍋で、中世集落地ではその出土は一般的かつ多い。**874**の竈と組みあわせて使用されたのであろうか。いずれも内面には独特のカキ目調整がみられる。図に掲げる他、破片の出土量は土師器皿などととも極めて多い。**873**は淡白灰色を呈する瓦で須恵質焼成を呈する。凸面には斜格子タタキが施され、凹面には布目圧痕を残す。その形状から平安時代以前に遡る可能性は少なく、鎌倉時代に比定されよう。**874**は竈で、破片となって溝中に散乱していたものを完形に復元したものである。前述のように、煮沸機能をもつ土師器の鍋と共に用いられ、炊き口近くの煤の付着がその火と関わる性格を示している。以上の出土遺物を概括し、各器種の諸特徴から、ほぼ13世紀代すなわち、鎌倉時代に比定できる。(岡田)

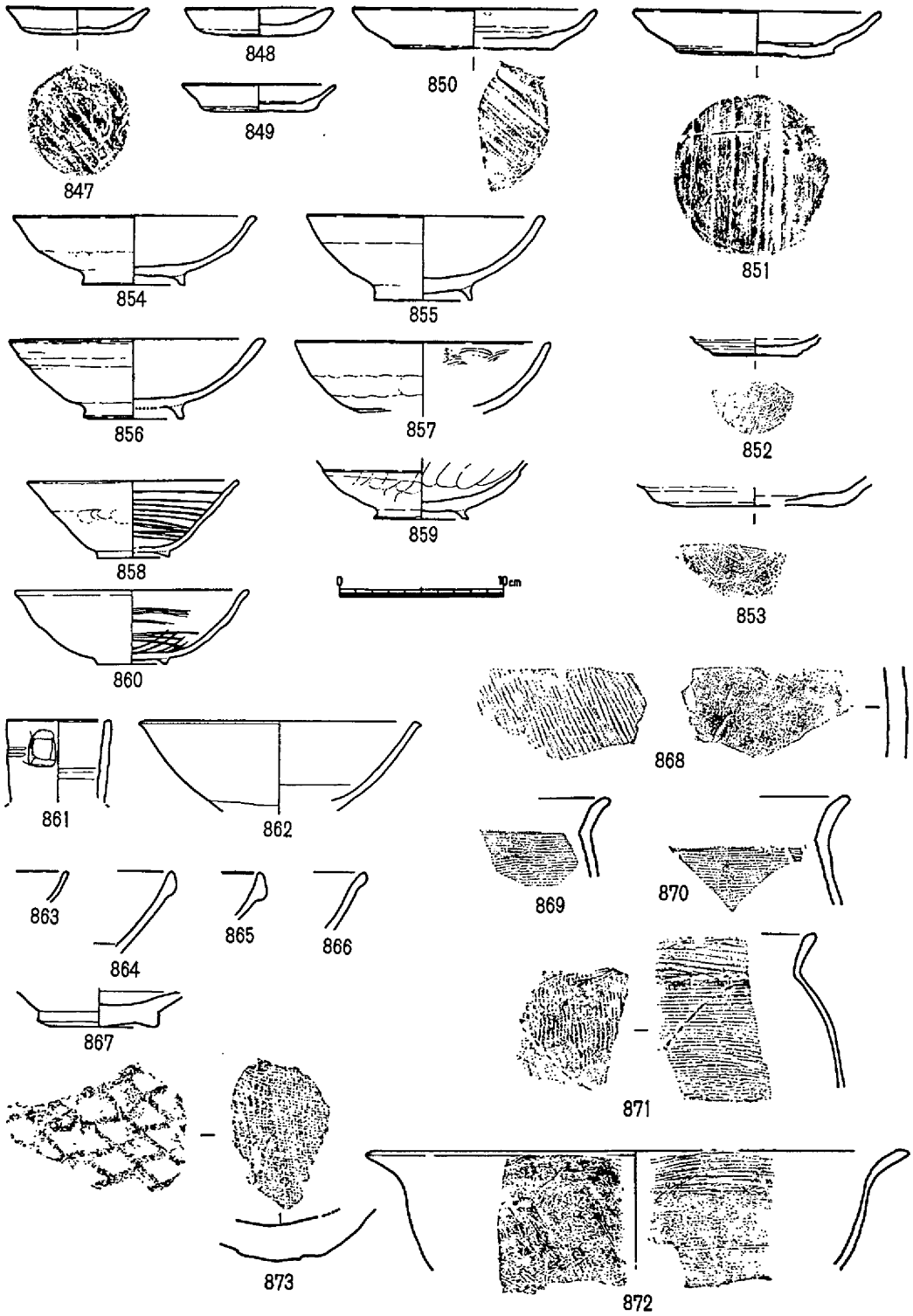


- | | | | | |
|----------------|---------------|-------------|-------------------|-----------------|
| 1. 黄土 | 13. 灰褐色土 | 25. 黄褐色土 | 37. 暗灰褐色砂土 | 49. 淡褐灰色砂 |
| 2. 淡黄褐色粘质土 | 14. 暗灰褐色土 | 26. 暗灰褐色土 | 38. 暗青褐色砂土 | 50. 褐灰色粗砂 |
| 3. 黄土 | 15. 暗灰青粘土 | 27. 暗灰青土 | 39. 暗褐灰色砂质土 | 51. 淡青灰色微砂 |
| 4. 黄褐色土(砂礫含) | 16. 暗黑青土 | 28. 暗青褐色砂 | 40. 暗褐灰色土 | 52. 青灰色微砂 |
| 5. 灰褐色土 | 17. 暗褐灰色土 | 29. 青灰色粘土 | 41. 暗褐灰色土 | 53. 淡青灰色砂质土 |
| 6. 灰褐色土 | 18. 灰黄色粘质土 | 30. 灰褐色砂礫 | 42. 暗褐灰色土 | 54. 淡黄褐色砂 |
| 7. 黄褐色土 | 19. 暗灰褐色土 | 31. 暗青褐色粘质土 | 43. 暗灰褐色土 | 55. 暗灰褐色砂 |
| 8. 淡黄褐色土 | 20. 暗灰褐色土 | 32. 黄褐色土 | 44. 褐灰色土 | 56. 淡黄褐色砂 |
| 9. 淡黄褐色粘质土 | 21. 明灰褐色砂礫土 | 33. 暗灰褐色土 | 45. 暗灰褐色土 | 57. 青灰色粗砂 |
| 10. 褐灰色土 | 22. 灰褐色砂礫土 | 34. 暗灰褐色土 | 46. 暗褐灰色砂质土 | 58. 暗青灰色砂质粘土 |
| 11. 灰黄色土(砂礫多含) | 23. 淡灰黄色微砂质粘土 | 35. 褐灰色砂质土 | 59. 暗青灰色微砂质粘土 | 60. 明灰褐色土 |
| 12. 暗褐灰色土(砂礫含) | 24. 暗褐灰色土 | 36. 暗褐灰色砂礫 | 61. 淡黄褐色土 | 62. 黄褐色砂质土 |
| | | | 63. 淡褐灰色砂质土 | 64. 褐灰色土-黑褐色土混层 |
| | | | 65. 暗灰褐色土-灰色砂质土混层 | 66. 暗灰褐色粘质土 |
| | | | 67. 暗灰褐色粘土 | 68. 暗青灰色砂 |
| | | | 69. 淡青灰色粘土 | |

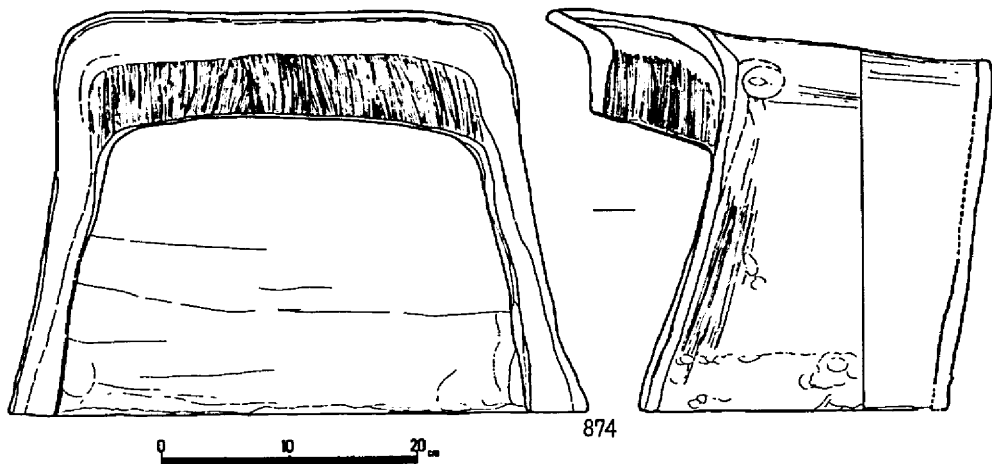
第154图 2・3区南壁土層断面図(1/80)



第155图 2・3区遺構関係模式図(1/120)



第156図 溝-30 出土遺物(1)



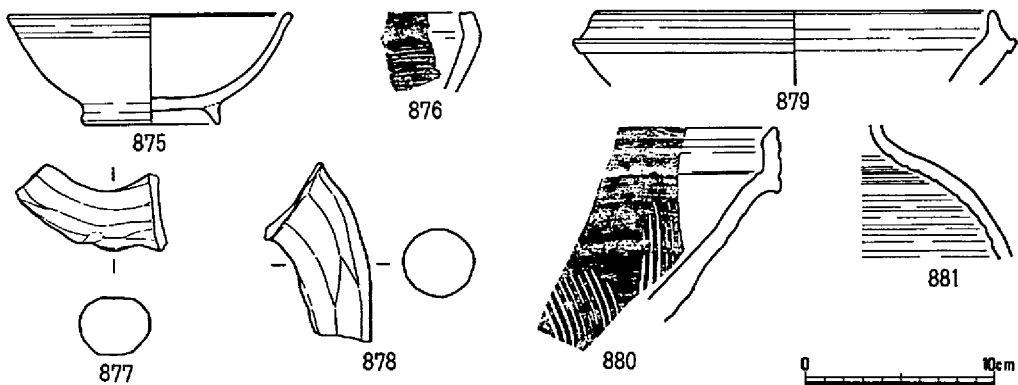
第157図 溝—30 出土遺物（2）（1/6）

溝—31（第154・155・158図）

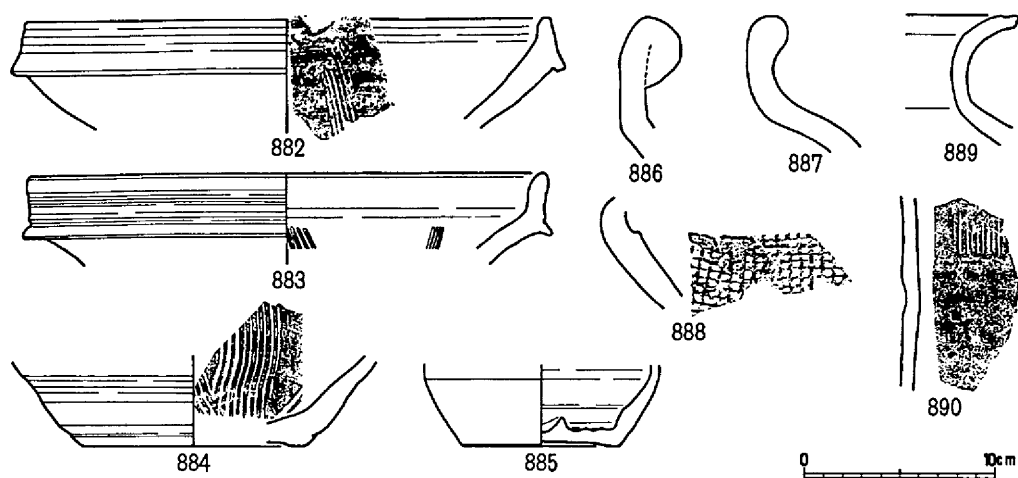
3区のはば中央を南北に流れる溝で、溝—32を切り、溝—45に切られている。南壁土層断面の観察によれば、推定幅約250cm、深さ約130cmを測る。遺物は下層の遺物のみを図示しており、「早島式土器」875、土師質土器877・878、亀山焼876、備前焼879～881等が出土しているが、備前焼の量の多さが注目される。時期は室町時代の枠でとらえる。

溝—32（第154・155・159図）

3区のはば中央を南北に流れ、溝—31に切られている。現存幅約400cm、深さ約140cmを測る。東岸部は露頭岩盤を削っているが、これがこの溝に伴うものか溝—27に伴うものかは不明である。遺物は、備前焼882～887、亀山焼888、常滑焼889・890を図示しているが、他に土師質土器・須恵質土器等が出土している。時期は室町時代に比定しうると考える。



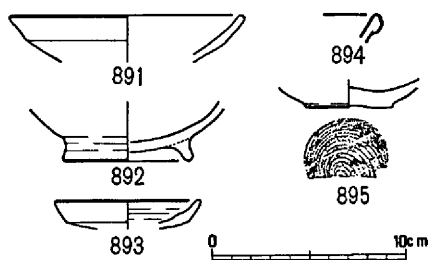
第158図 溝—31 出土遺物



第159図 溝—32 出土遺物

溝—33 (第160図)

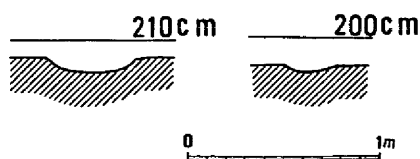
5区の西端を南北からやや西へ振って流れ、中世の他の溝とはその方向を異にしている。検出時の幅約100cm、深さ最大8cmを測る。遺物は「早島式土器」891・892、土師質土器893、須恵質土器895、白磁894が出土している。土壌—33に切られており、近世にまでは至らないと考えられる。(光永)



第160図 溝—33出土遺物

溝—34 (第161図)

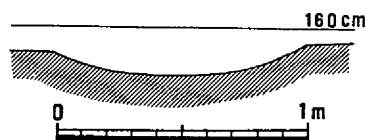
7区の西端部において検出された溝で、石組み遺構—2によって切られている。検出した幅は約40cm、深さは8cm前後を測るにすぎない。黒灰色砂質土で埋っており、時期は中世のものであると考えられる。



第161図 溝—34・35断面図 (1/40)

溝—35 (第161図)

8区の東端部、溝—37の西部において検出された。検出した幅は、25~40cm、深さは5cm前後を測るにすぎない。黒灰色砂質土で埋っており、時期は中世のものであると考えられる。



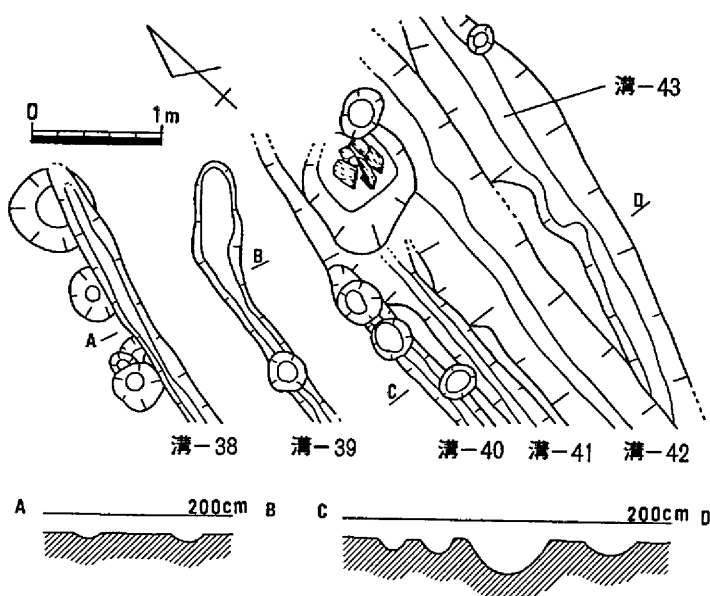
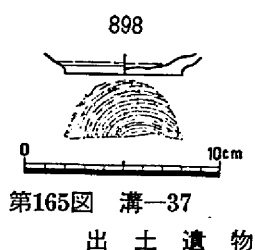
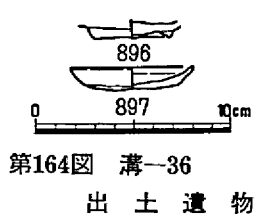
第162図 溝—36断面図 (1/20)

溝—36 (第162・164図)

10区の中央部においてほぼ東西方向に検出された溝である。検出した幅は約100cm、深さは15cm前後



第163図 溝—37断面図 (1/20)



を測る。埋土は黒灰色砂質土が1層のみである。遺物は、図示したような土師質の碗や小皿の他に、かまどや瓦器の小片が出土しており、時期は中世であると考えられる。

溝-37 (第163・165図)

8区の東端部、溝-35の東部において検出された。検出した幅は20～50cm、深さは5cm前後を測るにすぎない。黒灰色砂質土で埋っており、また埋土中より土師質の碗・小皿・土鍋や須恵質の碗や瓦器の小片が出土しており、時期は中世であると考えられる。

溝-38 (第166図)

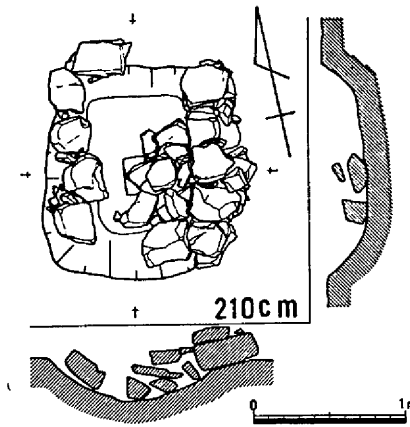
9区の中央部においてほぼ南北方向に検出された溝である。検出した幅は20～25cm、深さは5cm前後を測るにすぎない。黒灰色砂質土で埋っており、また埋土中より土師質の碗・小皿・土鍋の小片が出土しており、時期は中世であると考えられる。

溝-39 (第166図)

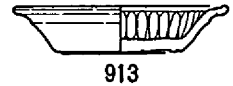
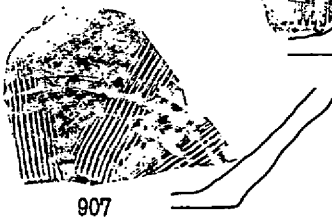
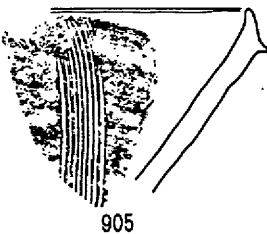
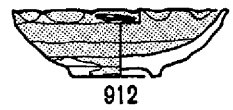
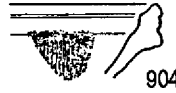
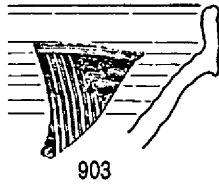
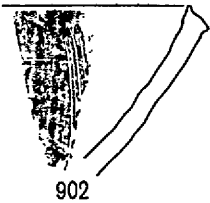
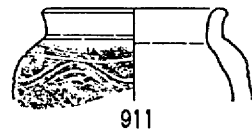
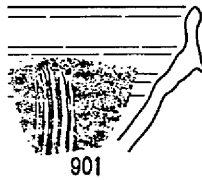
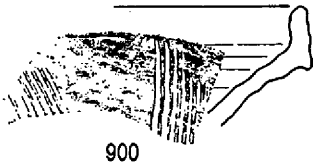
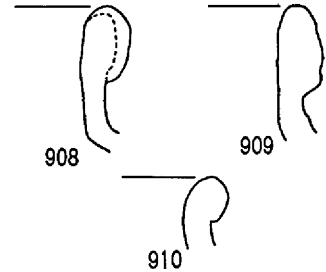
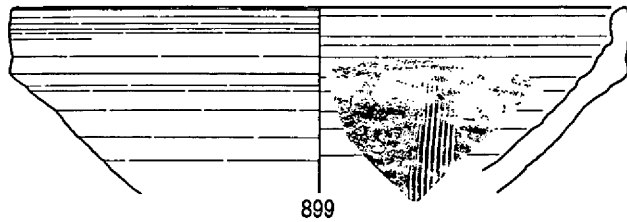
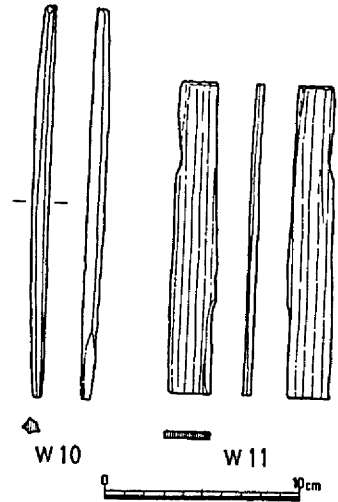
9区の中央部、溝-38の東部において検出された溝状の遺構である。幅20～40cm、深さ5cm前後を測るにすぎない。時期は、埋土及び出土遺物から中世であると考えられる。

溝-40～43 (第166図)

これらの溝は、いずれも9区の東部分においてほぼ南北方向に検出された。これらの溝は第166図のように重複しており、深さは、溝-40が約30cmと最も深く、他の溝は10cm前後を測るにすぎない。これらの溝の埋土はいずれも黒灰色砂質土で、また埋土中からは土師質の碗・小皿・土鍋や須恵質の碗や瓦器の小片などが出土している。時期は、いずれも中世であると考え



第167図 石組み遺構-2 (1/50)



第168図 11~13区落ち込み出土遺物

第4章 右岸用水路調査区

られる。

溝—44（第149図）

調査区の東端部、15区において検出された。検出した範囲が狭く全体の形状は明らかではない。南部分には土壌状の凹みがある。遺物は、埋土中より土師質の椀・小皿・土鍋などの小片が出土している。時期は中世であると考えられる。（平井）

6. 石 組 み 遺 構

石組み遺構—2（第167図、図版29—2）

7区西端ちかくで若干南北に長い長方形を呈し、東・西側に石積みを残し、他は抜き取られている。石積みも一部で2段、他は1段が存在するのみである。掘り方は底部にかけてゆるやかに掘り込まれた形で、計測値は長辺約140cm、短辺約110cm、最深部で25cmを測る。図示できる遺物はないが、中世の遺構と考えられる。（二宮）

7. 落 ち 込 み

落ち込み（第168図、図版30—1）

11～13区において検出された遺構である。検出した範囲が狭く全体の形状は明らかではないが、調査区域内ではゆるやかな曲線を描き、13区の西端部付近で北に屈曲する様相を呈している。この落ち込みは、端部より約50cm内側で約70cm下がり（海拔15cm前後）、その後徐々に深くなってゆくが、調査の過程で出水が著しく底面を確認することはできなかった。埋土は暗灰色砂質土が主体で、その他に角礫や炭・灰や貝殻による攪乱層が随所にみられた。遺物は、土師質の椀や小皿・瓦器・備前焼などと共に貝殻や馬骨や木製品が出土したが、攪乱層及び出水による不十分な調査のために混在したと考えられるものもあり、出土遺物からのみでは時期を想定し難い。図示した遺物は、899～911が備前焼、912・913が瀬戸系の施釉陶器と考えられる。備前焼でいえば、鎌倉時代末～南北朝時代のもの（902）から江戸時代のもの（904）まで出土しており多くは室町時代のものであると考えられる。これらの出土遺物及び土層関係からこの落ち込み遺構は、ほぼ中世のある時期（室町時代）を中心にして一部近世にわたって存在していたと考えられる。しかしながら、この遺構の性格については不明である。（平井）

第5節 近世の遺構・遺物

1. 土 壌

土壌—33（第169図）

5区のやや西寄りに位置し、溝—33を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、長径約175cm、短径約150cm、深さ50cmを測る。埋積土の下層には境内の全面に20～30cm大の角礫がほうり込まれていた。上層の埋積土は暗灰褐色砂質土である。遺物は第169図に示しているが、914～917の陶磁器により、この遺構は近世に属するものと考えられる。

土壌—34（第170・171図）

6区西端に位置する不整形の土壌である。南西の部分が不明確であるが、長径約530cm、短径約240cm、深さは最大で8cmを測る。第171図のうち、932以外が本遺構出土のものである。備前焼921～926、土師質土器927～929。陶磁器931、軒平瓦930。鉄器Ⅰ36・Ⅰ37等が出土している。これらの遺物と検出層位から、時期は近世にもとめられる。

土壌—35（第171図）

6区と7区にかかって位置し、西端は近世以降の井戸に切られている。平面形は不整形であり、現存長径約330cm、短径約270cm、深さ最大32cmを測る。井戸に切られる西端部は、溝状を呈している。図示した遺物は土師質土鍋932のみであるが、他に備前焼などの近世陶磁器が出土している。土壌—34と同様に時期は近世の枠でとらえうるのであろう。（光永）

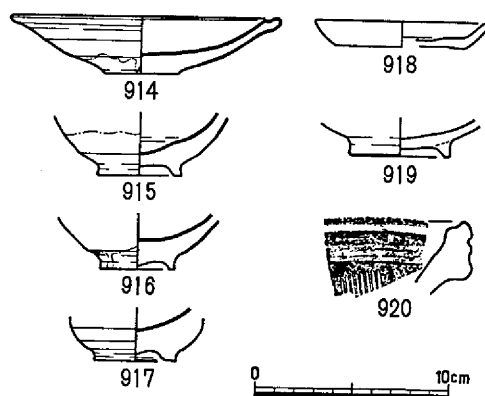
土壌—36（第172図）

8区の東部において検出された。平面形は、約150×120cmの楕円形を呈し、深さは検出面より約50cmを測る。この土壌の特徴は、図の1（炭灰褐色粘質土）と2（茶灰褐色砂質土）の部分の土質が全く異なっていることで、1の部分に桶のようなものが据えられていたのではないかと考えられる。また、四隅にはこの土壌に伴うと考えられる4本の柱穴が検出された。遺物は、1・2層より土師質の椀・小皿・土鍋や瓦器などとともに施釉陶器も出土しているが、いずれも小片である。時期は、明確ではないがほぼ近世に近いと考えられる。

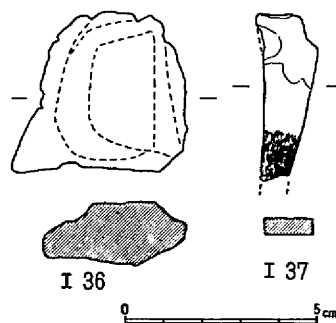
（平井）

2. 石組み遺構

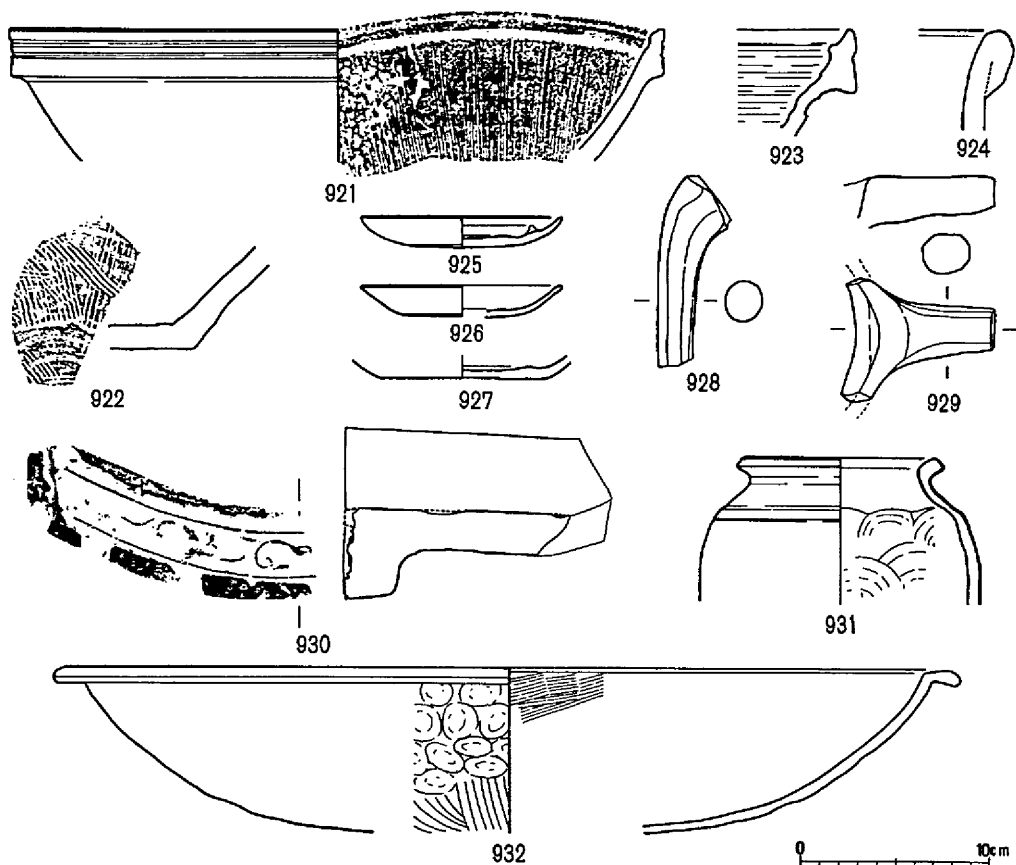
石組み遺構—3（第173図、図版30—2）



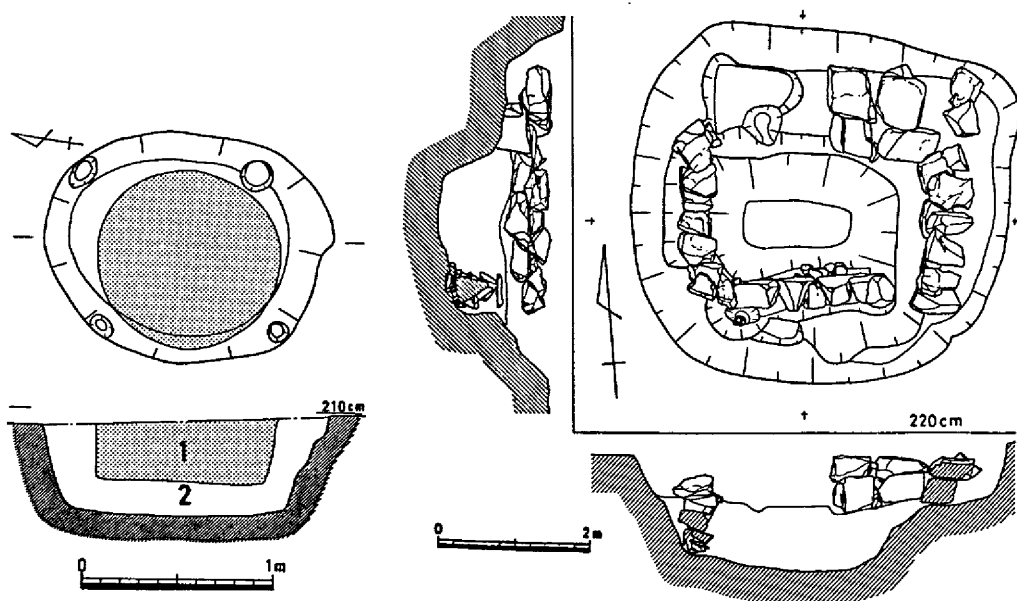
第169図 土壌—33出土遺物



第170図 土壌—34出土遺物



第171図 土坑—34・35 出土遺物



第172図 土坑—36 (1/40)

第173図 石組み遺構—3 (1/100)

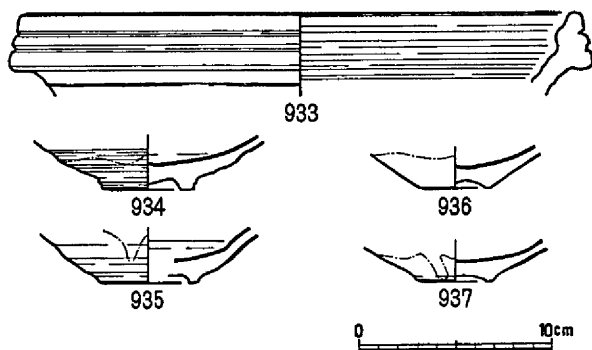
9区北側で調査区にはほぼ半分検出されたため、北側に拡張し、ほぼ方形を呈した全様を確認した。掘り方は2段で、石積みは北側で平坦面を作り、他辺に比べてより大きな石を用いて階段状に並べ、南側と西側では最下部より組み上げている。下部の掘り方については、東西に長い長方形を呈し、底部は丸味をもっている。石組み遺構一3の南西隅において、古い柱穴ならびに柱痕が検出された。この柱穴に伴うものは他に存在しない。規模は約 $500 \times 470\text{cm}$ 、深さ約 170cm を測り得た。上部構造については近世の削平を受け、不明である。埋没状況は、放棄する時点で石ならびに若干の遺物（土器・瓦・砥石・木製品でいずれも欠損品）を混入して埋めている。最下層には木の葉の自然堆積も確認された。

この遺構は、共同の水汲み井戸というよりは、洗い場と考えるのが妥当なようである。時代は混入遺物等から江戸時代のようなのである。（二宮）

3. 溝

溝一45（第174図）

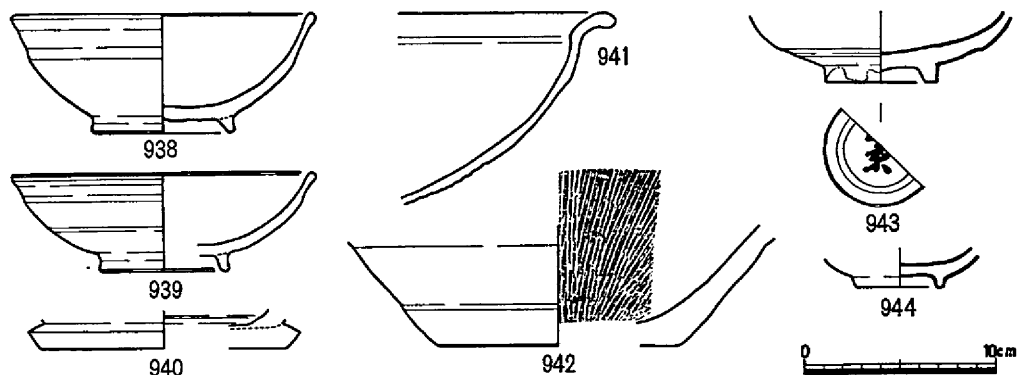
3区のほぼ中央を南北に流れ、溝一31および近世遺物を出土する土壌を切っている。検出時の幅約 90cm 、深さ 17cm を測る。遺物は、備前焼933・施釉陶器934～937等が出土しており、層序からみても近世に属する遺構と考えられる。



第174図 溝一45 出土遺物

溝一46（第175図）

5区の中央に位置し、北は調査区域外へ続くが、南端は調査区内で丸く終っている。幅約 80cm 、深さ 18cm 、検出長約 250cm を測る。遺物は、



第175図 溝一46 出土遺物

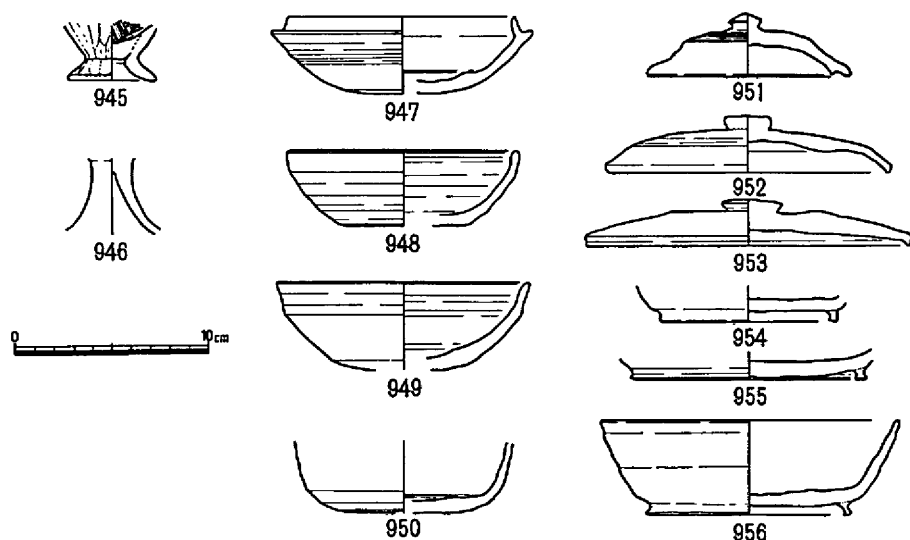
「早島式土器」938・939, 土師質土鍋941, 備前焼940・942, 施釉陶器943・944等を出土しているが, 時期は近世にもとめられよう。(光永)

第6節 包含層出土遺物

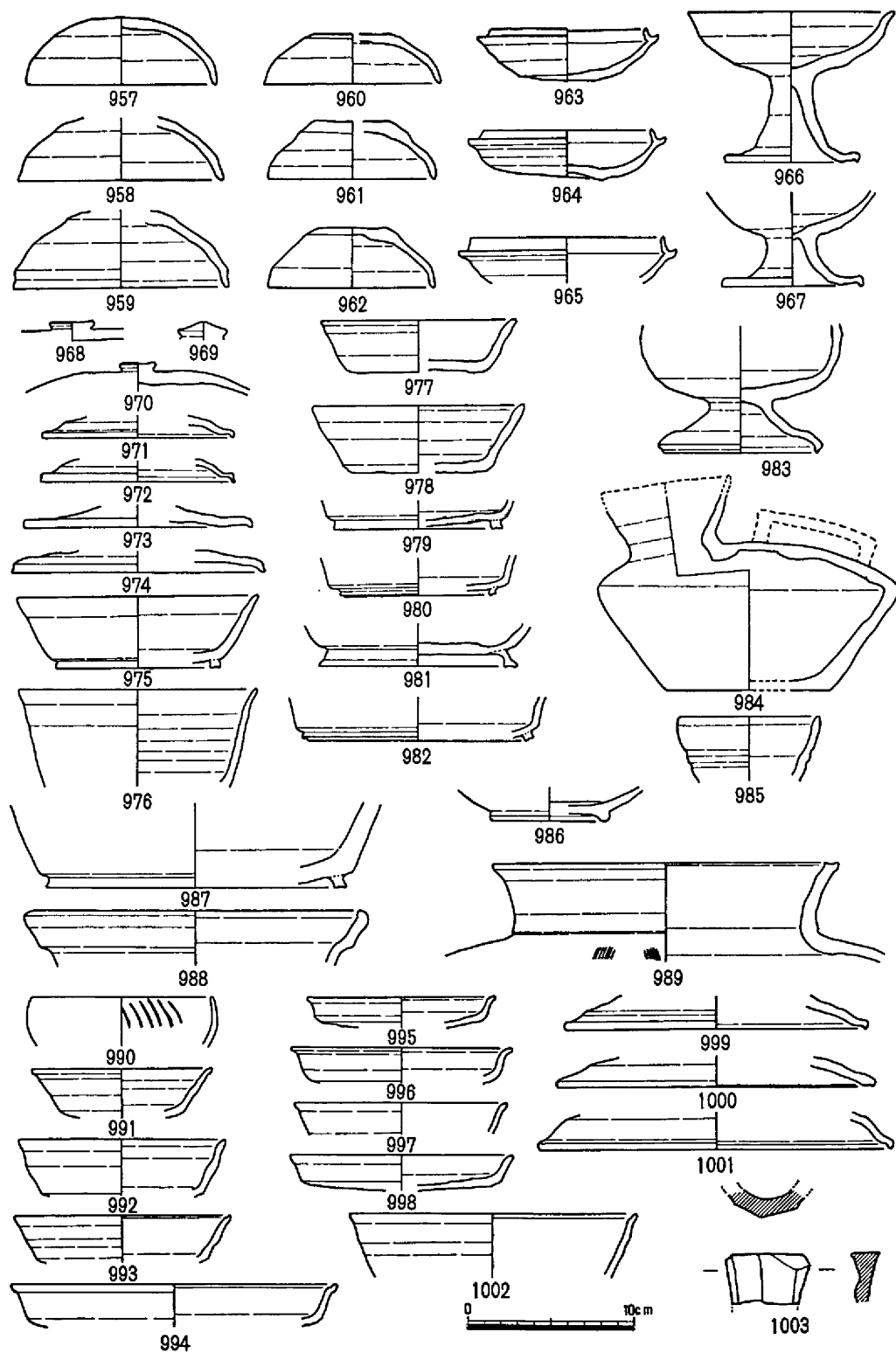
ここでいう包含層出土の遺物とは, いわゆる包含層出土の遺物の他に, その遺物の示す時期とは結びつかない遺構から出土した遺物を含む。

1 土器(第176図～179図, 図版38)

当調査区出土の土器の中で最も古い年代を示すものは, 溝-26出土の壺底部片559等の弥生時代前期の土器である。これに続く弥生時代中期の遺物は出土していない。弥生時代後期に至ると, 遺構もあり, 土器は古墳時代以後の遺構にも混入している。第176図に掲げる遺物は, 調査区の主に西半から出土したものである。945は弥生時代後期後半に比定される製塩土器で, 遺跡全体からの出土量はさほど多くはない。947～950は須恵器杯で, 948・949は逆転して蓋になる可能性もある。いずれも古墳時代後期, すなわち6世紀後半に比定される。951は内面に身受けのカエリをもち, 天井部には宝珠形のつまみをもつ蓋で, 他に類品も少なく, セット関係をなす杯の出土はみられない。7世紀中葉に比定されよう。952・953はいずれも蓋で, 954～956などの杯と型式的にセット関係を示している。奈良時代通有の供膳器種のもっともポピュラーな須恵器である。これらの杯・蓋は, 第135図の567や第139図632の精製土師器などと共



第176図 1～5区出土遺物(1)



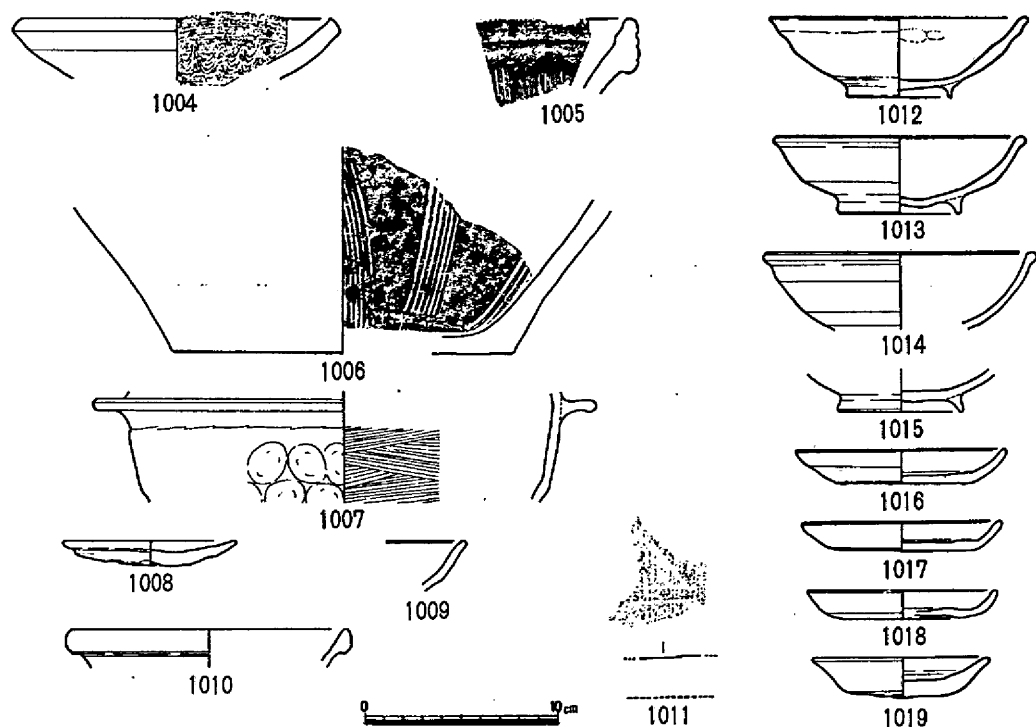
第177図 6~15区出土遺物(1)

第4章 右岸用水路調査区

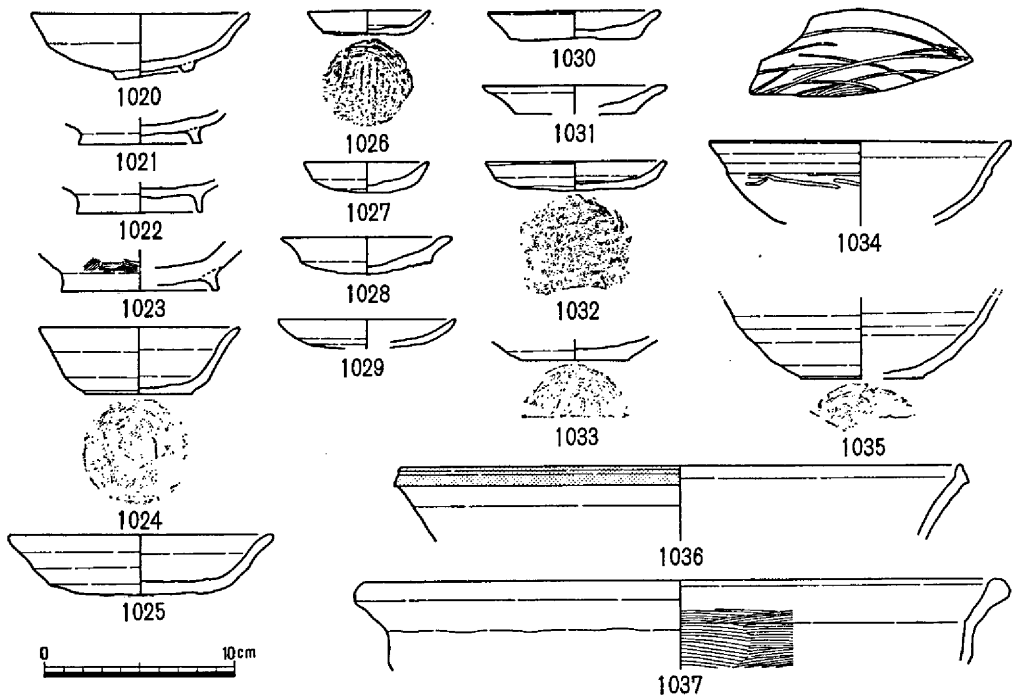
に7世紀後半から8世紀にかけての日常生活用具としての土器構成の一端を示しているが、先述の発掘区東方形の墨書土器や帯金具の出土等から推察すると、極めて官衙的な供膳形態の一要素をなすものであろう。

第177図の957～967・983は須恵器で、主に7・8区において出土したものである。960～962は蓋になる可能性もある。時期は6世紀後半～7世紀前半であると考えられる。この時期の遺物は7・8区以外ではほとんど出土していない。968～982・984・985・987～989は同じく須恵器で、主に8世紀代のものであると考えられる。また、990～1003は丹塗りを施した土師器である。いずれも小片である。時期はほぼ8世紀代のものであると考えられる。これらの奈良時代の遺物は6～10区において出土しており、建物一21や溝一29と関連するものであろう。986は須恵質の緑釉陶器である。

第178図は、1～5区で出土した中世の土器である。第109図の18・22層にあたる包含層からの出土である。備前焼1004～1006、土師質土器1008・1016～1019、須恵質土器1007、「早島式土器」1012～1015、瓦器1009、白磁1010、瓦1011の他に、亀山焼・施釉陶器・青磁等も出土している。量的には土師質土器の皿・小皿、「早島式土器」の椀が多い。これは日常雑器の中に占める比重を反映するものといえよう。



第178図 1～5区出土遺物(2)



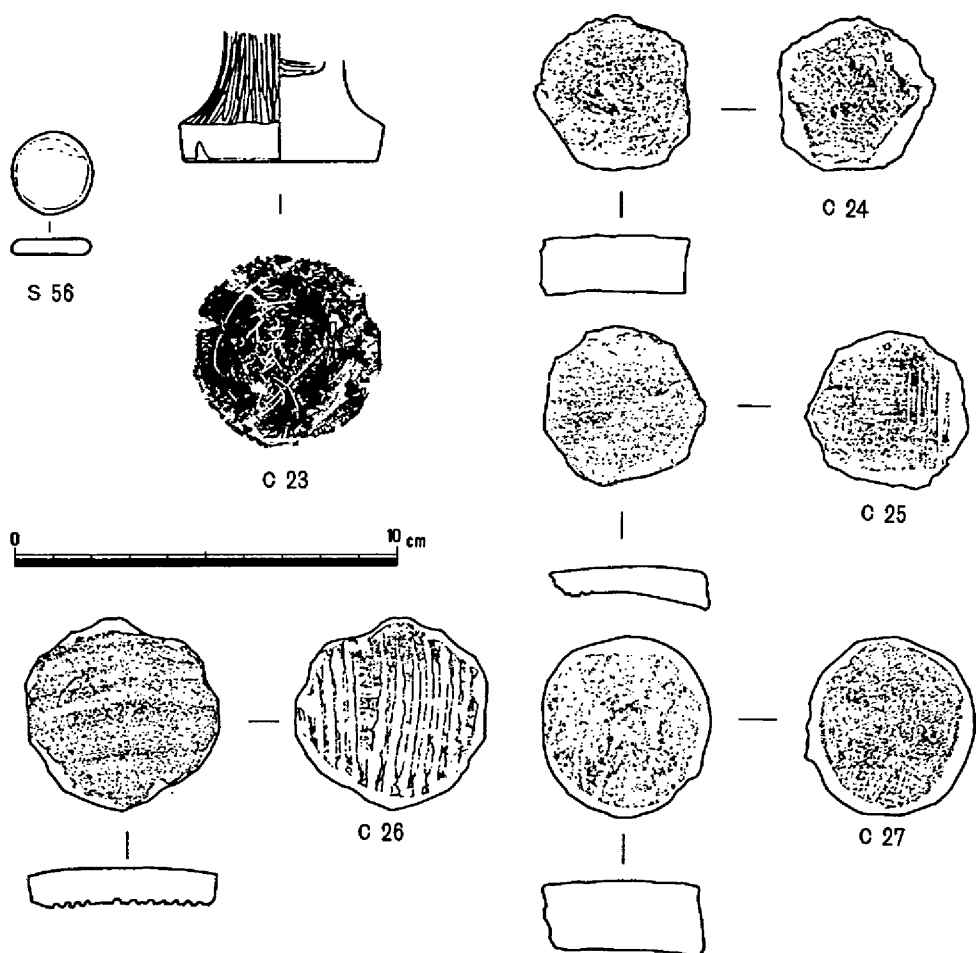
第179図 6～15区出土遺物(2)

第179図は、6～15区から出土した中世と考えられる遺物である。1020～1023は土師質の碗，1025～1031は土師質の皿，1024は須恵器の杯で底部は糸切りである。1033・1035は須恵質の碗で底部は糸切りである。1034は瓦器の碗で外面にも暗文がある。1036は須恵質の鉢，1037は土師質の鍋である。これらの他に図示できなかったが、青磁・白磁の小片及び内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキが施されている瓦器碗の小片が出土している。（岡田・平井・光永）

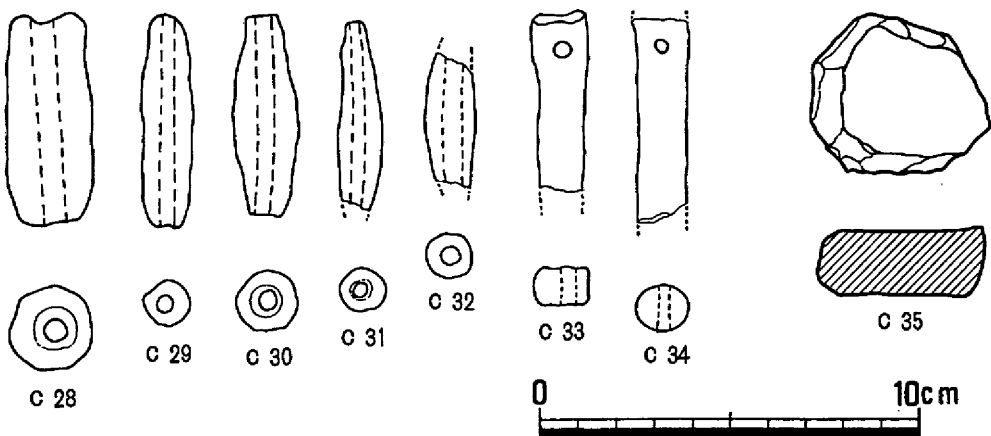
2 土製品（第180・181図，図版38）

第180・181図に掲げた遺物のうち、S56を除く土製品は、いずれも中世遺物包含層からの出土である。C23は瓦質土器であるが、器形・用途は不明である。ていねいに面取りされた外底部には、細い線刻で「三位公花押か」と書かれている。書体は達筆で書き慣れている。时期的には鎌倉時代に比定される包含層から出土しており、この時期の貴重な文字資料である。

C24～C27・C35は、いずれも玩具あるいは鍾と推定される円板で、C25・C26は備前焼播鉢，C24は備前焼壺，C27・C35は瓦を転用したもので凹面には布目圧痕を残している。最近の中世遺跡の調査では、このように土器片等を加工した円板や面子が出土する例が増加している（註7）。金楽寺貝塚では、101点にのぼる出土数があり、12世紀中頃から後半にかかる瓦器



第180図 1～5区出土遺物(3) (1/2)



第181図 6～15区出土遺物(3) (1/2)

に相伴しているところから（註8）、この時期の比較的一般にみられる日常品であることが知られると共に、使用時期をも示唆している。

C28～C34は土錘である。**C28～C32**は軸方向に貫通する孔を持ち、**C33・C34**は軸方向に直交する孔が穿たれている。（岡田・平井）

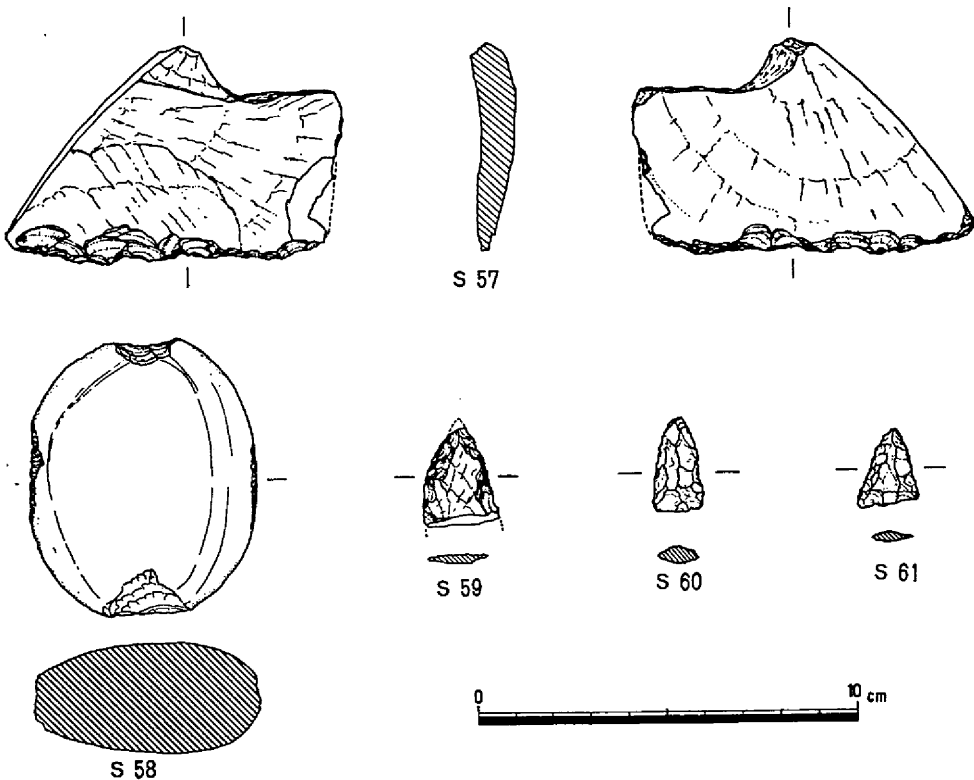
3 石器・石製品（第182図）

S57はサヌカイト製のスクレイパーであり、5区の古墳時代に比定される包含層から出土している。**S58**は花崗岩製の石錘で、4カ所の打ち欠きをもつ。5区の中世遺物包含層から出土している。**S59～S61**はサヌカイト製の石鏃である。**S59**は溝-27の上面から、また**S60・S61**は中世の柱穴からそれぞれ出土している。

S56は基石で、径2.1cm、厚さ0.4cmを測る。表裏共に使用による磨滅が認められ、扁平となっている。中世～近世に比定できる。

（岡田・平井・光永）

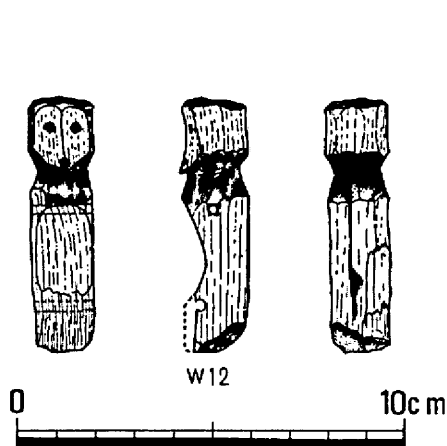
4 木製品（第183図）



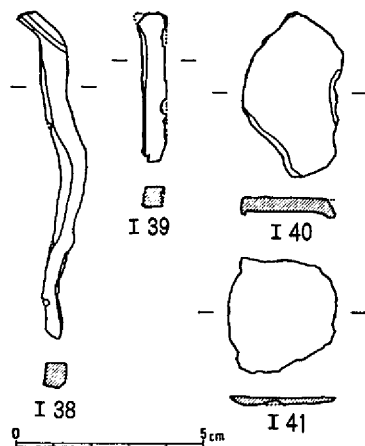
第182図 石器（1/2）

第4章 右岸用水路調査区

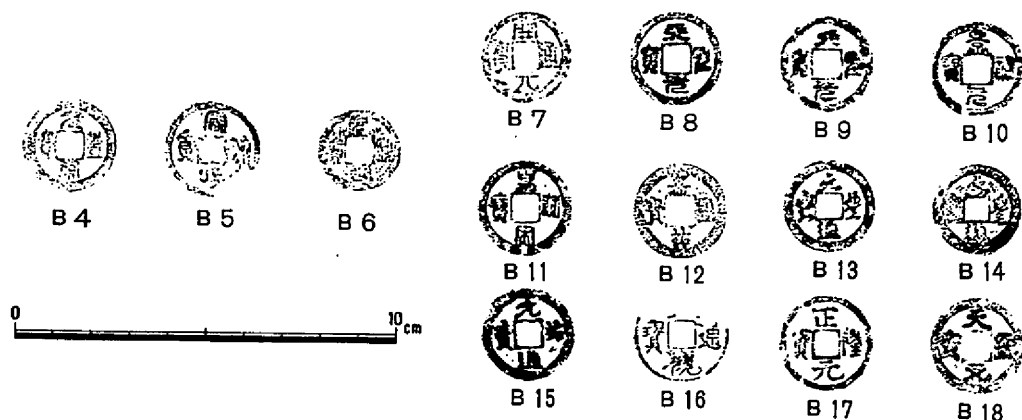
W12は、15区の中世包含層中より出土したものである。顔と首および体部の背の部分などに墨痕が認められる。また体部には径約2mmの円孔が穿たれている。(平井)



第183図 木製品 (1/2)



第184図 鉄器 (1/2)



第185図 銅 銭 (1/2)

表3 銅銭出土遺構・層位一覧表

銭 種	初鋳年	出土遺構・層位	銭 種	初鋳年	出土遺構・層位	銭 種	初鋳年	出土遺構・層位
B 4 元豊通宝	1078年	柱 穴-94	B 9 天聖元宝	1023年	7 区黒褐色土	B 14 元豊通宝	1078年	7 区黒褐色土
B 5 宣和通宝	1118年	"	B 10 景祐元宝	1034年	"	B 15 元祐通宝	1086年	"
B 6 元………	不 明	"	B 11 皇宋通宝	1039年	"	B 16 大観通宝	1107年	"
B 7 開元通宝	621年	7 区黒褐色土	B 12 嘉祐通宝	1056年	"	B 17 正隆元宝	1158年	"
B 8 天聖元宝	1021年	"	B 13 元豊通宝	1086年	11~13区落ち込み	B 18 天盛元宝	1158年	"

5 鉄器（第184図，図版3）

第184図に示した鉄器は、いずれも中世遺物包含層からの出土である。**I 38・I 39**は、断面方形の釘かと思われる。**I 40・I 41**は、その原形が不明である。断面方形の釘と考えられる鉄器は、第153図に示したように、中世の柱穴からも出土しており、この時期の建物に使用されていたものと考えられよう。（光永）

6 銅銭（第185図）

今回の調査で出土した銅銭は15点を数える。そのうち、**B 4～B 6**は、中世の柱穴—94から出土したもので、他は黄褐色を呈する中世砂質包含層から出土したものである。

B 4～B 6については、遺構に伴うものであり、第4節の4の中で扱うべきものであるが、ここで銅銭を一括して扱うものである。この柱穴—94からは、土師質小皿・「早島式土器」椀等が出土しており、後者には高台径に大小2種類ある。これらの土器の示す時期は、3枚の銅銭の初鑄年よりはやや新しいとみられる。

いずれも中国からの輸入銭で、宋銭が多い。銭種と初鑄年代については表3のとおりであるが、大半は12～14世紀、すなわち鎌倉時代にわが国にもたらされ、流通した銅銭である。

（岡田）

第7節 小 結

弥生時代に比定しうる遺構としては、土壙—27，溝—16～21がある。溝—22～25については、弥生時代に限定することは難しいが、これも含めた10本の溝についてみるならば、その流路方向は、ほぼ東西方向になる。4区の露頭岩磐は北東方向にあった丘陵部から延びるものであり、溝—20～25はこの南を廻る形となっている。溝—16～19については、この丘陵の北側に位置しており、いずれも東側への続き方は不明であるが、この丘陵西裾の部分で南へ流れを変えたものと考えられる。土壙—27については両側を溝—26・27に切られており、加えて半掘のためにその全容は不明であるが、多量の土器が一括廃棄された状態を示すものである。これらの遺構はいずれも後期を遡らない時期のものであり、後期後半の遺物は、土壙—27，溝—20で多量に出土している。遺構は検出されていないが、弥生時代前期の遺物は溝—26等で出土しており、この地での人間生活の開始時期が弥生時代前期にまで遡ることを示している。

古墳時代の遺構で明瞭なものとしては、第110図に掲げる土壙—25，第127図に掲げる土器溜りが検出されたに過ぎないが、奈良時代以降の造成・削平によって消滅した遺構群の存在も推

第4章 右岸用水路調査区

察される。出土遺物では百・古・Ⅰに比定される古墳時代前期の遺物が調査区内には散見する。後期では、須恵器杯・高杯片・土師器などがみられるのみで、集落址が存在した可能性もある。出土遺物で注目されるのはやはり埴輪であろう。その大半は溝―27で出土したものであるが、図化に至らぬ細片は溝―27の東方4区西半部にも及ぶ。この事実は北方丘陵部に周辺の平野部を見下ろす古墳の存在をうかがわせる。とりわけ形象埴輪の質・量においては、金蔵山古墳におとらず、かなりの規模の前方後円墳を含む古墳群が存在したことが推定される。時期的には5世紀代に比定されよう。

奈良時代の遺構の検出は2～11区に集中する。重要な遺構としては、溝（溝―26・溝―27）掘立柱建物、柱穴列、土塋（土塋―28）などがあり、低水路調査区で明らかにされた、官衙的遺構群と関連がみられ、更にそのひろがりを示しているといえよう。建物―21はその構造・規模の点から倉庫と推定され、低水路調査区で検出された掘立柱建物群と密接に関連する。出土遺物では、7世紀代から8世紀代、平安時代に至る須恵器、土師器の出土が比較的多く、その中のいくつかの器種は官衙的供膳形態の構成を満たすものである。とりわけ第139図に掲げる636などの土師器高杯脚部片はていねいな面取りがみられ、その出土が極めて限定される性格からも、本遺跡の官衙的性格・機能を濃厚に示す遺跡であることが考察されよう。

また、溝―29から出土した銅製帯金具や墨書土器もそうした遺跡の性格を示唆する遺物といえよう。ところで「上三宅」という墨書についてであるが、読み方としては「カミ（ノ）ミヤケ」の可能性が強いと考えている。そこで、まず「ミヤケ」であるが、「ミヤケ」は一般的には律令体制成立以前において「大和朝廷」が直接支配していた土地・人民・倉庫などを意味すると考えられているが、律令体制成立以降は何らかの公的な建物——たとえば「郡家」・「官倉」・「荘園内の荘所」——を指すようになったとされている（註9）。一方、すでに何回も触れてきたように百間川当麻遺跡は、低水路および右岸用水路調査区で、合計14棟の倉庫と考えられる奈良時代の掘立柱建物が検出され、また官衙的色彩の濃い遺物も数多く出土している。こうしたことから、「ミヤケ」という墨書は、郡家あるいは公的な倉庫のいずれかを意味しているものと考えられる。また、「上」については、百間川当麻遺跡が奈良時代の備前国上道郡に所在していることから「上道郡の郡家」・「上道郡の倉庫」としてか、あるいは「上の倉庫」・「下の倉庫」といった意味で用いられたのではないかと考えている（註10）。いずれにせよ、「上三宅」の墨書は、低水路調査区出土の「官」印須恵器と共に当遺跡の性格を考える上で重要な文字資料といえるであろう。

今回の調査によって、もっとも出土量が多いものに中世陶磁器・須恵器・土師器などがある。これらは包含層および柱穴・溝から出土したものであるが、当遺跡の中世における隆盛を物語る遺物である。個々の遺構については前述のとおりであるが、中世出土土器から推定年代

を検討してみるといくつかの手がかりが見出される。たとえば、①土師質土器の碗では溝—30出土遺物からみると、口径は14～15cm、器高約4～5cmを測り正円を描きわずかに外方する比較的高い高台をもつ。そして、体部には上位に成形の際生じる段がみられる。②各遺構・包含層から出土している瓦器は726・835・836のように高台が断面形合形を示すものが若干みられ、稲垣晋也氏の研究（註11）では13世紀初頭に比定している。全形をうかがえる704・705などはおそらくそれに続く型式のもので、近年の報告（註12）では和泉型と呼称されている。これらはやはり13世紀代に比定される。③白磁・青磁の出土が比較的多くみられ、前者は後者よりも若干出土量が多い。太宰府における森田勉・横田賢次郎両氏の研究成果（註13）によるとは、ほぼⅢ期に比定でき、概ね鎌倉時代に輸入された中国製磁器である。以上の事柄をまとめてみると、ほぼ13世紀から14世紀にかけての集落が存在したことは疑い得ないであろう。これらに続く時期を示す遺物として溝—32から出土している備前焼があげられる。これらの大半は14世紀代以降に比定され、第155図の土層断面図にあらわれる二つの大きな時期を画する遺構面の存在を示唆している。溝—30からはほとんど備前焼の大片が出土していないことを考慮しても、時期的な備前焼の普及を考えてみる必要があろう。1～3区にかけての柱穴群も切合い関係があることから、先述の年代幅は十分に考えられよう。また、表3に掲げる宋銭（北宋銭）にしても、その輸入年代からも時期的に限定されよう。

集落の性格は、地理的条件と密接に関連する。やはり奈良時代と地勢の大きな変化はなく、海岸線の内陸部に近い部分に位置していたのではないかと推定される。

5区から10区にかけて検出された、近世から近代にかけての井戸や石組み遺構などは、後世の削平を免れて遺存していたものであるが、正確な実年代を比定する手がかりはない。出土遺物の一部、たとえば伊万里焼や備前焼などの陶磁器片や、層序から推定すると江戸時代から明治時代にかけての集落が現代まで存続していることを物語っている。3区で検出された溝—45などは奈良時代から連綿と継続する地割線上に位置し、現代でも屋敷地の境界に位置することからも、地勢にあった生活面の存続を物語っている。

以上、百間川当麻遺跡右岸用水路調査区の昭和56年度発掘調査の概要をまとめてみた。報告書作成にあたっては、調査担当者4名の討議をもとに作成・執筆したものであるが、文化課同僚諸兄の教示を随所に賜った。記して謝意を表する次第である。

（岡田・二宮・平井・光永）

第4章 右岸用水路調査区

註

- 註1 石野博信・榎本誠一・松下勝・山本三郎ほか『川島・立岡遺跡』（本文編）1971年3月太子町教育委員会刊。「20溝」出土土器の中でB型に分類され、独特の技法をもつものとして、酒津式土器との関連に注目されていた一群の土器があるが、これらに比べると底部はしっかりしており器面の調整も古相で、先行する型式として、本遺構出土土器の一群が考えられる。
- 註2 西谷眞治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第一冊 倉敷考古館刊 1959年8月。5世紀前半に属する埴輪が注目される。
- 註3 早稲田大学講師金子浩昌氏のご教示によって判明した。記して謝意を表する。
- 註4 「衣服令」の規定による。
奈良国立文化財研究所「平城京左京一条三坊の調査」『平城宮発掘調査報告』VI 1975年1月F, 金属器, 帯金具の項を参考にした。
- 註5 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館論集』4 九州歴史資料館 1978年。
- 註6 九州歴史資料館『太宰府史跡昭和56年度概報』1982年3月刊などによる。
- 註7 兼康保明「小型円板」『日本仏教民俗基礎資料集成』4 中央公論美術出版 1977年 に詳しく紹介されている。
- 註8 岡田務ほか「金楽寺貝塚Ⅱ」『尼崎市文化財調査報告』第14集 尼崎市教育委員会 1982年3月に良好な資料が報告されている。
- 註9 彌永貞三「大化以前の大土地所有」『日本経済史大系1 古代』東京大学出版会 1965年。また、東大寺領横江荘家跡の発掘調査で「三宅」の墨書土器が出土している。吉岡康暢『史跡東大寺領横江荘家跡』石川県松任市教育委員会 横江荘遺跡調査委員会 1979年。
- 註10 参考になる墨書例として伊場遺跡から出土した「下厨南」の墨書土器がある。向坂鋼二ほか『伊場遺跡遺物編2』『伊場遺跡発掘調査報告書』第4冊 浜松市教育委員会 1980年。
- 註11 稲垣晋也「瓦器碗の成立と展開」『日本歴史考古学論叢』第2 雄山閣出版株式会社 1968年7月。
- 註12 橋本久和ほか「上牧遺跡発掘調査報告」『高槻市文化財調査報告書』第13冊 高槻市教育委員会 1980年2月。
- 註13 註5に同じ。

第5章 ま と め

当麻遺跡は、旭川東岸に広がる平野（旭東平野）の東南端の位置に所在する。この平野の地理的、歴史的環境については、第一章に述べるところである。そこで、ここでは時代をほぼ古代に限って、その景観についてふれてみたい。

当該地域の古代における行政区域は、ほぼ備前国上道郡に相当すると考えられる。備前国府は、『和名抄』（註1）によれば、御野郡と記載されているが、その所在については諸説ある。しかし、この平野には、現在の小字名で国長、国長宮、国府市場といった地名が見られ、国府がその付近に所在した可能性は大きい。そこで、所在についての各氏の説を見ると、まず、厳津政右衛門氏（註2）は、岡山市国府市場字国長に所在する「国長宮」を中心とし、西を新田用水、東を中井川の間に想定し、北限を字北国長とする方八町と推定されている。石田寛氏（註3）は、字長盛と、字タサイを結ぶ線を北限に、字長盛と字土井東を結ぶ線を西限に想定し、それに囲まれる方八町を国府域と推定されている。この石田説は、厳津説とは東西に二町の違いが見られるが、「国長」の地名に重点を置く点では一致する。木下良氏（註4）は、歴史地理的立場から、「国長宮のすぐ東を通る土地割線が大字界をつくる」こと、「その西側が、国長宮域を除いて、わずかに低地となること」また、この大字界が、中近世の山陽道を中心に、北と南に3～4町の位置で東に曲ることに注目され、その位置を北西隅、及び南西隅と推定し、その東側に方八町の国府域を想定されている。また、高橋護氏（註5）は、山陽新幹線の建設に伴い調査された雄町遺跡の調査結果や、周辺の微地形の観察等から、国府市場、市場出村付近で、ムクイ、ヌグイと呼ばれる旧河道が、古代の地割線に強く規制されていることに注目され、それが、「国府造営に伴うものと理解するのがふさわしい」と考えられ、その内側に求められるものと推定されている。

以上の4氏の説について概略を示した。それぞれに若干の違いは見られるものの、「国府市場」を東限に置くか、その中心に置くかの差異と考えられ、極端な違いは見られず、ほぼ近い地域に求められている。いずれの説が正しいかの判断は、置くとして、「国府市場」と、「国長」との中間付近に見られる旧河道から西については、地割線の乱れが大きいこと、古い地割線が見られないこと等を考慮すれば、むしろ、その旧河道より東側に求め得る可能性が大きいと考える。また、「国府市場」の北西には、備前国総社が在り、その位置からは、国府の位置は決定できないが、国府の所在地をその近郊におくことはできるであろう。

国府の位置については、先に述べた説に要約されるものであるが、同地域における上道郡衙



アミは旧河道　波線は推定海岸線

第186図 旭東平野古地形復元図 (1/5,000)

については不明である。『岡山市史』(註6)には、国府市場の高下を中心とする付近と、四御神の総堂谷付近の二説を可能性として呈示してある。前者は、郡家の転化した可能性があるもので、後者は、郡の総社の所在地であり、郡衙との密接な関係を考慮しての提示である。両者ともに決定的な資料に欠けるため、今後の調査研究の必要があるが、現状では、有力な候補地と言えるであろう。

古代の山城として、岡山市草ヶ部の小廻山に朝鮮式山城が所在する。同所は、国府から、直線距離にして約6kmの位置にあり、近隣に類を求めれば、備中国府と鬼ノ城、備後国府と常城のように国府との関連が注目される。小廻山は、立地的には、内陸的であり、瀬戸内海よりも、旧山陽道を意識したものと考えられる(註7)。また、同所の地名「草ヶ部」は、古代の軍事的部民である日下部氏との関係が考えられる。同じく軍事的な遺跡としては、岡山市宿、長利にかけて「段地」、「戸兵」、「矢倉」等の地名が見られ軍団が所在したことが考えられる(註8)。この位置は、国府と、小廻山とのほぼ中間にあたる。国府の所在する平野が、東へ展開し、この付近を過ぎるとその幅を減じ、狭隘部を形成する。その狭隘部を北東へ進むと小廻山に至る。また、その地点より南に進むと約2kmで瀬戸内海に至り、交通の要衝であることが指摘できる。しかし、そこを軍団の所在地として確定できるものではないが、残存する地名からすれば、有力な候補地にはなりうるであろう。

この旭東平野には、条里制の遺構を見ることができる。この条里制については、古くは永山卯三郎氏(註9)の研究がある。氏は、坪名復元の研究から、切絵図の調査等、基本的な研究を成されているが、坪名の機械的な割り振りがあり、若干の修正の必要はある。しかし、岡山県下の条里制の研究においては、その基本を成すことには変りはないであろう。旭東平野において、条里制の遺構が明瞭に認められるのは、国府市場、中井、赤田、藤原、石立を結ぶ線より東側である。その東側にあっても、四御神、土田、雄町、穴甘、宿、長利、目黒、可知にかけての一带は、その遺存状態も非常に良好であると言える。それに比べ、その西側にも、条里制の遺構は認められるものの、多少の乱れが見られる。その乱れは、旧河道との関係において理解されるべきものであろう。つまり、この平野には、大きく4本の河道の痕跡を見ることができる。その一つは、賞田、市場出村、雄町、長利を結ぶものであり、第二は、賞田、国府市場の西、藤原の北、高屋の北、兼基の南、長利を結ぶものである。他の二本は、条里遺構の認められない地区であり、後者の西側に確認されるものである。先述の2本の河道は、国府市場付近を除いて条里制にほとんど規制されることなくその河道をたどることができる。そして、その2本の河道に挟まれる範囲において、条里制の遺構に若干の乱れが見られる。この河道について、その時期を確定することは難かしいが、東側の河道については、条里制の規制が強くないことを考えると、同時期、もしくは、条里制の施行される時期には沼沢地であり、水田化

第5章 ま と め

の難かしい状態であったと推測される。その点は、河道の痕跡の明瞭さに欠ける部分のあるところからも推測できる。それに比べて、西側の河道は、河岸段丘状を呈し、その中間に幅40m前後の河道が明瞭に確認できる。この痕跡の強さからすれば、西側の河道がより新しいものと推測される。東側の河道に関しては、雄町遺跡の調査結果から「旧河道の凹地は、弥生時代中期以降、流量を減じてしだいに滞水状態に変わり、5世紀後半から7世紀前半にかけては、厚い泥炭状の植物堆積を残しているが、歴史時代においても粘土層の堆積する沼地として永く残っていた」（註10）旨が報告されている。百間川内に所在する各遺跡の調査からしても、弥生時代後期には、水田が非常に広い範囲に展開することが知られてきており、弥生時代中期段階において、沖積化は、ほぼ完了していたものと考えられる。また、西側の河道に関しては、百間川長谷遺跡の調査において、中世に利用された微高地が存在することは（註11）、その微高地の形成は、それ以前ではあるが、その微高地に検出した遺構の時期はほぼ一時期であり、古い遺物、遺構の見られないことは、その微高地の形成が利用された時期に近いことを推測させるものであろう。先に述べた推測と合わせ考えると、河道は、東から西へと変遷したものと考えられ、河道の痕跡は、5世紀以降を物語ると言えるであろう。つまり、条里制施行時には、ほぼ現在見られる平野の形状を呈していたと推測するものである。

条里制遺構の見られる南限について見ると、可知付近まで認められる。先に述べた旧河道は、長利付近で流路を南に変えて海に注ぐものであり、この地域においては、旧河道の右岸側より左岸側において遺存状態は良好であり、坪名もよく残存している。たとえば、目黒においては、「十ノ坪」「十五」「二十二」の地名が、南北に並ぶことから、西北隅に始まって、東に進み、東端で南に下り、西に進むというように千鳥に坪名が付されたことを推測させる。また、可知においても、「一ノ坪」「三ノ坪」「十ノ坪」の地名が残っており、この付近の方形区画は、条里制の遺構であることを推測させる。また、牛窓本蓮寺文書（註12）の中に、「可知郷内唐臼里拾坪」と見え、可知郷内に、条里制の里名と坪名が遺存していたことが、知られることから、可知郷にも、条里が及んでいたものと認められる。この本蓮寺文書に見られる「可知郷」は、現在の可知にその遺名をとどめるものと考えられる。これらのことからして、条里制の施行された南限は、現在の可知付近に見られる方形の区画をその遺制と認めることができ、倉安川と、県道西大寺線との中間より少し南にまで及んでいたものと考えられる。

条里は、可知まで及んでいたものと考えられ、その間を流れる河川は、この可知付近で海に流入するものである。そして、海に流れ込む河口付近は、入江の状況を呈していたものと考えられる。「大安寺流記資材帳」（註13）に見える「岩間江」は、その入江を言うものと考えられる。つまり、山間を流れてきた旭川は、龍の口山塊の西南、祇園付近より、旭東平野を流走し、長利付近において流れを南に変えて海へ流入していた。その時、河口部にデルタを形成さ

せた。そのデルタも、大多羅、松崎までは及ばなかったため、その付近は、葦原として未開地であった。一方、右岸側の米田付近は、流路変換の内側に当り、自然堤防を形成し、それが当麻遺跡の基盤層として成長したものと推測される。そして、条里制施行時には、ほぼ一本の河道にまとまり、祇園より、国府を経て、長利で流れを南に向け、岩間江に注いでいたと考えられる。

当麻遺跡は、先に述べたように、自然堤防上に存在する遺跡である。この遺跡から出土した最も古い遺物は、縄文時代晩期の土器片である。しかし、それに伴う遺構は、検出されていないため、人が生活していたか否かについては不明である。人の生活の痕跡を見せる最も古い遺構は、弥生時代前期のものである。それは、生活面に掘り込まれた溝であり、その埋土中より出土した壺、甕等の土器片である。この時期に始まり、断続的ではあるが、現在まで人の生活の跡を見ることができる。その概略を記述してみると、弥生時代中期のものとして、溝、土壌を検出した。弥生時代後期になると、住居址、溝、土壌等を検出した。弥生時代の遺物は多く、土器、石器（石斧、石鏃、石庖丁及び、多量のサヌカイト片）が出土している。古墳時代の遺構としては、住居址、井戸、溝、土壌があり、同時期の土器が多く出土している。古代になると、企画性をもって建てられた掘立柱の建物群と溝を検出した。出土遺物としては、銅製帯金具、墨書土器、陶硯、緑釉陶器、須恵器、土師器等が出土している。中世の遺構としては、掘立柱建物、井戸、溝、土壌墓等であり、備前焼、輸入陶磁器、瓦器、瓦、面子、櫛等が出土している。近世になると、井戸、土壌、溝を検出し、備前焼、伊万里、唐津等の陶磁器類、漆器椀、木製品等が出土している。ここでは、それ等の全てについて考察することは不可能であるので、古代の一時期に限定して概観してみたい。

古代の遺構としては、掘立柱の建物群と溝がある。溝は、右岸用水路の調査区で検出したため、その方向性、区画性において具体性を欠くため、他の遺構との関連については不明瞭である。それに比べて、建物は14棟を検出し、比較的まとまって検出したため、その企画性も知ることができる。具体的な群別は、前章で述べた通りであるが、再度グループ分けをしてみる。第1群は、建物―1～4、8、9、21の7棟である。第2群は、建物―5、11、12の3棟である。第3群は、建物―7、10の2棟である。他に2棟あるが、いずれもその方向を異にしており、5群に分けられる。これら建物群にあって、第1群が検出数の多いこともあって最も企画的である。その中にあって、建物―1、3、4の統一的企画性は非常に強いものが見られる。この第1群の中にあっても、建物が近接しすぎており、同時期建つことの不可能な建物があり、同時に全ての建物が存在したものとは考えられない。しかし、建て替え、もしくは建て増しにしても、同一企画のもとに施行されていることは、その企画の統一性の表われからも解るであろう。

建物群を5群に分類したが、それら各群は同時に存在したものではなく、時期が異なるもの

第5章 ま と め

と理解されるであろう。この建物群を見ると、総柱建物が多く、この建物の性格を示すものと言えるであろう。その性格も、今回調査した建物群について言えることであって、当麻遺跡の同時期の遺構全てに及ぶものではない。この一群の建物について、その性格を推定すれば、倉院の一部を想定することができるであろう。

出土遺物を見ると、多くの須恵器、土師器と伴に、墨書土器、銅製帯金具、陶硯、緑釉陶器、押印須恵器が出土している。墨書土器は、須恵器坏身の底部外面に書かれているもので、「上三宅」と読める。この「三宅」の意味であるが、前章でも述べたように、公的な建物群—官衙—を指すものとして理解できるであろう。その意味することが、官衙としても、それが、国に関連するものであるか、郡に関連するものかについては不明である。しかし、建物群との関連において考えれば公的な倉庫群を意味するものと理解できる。その場合においても公的な意味については不明である。この「三宅」が、『出雲国風土記』（註14）に見られるように郷おきに見られる「正倉」と性格を同じくするものであるなら、岡山県作東町高本遺跡の倉庫群（註15）と同様に、郡の倉院（註16）としての性格を有するものとも考えられる。

帯金具は、銅製の丸靱である。計測値を示すと最大長3.6cm、最大幅2.9cmとなる。丸靱は、出土時の観察においては、その表面に金、銀の残痕は認められず、青錆に覆われていた。そのため、表面の仕上は何によるものかは明らかにしえない。ところで衣服令（註17）の規定によれば、五位以上は朝服に金銀装腰帶を用いるが、六位以下は、烏油腰帶を用いることが記されている。平城宮址出土の銅製帯金具の研究（註18）では、先に示した計測値のものは、AⅢ型に分類され、八位相当の官の用いる帯金具とすることができる。その研究の成果に従うなら、この遺跡から出土した帯金具には、烏油—黒漆（註19）が塗られていた可能性が大きい。また、銅製帯金具を用いるのは、弘仁元年（註20）に石帯を用いることが許可されていることからすればそれ以前となる。

銅製の帯金具を佩用していたのは、八位相当の官吏であることが理解される。しかし、その官吏が常に滞在していたかどうかは不明であるとしても、行政府の役人が常に滞在していたであろうことは、陶硯、墨書土器の出土したことから明らかであろう（註21）。先に倉庫群を、郡の倉院の可能性もあることを指摘しておいたが、旭東平野全体における位置から再考してみる必要がある。当時、この地の東側には河川があり、南流して岩間江に注ぐ、また、その上流には、備前国府がある。国府付近を流れる河道は、国府市場付近に見られる西側の河道が南北に直線的であることは、国府の所在に強く規制されたものと推測され、国府の存続期間中には、西側へ変遷していたものと考えられる。このように、国府から当麻遺跡までは大きな河川が見られ、国府からの水運には至便の地であることが指摘できる。そのことは、国府に関連する遺跡である可能性もある。また、当麻遺跡は、当時の海岸に近く、入江の奥まった上流に位

置する。さらに、その対岸に「亀津」の地名が見られ、近接しては、「船着」の地名が見られる。この地名が何時頃の名残りであるか不明であるが、古くは、この付近まで港湾的な機能を有していたと推測することができる。その推測が正しければ、付近は国府の外港としての機能も持ち得る。そのことを考慮すれば、国府の外港に付属する倉院の可能性も考えられる。しかし、現状においては、それを確定すべき資料に欠けるため、いずれとも決定しがたいが、倉院としての性格の強いことは指摘できるであろう。

(文責・井上)

註

- 註1 正宗敦夫校訂『倭名類聚鈔』巻5 風間書房 昭和45年3月
- 註2 厳津政右衛門・「備前国府」『岡山市史』古代編第5編第1章 岡山市 昭和37年9月
- 註3 石田寛「条里制と備前国府の位置」『岡山市史』古代編第4編 岡山市 昭和37年9月
- 註4 木下良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号 1967年9月
- 註5 高橋護「古地形から見た備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』1 岡山県教育委員会 昭和46年3月
- 註6 厳津政右衛門「市域にある郡家遺跡」『岡山市史』古代編第5編 第3章第2節 岡山市 昭和37年9月
- 註7 高重進「古代朝鮮式山城と国府」『地理科学』22号 1975年
- 註8 日野尚志「古代山城と軍国」『史学研究50周年記念論叢』福武書店 1980年10月
- 註9 永山卯三郎『岡山県農地史』世界聖典刊行会 昭和54年10月
- 註10 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 74頁 岡山県教育委員会 昭和47年3月
- 註11 「百間川長谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 岡山県教育委員会 1981年11月
- 註12 「柘植經光、長原盛重連署屋敷島沽券」藤井駿、小野恭一郎共編『岡山県古文書集』第2輯67頁 思文閣出版 昭和56年12月
- 註13 竹内理三編『寧楽遺文』380頁 東京堂出版 昭和40年7月
- 註14 「出雲国風土記」『日本古典文学大系2・風土記』岩波書店 昭和41年4月
- 註15 「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 昭和50年3月
- 註16 「延暦14年閏7月15日官符 応建置倉院事」『類聚三代格』国史大系 吉川弘文館 昭和47年5月
- 註17 「衣服令」『令義解』巻6 国史大系 吉川弘文館 昭和39年7月
- 註18 『平城宮発掘調査報告』VI 157～158頁 奈良国立文化財研究所 昭和50年1月
- 註19 たとえば『延喜式』49巻 左右兵庫「凡二季大被横刀八口。金装二口。其料……漆八合。膠四両。」とあり烏装は、漆塗りであることがわかる。
- 註20 「弘仁元年九月乙丑……銅鈴具者。以 漆塗成。動易 剝落。……伏望雜石及毛皮等、悉聽 用 之……並許 之」『日本後紀』国史大系 吉川弘文館 昭和46年4月
- 註21 「弘仁十三年閏九月廿日官符 応給食脩丁事」『類聚三代格』に正倉官倉院守院別12人とある。国史大系 吉川弘文館 昭和47年5月

この章は、調査担当者（松本・岡田・二宮・平井・光永）の意見を参考にして井上がまとめたものである。各調査者には、若干の意見の相異もみられるが、それが文章に十分に反映されていないことは、文責者の文章表現力の拙さによるものであり、文責者の責任に帰するものである。

表4 遺物観察表

溝-2 (第8図・9図)

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺形土器	41.2			外反して端部が丸く終る口縁。頸部に2本の凹線、輪積み痕がある。外面はナデ調整、内面は磨製があれ手法観察不能。	白黄淡茶褐色 ～淡赤褐色	砂粒を含む	良好	砂粒は1～2、3mmのものである。
2		13.9			口縁は外反して端部は丸い。頸部に1本、肩部に2本の凹線。内外面共にへら磨き、口縁内部は横ナデ。	淡黄褐色	砂粒(1mm前後)を含む		
3		14.7			外反する口縁部で端部はやや角ばる。頸部は2本の凹線。口縁部内外面横ナデ、内面頸部には指頭圧痕が残る。外面へら磨き。	白黄色～灰褐色 (内面) 白黄茶褐色(外面)	砂粒(1mm前後)を含む		
4		14.6			外反する口縁部、頸部に退化した削り出し突帯を持つ。内面横ナデ、口縁外面には指頭痕らしきものがある。外面横ナデ仕上げ。	白淡黄褐色(内) 淡褐色(外)	砂粒(1mm前後)を含む		
5		15.7			外反して肥厚する口縁で端部は丸い仕上げ、頸部に削り出し突帯、上下に凹線をみる。内外面共にへら磨き。	黒灰淡褐色	砂粒(1mm前後)を含む		
6		11			5と同じ口縁部。頸部に貼り付け凸帯。口縁の内外面は横ナデ、内面に指頭痕をみる。	淡黄褐色 暗茶褐色	砂粒(1mm前後)を含む		
7		15.3			6と同形態。肩部に削り出し突帯をみる。内面はへら磨き(口縁)指頭痕(頸部)指ナデ(体部)、口縁外部横ナデ、頸部以下ナデ後へら磨き。	白黄茶褐色(外) 黒茶褐色(内)	砂粒(1mm前後)を含む		
8		17.2			外反する口縁で端部は若干角ばる。口縁部～頸部の内面はへら磨きで以下は指ナデ。口縁部外面は横ナデ、頸部～肩部にかけての外面にはうすうすと重弧文がみられる。	白淡黄褐色	砂粒(1mm前後)を含む		重弧文は図示できなかった。
9	壺形土器		8.1		肩部に現存する2本の凹線、刺突文を有し、扇張りの器形。内面底部は指ナデ、上方にへら削り、指おさえと調整されている。外面底部横ナデ、上部はへら磨き調整。	赤褐色 暗赤褐色	若干の砂粒を含む	やや不良	7と同一個体である可能性がある。
10			6		器壁に厚味があり、内面ナデ、外面へら磨きで下半は器面はがれ不明。	黒褐色 暗茶褐色	かなりの砂粒を含む		
12		29.4	8.8	34	「く」字状に外反する口縁で、端部は丸い。頸部直下に3本、さらに下に2本の凹線、内外面は器面のはがれにより調整不明、外面下部に指頭らしきもの。	赤茶褐色 黄茶褐色	多量の砂粒を含む		
13	壺形土器	28.9			「く」字状に外反し肥厚する口縁部。端部はやや角ばり、刻み目がある。体部には3本の凹線、凹線間にも刻み目を施す。調整は剥離し不明。	淡茶褐色	多量の砂粒を含む		

遺構に伴わない遺物 (第19図)

19	壺形土器	11.4	7.5	復元高 22	口縁部は大きく外反し端部は丸く仕上げた口縁部、頸部と体部には削り出し凸帯がつく。体部凸体には刻み目がつく。肩部外面には縦の沈線で挟んでへら磨き後木葉紋がみられる。口縁～頸部の内外面は横ナデ、肩部内面ナデ、下半は指押え後横ナデ、体部凸帯以下はへら磨き、指押え。底部ははめ込み。	暗茶褐色	粗砂粒を含む	良好	
----	------	------	-----	-----------	---	------	--------	----	--

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
20	甕形土器	24.4			「く」字状に外反し、端部は若干内傾し丸く終る。口縁端部に刻み目、頸部に凹線とヘラ状工具の刺突がある。内面ヘラ削り後ナデ、外面下部ヘラ削り、上部刷毛ナデ（縦、横、斜め）。	黄淡褐色 ↓ 淡赤褐色	多量の粗砂粒を含む	普通	
22		15.8	5.8	20.9	口縁部は「く」字状に外反し、端部内面に凹を有す。口縁～頸部内外面は横ナデ、内面上半は横斜のヘラ磨き、下半は指押え後ヘラ磨き。外面上半ナデ後刷毛、下半ヘラ磨き。	暗茶褐色 ↓ 黒色	砂粒を含む	良好	
23		18.5	5.3	11.6	体部は内湾して上がり、口縁部は外反して端部は丸い。内面ヘラ削り、外面叩き後ナデにて仕上げる。	淡赤褐色 ↓ 黒色	粗砂粒を含む		粗砂→1～2、3mm
24		18.2		11	丸底に近い底部、体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸い。口縁内外面は横ナデ、体部内面指押圧痕、外面は叩き後中程より下はヘラ削りを行なう。	淡褐色(内) 褐色～黒色 (外)	粗砂粒を含む		赤褐色顔料らしきものがみられる(外面の一部に)。
25			8.6		安定した平底。内面は上部より刷毛ナデ。ヘラ磨き・ヘラ削り。外面はヘラ磨き。	淡黄白色	細砂を多量に含む	良	砂っぽい土器

土 境 (第20図)

21	壺形土器	12.8	8.6	28.4	口縁部は大きく外湾し肥厚で端部でわずかな方に拡張。頸部～胴部間には2列3ヶ所に刺突文。口縁～頸部の内外面は横ナデ、内面はクシ状工具、下部は指ナデ、一部に指頭痕を認める。外面上半刷毛、中程はヘラ磨き、下部はクシ状工具。若干底部は上げ底気味。	白灰色 ↓ 暗灰淡褐色	かなりの細砂粒を含む	良好	胴下半の4分の1が黒色。底部は荒いヘラ削り。
26 27			7 7		安定した平底である。内面指ナデ後刷毛ナデ、底部はヘラ削り、27の内部刷毛はわずかに残る程度。外面はヘラ磨き。縦横(26)、器体上部には刺突文あり(26)。	暗灰茶褐色 ↓ 黒色(外) 淡黄暗茶色 ↓ 暗灰茶色(内)	細粗砂を含む		
28					体部の一部分。内面ナデ。外面は爪形文、ヘラ削り。		砂粒を含む		埋土内にて出土した遺物。
29			4.5		底部は上げ底。内面刷毛ナデ。外面は縦横のヘラ削り。底部はヘラ削り。	黒茶色(内) 暗褐色(外)	粗砂粒を含む	普通(良)	
30	壺形土器		8.7		厚い平底の底部で、体部は除々に薄く頸部で厚さを増す。頸部内面は横ナデ、体部内面は刷毛で下半部は指ナデにて仕上げる。外面は荒い刷毛、下部は細かい刷毛。	褐色(内) 白淡黄色(外上) 淡褐色(外下)	細粗砂粒を含む	良好	
31	甕形土器	20.1	5.1	32.3	若干上げ底の底部。頸部で逆「し」字状に屈曲して口縁部に至る。口縁部の器壁は厚く端部外面に退化凹線をみる。口縁～頸部の内外面は横ナデ、体部内面の上半の一部に刷毛目、その他はヘラ磨き。外面の頸部直下には横ナデ後縦の刷毛目。胴部最大径より下はヘラ磨き。	赤褐色	細砂粒を含む		
32			10.4		安定した平底を呈す。内面刷毛ナデ上げ、底部は指ナデ。外面はヘラ磨き。	淡赤褐色	細砂多く含む(もろい)		
33		11.2	2.8	4.5	底部は平底で、器壁は若干薄くなって斜めに立ち上がり、口縁端部は丸くなる。口縁に一對の穴をあけている。内外面とも指ナデ。	淡黄褐色	細・粗砂粒を含む(もろい)	普通(良)	
34	鉢形土器	20.1	7.4	17.5	わずかに上げ底を呈する。体部は内傾して	淡茶褐色(内)	細砂を含む	良好	

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
35	鉢形土器		6		上がり、口縁部で逆「L」字状に屈曲する。口縁端部は丸くなる(34)。口縁～頸部の内外面は横ナデ、体部内面の下半は指押え、上半は横、斜めのへう磨き。外面下半へう磨き、上半縁の刷毛(34)、横の刷毛ナデ後一部に縦のクシ目(35)。	暗灰茶褐色 ↓ 黒色(34の外) 淡茶褐色 ↓ 黒色(35の外)			

土 墳 墓 (第22図)

36	壺形土器	17.2	8.7	39.6	頸部から「ハ」字状に開く胴部は丸味を持ち、平底を呈する。頸部から逆「L」字状に屈曲し、上にのびる口縁部を貼り付け、端部は丸い仕上げ。口縁部の内外面は横ナデと思われる。体部内面中位にはへう磨きがみられる。外面胴中位を除いて刷毛ナデ。	黒淡灰色 ↓ 黒色(内) 暗茶褐色(外)	粗砂粒 (1mm～2.3mm) を含む	良好	
----	------	------	-----	------	---	-------------------------------	---------------------------	----	--

土 墳 (灰穴-1) (第24図)

37	壺形土器	19.2			口縁端部は上下に拡張し、外面に退化凹線、鋸歯文を施す。内面横ナデ、外面頸部刷毛ナデ、上半横ナデ。	白淡黄色	砂粒を含む	良好	外面に褐色顔料塗布。
38	壺形土器	14.5			「く」字状口縁で端部は上下に拡張し丸い。口縁～頸部内外面は横ナデ、頸部以下の内面へう磨き、外面刷毛ナデ。	白黄淡褐色	砂粒を含む		
39		15.2			外反した口縁で端部は上下に拡張して丸い。外面には退化凹線。口縁～頸部内外面は横ナデ、体部内面へう磨き、外面肩部に鋸凹線、胴部は刷毛ナデ。	白黄淡褐色	若干の粗砂粒を含む		外面にはススの付着。
40		14.2			「く」字状に外反した口縁部で端部は若干拡張丸味、口縁～頸部の内外面は横ナデ。体部内面指ナデ、外面下半刷毛ナデ、上半部では指押えの痕跡がみられる。	茶褐色 ↓ 褐色 ↓ 黒色	多量の細砂粒を含む	やや不良	
41		15	5.2	21.4	肥厚した口縁部で「く」字状に外反し、端部外面に退化凹線を有す。口縁～頸部内外面横ナデ、体部内面下半刷毛ナデ、上半へう磨き、外面刷毛ナデ。	日黄淡褐色 ↓ 黒灰白黄淡褐色(内) 白黄淡褐色 ↓ 赤淡褐色(外)	砂粒を含む		外面スス付着する。
42			5.4		わずかに平底を呈する器種。内面へう磨き、外面刷毛ナデ	黒色～ 白淡灰黄色	砂粒を含む		
43			6.3		平底を呈し、内面は指ナデの指圧痕。外面へう磨き。	暗灰白色(内)	砂粒を含む	良好	
44	高杯形土器	20.9			坏部は内湾し、口縁部は外反し端部は丸く仕上っている。坏部の内外面は丁寧なへう磨き、脚部は「ハ」字状に開くものであろう。脚柱外面指圧痕。内面ナデ。	白黄褐色	水澱粘土		

住居址-1 (第39図)

45	皿形土器	10			外反して斜め上方に伸びる口縁部で端部は丸い。体部は若干内傾。内外面口縁～頸部は横ナデ、体部内外面は刷毛ナデ。	白黄淡褐色	精製粘土で砂粒を含む	良好	砂粒は1mm以下のもの
46			2.4		内面へう磨き、外面指頸痕が残る。	淡茶褐色	精製粘土 若干の砂粒を含む		
47	台付 鉢形土器		6.4		器壁が厚く内傾する体部に、つまみ出した	白淡黄褐色	砂粒を含む		

低水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					台部がつく。端部は九い。台の付け根部分に押圧痕を残す。内面刷毛ナデ。				
48					体部の一部であり、内面には指圧痕、外面は叩き後刷毛、上部はクシ目が残る。	白淡褐色(内) 淡茶褐色～黒褐色(外)	粗砂粒を含む (1mm前後)	良好	

住居址一2 (第39図)

49 50	甕形土器	16.5 13.9			「く」字状に外反し、端部は僅かに内傾して上方に伸びる。口縁部内外面は横ナデ、拡張部外面は9～10条の帯描平行沈線文。内面ヘラ削り。	暗茶褐色	砂粒を含む	良好	
51					「く」字状に外反する口縁で端部は上下につまみ出す。内面上部横ナデ、下部ヘラ削り、外面ヘラ磨き。	白淡黄褐色(内) 暗茶色(外)	精製粘土 若干の砂粒を含む		褐色塗料が一部残存。
52					頸部～体部の一部は内面刷毛ナデ調整。外面は叩き目。	淡茶褐色(内) 暗茶褐色(外)	若干の砂粒を含む		
53	壺形土器	14.6		11.5 (現高)	外反する口縁で端部は垂直に立ち、外面に退化凹線がつく。口縁内面ヘラ磨き。頸部はシボリ、以下はヘラ削り。外面口縁部～頸部は横ナデ、以下は斜めの刷毛。	黄褐色 黒褐色の部分もあり。	砂粒(1mm前後)を含む。		頸部にヘラ描幾何学文様。 転用器台
54			7		内面ヘラ削り、底部は指ナデ、外面ヘラ磨き。	明茶褐色	砂粒を含む		
55	壺形土器	19			口縁部はわずかに外湾して上方へ張り、端部は上下に拡張し外面中央に窪み面を有す。口縁部内面は刷毛ナデ、外面は指おさえ後刷毛ナデ、頸部内面はシボリ後ナデ、外面ナデ後凹線。		精製粘土 若干砂粒(細砂)を含む。		
56			7.3		内面ヘラ削り、外面ヘラ磨きで下部に指頭痕をみる。	暗黒褐色	砂粒を含む		

住居址一3 (第39図)

57	埴形土器				若干体部に張りをもち、口縁部は外反して斜め上に伸びる。内面はナデ。外面は刷毛ナデ。	淡黄茶褐色 (内) 褐色(外)	精製粘土 若干の細砂を含む	良好	細砂→1mm以下の砂粒
58			4		つまみ出した台部で上げ底を呈す。内面ナデ、体部はヘラ磨き、台部は指頭押え。	白淡茶色	精製粘土 若干の細砂を含む		

溝一7 (第27図～34図)

59	壺形土器	19.3	10.3	36.3	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛ナデ。内面はヘラ削り。	赤茶褐色	細粗砂を含む	良好	底部若干黒色部分あり。
60		13.1	9.4	32.1	口縁部内外面横ナデ。外面刷毛ナデ。内面下半ヘラ削り、上半指ナデ。	乳灰白色 白灰色～灰黒色	細砂を含む		外面上半に化粧土をみる。
61 62 63 64		23.8 18 32.8 16.6			61は外面ナデ。内面ヘラ磨き。頸部より下はヘラ削り。62の口縁内外面は横ナデ、体部は刷毛目を施す。内面体部はヘラ削り、63は口縁がクシ目。内面は刷毛ナデ。外面は2cm位の板状工具によるナデ、内面ヘラ磨き、頸部はヘラ削り。64の口縁部内外面は横ナデ、体部外面は上半がヘラ磨き、下半は荒い刷毛、	黄褐色 赤茶褐色 乳白黄褐色 灰黒色 暗黄茶褐色	若干細砂を含む 細砂粒を含む 細砂を含む 細粗砂を含む		61は転用器台?。64の外面には赤褐色顔料塗布。

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					頸部内面はシボりのち横ナデ、以下はへう削り。				
65	壺形土器	18.8	13	39.6 (?)	口縁部から頸部にかけての内外面は横ナデ、 体部外面はへう磨き、内面はへう削り。	暗茶褐色 赤茶褐色 ↓ 白黄灰色	細・粗砂を含む	良好	推定復元である。
66		15.5			肩部の非常に張った器形。口縁～頸部の内 外面は横ナデ。体部外面は刷毛ナデ。内面は へう削り。	白黄淡褐色	若干の細・粗 砂を含む		
67 ↓ 70					頸部は内傾して細長く上がり、外反して口 縁部に至る。口縁部は大きく外反し斜めに上 がり端部を上下に拡張している。口縁端部には 2～4本の退化凹線をみる。口縁内面、口 縁端部内面は横ナデ。頸部内面はシボリ後上 半ナデ(67)、下半へう削り(68・69)、外面 は刷毛ナデ、へう削り後数本のへう描き沈線 (70を除く)、69の口縁外面はへう磨き。	白黄淡褐色 灰色 淡黄褐色	細砂を含む 細砂を含む		細砂→1㎝前 後 粗砂→1～2 ㎝前後
73 ↓ 74		24.4 19.6			外反した口縁部で端部を上下に拡張する。 端部内外面横ナデ後外面に鋸歯文(73)。横ナ デ後凹線(74)。口縁～頸部の内面指頸圧後ク シ状工具のナデ、外面は指ナデ(74)。	淡黄褐色	細砂を含む		73・74の口縁 端部外面にベ ニガラ塗布。
88 ↓ 90	台付 壺形土器	14.6 14.4	12.2 8.5 9.7	22.6 15	貼り付け脚部で、「く」字状に外反する口 縁部で端部は内傾して丸く終り、外面には凹 線、以下横ナデ。口縁内面横ナデ、体部内面 上半は横のへう削り、下半は斜め上方に向け てへう削り後ナデ。脚底内面へう削り後横ナ デ。外面横ナデ(88)。「く」字状に外反し端部 は肥厚し、若干上下に拡張している。内面指 ナデ、脚部外面指押え後ナデ。内面ナデ(89)。 体部よりつまみ出した裾部で端部は丸く終る。 底部は円板上の貼り付け。体部内面指ナデ。 外面へう磨き。下部～裾部は指頸圧痕、内面 はへう磨き(90)。	赤褐色(内) 赤褐色 ↓ 黄褐色(外) 淡黄褐色(内) 白黄褐色 ↓ 黒灰色(外) 淡黄褐色(内外)	細砂を含む (88) 細粗砂を含む (89) 精製粘土(90)		
91 ↓ 96	甕形土器	14 14 15 13.8 14.4 14			外反して、垂直直いは内傾、外傾する口縁 端部で丸く仕上げている。口縁端部外面には 退化凹線或いは凹がみられる。口縁～頸部の 内外面は横ナデ。体部内面はへう削り。指押 圧痕をみる。頸部に指押圧痕(92・96)。外面 は刷毛ナデ。脚部へう磨き。指円形の押圧痕 をみる(94)。	白黄色 ↓ 灰黒色(内) 白黄淡褐色 ↓ 淡褐色(外)	細・粗砂粒を 含む		外面に赤褐色 化粧土(91)
97 ↓ 98	小型 甕形土器	9.6 5 4.2	10.3		除々に薄くなり、頸部で外反し口縁端部は 上下におずか拡張して外面退化凹線を認める。 口縁～頸部の内外面は横ナデ。体部内面は指 押え後へう削り。外面指押え後刷毛ナデ。底 部へう削り(97)。若干上げ底気味。頸部内外 面横ナデ。体部内面指ナデ上げ、外面刷毛ナ デ仕上げ(98)。	淡茶色～灰黒色(内) 白灰色～灰黒色(外) 淡黄褐色(内) 淡黄褐色 ↓ 灰黒色(外)	細・粗砂を含 む		
99	ミニチュア	5.5	2.8	6.8	頸部で外反する口縁部で端部は丸くわずか に内傾気味。端部外面に凹を持つ。口縁～頸 部内外面は横ナデ、体部内面指ナデ上げ、外 面は横斜めのナデ、下部に指押圧痕をみる。	淡黄褐色	精製粘土		
100			3.5		内湾する体部である。内面はへう削り前後 指ナデ、外面ナデ。底部は指押えのようであ る。	白黄淡褐色	粗砂粒を含む		粗砂粒→1～ 2・3㎝
101	甕形土器	11.6			「く」字状に外反する口縁部で、端部はわ	淡褐色(内)	細粗砂を含む		肩部に若干ス

低水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
102	甕形土器	12			すかに上下に拉張する。口縁～頸部の内外面は横ナデ。内面へラ削り。外面肩部横ナデ。胴部へラ削り (101)。左右斜めの刷毛ナデ (102)。	淡褐色 ↓ 茶褐色 灰淡褐色(外)			スの付着(102)。
103		16.2	6.1	28.6	内湾する口縁部で端部は若干厚し丸く終る。口縁～頸部にかけての内外面は横ナデ、外面上半横ナデ、肩部以下刷毛ナデ、内面へラ削り。	黄色をおびた 淡茶褐色～ 黒茶褐色	細・粗砂を含む(1mm前後)	良好	外面にススの付着がみられる。
104		15.2	6	27.9	口縁端部が若干外反し、丸く終る。口縁～頸部にかけて横ナデ、外面は刷毛ナデ、内面はへラ削り。	白黄淡褐色	細・粗砂を含む(1mm前後)		外面にススらしきもの付着。
105		13.5	4.4	18.1	ほぼ垂直に立ち上がる口縁部で端部は先細りで終る。口縁～頸部は横ナデ、外面刷毛ナデ、内面へラ削り。底部若干上げ底を呈す。	茶褐色(内) 暗茶褐色(外)	細・粗砂を含む(1mm前後)		底部近くは黒色を呈す。
106		13.2	5.4	23.2	ほぼ垂直に上がり口縁部で端部は丸く終る。口縁～頸部は横ナデ、体部外面は刷毛ナデ、内面はへラ削り。	淡赤褐色(上半) 暗茶褐色(下半)	粗砂多く含む	やや不良	下半にスス付着。
107		13.7			やや外反する口縁部で端部は丸く終る。外面は肩部、内面頸部まで横ナデ、外面下半へラ状工具、内面へラ削り。	黄色をおびた 淡褐色	細砂多量に含む	普通 (やや不良)	胴下部は灰黒色～黒色。
108		16.4	6.3	26.6	ほぼ垂直に上がる口縁部で端部は丸く終る。外面肩、内面頸部まで横ナデ、外面下半刷毛、内面へラ削り。	白灰淡黄色 ↓ 黒色(外) 灰白色～黒灰色(内)	細・粗砂を含む	良好	上半は若干赤味をおびている。
109	壺形土器	17.6			頸部が「く」字状で口縁部に一枚の凹線をみる。肩部に角を持つ。口縁～頸部の内外は横ナデ、外面刷毛、内面へラ削り。	白黄淡褐色(内) 暗茶褐色 ↓ 黒色(外)			
110		12.5	6.3	26.9	体部が丸味をおびる。口縁端部は先細りで終る。口縁内外は横ナデ、外面頸部以下は刷毛、内面の頸部までへラ削り。	赤茶褐色(上) 白黄褐色(中) 黒灰色(下)			
111		11.9	5	22	「く」字状に外反し端部を若干上下に張り出す。口縁と頸部の内外面は横ナデ、外面刷毛ナデ、内面へラ削り。	淡茶褐色			焼成後に底部穿孔
112		11.1	3.7	20.7	「く」字状に開き、口縁端部先細りに上がる。口縁内外面は横ナデ、外面刷毛ナデ、内面へラ削り。	白黄淡褐色(上) ↓ 黒茶褐色(下)			最大径は胴部 ほぼ中央部。
113		16.4	4.9	26.6	「く」字状に外反して口縁端部はわずかに肥厚している。体部外面は刷毛ナデ、内面はへラ削り、外面下部は丁寧なへラ磨き。	黒茶色 ↓ 白黄灰色			外面にスス付着(頸部～肩部にかけて)
114		13.1	4.9	15.8	「く」字状に開く口縁、端部はやや上向きになる。口縁～頸部の外面は横ナデ、内面は指でさえの後ナデ、下半はへラ削り。	黒灰褐色(外) 白黄淡褐色(上) ↓ 白灰色(下)	内		
115		13.1	4.1	最大 22.7	斜め上へ外反し、端部は丸く終る。口縁～頸部の内外面は横ナデ、外面は刷毛ナデ仕上げ、内面へラ削り、底部へラ切り。	暗灰褐色(内) 灰褐色 ～赤褐色(外)	多量の細・粗砂を含む		
116	鉢形土器	13.6	5.5	21.3	「く」字状に外反し、端部は先細りにつまみ上げている。口縁～頸部内外面横ナデ、体部外面刷毛、内面へラ削り。	淡茶褐色	細・粗砂を含む		体部にススの付着がみられる。
117		42.2	11.6	24.7	口縁から頸部にかけての内外面横ナデ、以下はへラ磨き、外面下半にはフシ目が残る。	白黄褐色	少量の粗砂を含む		一部に赤色顔料が残る。

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	口径	高さ					
118	模形土器 (ミニチュア)	6	2.6	4.8	わずかに内湾気味の口縁部、内外面共に指ナデ調整、底部は若干あげ底を呈す。	白黄色(口縁) 灰黒色(下半)	細・粗砂を含む	良好	手捏土器
121	埴形土器	7.3			外反する口縁、端部は丸く終る。内外面共にナデ調整で仕上げている。	黄褐色	水こし粘土		
122	鉢形土器	14.8		6.6	122、123、126 は内湾する口縁で、若干の底部を持つ。口縁内外面は横ナデ、内外面は丁寧なへら磨き(122、126)、123 はナデ調整、127 は直立する口縁部である。127 の外面ナデ、それ以外はへら磨き、わずかに上げ底気味である。(127)	白黄褐色 淡白黄茶褐色 黄褐色 ↓ 灰黒色 茶褐色 ↓ 暗褐色	すべて 水こし粘土		内外面に赤褐色化粧土(123)、外面にスラしきの付着(129)。
123		15.4		8.4					
126		14.2		6.8					
127		16.6		8.7					
129		15.7							
124		12.9		9.7	丸く内湾して先細りで終る口縁、端部には穴が穿たれている。口縁内面指おさえ、他の内外面はへら磨き。	明茶褐色 ↓ 白黄褐色	水こし粘土 若干の粗砂を含む		約1/3は黒色
130	皿形土器	19.4		復元高 2.6	ゆるやかに上がる口縁で端部は丸く終る。内面ナデ、外面下半で底部はへら削り、上半ナデ。	黄味をおびた 白色	水こし粘土		双方に暗茶褐色顔料塗布。
131		19.4		復元高 2.9					
132	高杯形土器	15.2			杯部内面はへら磨き後ナデ、口縁外面は横ナデ、体部はへら磨き後ナデ、脚柱内外面はへら削り、脚部内面へら削り後ナデ、外面は刷毛ナデ、垂直に立ち上がり若干端部が外反気味の口縁部。	杯部…… 黒茶褐色～ 暗赤褐色 脚部…… 赤茶褐色～ 暗茶褐色	水こし粘土に 若干の細砂を含む		返し孔は4ヶ
133		18.1			口縁部内外面横ナデ、杯内面指ナデ、外面は刷毛ナデ、浅い杯部から垂直に立ち上がり端部は丸く終る。	白黄灰白色(内) 暗茶褐色(外)	細砂を含む		
134		28.2	22.6	14.5	杯部は2段に作り、やや内傾する口縁部をもち、端部は丸く終る。脚部～裾部にかけては2ヶ所に貼り付け凸帯がある。裾部は先細りになる。これは3つの別々の物を接合して作り上げている。内外面の調整は磨減が盛しく不詳。裾凸帯にへら描きが施されている。	黄褐色	かなりの量の 細・粗砂を含む	やや不良	
135		11.4			133の小型のもので、体部が内傾する。口縁内外面は横ナデ。杯内面は刷毛ナデ、外面は指ナデ、脚部内面指ナデ。		水こし粘土	良好	全体に明茶褐色顔料の塗布がみられる。
136		16.4	12.6	8.2	135をやや大きくした形。口縁部はわずかに内傾し端部は丸く終る。脚柱部から「八」字状の裾部で端部は丸い。脚柱内面へら削り、その他は刷毛ナデ調整。	淡黄褐色 ↓ 暗赤茶褐色	水こし粘土 若干の細砂を含む		
137		17.3	12.4	11.3	外反する口縁部で端部は丸く終る。内外面横ナデ、体部内外面刷毛ナデ、脚、裾内外面は横ナデ。	白淡褐色 黄褐色～淡赤褐色	水こし粘土 (微砂を含む)		
138		16.6	10.1	9	体部はわずかに内傾して伸び口縁部は大きく屈曲して外反する。脚柱から「八」字状に広がる裾部で、端部は丸い(141～145・148)。140の端部はわずかに立ち上がっている。杯内外面はへら磨き(140、141、144、145、146、147、149)、口縁内外面横ナデ、体部内外はへら磨きもある。脚、裾部についても外面刷毛ナデ、へら磨きがみられる。脚柱内面へら削り、裾内面はほとんどナデ調整。		すべての土器が水こし粘土を用いている		
140		15.1	10.6	7.9					
141		19	12.2	8.3					
142		18.8	11.8	9.9					
143		18.4	11.8	9					
144		19.4	13	8.9					
145		19.8							
146		23.7							
147		16.8	10.8	9.5					
147		15.1							
167 ↓ 173				6.6 5 6.2 5.2	底部は平底形を呈す。内面は指頭圧痕、へら削り、外面はへら磨き(169、171)、刷毛ナデを施す。最下部に指頭痕もみられる(171、	白灰色 ↓ 淡黄褐色(内)	細・粗砂を含む		赤褐色の化粧土を施している(173)

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
			6.2 4.4 5.4		172)。169、171の底部は若干張り出している。 169の底部には焼成後穴をあける。	黒灰褐色 ↓ 白灰淡黄色(外)			

溝-13 (第34図)

153	軒丸瓦				中央に三巴文、周囲に珠文を約24個を巡らす外縁は紫文である。裏面指ナデ。	白淡灰色	若干細砂を含む	良好	
154	埴輪				タガ貼り付け後外面横方向の刷毛目を施す。 タガは横ナデで仕上っている。	白淡黄褐色	細砂を含む	軟質である	

溝-5・9 (第34図)

157	製塩土器		4.8		脚部は「八」字状に広がり、体部も内傾して立ち上がる。内面ナデ。外面、脚部ともに指頭痕が残る。	茶黒灰色(内) 暗黄白色(外)	粗砂粒を含む	良好	
158	壺形土器	12.8			肥厚した頸部から斜めに立ち上がる口縁部で、端部はやや内傾気味で丸く終る。口縁～頸部の内外面は横ナデ、内面へう削り、外面へう磨き。	淡茶色	若干の粗砂粒を含む		
159	台付 壺形土器		8.5		「八」字状に外反しながら下方に広がり、下端部は丸い。体部は緩やかに内傾して上がる。底部は円板の貼り付けと思われる。調整は表面剝離のため不明瞭。	乳白色	細砂粒を多く含む	やや不良	
160	壺形土器 (ニニチュア)		3.7		平底に近い底部で器壁は厚く、内傾する体部。内外面とも指ナデ仕上げ。	灰白色(内) 淡黄褐色(外)	精製粘土	良好	外面に黒色部分あり
161					頸部～肩部にかけての部分、内面上部指ナデ、下部へう削り、外面は荒い刷毛を施す。外面頸部近く工具による圧痕が付く。	白黄淡褐色(内) 淡褐色(外)	精製粘土		外面に黒色部分あり
162	壺形土器	14.5			頸部は「八」の字状に内傾し、頸部を外反し上方に拡張して口縁部をつくる。口縁端外面に凹線をもつ。口縁端部内外面は横ナデ、口縁～頸部の内面はへう磨き、下半はへう削り、外面上半刷毛、下半は不明。	淡茶褐色(内) ↓ 黒灰色 白淡茶色	砂粒を含む		
163	高杯形土器		11.2		「八」の字状の脚で裾端部は丸い。杯部は内傾して上がる。杯内外面は刷毛ナデ、脚外面ナデ、裾内面は指押え。	白黄淡褐色	細砂粒を含む		外面に褐色の化粧土をみる。
164			17.4		内傾した杯部より斜めに立ち上がる口縁部で、端部は角ばる。端部内外面は横ナデ、杯部内外はクシ状工具。	白黄淡褐色(中) 茶褐色(外上) ↓ 黒色	細砂粒を含む		
165	壺形土器		4.7		上げ底を呈し、体部は内湾する。内面調整は剝離のため明確でない。外面は指押え後ナデを施す。	淡白黄灰色	粗砂粒を含む	やや不良	
166	甕形土器	15.2			「く」字状に外反した口縁、端部は内傾し丸く仕上げる。口縁～頸部の内外面は横ナデ、体部内面はへう削り、外面は縦の刷毛後横ナデを施す。	暗茶淡褐色	砂粒を含む	良好	砂粒→1～2mm前後

井戸-1～3 (第42図・46図)

174 ↓ 176	甕形土器	14.6 15.8	3.6	24.9	口縁部内外面は横ナデ。拡張部外面は7～9条の凹線平行沈線を施す。体部外面は、刷	黒灰色 淡灰白褐色	0.5mm以下の 砂粒を含む	良好	外面にはスス付着。174の
-----------------	------	--------------	-----	------	---	--------------	-------------------	----	---------------

百間川当麻遺跡

持図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
		14.4			毛目のうち磨き、さらに肩部を横ナデ。内部内面は、指頭圧痕、磨削りを施す。	淡赤褐色			肩部に刺突
177	鉢形土器	32.0 36.5		18.0	口縁部内外面は横ナデ。外面体部、底部は磨削りで調整。内面体部は、下半が磨削り、上半が刷毛目を施したのち横ナデで仕上げ。	暗茶褐色	1.0mm以下の砂粒を含む黒雲母を多く含む	良好	外面にはスス付着。
178	変形土器	15.0	4.0	24.8	174と同様。体部やや丸味をもつ。	黒灰色	0.5mm以下砂粒		
179		14.6	3.0	15.5	外面は、口縁部は横ナデ、体部は刷毛目を施す。内面は、口縁部が刷毛目のち横ナデ、体部は磨削り、ナデにより調整。	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む		
180		15.0			口縁部は、刷毛目、横ナデで調整。	黄褐色	0.5mm以下の砂粒を含む		
181		12.4			口縁部は、外面が横ナデ、内面は刷毛目、ナデを施す。体部は、外面が叩き、内面を磨削り。	淡茶褐色	0.5mm以下の砂粒を含む		
182		7.4			口縁部内外面は、横ナデ。体部は、外面を細かい磨き、内面をナデで調整。	淡黄褐色	水澄し粘土精良。		
183 184	鉢形土器	17.2 16.2	7.0	8.5	やや内湾するもの(183)と、直線的にのびるもの(184)がある。調整は、内外面とも刷毛状工具、ナデを施す。	黒褐色 黒灰色	0.5mm以下の砂粒を含む		外面にスス付着。
185		11.8			内外面とも、細かい磨き、口縁部は横ナデを施す。	淡赤黄褐色	水澄し粘土精良		
186	変形土器	14.3		22.2	口縁部は、内外面とも横ナデ。体部は、外面が刷毛目、内面が指頭圧痕、磨削りで調整している。底部は、やや痕跡を残す。	黒灰色	1.5mm以下の小石を含む		外面肩部に吹き寄せ痕

G-3区 土器溜り(第48図・49図)

187	盃形土器	19.5			口縁部から頸部にかけては、内外面ともにヨコナデ、胴部外面は、ハケナデ、内面は、上半にクシナデの痕跡が見られ、下半は、ヘラケズリによる。	淡赤褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	
188		13.5	9.5	37.1	口縁部の内外面は、ヨコナデ、胴部外面には、タタキ目が薄く残り、ハケナデによる仕上げ、胴部内面は、ヘラケズリで、上半は、ケズリの陰線が残るが、下半は、入念であり平坦である。	淡褐色～淡赤褐色	0.5mm以下の砂粒を含む		
189	埴形土器	12.1		17.3	口縁部内外面は、ヨコナデ、胴部外面は、上半は、クシナデ後ナデ、下半はナデによる胴部内面は、上半は、ヘラケズリ、下半には、指頭圧痕が見られる。	乳褐色	1～2mmの砂粒を多く含む		
190		9.8		13.4	口縁部内外面は、ヨコナデ、胴部外面の上半はクシによる。ヨコナデ及びタタキナデが見られ、下半は、クシナデ後にナデ、胴部内面は、上半は、ヘラケズリ、下半には、指頭圧痕が見られる。	乳褐色	1mm以下の砂粒をやや多く含む		
191	変形土器	15.4	4.3	17.9	口縁部外面は、タタキ後ヨコナデ、内面は、ヨコナデ、胴部外面は、タタキ後ハケナデ、胴部内面は、ヘラケズリ。	赤褐色～淡赤褐色	0.5mm前後の砂粒を多く含む		
192		13.4			胴部外面は、ハケナデ後ナデが見られ、一部にススが付着する。胴部内面は、ヘラケズリ。	褐色～淡褐色	0.5mm以下の砂粒を多く含む		
193	変形土器	8.8	5.9	23.4	口縁部の内外面は、ヨコナデ、胴部外面は	赤褐色～淡褐色	大粒の砂粒を		

低水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					一部にハケナデの痕跡が見られる。胴部内面は、ヘラケズリによる。外面には、丹色の化粧土を塗ったものと推定される。		含む		
194	甕形土器	15.1	6.5	27.6	口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面の肩部まではタタキが見られ、下半は、タタキ後ハケナデ、胴部内面は、ヘラケズリで、一部にハケナデが見られ、下半は入念なヘラケズリによる。	淡褐色～ 淡赤褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	
195	高杯形土器	17	11.8	10.1	杯部の内外面は、丁寧なヘラミガキ、脚部外面は、ヨコナデ、内面は、一部ヘラケズリ、脚柱部内面中央に、杯部に向けて径3mmの円孔が見られる。	淡赤褐色	0.5mm前後の砂粒を含む		
196			15.7		脚端部の内外面は、ハケナデ、脚柱部の内外面は、ヨコナデ、脚柱部上面には、杯部に向けて円孔が見られる。		1mm以下の砂粒を含む		
197		20.6			脚柱部内面は、ヘラケズリ、脚端部はハケナデ、脚部と、杯部とは個別に造り、接合部の外縁に粘土を貼付ける。杯部と脚部の接合面の中央には、脚部から杯部に向けて径3mmの円孔が見られる。	淡黄灰褐色～ 淡褐色	細砂をやや多く含む	やや軟	
198		19.0			杯部外面は、端部はヨコナデ、体部は、ヘラケズリ後ヨコナデ、内面は、端部は、ヨコナデ、体部上半は、クシナデ後ヨコナデ、下半はヨコナデ、脚部内面は、クシナデ、内面は、上端にしほり込みが見られ、下半はヘラケズリ、クシによる波状のヨコナデが見られる。	淡赤褐色～ 淡褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	
199	鉢形土器	14.3	2.1	6.9	器壁があられているので手法の観察不能、底部にわずかに平面が見られる。	淡褐色～ 茶褐色	1mm前後の砂粒を含む		
200		8.8		5.4	内面の一部にクシの痕跡が見られる。底部に円孔が穿たれている。	赤褐色	0.5mm以下の砂粒を多く含む		
201		18.4		8.0	外面は、丁寧なナデ、内面は、部分的にクシの痕跡が見られる。	赤褐色～ 淡赤褐色	0.5mm以下の砂粒をやや多く含む		

井戸-6 (第50図)

208	甕形土器	14			「く」字状に外反する口縁で、端部は外反して丸く終る。端部外面には退化凹線、口縁～頸部の内外面は横ナデ、体部内面へラ削り、胴部に指圧痕あり。外面上半横ナデ、下半に刷毛目あり。	白黄淡褐色(内) 暗茶褐色(外)	細砂を含む	良好	
209 212	高台付 Ⅱ 皿 椀	14.3 15.1 15.5 16.3	6.2 6.7 9.3 6	5.1 5.7 3.1 5.5	高台はいずれも貼り付けで、断面は細長い台形に近い形、底部から体部にかけて、内湾して立ち上がり、端部はわずかに外反して丸く終る。内外面ともに指ナデ(209、210)。わずかに内傾して斜め上方へ上がり、端部は丸く仕上げる。内外面はナデ、底部は板目痕跡(211)、糸切り(212)。	白淡褐色(内) 灰白色(外) (209) 淡茶褐色 (211) 灰白色(212)			内外面に淡黄灰色の化粧土を塗る(210)。
213	小皿	8.7	5.3	1.3	底部糸切り、後へラ削り、口縁部は斜め上方へ上がり、端部は丸く終る。内外面ともにナデを施す。	暗灰色	若干細砂を含む	やや不良	

百間川当麻遺跡

柱穴 (P) (第50図)

棟図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口徑	底徑	器高					
215	深鉢形土器	17.1	10	18.5	底部は平底で、わずかに外湾して立ち上がり、端部は丸く終る。口縁部には紐通しの穴が対称に1対づつある。口縁部外面横ナデ、その他の内外面は無作意な刷毛ナデ、外面にはクシ状工具による斬突。	白黄褐色～ 明褐色(内) 白黄褐色～ 赤褐色(外)	粗・粗砂を含む	やや不良	仕上げに化粧土を塗布しているようにみえる。
216	杯	14.2	7.1	5.4	底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。「八」字状に開く貼り付け高台である。内外面ともにナデ仕上げ。	黄淡赤褐色	細砂粒を含む	良好	
217	台付碗	10.8	4.7	4.2	底部から内湾して立ち上がり、口縁端部で丸く終る。端部内面に1条の凹線をみる。底部は閉り出しの低い高台が付く。内外面ともに丁寧なへら磨きを施す。	黒色 、 暗灰色	若干の粗砂を含む		

建物-2 (第61図)

218	杯		19		貼り付け高台で四角形に近い形を呈す。体部内外面ナデ、底部内側はへら削り。	青灰色	粗砂粒を含む	良好	体部内面かなりマメツ。
219	盃	16.6		2.6	かなり器壁は厚い。口縁端部は屈曲し丸く仕上げる。外面上半へら削り、下半及び内面はナデ。	暗灰色(内) 暗灰青色(外)	粗砂粒を含む		
220	盃				「く」字状に外反する口縁で端部は丸く仕上がる。内外面とも荒い刷毛ナデ、頸部外面に縦の荒い刷毛目(220)。	暗灰茶色(220) 灰淡黄褐色 (221)	砂粒を含む	やや不良	外面端部に指圧痕をみる。 (221)
222	碗	15.4			口縁部は内湾気味で斜めに上がり、端部は外傾して丸く終る。内外面ともナデ、外面下部に指圧痕が残る。	暗茶褐色	細砂粒を含む	良好	色調は化粧土の色である。
223	盃	21.2			「八」字状に開き口縁端部は丸く仕上げている。内外面ともにナデ。	淡青灰色(内) 灰色(外)			外面に自然粒がかかる

建物-7 (第61図)

224	盃				外反する口縁部で、端部はかるく上下につまみ出す。内面と外面下部は荒い刷毛、上部は横ナデ。	白黄褐色～ 黒褐色(内) 白淡黄灰色(外)	若干の砂粒を含む	良好	
-----	---	--	--	--	--	-----------------------------	----------	----	--

建物-8 (第61図)

225	盃				外反した口縁部で端部は丸い。内面は荒い刷毛。外面は横ナデ。	白淡黄茶色	多量の粗砂粒を含む	良好	粗砂粒→1～2mm前後
226	杯		10.4		高台は台形状を呈する。体部内外面はナデ、底部内側はへら削り。	黒灰色	砂粒を含む		
227			7.4		「八」字状に開く貼り付け高台で、端部は丸い。内面へら磨き。外面及び底部内側はナデによる仕上げ。	白淡明茶色	精製粘土		外、底内側は化粧土の塗布をみる。
228	鉢形土器	9.4			やや内傾する体部で、端部は丸い。若干底部らしきものがみられる。内面へら削り、外面へら磨き、口縁端部は刷毛ナデ、下方にはモミ痕跡がみられる。	白淡黄褐色	細砂を含む		

通図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
229	甕形土器	12.7			「く」字状の口縁部で、上に伸びた端部は丸く終る。口縁～頸部の内外面及び肩部は横ナデ、体部内面はへら削り、外面は刷毛ナデ調整。	白淡黄褐色	砂粒を含む	良好	
230		14.1			口縁部は「く」字状に外反し、端部は上方に内傾して拡張する。内外面は横ナデ。	白黄淡褐色	砂粒を含む		
231					肩部から口縁部にかけて器壁が厚くなる。端部は外反して若干角ばって終る。内面指ナデ、外面上半は縦櫛の刷毛、下半は指ナデ。	白淡黄色	粗砂を含む	やや良好	

遺構に伴わない遺物（第62図）

232	杯		9.9		高台は貼付けで、外方に開く。高台の端部は、丸くおさめる。底部外面のほぼ中央に左文字で「官」の押印が見られる。	暗灰色	砂粒を含む	良好	「官」の押印は、233と非常に良く似る。
			7.5		高台は貼付けで、外方に開く。高台の端部底面は、面取りが見られ、中が少しくぼむ。底部外面のほぼ中央に左文字で「官」の押印が見られる。				高梁市出土

中世土壌墓（第76図）

234	碗	16	6.4	6.9	短く削り出した高台を有し、器壁の薄い体部は斜め上方に伸びる。口縁端部は外方に折り曲げて、玉縁状を呈する。	灰色	緻密である。	良好 (堅緻)	体部下半釉薬かけられず。
235	小皿	8.6	7	1.3	底部の形態は平底。斜めに立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。内外面はナデ。	淡褐色	細砂粒を含む	良好	
236	碗	14	6	4.7	底部から口縁部にかけて内湾し、斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く終る。高台は貼り付けで、斜めに貼り付けで逆三角形を呈す。内外面ともにナデ調整である。	白淡黄色	細砂粒を含む		

ボーリングー 3 内（第97図）

239	碗	10.1		4.3	内傾して立ち上がる体部で、口縁端部は薄く丸く終る。内面指圧後刷毛ナデ。外面は指頭痕が残る。	暗茶褐色	若干砂粒を含む	良好	
240	高杯		16.8		「八」字状に開く脚部で、裾端部は丸く終る。脚柱内面はへら削り後ナデ。裾内面ナデ、脚柱・裾の外面は刷毛ナデを施す。	淡茶褐色(内) 暗茶褐色(外)	細砂粒を含む		

土壌（第97図）

241	甕		18.5		平底の底部で、緩やかに内傾して上がる体部で輪痕痕跡を認める。内面下半に指押痕をみる。全体的に横ナデ。外面は叩きを施す。	黒色	砂粒を含む	良好	瓦質土器
242			32.1		「く」字状に外反する口縁部で、端部は若干上下に拡張し、外面に浅い窪みを有す。内面横、斜めのクシ状工具。口縁外面ナデ。体部約2.5cm幅のクシ状工具で調整を施す。	白淡黄灰色(内) 淡黄茶色(外)	細砂粒を含む		

百間川当麻遺跡

柱穴 (P) (第97図)

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
255	高台付椀	16			貼り付け高台が付き、体部は内湾して上がり、口縁部は丸く納める。内外面ともにナデ調整を施す。	淡褐色 淡茶褐色(内) 黄褐色(外)	細砂粒を含む (1mm以下)	良好	口縁部、内面底部にスス付着。
256	小皿	9	7	1.3	へらおこしの底部、斜めに上がり、口縁部は丸い。内外面ともにナデを施す。	淡黄茶褐色	細砂粒を含む		
258	控鉢	27			体部は斜めに立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は上方に伸び丸く納め、外面には浅い窪みが付き、片口をつくる。内外面ともに横方向の指ナデを施す。	青灰色 (端部外面) 灰灰白色 (内外)	細・粗砂粒を含む	普通	生やけの感じがする。

柱穴 (P) (第97図)

260	高台付椀	11.3	4.5	3.5	低い貼り付け高台が付き、体部は緩やかに内傾し、口縁部に至り、端部は丸く納める。口縁部外面には凹がつく。内面はナデ、外面は指押え接横ナデの調整。	乳白色	若干の砂粒を含む	良好	
261	こしき				「こしき」の体部で、ほぼ垂直に伸び上がり、取手が貼り付く。内面は指押え後刷毛ナデ、取手の内側には指頭痕が残る。外面は荒い縦方向の刷毛ナデを施す。取手は指ナデ。	暗茶褐色(内) 白黄淡褐色 (外)	細・粗砂粒を含む		

土 壇 (第98図・99図)

262 263 269	槽鉢	30.7 30.6 32.4	14.6	10.9	体部は斜め上方に上がり、器壁の厚い口縁部をつける。口縁部には内傾する面を有す。外面は凹凸が著しい。内外面の調整は横ナデを施す。条線は8本又はそれ以上とみられる。269の外面下部並びに底部はへら削りを施す。	黒茶褐色 ↓ 暗茶褐色(内) 暗赤茶褐色 ↓ 黒茶褐色(外)	若干の細砂粒を含む	良好	
271 272		23.1 12.7			体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がる形態で、貼り付け、或いは削り出し高台のつくものである。内外面ともに横方向の刷毛ナデを施す。271の底部外面はへら削り。	暗茶褐色	若干の粗砂を含む		
278	鉢	11.6 12.3	11 12.4	7.5 7.3	へら切りの平底を呈し、体部は若干内傾して立ち上がり、端部は体部に直交する形を示す。内外面ともに横ナデ、外面下部にはへら削りを施す。278は若干上げ底を呈す。	暗赤茶褐色(内) 暗茶褐色(外)			双方の外面は釉薬をかけている。
280	土鍋	36.4			体部は斜めに立ち上がり、逆「L」字状の肥厚した口縁で、端部は丸く終る。内面の口縁部に近い所に蓋受け(?)状の鈎が貼り付き、対称に一對の穴が開いている。内面は刷毛ナデ、外面口縁下横ナデ、その下は指押えの調整を施している。	黒青灰色(内) 黒灰色(外)	細砂を含む		外面にはススが付着
281	羽釜	19.8			体部は内傾し口縁部は丸味を持つ。外面口縁下には貼り付け凸帯の鈎が通る。鈎の内面側には指頭痕を認める。内面刷毛ナデ、外面鈎より上には指頭痕、下は指ナデ。	黒色	若干の細砂を含む		鈎より下にはススが付着
282 283		17.8 18			281と同形態で、鈎の上部に一對の釣り手の貼り付けを施している。内外面の調整も同様手法である。	黒色 ↓ 黒褐色	粗砂粒を含む		
284	鉢	13.6	13	7.1	278と同じ形態。	黒褐色(内) 暗茶褐色(外)	若干の細砂を含む		

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
287	椀		5.5		削り出しの高台がつき、体部は緩やかに内傾して上がる。内面横ナデ、外面上半ナデ、下半～底部はヘラ削り。	白灰色	緻密	良好	淡黄緑色の釉薬が分かる。
288		11.4			内湾する体部、口縁部は若干外反し、端部は丸くなる。内外面ともにナデにて終る。	白黄淡茶色(内、外)	若干細砂を含む。微砂質		白黄淡茶色(釉薬)
290 292	土鍋	24.2 30			内傾した頸部より直角に伸びる口縁部で、端部は上下に拡張する(290)。内湾気味に立ち上がった体部で「く」字状に外反する口縁部で端部は肥厚して丸く終る(292)。前者の内面は刷毛の横ナデ、外面横ナデ、体部は指押え後荒いナデ、後者は、内面クシ状工具、外面横ナデ(口縁)、体部指押え後縦、横方向にクシ状工具の調整を施す。	淡褐色(内)	粗砂粒を含む		外面にススの付着、粗砂粒→1～2・3mm

遺構に伴わない遺物(第102図・103図・104図・107図・108図)

293	壺形土器	8.2			「八」字状に内傾し口縁部に至り、端部は丸く納める。口縁部には対称に一对の穴があく。内面は指押え後指ナデ、外面はナデ後ヘラ描き沈線。波状文を施す。	暗灰黄色(内) 暗黄色(外)	粗砂粒を含む	良好	
294 295		12.4 12			「八」字状に内傾して口縁部に至り、口縁端部は肥厚する。口縁端部に刻目、口縁部に貼り付け凸帯を巡らし、凸帯に刻目を施す(295)、内面上部横ナデ、下部ナデ上げ、外面はナデ後12本のクシ描き波状文を施す(294)。295は内面横ナデ、外面凸帯上部はナデ、下部はナデ後波状文を施す。	淡黄褐色(294) 黒茶褐色(295)	細粗砂粒を含む		
296		8.8			外反して口縁部に至り、端部は若干上下に拡張され、外面に浅い窪みを持つ。頸部には調整後対称に一对の穴をあける。内面ナデ、外面上半横ナデ、下半は斜めの刷毛を施す。最下部に凹線らしきものがみられる。	淡黄褐色	砂粒を含む		
297		16.3	11.8	17.9	平底の底部で、体部は外反して上がり、口縁部で若干内湾気味になり、肥厚した端部は内傾する。口縁と底部には対称に一对の穴をあける。内面調整は下部でシボリ後ナデ、外面はナデ後端部に刻目、以下クシ描き波状文、同沈線、波状文、波状文、沈線、斜突文と続く。	白淡黄色	細砂粒を含む		
302	壺形土器	19.4			頸部より「く」字状に外反し斜めに立ち上がる口縁で、口縁端部は垂直にのびる。端部内外面は窪んだ形をとる。口縁部内面はヘラ磨き、外面は横ナデを施す。	黒色～黒褐色(内) 暗茶褐色(外)	細粗砂粒を含む		砂っぽい。
306					「く」字状に外反する口縁部で、端部は内傾して上下に拡張する。頸部～肩部に輪積み痕をみる。端部外面には退化凹線。口縁～頸部の内外面は横ナデ、頸部～肩部内面は指押え後ナデ、体部はヘラ削り、外面上半縦方向の刷毛、下半はヘラナデ後刷毛調整。	淡黄褐色	細砂粒を含む		
307	台付直口 壺形土器	6.5	12.4	18	「八」字状の口縁で、除々に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終る。胴部は算盤玉状を呈す。脚部はやや内傾する柱状部から「八」字状に広がり、除々に薄くなる。口縁部、胴部、脚部の三つが貼り付けられて1個体となっている。口縁端部外面には、小さくて浅い凹線が2本みられる。内面調整は口	淡褐色	水浸し粘土		透し穴は4ヶ

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					縁の上四分の三がへう磨き、四分の一と胴内 部上半が横ナデ、下半は横斜の刷毛、胴柱内 面はへう磨り、裾内面は刷毛ナデ、外面は全 体がへう磨きを施し、裾端部は内外面とも横 ナデを行っている。				
310	埴形土器	9.8		7.4	「く」字状に外反する口縁部はさらに内傾 して立ち上がり、口縁端部は内傾し丸く納め る。内外面ともにナデ仕上げ。	白淡褐色	細砂粒を含む	良好	口縁端部内外 面に黄褐色の 化粧土残る。
311	鉢形土器				内湾した体部から、肥厚した口縁は内傾し て立ち上がり端部は丸く納まるものであろう。 頸部内面は面をとった後がつく。内面全体に わたって横、斜の刷毛ナデ、外面口縁横ナデ、 体部は叩きを施す。	白淡灰色(内) 白淡黄色(外)	細粗砂を含む		
313	台付椀	12			体部は直線的に開き、口縁端部は丸い。貼 り付けで裾広りの脚部がつく。体部内外面 は指頭痕を残す。脚柱内面はシボリ、裾内面 ナデ、外面には指頭痕を残す。	白淡黄褐色 乳白色 (脚内面)			
319	皿形土器	24			緩やかに内傾して立ち上がる口縁部で、端 部は丸く納めている。内面ナデ、外面は丁寧 なへう磨きを施す。	白黄淡褐色 (内)	細砂を含む		外面明茶褐色 の化粧土がみ られる。
320 321 322	鉢形土器	31.6 31.4			外反する口縁部で、口縁端部を上下に拡張 する(320)もの、内傾し上方に拡張する(321、 322)ものがある。口縁端部外面に退化凹線を 持つ(320、321)。口縁内面上半も横方向のナ デ(320)、へう磨き(321、322)、下半は横ナデ (321)、体部はへう磨り(320、322)、刷毛ナデ (321)。外面は、口縁端部～体部間で横ナデ (320、321)、体部はへう磨き、320の体部はへ う磨り、322の外面は全体がへう磨き。	黄淡茶色 ↓ 黒灰色(内) 白黄淡褐色 ↓ 褐色(外)	砂粒を含む		322の口縁部 内面には丹塗 り痕が認めら れる。
323	壺形土器				球状の体部を呈し、口縁部は外反し、直線 的に伸びる。底部内面には粘土を貼り付け平 らに作り、焼成前に円孔を穿つ。口縁部内面 横ナデ、体部内面上位はへう磨り後指押え、 中位はへう後刷毛、下位は指押えにより指頭 痕が顕著に残る。外面の体部中位～下位にか けては、変形した叩き後刷毛ナデ。	白淡黄色	水澄し粘土 (かなりの粗 砂粒を含む)		
324		16.8			「八」字状の頸部から外反して立ち上がり、 口縁端部は丸く納まる。口縁～頸部の内面は ナデ、体部内面へう磨り、口縁外面横ナデ、 頸部以下はへう磨り後刷毛ナデ。	白淡黄色	粗砂粒を含む		体部の一部に 化粧土がみら れる。
334	甕形土器	16.2			「く」字状に外反し、拡張部は斜め上方に 上がり、端部は若干内傾し丸く終る。拡張部 外面は9条のクシ描沈線を施す。口縁内面は 横ナデ、体部内面へう磨り、頸部外面横ナデ、 体部外面は刷毛後へう磨き。	淡茶褐色(内) 暗茶褐色 ↓ 黒色 ↓ 暗灰褐色 (外)	細・粗砂粒を 含む		
409 414 417 418	土鍋	37 38.1 33 35.6			斜めに張り出す口縁部で、端部は角ばる (409)。上につまみ上げる(414)、外反気味、 (417)、わずかに上下に拡張し内面が深く窪む (418)ものである。内面は横或いは斜め方向 の刷毛ナデ、指押え後刷毛ナデ(414)、口縁部 外面は横ナデ(409・414・418)、体部外面指押 え後刷毛目(409・414)を施す。刷毛目(417)、 クシ状工具(418)を施す。	白淡黄褐色 ↓ 黄淡茶色(内) 白淡黄色 ↓ 白黄色 (口縁外面)	細砂・粗砂を 含む		外面にススの 付着をみる。
410	擂鉢	21.4	12.6	8.6	体部は緩やかに外方に開き、若干内湾気味 に口縁部に至る。口縁端部は若干内傾する。	暗茶褐色	若干の砂粒を 含む		

低水路調査区・右岸用水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					内面は横ナデ後7本単位の条線をつける。外面横ナデ。外面底部はヘラ削りを施す。				
411	土鍋	25.8			斜め上方に立ち上がり、口縁端部は深く窪む。口縁外面下端には貼り付けの罫が端部を丸くして付く。内面は刷毛ナデ、外面は指押えを施す。	白黄淡茶褐色	細粗砂を含む	良好	罫より下にはススの付着をみる。
412	擂鉢	29	9.8	13.8	体部は直線的に外方に伸び、口縁部を長く直立させ、下方に若干つまみ出す。内面は横ナデ後縦17本、斜り本の条線を施す。底部は格子目に施す。口縁端部外面に刷毛目若干残る。体部外面は指ナデ。底部外面は指ナデにて仕上げる。	暗茶褐色	精製粘土 (若干の砂粒を含む)		
415	提鉢	27.5			肥厚する口縁部で、端部は内外に拡張。端部上面に浅い窪みを有す。体部内面横方向のクシ目、外面は斜めのクシ目を施す。	淡茶褐色	細粗砂粒を含む		
420		29			斜め上方に立ち上がる口縁部で、体部に直交する端部を有す。内面外面横ナデ、外面には凹線も認められる。	黒灰色 (内外上半) 淡青灰色 (内外下半)	細砂を含む		瓦質土器
421	甌	33.2	10.9	24.5	肥厚した「く」字状に外反する口縁部で、体部に直交する形の端部を有する。内面は口縁～体部中程までをクシ状工具で斜め・横に施し、以下は指頭圧痕が残る。外面には縦・横・斜め方向にクシ状工具で調整を施す。	黄茶色 ↓ 暗灰茶色(内) 白黄淡茶色 ↓ 暗茶褐色(外)	細粗砂粒を含む		焼成後に底部に穴をあけて「こしき」として用いたものであろう。
440	碗				口縁部は内湾気味に斜め上に立ち上がり、端部は外方へ折り曲げて玉縁状を呈している。	淡灰色 淡灰緑色	白色を呈し、緻密	堅緻	
441		16.2	7	6.8					完形品。
442					底部は平底に造られている。内面の底部に近い位置に凹線が施される。釉は内面全体、外面は底部より若干上の所まで施されている。	淡灰色 ↓ 淡灰緑色	白色を呈す		
444	甕	30			斜め上に張り出し、肥厚した口縁は、端部外面に浅い凹みを有す。内面横ナデ、外面はクシ状工具による縦方向のナデを施す。	褐色(内) 淡黄褐色(外)	砂粒を含む	良好	外面にスス付着。
445	土鍋	30.4			斜め上方に張り出し、肥厚する口縁で、端部はわずかに上につまみ出す。端部内面に浅い窪みを持つ。内面は荒い横方向の刷毛ナデ、外面口部はクシ状工具で施す。	白淡黄茶色	砂粒を含む		外面にスス付着。
446		31.3			斜めに張り出し肥厚した口縁で、端部は上下に若干つまみ出す。内面は荒い刷毛状工具による横ナデ、口縁外面は刷毛ナデ後横ナデ、体部は縦方向のクシ状工具で施す。	淡茶褐色 ↓ 白黄淡茶色(内) 白黄色 淡茶褐色(外)	砂粒を含む		外面にスス付着。
447		29.4			斜めに張り出し、肥厚する口縁で端部は丸く仕上げる。内面横方向の刷毛ナデ、口縁部外面は指ナデ、体部は指ナデ後刷毛ナデを施す。	淡茶色(内) 黒茶褐色(外)	砂粒を含む		外面にスス付着。

土壌-25 (第116図)

448	変形土器	14.6		14.8	口縁内面は粗いハケメ。体部内面は細かいハケメ。	灰白色	2～3mmの砂粒	良好	外面は火を受けている。
-----	------	------	--	------	-------------------------	-----	----------	----	-------------

百間川当麻遺跡

検出 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
449	甕形土器	15.2			内外面ともハケメ。	灰白色	細砂粒	良好	外面に煤
450		12.0			外面は粗いハケメ。内面は細かいハケメ。		2-5mmの砂粒		
451		22.6			内外面ハケメ。口縁部ヨコナデ。	にぶい白色	細砂粒		
452	甕形土器	17.0		6.5	外面細かいハケメ。口縁部ヨコナデ。内面に放射状の竪文。	灰白色	細砂粒 金雲母・黒雲母		
453	甕				外面タテの平行タタキのちかキメ。	青灰色	細砂粒		

土壌-27 (第118~120図)

454	高杯形土器	30	19	17.3	透孔は5孔。	黄褐色	砂粒含	良好	
455-456		18.5				淡褐色	精製粘土	普通	
457-459		14.5			脚部外面はヘラミガキとハケメがある。	淡褐色			
460	壺形土器	3			内外面ともナデ調整。	淡灰褐色			剥落顕著
461		16.5				淡褐色	砂粒含		
462					倭状浮文の配置は不明。		精製粘土		
463		22.5					砂粒含		
464		21				黄褐色			
465	鉢形土器	16			内面はナデ調整。	淡褐色	精製粘土		
466		18.5				淡褐色		良好	
467		18						普通	外面剥落
468		4.5			調整不明。				
469		4			台の付く可能性はない。	淡褐色	砂粒含		
470		11				淡褐色			
471	壺形土器	11			口縁部から頸部上半の外面は横位のナデ。	灰褐色	雲母を含む	良好	
472					頸部外面は横位のナデ。	褐色			
473		5.8			胴部外面は調整不明。	褐色			
474	甕形土器	13.5			口縁部内面は横方向のハケメ。				
475		14.8							
476	壺形土器								
477	甕形土器	13	5.3	25.3					外面煤付着
478		15	6	28	底部外面は一定方向のヘラミガキ。				
479	壺形土器				胴部上半に平行なヘラミガキ。				
480	甕形土器	13			胴部外面はハケメ調整後にナデ仕上げ。	褐色	砂粒含		
481	鉢形土器	16.5			胴部内面は横方向ヘラミガキ後にナデ。	淡褐色			
482	甕形土器	16.5			胴部外面調整不明。				
483		14			胴部外面調整不明。	灰白色			外面煤付着
484	鉢形土器	18						普通	
485	甕形土器	16			胴部外面調整不明。	褐色			
486		14						良好	
487		13			胴部外面調整不明。	淡褐色		普通	口縁部煤付着
488		13.5				灰白色			口縁部に炭化有機物付着
489		13.5			口縁部は横位のナデによるつまみあげ。	淡褐色		不良	
490		17.5				淡褐色		良好	
491		15							
492 (鉢形土器)		4.2			内外面ともナデ調整。	褐色	精製粘土	普通	
493		8.2			内面調整不明。	灰白色	砂粒含		
494		5.8				暗褐色		良好	外面煤付着
495	壺形土器	27			口縁部外面にヘラミガキの連続S字状文。	淡赤褐色		普通	
496		18.5			頸部内外面に縦方向ヘラミガキ。	淡褐色		不良	
497		14.7				淡黄褐色	微砂含	普通	
498		18	6.2	31.5		淡褐色	砂粒含		
499		14.3				淡褐色			
500		14	9.6	29.8	頸部外面はヘラミガキ後に横位のナデ。			良	
501		16	4.8	25.1	胴部外面に縦方向ハケメの痕跡。			不良	剥落顕著
502		(16.6)				赤褐色			口縁部欠損
503					丹塗り痕跡が認められる。	淡褐色	微砂含	普通	
504		14.5				淡赤褐色	砂粒含	良	内面剥落
505		10.5				淡褐色	微砂含		
506		10.5				淡褐色	砂粒含		
507		7.5			胴部外面下半はハケメか?		精製粘土		

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
508	甕形土器	11.7	3.8	20		橙褐色	砂粒含	良	
509		16	4.7	13.5	外面はナデ。	淡褐色		普通	
510		11.2	3.7	12.4	胴部外面下半はナデ。	灰白色		良	
511		9			外面はナデ。	淡褐色	微砂含		
512		11				淡赤灰色	砂粒含		外面煤付着
513		14				褐灰褐色	黒雲母含		
514		14.3				淡黄灰色	微砂含		外面煤付着
515		16.5			頸部外面はハケメ後に横位のナデ。	淡褐色	砂粒含	普通	
516		12					微砂含		外面剥落
517	鉢形土器	17				淡褐色	砂粒含		
518		18.5				淡褐色	微砂含		外面剥落
519	甕形土器	13	6.5	15.7	底部外面はハケメ。			良	
520			5.4		底部穿孔は焼成後。	橙褐色	砂粒含		
521			5.8			橙灰褐色		普通	外面煤付着
522			4			褐灰色			
523			5.5		底部外面はヘラミガキ。	暗褐色			
524	鉢形土器	41.8	10.2	18.6	胴部外面下半は粗いハケメ。	灰白色		良	
525		16.5	3.3	12.3	胴部外面下半～底部外面はナデ。	淡褐色			
526		15.4					微砂含		
527		19	6	15.7		黄褐色	砂粒含	普通	
528	台付 鉢形土器	18.3	10	16.1		淡褐色		良	
529		18	8.7	16.3	口縁部～肩部外面はハケメ後に横位のナデ	灰白色		普通	
530	鉢形土器	24.6	7	12		淡黄灰色		普通	
531		27.6	8	15.4	口縁部外面は横位のナデ。	灰白色	砂粒若干	良	胴部外面剥落
532		26.5			口縁端部は横位のナデ。	淡褐色	微砂含		
533		14.5	5.5	6.6	器表面はナデによる仕上げ。	橙灰色	精製粘土		
534		18.2				淡褐色	砂粒含		
535		10.5	4.5	7.4	口縁部は内外面とも横位のナデ。	灰褐色	微砂含		
536	台付 鉢形土器	16	9	10	内面はナデ。	褐色	砂粒含	普通	
537		6.9	3	7.3	ナデ。	淡黄灰色			
538	鉢形土器	12.5	1.8	10.6	指頭による押圧・ナデ。	黄褐色	砂粒多含	不良	
539	高杯形土器	22	13	11		淡褐色	精製粘土	良	
540								普通	
541					杯部内面はナデ。			不良	
542								良	胴内面煤付着
543			9.2						
544			8		脚部内面はナデ。	橙灰色			
545		14.5			口縁部は横位のナデ。	淡褐色			
546		12				赤褐色			
547		14			杯部内面はナデ。	橙灰色			
548					杯部外面はナデ。	淡褐色		普通	
549		10.5			杯部中央の透孔は焼成前の穿孔である。	橙灰色			
550	器台形土器	25	21	17.6	内面および脚部外面はナデ。	灰白色	砂粒含		

土器溜り（第131図）

551	甕形土器	19.0			口縁部内面ヨコナデ。	にぶい褐色	水澱し粘土	良好	
552	甕形土器	12.0			口縁部外面8条の筋掘沈線。		細砂粒		外面に黒斑
553	指形土器	18.1		4.9	口縁部ヨコナデ。内面細かいハケメ。底部外面ヘラケズリ。	外は灰白色 内はにぶい褐色	3mm以下の砂粒		
554	高杯形土器					淡黄褐色	水澱し粘土		小片
555	鉢形土器	29.4	5.5		外面指頭押えののちヘラミガキか。内面ヘラケズリか。	にぶい褐色			

百間川当麻遺跡

建物-21 (132図)

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
556	壺					灰白色	粗砂粒	良好	小片
557		15.4			内外ともヨコナデ。	青灰色	殆ど砂粒を含まない		外面自然粘

土境-28 (第133図)

558	杯	14.4	9.2	4.85	須恵器。体部はヨコナデ調整で仕上げ。ろくろ水びき痕跡をよく残す。底部はやや厚く外底部が高台端部より下位にある。器体は全体に丸味をもち、器壁はやや厚い。	暗灰色 ↓ 淡青灰色	長石粗砂を含む	やや軟質	完形片
-----	---	------	-----	------	---	------------------	---------	------	-----

溝-26 (第134図)

559	壺形土器 底 部				器表面は磨減。外底面はやや揚げ底風。弥生式土器（前期）。	白褐色	石英・長石など粗砂を多く含む	軟質	
560 ↓ 566	壺あるいは壺				いずれも青灰色ないしは青色を呈する須恵器で、外面は平行タタキ、内面は同心円タタキが施される。外面には更に、横方向のカキノ調整が施される。	青色～灰青色	比較的精良	普通 ↓ 堅緻	

溝-27 (第135～138図)

567	皿	13.5	11.8	1.7	体部外面はやや荒いヨコハケ調整、内面はヨコナデ仕上げ。外底部はナデ調整を施す。	明るい橙褐色	精良	普通
568	杯	13.3	9.3	3.0	体部はわずかに凹凸を残し、直線的なたちあがりを示す。器表は内外面共に丹塗の化粧がみられ、内底部に顕著である。土師器。	紫地は黄白色		
569					須恵器底部片で外底部に×印のカマジルシがへら描きされる。	暗灰青色		
570 ↓ 580	壺・横瓶・交				571・578は模範片で後者は、体部中央部の内板充填部分。他は外面平行タタキ、内面は同心円タタキが施される。中には外面にカキノ調整が施されるものもある。須恵器。	暗青色～灰色		
581	内筒壇輪				口縁部片。端部は外方する。内外面共にヨコナデ調整。	明橙褐色	微砂を含む	良好
582					口縁部片。端部は外方する。外面はタテハケ調整の後、一部ヨコナデ、内面は斜方向の荒いハケ調整の後、ヨコナデ仕上げを施す。	白っぽい 橙褐色 ↓ 橙褐色		
583					口縁部片。端部は外方せずに丸味をもっておわる。外面はタテハケ調整の後、ヨコハケ調整を施し、上端はヨコナデ仕上げ。内面はヨコハケ調整を施し、上端はヨコナデ仕上げ。	白褐色		
584					口縁部。端部はやや外方しやや鋭く突出しておわる。外面はタテハケ調整、上端はヨコナデ仕上げ。内面は細かなヨコハケ調整、上端はヨコナデ仕上げ。	赤橙褐色 ↓ 白褐色		
585					口縁部。端部はやや外方し鋭くおわる。外面はヨコあるいは斜行ハケ調整、内面はやや荒い斜行ハケ調整を施す。上端はいずれもヨ	橙褐色		

右岸用水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					コナデ仕上げ。				
586	円筒埴輪				胴部片。外面は細かなタテハケ調整の後、ヨコハケ調整で仕上げる。内面はナデ調整。	淡橙褐色	精良 微砂を含む	良好	
587					胴部透孔部。外面は荒いタテハケ調整の後、ナデおよびヨコハケ調整で仕上げる。内面は荒いタテハケ調整がナデによってすり消されている。透孔は円形で、鋭い工具でいっきに切りとられている。	明橙褐色	精良		
588					胴部透孔部。外面はタテおよび斜方向のハケ調整を残す。内面は下半にヨコハケ調整が施される。	くすんだ 橙褐色	微砂を含む	やや軟質	
589					胴部透孔部。外面は細かなヨコハケ調整を施す。内面は斜方向のナデ調整が観察される。透孔部は円形で鋭い工具でいっきに切りとられている。	淡白褐色		普通	
590					胴部。外面はタテハケ調整の後、しずかなヨコハケ調整が観察される。内面はタテハケ調整およびナデ仕上げを施す。	赤橙褐色	微・粗砂を含む	良好	
591					胴部片。外面はヨコハケ調整、内面はナデ調整で仕上げる。		微砂を含む		
592					胴部片。外面は荒いヨコハケ調整、内面もほぼ同様な斜方向のハケ調整を施す。		微・粗砂を含む	やや軟質	
593					胴部片。外面は荒いタテハケ調整の後、ヨコハケ調整、内面は荒いカキメを思わせる斜方向およびヨコハケ調整を施す。	白褐色	微砂を含む		
594					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を呈する。残存部はすべてヨコナデ仕上げ。内面はヨコナデ調整を施す。外面には丹彩を施す。	明赤橙褐色 ↓ 淡橙褐色 (内面)	微砂を含む 精良	良好	
595					胴部突帯部分。突帯は断面形三角形を呈する。内外面共に磨滅。	暗褐色	微砂を含む	やや軟質	
596					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を呈する。外面は、残存部すべてヨコナデ仕上げ。内面は細かなタテハケ調整を施す。	白褐色		普通	
597					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を呈する。外面はヨコハケ調整およびヨコナデ仕上げ。内面は斜行ハケ調整およびナデ調整を施す。	淡黄橙褐色	微砂を含む 精良	良好	
598					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を示し、やや下垂する。外面はタテハケ調整を施し、突帯貼付け前も同様の調整が施される。突帯およびその上下はヨコナデ仕上げ。内面はヨコハケ調整を施す。	淡橙褐色土	微砂を含む		
599					胴部突帯部分および透孔部分。突帯は断面形台形を示し、やや下垂する。透孔は円形。外面はタテハケ調整の後、ヨコハケ調整を施す。突帯部分はヨコナデ仕上げ。内面は酸化鉄が付着して不明。	淡灰褐色		普通	
600					胴部突帯部分。突帯は剥落。外面はやや斜行するタテハケ調整、内面も同様であるが、ヨコナデ調整も加わる。	橙褐色		やや軟質	

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
601	円筒埴輪				胴部突帯・透孔部分。透孔はいびつな円形。突帯は断面形台形を示す。外面はヨコハケ調整。突帯部分はヨコナデ仕上げを施す。内面はヨコナデ調整を施す。	淡灰白褐色	微砂を含む	普通	
602					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を示す。外面はタテハケ調整の後、ナデ調整を加え、突帯部分はヨコナデ仕上げ。内面はタテハケ調整にナデ。オサエ調整を施す。	橙褐色土	微砂を含む 精良	良好	
603					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を示す。外面はタテハケ調整の後、ヨコハケ調整を施す。突帯の下にはタテハケ調整痕が残る。内面はやや荒いヨコハケ調整を施す。	白褐色	微砂を含む	普通	
604					胴部突帯部分。突帯は断面形台形を示す。外面はヨコハケ調整およびヨコナデ調整痕を残す。内面はヨコハケ調整が施される。	暗灰赤褐色		やや良好	
605					胴部突帯・円孔部分。突帯は断面形台形を示す。外面はタテハケ調整の後、ヨコおよび斜行ハケ調整を施す。内面はヨコ・斜行ハケ調整の後、一部ナデ調整を施す。	明橙褐色	微砂を多く含む		
606					基底部。外面はヨコハケ調整、内面は斜行ハケ調整・タテ方向のナデ調整を施す。	橙褐色	微砂・粗砂を含む	良好	
607					基底部。外面はタテハケ調整の後、ヨコハケ調整を施し、下端はナデ仕上げ。内面はヨコおよび斜行ハケ調整を施す。	灰褐色	微砂を多く含む		
608					基底部。外面は磨滅、内面は斜行ナデ調整を施す。	白褐色	微砂を含む	やや軟質	
609					基底部。外面は荒いヨコハケ調整、内面は斜行、ヨコハケ調整およびヨコナデ調整を施す。				
610	形象埴輪				該当器物は不明。外面は細かなヨコハケ調整を施し、その上から太目の綾杉文様がへう描きされる。内面は粘土接合痕・ナデ調整痕を残す。	白褐色	微砂を含む	良好	
611					表面には網代組を細目の線刻で描かれる。一方には付属物が剥落した痕跡を残す。内面には粘土接合痕とナデ調整痕を残す。家形埴輪の屋根か。	淡白橙褐色	微砂を多く含む	やや軟質	
612					鰭状を呈する部位で、鰭付円筒埴輪か盾形埴輪の可能性がある。表面には細かなハケ調整の後、丹塗りが施されるが裏面には施されず、細かなヨコハケ調整を残す。接合痕跡は明瞭に看取され、接合面にハケ調整痕を残す。	赤褐色 ↓ 白褐色			
613					三角板葺短甲前胴部。ていねいなナデ仕上げの後、三角板や付属部品（装飾的）を描く。また葺板部分は巾1.4cmの長方形粘土を貼付けて表現する。裏面には極めて細かいヨコハケ調整を施す。	淡橙褐色	精良		
614					板状を呈する。端面はやや丸味をもって終り、表面には細かなタテハケ調整を施し更に丹彩が施される。裏面はタテ方向のナデ調整が施される。	赤橙褐色 ↓ 黒灰色	微砂を含む		
615					円筒状の部位。外面はタテ方向の極めて細	白橙褐色			

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					かいハケ調整を施す。内面は粘土の輪積み 接合痕が観察される。				
616	形象埴輪				家形埴輪の屋根、破風部分か。正面観には 細かなハケ調整を施し、更に丹彩がみられる。 裏面はナデ、粘土接合痕を残す。	赤橙褐色 ！ 白橙褐色	微砂を含む	良好	
617					家形埴輪の壁か。表面にはタテハケ調整を 施し、更に丹彩が彩される。裏面はタテ方向 のナデあるいはハケ調整を施す。	赤橙褐色 ！ 橙褐色		やや軟質	
618					家形埴輪の屋根で、破風の一部も残す。表 裏共に細かなハケ調整を施し、全面に丹彩を 施す。また、屋根には押し縁状の線刻が描か れる。	赤橙褐色		良好	
619					家形埴輪の屋根で、破風の一部を残す。表 面の大半は細かなハケ調整が施される。屋根 には618と同様押し縁状の線刻が描かれてい る。屋根部分は縦方向の剥離面がみられ、板 状の粘土の接合で屋根が形づくられたことが わかる。	白褐色	精良		
620					家形埴輪の壁部分で、平側と妻側に3条の 平行沈線が描かれ横板造りの家であることを 示している。表面には極めて細かなハケ調整 が施され3条の沈線の直下から上半は丹彩が 施される。裏面はタテハケ調整が施される。	赤橙褐色 ！ 白褐色			
621					家形埴輪の下部で裾廻りの突帯部分と台部、 壁の一部を残す。床下には半円形の透孔がみ られる。ナデ調整による成形が内外面に観察 される。	橙褐色	微砂を含む		
622					家形埴輪の下部、裾廻り部分。外面はタテ ハケ調整、内面には丹彩の痕跡（流れこみ） もみられる。	白橙褐色		やや軟質	

溝-28 (第139図)

623	甕	23.5			肩部外面は縦方向平行タキ後にカキメ	灰色	砂粒含	堅緻	自然釉散在
624		25							
625		16							
626		11.7				青灰色			
627		13				灰色			
628		9.8					微砂質粘土	良	遺存度不良
629	杯					暗灰青色	微砂含	良	内面赤灰色
630	高杯	9				淡褐灰色	微砂質粘土	良	
631		11.7				灰色		堅致	
632	杯	13.8	10.5	2.7	内外面とも丹彩。	橙赤色	微砂若干	良	
633		13.3	10	2.6			微砂含	普通	
634		11.2					微砂若干	良	
635		13.2	10	3.5			微砂含	普通	
636	高杯		14.5		脚柱部はヘラケズリにより9面の面取り。 外面と脚柱部内面に丹彩。		微砂若干	良	

溝-29 (第140～142図)

637	杯	14.0			口縁内外面ヨコナデ。底部内面ユビナデ。	灰白色	細砂粒	ややあまい	外面に黒斑
-----	---	------	--	--	---------------------	-----	-----	-------	-------

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考	
		口径	底径	器高						
					外面へラ切り痕(左)。					
638	杯	13.8	9.0	4.0	底部外面へラ切り(左)ののちわずかにユビナデ。他はヨコナデ。	灰白色	細砂粒	あまい	黒斑	
639		13.6	9.8	3.8	638と同じ					
640	壺	14.6		3.1	天井部外面へラケズリ(左)。内面不整方向のユビナデ。他はヨコナデ。	淡灰色		良好		
641		14.0			天井部外面へラケズリ。他はヨコナデ。	淡青灰色				
642		13.9			天井部外面へラケズリ。内面不整方向のユビナデ。他はヨコナデ。	暗灰色				
643		14.0			内外ともヨコナデ。	青灰色				
644		18.4			天井部外面不整方向のユビナデ。他はヨコナデ。	淡灰色	微砂粒			
645		18.8			天井部内外面不整方向のユビナデ。他はヨコナデ。	青灰色	細砂粒			
646		27.0			640と同じ。	淡灰色				
647		11.4			内外ともヨコナデ。	灰色				
648		11.2			647と同じ。	灰白色				微砂粒
649										
650										
651							淡灰白色			
652	杯		7.4		底部外面へラ切りののちわずかにユビナデ。他はヨコナデ。	青灰色	細砂粒	ややあまい	外面自然釉	
653		13.6		3.8	652と同じ。	灰白色	殆ど砂粒を含まない			
654		14.0		3.3	底部外面へラ切り。他はヨコナデ。			微砂粒	良好	
655		11.6			内外ともヨコナデ。	青灰色	細砂粒			
656		13.8	9.0	3.5	底部内面不整方向のユビナデ。外面へラキリ(左)。他はヨコナデ。			灰色	殆ど砂粒を含まない	
657		12.8	9.4	4.0	底部内面ユビナデ。外面へラ切り(左)ののちユビナデ。他はヨコナデ。					2～3mmの砂粒を含む
658		12.4	8.0	3.9	657と同じ。					
659		15.2	11.0	6.3	底部内面ヨコナデ。外面指頭押え。他はヨコナデ。	暗青灰色	2～5mmの砂粒を含む			
660					底部内面不整方向のユビナデ。他はヨコナデ。	淡青灰色	微砂粒	小片		
661			10.0		底部内面不整方向のユビナデ。外面へラ切りののち不整方向のユビナデ。他はヨコナデ。	暗灰色	殆ど砂粒を含まない			
662						青灰色	微砂粒	小片		
663			10.0		661と同じ。					

右岸用水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考	
		口径	底径	器高						
664	杯				660と同じ。	灰白色	細砂粒	良好	小片	
665			9.2		661と同じ。	淡灰色		ややあまい		
666			10.1		内外ともヨコナデ。	青灰色	微砂粒	良好		
667			13.2		656と同じ。	灰褐色	細砂粒			
668			12.6		660と同じ。	暗灰色	微砂粒			
669			12.8		656と同じ。	青灰色	細砂粒			
670			12.0		661と同じ。		微砂粒			
671	高杯		9.8		内外ともヨコナデ。	暗灰色	微砂粒 金雲母・黒雲母			
672			6.6		底部外面へラ切り。他はヨコナデ。	灰白色				
673					内外ともヨコナデ。	暗灰色				
674	硯					淡青灰色			小片	
675	甕	22.4			口縁部内外ともヨコナデ。	暗青灰色			外面自然釉	
676		24.0			内外ともヨコナデ。	淡灰色				
677	杯				底部外面不整方向のへラケズリのちへラミガキ。	にぶい橙色			全面丹塗り 金雲母・黒雲母	全面丹塗り
678					底部外面不整方向のへラケズリか。他はヨコナデ。	灰白色				小片。全面丹塗り。
679		13.6		3.0	底部内面不整方向のユビナデ。外面へラケズリ。					全面丹塗り
680		12.8			内外ともヨコナデ。					
681	皿	15.0			ヨコナデ。底部外面へラケズリか。					
682		17.8		1.5	内外ともヨコナデ。					
683		19.0	9.4	4.3	底部内面指頭押えのちユビナデ。外面へラケズリ。高台はヨコナデ。	にぶい橙色				
684	高杯									

井戸-7 (第144図)

685	白磁碗	18.5			白磁碗。口縁部は特有の厚みがみられる。釉面は光沢を放つ。	淡緑白色	精良	堅緻	
686			7.4		白磁碗底部。断面形状を呈し外方するケズリダシ高台をもつ。見こみ部分には横方向の段があり、中央部はやや盛りあがる。見こみ部分は平滑で光沢がありていねいに仕上がる。	淡白灰色			底部充存。
687	碗	15.9	5.4	5.7	土師質土器。外面は口縁部にはヨコナデ調整が施され、掌圧痕を残す底部にはヨコ・斜方向の暗文がみられる。内面は、ていねいな	白褐色	普通	良好	完形片。

百間川当麻遺跡

棟図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					ナデ調整の後、暗文が施される。内底部は特 にていねいな仕上げが施されなめらかで、ツ ルツルしており重ね焼痕も残す。高台は貼付 けで外方する。瓦器製作手法に似る。				
688	柄	14.5			土師質土器。外面はヨコナデ調整、内面は ナデ調整を施し、口縁部には細かいミガキが 施される。	淡黄褐色	粗砂をわずか に含む	良好	
689			6.4		土師質土器。688と同質、外面はヨコナデ調 整、内底部は任意ナデ調整を施す。高台は高 く外方する。				
690			5.8		689と同質。内底部はよく磨かれ、滑らかで あるが黒色の煤状の炭化物が付着している。	白黄灰色			
691	口	8.2	5.9	1.2	土師器。外底部はヘラオコシ痕を残す。	褐灰色		やや軟質	

井戸-8 (第146図)

692-695	楕		6-7		内面は丁寧なナデ。	灰白色	微砂含	良	695に重焼 き痕がある。
696			6		底部外面には板目痕跡。	淡褐灰色	砂粒含	堅緻	
697			16.5		内面は回転ナデ。	灰色	微砂含		
698	口		9.3		内外面とも回転ナデ。	橙灰色	精製粘土		
699-701	小口	8-9	5.5-7	13-17	699は糸切底。				
702	鉢				内外面とも回転ナデ。	青灰色	砂粒含		
703	椀				内面と外面上半に暗文。	暗灰色	微砂含		

土壇-29 (第147図)

704	皿	9.3	約4.3	1.8	瓦器皿。内面にはわずかに暗文が施され、 内底部中心は中央の隆起をヘラ先で調整して いる。外底部には指頭圧痕を残す。	灰黒色 ↓ 黒灰色	粗砂をかすか に含む	良好	復元実図。
705	柄	15.3	5.2	6.4	瓦器柄。見込みには暗文をよく残す。外面 体部上半はヨコナデ調整、下半にはオサエ調 整を施し圧痕がみられる。高台は断面形三角 形を呈する。	灰黒色 ↓ 淡灰褐色	精良	不良。完全 にいぶし焼 となってい ない。	
706		15.7	5	5.3 ↓ 4.1	瓦器柄。見込みには暗文数条が施される。 体部上半口縁部に近い部分はヨコナデ、下半 にかけては指頭オサエ痕をよく残す。高台は 断面形三角形を呈する。	灰黒色		やや不良	完形片。
707	鉢	40.3			須恵質土器。内外面共にヨコナデ調整を施 す。内面には磨減・使用痕がみられる。口縁 部はやや肥厚して終る。	白っぽい灰色	微砂・粗砂を 多く含む	軟質	復元実図。

土壇-30 (第148図)

708 ↓ 720	口	8.1 ↓ 9.2		1.0 ↓ 1.7	土師器口。形態にはいくつかのパターンが あるが、時期差を示すとは考えられない。口 径は8cm前後を測るもの、9cm前後を測るも のに二分される。体部は直線的に外方する ものとゆるやかに弧を描いて外方するものが	白橙褐色	比較的精良	軟質	完形品およ び正確な計測 値の得られる、 完形品
-----------------	---	-----------------	--	-----------------	--	------	-------	----	-----------------------------------

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
					みられる。すべてろくろを使用して作られ、回転方向は左右両方みられ、すべてヘラオコシによって切りはなされる。更に、板状の圧痕が観察される。糸切底はみられない。				
721	皿	14.5	9.5	2.4 2.7	土師器皿で、やや大型である。器壁はやや厚手で口縁端部はやや肥厚して丸くおさまる。ヨコナデ、ナデ調整を主体とし、外底部はヘラオコシ痕跡を残す。ろくろは左回転。	明白橙褐色	精良	普通	完形片。
722		14.7	9.8	2.5 2.75	721と同様であるが、底部の形状がやや異なる。外底部はヘラオコシ痕を残す。				
723		7.9	約5.6	1.6	瓦器皿。外面体部上半はヨコナデ、下半から底部にかけては指頭圧痕を多く残す。見こみには暗文は認められない。	灰黒色 黒灰色	不良	良好	完形片。
724		8.8			瓦器皿、やや大ぶりで深い。外面はタテ方向の任意ナデ調整が部分的にみられる他、不調整、内面には恣意的な暗文がみられ、口縁部近くはヨコナデ調整が施される。	白っぽい灰色 灰色・黒色	精良		口縁部・体部片復元実測。
725		9.1	約6.3	2.0	瓦器皿。体部外面上半はヨコナデ調整、下半から底部にかけては不調整である。見こみには10条の直線的な暗文が施され、全面はヨコ方向のミガキ・ナデがみられる。	灰黒色			完形片。
726 728	楕				瓦器楕底部片。726は高台の断面形は台形を示し、古い様相を示す。727は網目状の暗文が見こみ部分に施される。728は見こみに3条の細い暗文と、ヨコ方向の2条の暗文がみられる。				
729		14			瓦器楕。体部外面にはヨコナデ調整の後、横方向の暗文風のミガキがみられる。下半は不調整。内面は横方向のミガキに加え、恣意的な暗文が多くみられる。口縁部は肥厚して丸くおさまる。	灰黒色～ 黒灰色		普通	復元実測。
730		15.2	4.7	5.0	瓦器楕。体部外面口縁部近くはヨコナデ調整、下半から底部にかけては指頭圧痕を多く残す。見こみにはヨコ方向および直線的な暗文を施す。	灰黒色		良好	完形片。
731	白磁皿	10.1			白磁。体部は屈曲し段状をなす。器表釉には貫入がみられる。太宰府皿類類に比定されるものか。	淡白灰色	灰白色	堅緻	口縁部片復元実測。
732	白磁碗		6.75		白磁。底部は露胎となっている。釉は光沢あり、見こみ部分には釉がかかっていない部分があり、若干砂粒が付着している。	淡白緑灰色	白灰色		底部充存。
733	楕	17.6	7.3	5.5	須恵質土器。体部外面はヨコナデ調整を施し底部は糸切底。内面もヨコナデ調整を施す。器壁は厚手で、口縁部は肥厚して丸味をもっておわる。口縁周縁には黒灰色を呈した、ベルト状の重ね焼痕跡がみられる。	暗灰色 淡灰色	粗砂・微砂を多く含む	やや良好	完形片。
734 735	鉢	33.6	10		須恵質土器。やや肥厚して段がつく口縁端部が観察される。体部はヘラケズリの後、ヨコナデ調整で仕上げる。内面はヨコナデ調整を施し、下半は使用頻度を物語る磨滅がある。外底部は糸切底で、圧痕もみられる。同一個体の可能性が強いもので、こね鉢と考えられる。	灰青色 くすんだ 青灰色	砂粒を多く含む		復元実測。

百間川当麻遺跡

插图 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	高さ					
736	甕				須恵器。外口はやや大き目の格子目タタキを施し、その上からタテ方向のカキノ調整がみられる。内面は主にヨコ方向のカキノ調整で器口をととのえる。底部近くの体部下半片である。				

土墳墓—2 (第150図)

737	柄	14.8			内外面ともヨコナデ。	灰色	微砂粒	良好	重ね焼痕跡
-----	---	------	--	--	------------	----	-----	----	-------

中世柱穴 (第151~153図)

738-746	口	16 5 11.3	11 5 5.8	3.3 1 1.8	土師質土器。調整はロクロ使用による回転ナデであり、回転方向は左右どちらもある。底部外面に糸切りはみられず、板目痕跡をもつものが多い。	淡褐色	精製粘土	堅緻なもの と、良好な ものがある	
747-778	小口	9.2 1 7.8	7.2 1 4.3	1.9 1 1	土師質土器。調整はヨコナデであり、ロクロ回転は左右どちらもある。糸切り底はみられず、粘土紐の痕跡を残すものがある。				
779	埴輪					黄褐色	砂粒含	良好	外面自然釉
780-784	鉢	37.8 1 33.7			調整は内外面ともハケメであり、外面には縦方向のハケメもみられる。	灰褐色		普通	
785	壺				須恵器。ロクロは左回転。	灰色		堅緻	
786	杯	10.5			須恵器。ロクロは右回転。	暗灰色			
787	盃				須恵器。	淡青灰色	細砂含		
788-790	柄	16	6		須恵質土器。調整はロクロによるヨコナデであり、回転方向は左右どちらもある。口縁部は暗灰色を呈す。	暗灰色			
791	皿		9.8		須恵質土器。ヘラオコシによるか。	灰白色	微砂質粘土		
792	柄	8.8	4.5	2.7	須恵質土器。ロクロによる左回転のナデ調整を施し、糸切り底である。	青灰色			
793-795	小皿	8.2 1 7.5	6 1 5.2	1.5 1 1.1	須恵質土器。糸切り底。	淡青灰色			
796	皿		7		須恵質土器。ロクロは左回転で糸切り底。	灰白色	砂粒含		
797	こね鉢	32.5			須恵質土器。ロクロは左回転。	青灰色			
798	甕				亀山焼。	淡褐色	細砂含		
799	鉢				須恵質土器。ロクロは右回転。	淡青灰色			
800	甕				亀山焼。	暗灰色	砂粒含		
801-828	柄	16.5 1 11	7 1 4.2	5.2 1 3.2	従来「早稲式土器」と呼ばれる土師質土器である。口径で14~16cmの大形品と、11cm前後の小形品にわかれ、高台径でも、6~7cmの大形品と4cm前後の小形品にわかれる。高台高は0.4~1cmの幅をもち、断面形も、三角形のものと、台形のものがある。	灰白色	砂粒を若干含む 精製粘土		

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
829-836	椀	15.5 14	5.4 3.2	5.2	瓦器。外面下半は指頭によるオサエが残るが、外面上半と内面はていねいなナデ仕上げがなされる。暗文は内面のみである。	暗灰色	砂粒を若干含む精製粘土	堅緻	
839	皿	10	7.5	1.5	瓦器。ロクロ回転は左である。				
840		8.8	6.8	1.8					
841	碗	18.2			青磁。	淡緑灰色	緻密		
842-843		16.4			白磁。	乳白色			
844					青磁。	淡緑灰色			
845		9			釉は暗灰緑色を呈し、光沢なく鈍い釉調を示す。施釉は全面にわたり、素地胎土は還元焰焼成である。肩部には簡略な耳が飾られる。俗称「甬重陶器」とされるものであろう。	青灰色	精良	良好	
846	椀	11.3			黒釉陶器。いわゆる「天目茶碗」。	灰黄色	緻密	堅緻	

溝-30 (第156・157図)

847 849	皿	8.7 9.3	約6.5 1.7	1.5 1.7	土師器皿。いずれも体部はヨコナデ調整を施し、内面はていねいなナデ調整で仕上げる。外底部はヘラオコシの痕跡を残し、更に圧痕もみられる。	白澄粘土	比較的精良	軟質	完形品。
850		14.7	9.5	2.4	土師器皿。やや大型で器壁もやや厚手である。体部内外面はヨコナデ調整を施し、外底部はヘラオコシ後ナデ仕上げ。	灰褐色～ 橙褐色	精良	普通	完形片。
851		14.8	9.4	2.6	850とほぼ同様。外底部はヘラオコシ後、圧痕がみられる。うくろは左回転。	赤味を帯びた 橙褐色			完形片。
852	杯か		5		須恵器。体部は内外面ヨコナデ調整を施す。外底部は糸切底。	灰青色		良好	
853			10.5			淡白灰色	比較的精良	軟質	
854 856	椀	14.5 15.5	5.9 6.2	4.6 5	土師質土器。体部外面は口縁部近くをヨコナデ調整、下半は不調整とするもの多い。高台はやや外方し、高く内外面はヨコナデ調整が施される。内面は任意あるいは、ヨコナデ調整で仕上げられ滑らかである。見こみに重ね焼痕を残すものもみられる。	白黄褐色 黄白色	精良	良好	完形片・完形品。
859		12.7	4.3	4.6	瓦器。体部上半はヨコナデ、下半は不調整である。内面にはヨコ方向の暗文が施される。高台は断面形鋭角三角形を呈する。	黒灰色			復元実測。
860		14.2	4.25	4.4	瓦器。体部外面は口縁部四縁のみヨコナデ調整を施し、下半は不調整。内面には上半部はヨコ方向、底部には斜方向の直線的な暗文が施される。高台は断面形逆台形を示す。	灰黒色			
861 867	壺・椀				白磁(861～864・867)、青磁(865・866)、861は水甌と考えられる白磁の口頸部片。口縁端面は露胎となっている。装飾的な把手状の耳が一部残される。862は白磁碗で光沢ある釉面が観察される。見こみ部分は釉のかかりにムラがあり凹凸がある。体部下半は露胎である。867は底部で見こみ部分には段があ				

百間川当麻遺跡

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	高さ					
					る。外底部は露胎でケズリ痕跡をよく残す。いずれも精良な築地・粒をもつ。				
868	甕か				須恵器。体部片で外面は斜方向の平行タタキが施され、内面はヨコ方向のナデ調整を施す。	黒色～赤灰色	微砂・粗砂を含む。	良好	
869 1 872	土鍋				土師質土器。いずれも煮沸用器として用いられたことがわかる。体部は基本的にタテ、斜行ハケ調整を施し、内面は横方向のカキメ調整がみられる。口縁部内面では、カキメのあるものとなないものが同方みられる。出土量は極めて多いが細片がそのほとんどを占める。	赤褐色			
873	瓦				平瓦片で、斜格子のタタキが凸面に施され、凹面には布目圧痕をよく残す。	白灰色			
874	甕	約35	25.5 1 45.5	22.5 1 32	土師質で前面に底状の口縁をもつ。その下部はタテ方向のハケ調整を施す。炊き口は台形状を呈し周縁や内面には煤が付着している。鈎面上位にはこぶ状の突起がみられる。内面はヨコナデが主体である。	橙褐色 1 灰褐色			完形片復元。

溝-31 (第158図)

875	柄	14.5	7	5.8	内面は丁寧なナデ。「早島式土器」。	灰白色	微砂含	堅緻	
876	鉢				外面はナデ。亀山焼。	暗灰色			
877	こね鉢	21			偏前焼。	暗赤灰色	砂粒含	良好	
878					土師質土器。	橙灰色			
879	土鍋支脚					橙褐灰色			
880	擂鉢				偏前焼。	淡赤灰色	微砂含	堅緻	
881						褐灰色			

溝-32 (第159図)

882-884	擂鉢	28	12		偏前焼。	灰赤色	砂粒含	堅緻	
885			8.4			暗赤灰色			
886-887	甕					赤褐色			
888					亀山焼。	灰色		良好	
889-890					常滑焼。	橙褐色		堅緻	

溝-33 (第160図)

891-892	柄	12.2	6.8		「早島式土器」と呼ばれる土師質土器。	灰白色	砂粒を含む	堅緻	
893	口	7.8	6.5		土師質土器。	橙灰色	精製粘土	良好	
894	碗				白磁。	乳白色	緻密	堅緻	
895	柄		4.7		須恵質土器。	青灰色	細砂を含む		

溝-36 (第164図)

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
896	柄		4.0			乳白色	微砂粒	良好	
897	小皿	6.4		1.1	底部内外面エビナデ。	にぶい橙色	殆ど砂粒を含まない		

溝-37 (第165図)

898	柄		6.0			灰白色	微砂粒	ややあまい	
-----	---	--	-----	--	--	-----	-----	-------	--

落ち込み (第168図)

899	槽鉢	32.0				赤褐色	細砂粒	堅緻	内面磨減。
900					口縁外面に浅い凹線。	灰赤色			
901						赤灰色			内面磨減。
902						にぶい赤褐色			
903						赤褐色	微砂粒		
904					口縁外面に2条の凹線。	にぶい赤褐色	細砂粒		
905						赤褐色			
906						暗赤灰色	微砂粒		内面磨減。
907						暗赤褐色			
908	甕					暗赤灰色	2～3mmの砂粒を含む	良好	
909						暗赤褐色	微砂粒		
910	壺					灰色			
911		9.6			体部外面に波状文。	にぶい赤褐色			
912	柄	11.2	4.2	3.5	体部内外面に淡緑灰色の釉。削り出し高台。	にぶい黄橙色	緻密		
913	皿	11.2	6.6	2.5	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	浅黄色			

土壌-33 (第169図)

914	皿	14.3	3.8	3	糸切底。	黄緑灰色	精製粘土	堅緻	
915	柄		4.4		削り出し高台、内外面施釉。	淡緑灰色			
916			3.8			緑灰色			
917			4.2		削り出し高台、内面施釉。	緑青灰色			
918	小口	9	6.5	1.3	糸切底。	橙灰色	精製粘土	良	
919	柄		5.2		「早島式土器」と呼ばれる土師質土器。	灰白色	砂粒含	堅緻	
920	槽鉢				備前焼。	赤灰色			

土壌-34・35 (第171図)

921	槽鉢	34.2			備前焼。	褐色	砂粒含	堅緻	
-----	----	------	--	--	------	----	-----	----	--

百間川当麻遺跡

検出 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
922	播鉢				偏前焼。	赤褐色	砂粒含	堅緻	
923	鉢					淡赤灰色			
924	甕					灰褐色			
925	燈明皿	10.5	6	1.6		暗灰褐色	緻密		
926	皿	10.5	6	1.6		暗橙褐色		良好	
927			8.8		土師質土器。底面に板目痕跡。	灰白色	砂粒含		
928	土師支脚				土師質土器。	橙灰色			
929						淡橙灰色			
930	軒平瓦				須恵質。	灰色	細砂粒	堅緻	
931	壺	10			内面は背海波文をズリケシている。	褐緑色			
932	鍋	48	16		底面は粗いハケメ。土師質土器。	褐灰色	砂粒含	良好	

溝-45 (第174図)

933	鉢	29			口部外面に重ね焼痕跡。	赤褐色	砂粒含	堅緻	口前焼。
934	口		4.8		ヘラケズリによる器表面整後に施釉。	淡緑灰色	精撰粘土		
935			5.4		削り出し高台。				
936			3.8			淡褐灰色			
937			4			褐橙灰色			

溝-46 (第175図)

938	柄	15.5	7.2	6.2	口部外面は回転ナデ。「早島式土器」。	灰白色	微砂含	堅緻	
939		16	6.8	5.1	左方向の回転ナデ。「早島式土器」。		砂粒含		
940			13		偏前焼。	赤褐色			
941	土鍋				口部外面上半はハケメ、下半は多条凹線。	褐灰色	微砂含	良	土師質土器
942	播鉢		12.6		外面は左方向の回転ナデ。偏前焼。	赤灰色	砂粒含	堅緻	
943	柄		5.8		柄部内外面と高台外面に施釉。	灰白色	精選粘土		
944			4.5		器表面に施釉。	黄緑灰色			

包含層出土遺物 (第176～179図)

945	製塩土器		4.5		土師器。体部外面はヘラケズリ調整で器体が整えられる。内面は荒いハケメ痕を残す。台部は外方し、丸味をもって終る。	赤橙褐色	砂粒を多く含む	軟質	1区褐灰色包含層出土。
946	高杯				須恵器。脚部片、層序的には奈良時代に比定される。	灰色	微砂を含む	堅緻	2区灰黄色砂質土出土。
947	杯	11.65		4.1	須恵器。立ちあがりはやや内傾して丸くおさまる。体部の一部には自然釉がかり、緑	緑灰色～灰色			5区出土。

右岸用水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考	
		口径	底径	器高						
					灰色を呈する。体部は丸味をもって成形、調整される。					
948	杯	11.7	6.5	4	須恵器。底面はヘラケズリによって平らに成形される。基本的にヨコナデ調整が施され丸味をもった口縁端部に至る。	淡灰色	微砂を含む	堅緻	2区淡灰黄色砂質土出土。	
949	杯か	13		4.7	須恵器。蓋の可能性もある。体部の内外面はヨコナデ調整が施され、外底部にヘラケズリ痕跡を残す。口縁端部は丸味をもっている。	淡青灰色			1区黄褐色土出土。	
950	鉢		約7cm	4cm以上	須恵器。体部は基本的にヨコナデ調整が施される。外底部ではていねいな横方向のヘラケズリ痕跡を残す。形態的に特異で、類例をみない。	淡白灰色	精良	良好	4～6区茶褐色含礫土層出土。	
951	蓋	10.6		3.3	須恵器。天井部は横方向のカキメ調整が施され、頂部には宝珠ツマミが付けられる。体部はヨコナデ調整が施される。内面には断面三角形を呈するカエリをもつ。	灰白色	粗砂をわずかに含むが精良	堅緻		
952		14.6		3.05	須恵器。天井部はヘラケズリが施され、扁平なツマミが付けられる。体部にはヨコナデ調整が施される。ろくろは時計まわり。	くすんだ灰色			良好	
953		17		2.4	須恵器。天井部はヘラケズリが施され、やや凹んだ中央部に扁平なツマミが付けられる。体部はヨコナデ調整を施す。	灰色			堅緻	1区出土。
954	杯		9.2		須恵器。体部は内外面共にヨコナデ調整を施す。外底部はヘラフォン後、ナデ調整で仕上げる。高台は断面台形を呈する。ろくろは左回り。	灰青色		良好	4～6区茶褐色含礫土層出土。	
955			12.2		須恵器。体部および高台部分はヨコナデ調整で仕上げる。底部は器壁は厚く、下方に位置する。	灰色			堅緻	2区淡灰黄色砂質土出土。
956		15.6	10.4	5	須恵器。体部の内外面はヨコナデ調整を施す。内底部は任意ナデ調整で仕上げるが、回転凹凸痕を残す。高台はやや外方する。ろくろは時計回り。	青灰色			粗砂含むも精良	良好
957	蓋	11.4		4.1	内外ともヨコナデ。	にぶい褐色	微砂粒	生焼け		
958		12.6			ヨコナデか。	灰白色	細砂粒	あまい		
959		13.2			957と同じ。	淡灰色		良好		
960		10.8		3.0	天井部ヘラ切りのち不整方向のユビナデ。	青灰色	微砂粒			
961		10.2		3.5	960と同じ。	暗青灰色				
962		10.2		3.6	天井部ヘラ切り未調整。	淡青灰色				ややあまい
963	杯	9.4		3.2	底部内面不整方向のユビナデ。外面ヘラ切り未調整。	青灰色		良好		
964		10.2		3.6 ~4.6	底部内面ユビナデ。外面ヘラ切りのちユビナデ。					
965		11.8							淡青灰色	
966	高杯	12.5	8.0	14.0	ヨコナデ。	青灰色				

百間川当麻遺跡

採掘 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考	
		口径	底径	器高						
967	高杯				ヨコナデ。	灰白色	粗砂粒	良好	小片	
968-969	盃					青灰色	微砂粒			
970					天井部ヘラケズリか。					
971		11.6			ヨコナデ。	淡灰色				
972		12.0				暗灰色				
973		13.9				灰白色				
974		15.4				暗青灰色				
975	杯	14.6	10.1	4.3		青灰色	粗砂粒	生焼け		
976		14.6				灰色				
977		12.0			底部内面ユビナデ。外面ヘラ切り。	灰白色				
978		13.0								
979			10.2			淡灰色	殆ど砂粒を含まない	良好	小片	
980			9.6			青灰色	微砂粒			
981			12.2	底部内外面不整方向のユビナデ。	淡青灰色					
982	杯		14.2		褐灰色	細砂粒				小片
983	台付壺		9.2		灰色					
984	平瓶				青灰色		微砂粒	図上復元		
985		8.4				淡灰色				
986	瓶		6.8		削り出し高台。	淡緑灰色	精製	堅緻	緑釉陶器	
987	壺		18.4			暗青灰色	細砂粒	良好	丹塗り	
988	壺	20.0			口縁部ヨコナデ。	青灰色				
989		20.8			口縁部ヨコナデ。体部外面平行タタキ。					
990	碗	11.0			体部内面に暗文。	明赤褐色	微砂粒 雲母が目立つ			
991	杯	11.1				にぶい橙色				
992		11.3								
993		13.2								
994	皿	20.0								
995		11.6			底部外面ヘラケズリか。					
996		13.6								

右岸用水路調査区

挿図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考	
		口径	底径	器高						
997	皿	13.0			底部外面不整方向のユビナデ。	にぶい橙色	微砂粒 雲母が目立つ	良好	丹塗り	
998		13.6								
999		18.0								
1000		19.2								
1001		21.0								
1002	杯	17.4			灰白色					
1003	高杯				にぶい橙色					
1004		16			偏前焼。	赤褐色	砂粒含	堅緻		
1005	播鉢					赤灰色				
1006			17.3			偏前焼。ロクロ回転は右。				灰色
1007	鍋				須恵質土器。	淡灰褐色	細砂含			
1008	皿	9.3	約6	1.3	土師質土器。ヨコナデ。	淡橙灰色	精製粘土	良好		
1009	椀				瓦器。内面のみ暗文。	暗灰色				
1010	皿	14.5			白磁。	乳白色	緻密	堅緻		
1011	瓦				平瓦片で凸面には菱形文に横線を交差した タタキをもち「東大寺瓦」にみられる手法で ある。凹面は剥落している。	白黄色	砂粒を多く含 む	良好		1区黒灰色 砂質土出土。
1012 ↓ 1015	椀	14.5 ↓ 13.3	6.3 ↓ 5.3	4	従来「早島式土器」と呼ばれる土師質土器 である。	灰白色	砂粒を含む 精製粘土			
1016 ↓ 1019		11 ↓ 9	7.2 ↓ 6	2.1 ↓ 1.5				土師質土器。ロクロ回転は左右どちらもある。 1016・1017は糸切り底である。		淡黄橙色 ↓ 淡橙灰色
1020	椀	11.6	4.1	3.3	体部内面ヘラミガキ。	乳白色	微砂粒		ほぼ完存。	
1021			6.6		体部外面ヘラミガキ。底部外面ユビナデ。		細砂粒			
1022			6.6							
1023			8.4		体部外面細いヘラミガキ。	にぶい橙色	微砂粒			
1024	杯	10.6	3.5	5.6	底部外面糸切り痕。					
1025		14.0		3.1	底部内面ユビナデ。外面ユビナデのち板目 痕。	乳白色	細砂粒		ほぼ完存。	
1026	小皿	6.5		1.3	底部内面ユビナデ。外面糸切りのち板目痕。	浅黄橙色	殆ど砂粒を含 まない			
1027		6.6		1.6	底部内面ユビナデ。外面板目痕。		微砂粒			
1028		9.0		1.9	1027と同じ。					

百間川当麻遺跡

神図 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考		
		口径	底径	器高							
1029	小コ	9.4			1027と同じ。	浅黄橙色	微砂粒	良好			
1030		9.1			底部内面ユビナデ。外面ヘラ切りのち板目痕。						
1031		9.6									
1032		9.6		1.5	底部外面糸切り痕。	乳白色					
1033	椀		5.6			淡青灰色					
1034		15.8			体部内面碇文。外面碇文と指頭押え。	灰黑色				瓦器。	
1035			6.4		1033と同じ。	暗青灰色					
1036	鉢	29.6				灰白色					重ね焼痕跡。
1037	鍋	32.8			口縁部ヨコナデ。体部内面粗いハケメ。	褐灰色					



1



3



2



4



7



5



6



- | | |
|-------------------------|--------------|
| 1. 調査区調査前全景 | 5. 溝-2土層断面 |
| 2. 南側調査区弥生・古墳・奈良時代 | 6. D4区遺構検出状態 |
| 3. 溝-4(左), 2(右上), 1(右下) | 7. 溝-7全景 |
| 4. 溝-2遺物出土状態 | 8. 溝-7遺物出土状態 |

図版2



1. 土壇-6



2. 土壇-2



3. 土壇-3



4. 壺棺墓



5. P-5-5遺物出土状態



6. G3区 土器溜り-1 全景



7. G3区 土器溜り-1 遺物近影



8. G3区 土器溜り-1 遺物近影



1. 土塊-1



2. 2号住居址全景



5. 灰穴-1 検出状態



3. 1号住居址全景 (新)



6. 灰穴-1 土層断面

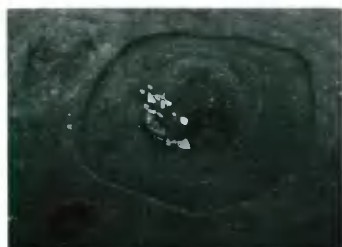


4. 1号住居址全景 (旧)

図版4



1



2



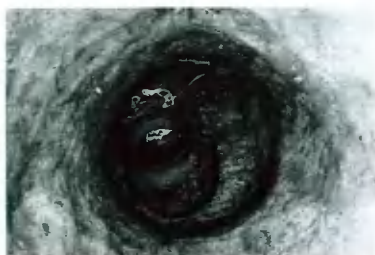
3



7



4



5



6

- 1. 井戸-1
- 2. 井戸-3 1段掘り
- 3. 井戸-3 完掘
- 4. 井戸-4 完掘
- 5. 井戸-4 出土遺物近影
- 6. 井戸-5 完掘
- 7. 井戸-6 完掘
- 8. 井戸-6 出土遺物近影



8

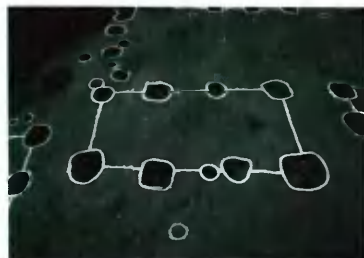


南側調査区 弥生・古墳・奈良時代遺構全景

图版6



1. 建物-1



2. 建物-2



3. 建物-3



4. 建物-2(上)・3(下)



5. 建物-3(上)・4(下)



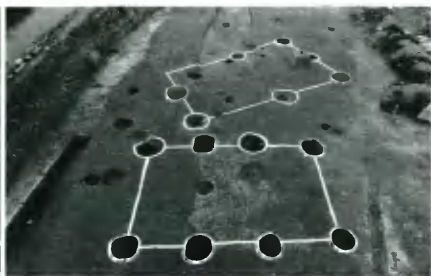
6. 建物-5



7. 建物-6



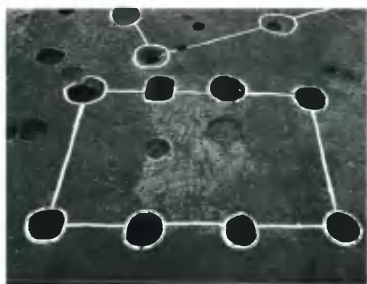
1. 建物-8



4. 建物-12(上)・13(下)



2. 建物-13・12・7・11・10(上方より)



5. 建物-12

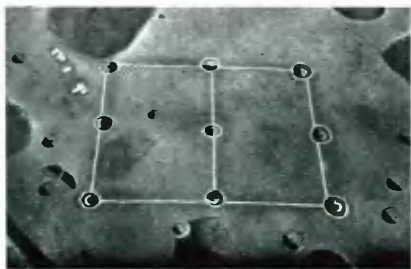


3. 建物-10・11・7(左より)

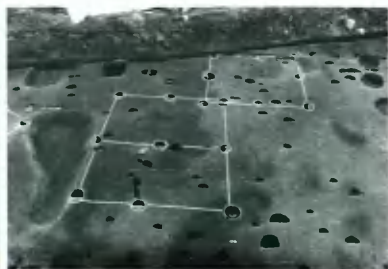


6. 建物-13

図版8



1. 建物-15



2. 建物-14(左)・16(右上)



3. 建物-17



4. 南側中世全景・
建物-18(左上)・19(中下)・20(中上)



5. 柱穴(P-308)遺物出土状況



6. 柱穴-柱痕検出状況



1. 土墳墓-1 (中世)



3. 北側中世全景



2. 土墳墓-1 出土遺物近影



4. 石組み遺構-1 全景

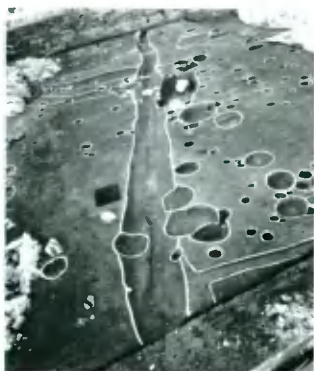


6. 北側の近世土墳



5. 土墳-10 半掘状態

図版10



5



1



6



2



3



7



4

1. シスト状遺構検出状態
2. 土壇-41 検出状態(上層)
3. 土壇-41 遺物(櫛)近影
4. 土壇-41 遺物出土状況(下層)
5. 溝-13 その他掘り上げ状況(北側の近世)
6. 溝-13北端部石列
7. 溝-13内閉塞石



1. 北側調査区中世・近世全景



2. 南側調査区近世全景

図版12



59



64



97



60



99



105



104



103



65



115

溝一7 出土遺物



107



110



111



112



114



116



117



88



124



89

圖版 14



132



134



136



137



139



142



141



140



7



2



141



19



177



188



186



174



189



193



109



190



194



198



201

図版16



53 (住居址)



157 (溝)



216 (柱穴)



217 (柱穴)



鹿角 (柱穴)



215 (柱穴)



297 (包含層)



239 (ボーリング-3)

住居址・柱穴・包含層出土遺物



36



211



210



212



425



234



375



430



235



376



236



441

36……壺棺墓

234
235……土墳墓-1
236

210
211……井戸-6
212

375……包含層
376……側溝(包含層)
425……包含層
430……包含層
441……近世造成土(包含層)

図版18



352



410



c 21



371



435



434



437



426



352……包含層

371……包含層

410……近世造成土
(包含層)

426……堤防盛土
(包含層)

434

435 } ……包含層

437 }

c 21 ……包含層

w 2 ……井戸

w 5 ……土壌

w 6 ……土壌

w 8 ……土壌

w 9 ……土壌



w 5



w 2



w 8



w 9



w 6

井戸・近世土壌・包含層出土遺物



1. 右岸用水路調査区発掘調査着手前の状況（北西から）



2. 1区西調査区土層断面壁（東から）

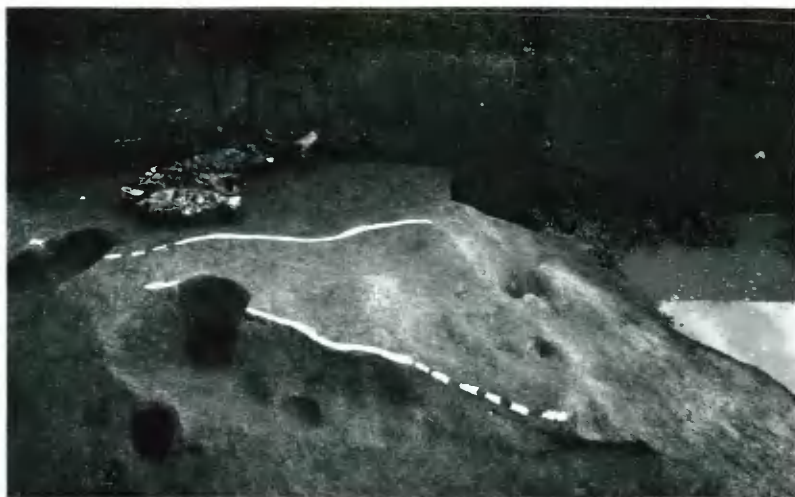
図版20



1. 8区 土壇-25 検出状況（南東から）



2. 7・8区 溝-23 検出状況（南東から）



1. 2区 土壇-27・溝-16 検出状況（北東から）



2. 1区 溝-17・18・19 検出状況（東から）

図版22



1. 4～6区 溝-20 遺物出土状況（東から）



2. 4～6区 溝-20 検出状況（北西から）



1. 9・10区 土器溜り-2 検出状況 (東から)



2. 10・11区 溝-29 検出状況 (西から)

図版24



1. 2区 溝-26 検出状況 (北西から)



2. 3区 溝-27 検出状況 (北から)



1. 9区 建物-21 検出状況 (西から)



2. 9区 建物-21 柱-4 検出状況 (西から)



1. 1区 井戸-7 井底検出状況（北東から）



2. 5区 井戸-8 井底検出状況（南西から）



1. 1・2区 中世遺構群検出状況（南東から）



2. 2・3区 溝-30 検出状況（北東から）

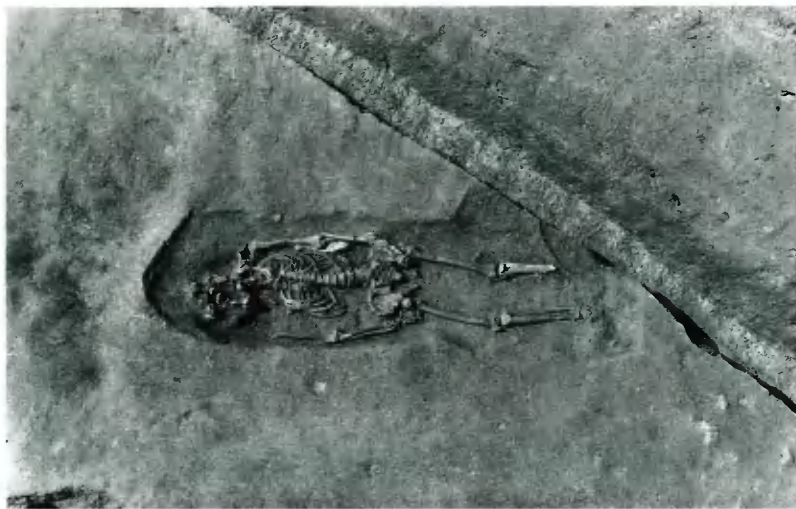
図版28



1. 2区 土壇-29・30 完掘状況 (南から)



2. 7・8区 中世遺構検出状況 (南東から)



1. 9・10区 土壙墓-2 検出状況（北から）



2. 7区 石組み遺構-2 検出状況（北から）



1. 11～15区 中世遺構検出状況（東から）



2. 9区 石組み遺構-3 検出状況（北から）



454



472



477



478



480



495



495

454~480
土壇-27
495~501
溝-20



499



498



501

出土遺物 (1)

図版32



502



505



508



509



510



511



519



524



528



529



531



533



536



537



535



539



530



550



677



B3



637



638



637墨書文字

出土遺物 (3)



639

图版34



610



611



613



612



616



615



618



617



619



620



621



622





1



1



687



704



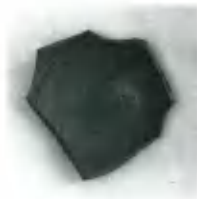
705



707



686



井戸-7 南東隅柄組



井戸-7 北東隅柄組



图版36



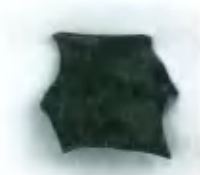
土壙一30 出土土師器皿



725



733



845



855



856



861



873



867



874



出土遺物 (6)



土墳墓一2 副葬品出土状況



I 26



I 38 I 27 I 29 I 30 I 32 I 31 I 28 I 33



I 36 I 37 I 34 I 39



溝一30 出土人骨



左拡大

出土遺物 (7)

図版38



558



951



952



956



986



1



C 23



805



1



811



C 25



C 26



C 27



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査 IV

百間川当麻遺跡 2

昭和57年11月 印刷

昭和57年11月 発行

編集 岡山県教育委員会文化課
建設省岡山河川工事事務所
発行 岡山県教育委員会
印刷 岡山県農協印刷株式会社